# 佐良山古墳群の研究

第　1　冊

1952

津　山　市

# 正　誤　表

| 頁 | 行 | 誤 | 正 |
|---|---|---|---|
| はしがき | 22 | ほかならはい | ほかならない |
| はしがき | 2 | 名位 | 各位 |
| 目次 | 右 10 | 畝祇園古墳 | 祇園畝古墳 |
| 3 | 右 12 | 高に坏 | 高坏に |
| 6 | 左 1 | しのみで | したのみで |
| 6 | 左 2 | 坪井3名 | 坪井の3名 |
| 7 | 左 16 | 手合け | 手分け |
| 13 | 左 8 | なるべさ | なるべき |
| 15 | 右 16 | るうか？ | ろうか？ |
| 19 | 右 2 | 官滝 | 宮滝 |
| 19 | 右 11 | 官滝 | 宮滝 |
| 21 | 左 22 | があるが | であるが |
| 22 | 左 3 | 一方古墳 | 一方古墳群 |
| 22 | 右 7 | 所存する | 所在する |
| 25 | 左 31 | 大ささは | 大きさは |
| 25 | 右 17 | 第7号墳 | 第8号墳 |
| 25 | 右 21 | 第8号墳 | 第9号墳 |
| 27 | 左 14 | 3～40m | 30～40m |
| 27 | 左 18 | 巾約1,4m | 巾約1•4m |
| 27 | 右 15 | 台地上 | 台地状 |
| 27 | 右 32 | 7•0n | 7•0m |
| 29 | 右 31 | 道路の | 羨道の |
| 31 | 右 2 | 中央m1棺 | 中央の1棺 |
| 31 | 右 12 | 調査参照 | 調査報告参照 |
| 32 | 左 3 | 畝細1号墳 | 細畝1号墳 |
| 32 | 右 31 | 正京茶畠古墳 | 正京茶畠古墳 |
| 33 | 左 29 | 岡の岡2号墳 | 西の岡2号墳 |
| 33 | 右 8 | 中官古墳群 | 中宮古墳群 |
| 34 | 左 16 | 横穴式が | 横穴式石室が |
| 34 | 左 17 | 7•m2 | 7•2m |
| 34 | 右 1 | 同様大 | 同様の |
| 43 | 左 11 | 古備平野 | 吉備平野 |
| 45 | 左 2 | 平的 | 平均 |
| 49 | 右 17 | いるの家父長 | いる家父長 |
| 51 | 左 35 | 失われことはない | 失われることはない |
| 51 | 註 12 | 神庭英朗 | 神原英朗 |
| 52 | 左35-36 | 遺物遺物 | 遺物遺跡 |
| 52 | 右 36 | 行こことうとす | 行こうとする |
| 53 | 左 7 | 佛数 | 佛教 |
| 53 | 右 2 | 佛数 | 佛教 |
| 58 | 左 16 | norlh | north |

| 頁 | 行 | 誤 | 正 |
|---|---|---|---|
| 59 | 左 8 | 前方円後墳 | 前方後円墳 |
| 59 | 右 16 | 對しは | 對して |
| 60 | 図　下 | 第5図ハニワ頂丘図 | 第5図 中宮第1号墳ハニワ囲繞状態 |
| 62 | 左 28 | 上内の面 | 上の内面 |
| 70 | 右 23 | 軸 | 釉 |
| 71 | 右13-14 | (G)現は | (G)は |
| 71 | 右 15 | 軸 | 釉 |
| 75 | 左 9 | 軸 | 釉 |
| 79 | 左 30 | 楕円形 | 楕円形 |
| 87 | 左 29 | 考えられ | 考えられる |
| 90 | 右 15 | そ）。のほか | ）。そのほか |
| 92 | 右 25 | ども保の存のよい | どもの保存のよい |
| 92 | 右 28 | それが | それと |
| 92 | 右 28 | 石棺の関係傾斜 | 石棺との関係の傾斜 |
| 100 | 左 5 | 長く | 長い |
| 100 | 左 23 | 比高は約90cm | 比高は約90m |
| 101 | 左 2 | 11図版中央 | 11図版右下 |
| 102 | 左 4 | 何段かにわかって | 何段かにわたって |
| 102 | 左 18 | 壁床に破壊され | 壁床とも破壊され |
| 102 | 右 31 | 指摘するめに | 指摘するに |
| 103 | 右 表 | （遊2） | （遊3） |
| 103 | 左 4 | 欠捐 | 欠損 |
| 103 | 右 5 | 第11図版下右） | 第11図版上及び下左） |
| 104 | 左 2 | 第11図版下左） | 第11図版下右） |
| 105 | 左 10 | 1cmの程 | 1cm程 |
| 106 | 右 12 | 欠捐 | 欠損 |
| 106 | 右 32 | 欠ぐが | 欠くが |
| 107 | 左 30 | 比載的 | 比較的 |
| 108 | 左 22 | （遊2） | （遊3） |
| 108 | 右14-15 | 楕円形 | 楕円形 |
| 112 | 右 18 | 中正線 | 正中線 |
| (6) | 2 | Gron-- une | Gion--une |
| (7) | 9 | Sarayama Tombs' | Sarayama Tombs, |
| (8) | 11 | has been supposed – | has been supposed |
| (9) | 8－9 | the scalloplike – type with | the scallop –like type. With |
| (10) | 3 | the study the offering | the study of the offering |
| (11) | 14 | Deptartment | Department |

# 佐良山古墳群の研究

第　1　冊

1952

津　山　市

# 序

わが郷土は，その美しい山河のたゝずまいの中に，幾多の古墳を抱いている。しかもこれ等の古墳に対しては，相当古くから盗掘濫掘が行われた形跡があり，更に今後もその虞れがあることを思えば，今にしてこれら古文化財に対し保護を加えて学術的研究の途を確立しなければならないことが痛感されるのである。

本市に於いては，一昨年文化財保護法の施行を機に，いさゝか同法公布の趣旨に添うべく，岡山大学に委嘱して市内佐良山に遺る処女古墳一基の完全発掘を行うことにした。時恰も厳寒の頃とて，連日膚を刺すような風が吹き荒び粉雪のちらつく中を，二ヶ月に亘つて真摯な発掘作業が継続せられた。その間わが市民は挙つてこの事業に協力し，又同学の士も遠近から訪れてこれに援助の手をさしのべられた。

発掘の経過はフイルムに収められ出土品は残らず市立郷土館に展示し汎く公開されているが，この度その報告書を公刊する運びに至つたのである。

この事業によつて，本地方に於ける考古学に対する関心と古文化保護の熱意が湧然として高まりつゝあるを見て，ひそかに会心事としている次第であるが，更に本書の刊行によつて些かなりとも斯学の発展に寄与し得られるなら欣快これに過ぎるものはない。

最後に，本研究に従事せられた岡山大学，並びに御援助を頂いた各方面の方々に篤く感謝の意を表したい。

昭和２７年３月

津山市長　中　島　琢　之

# はしがき

曾つて長いあいだ，神秘主義のばけ物にとりつかれていた日本の古代史は，その眞の姿を，今度は，底知れないノスタルヂアの深淵に，落とし込まされようとしている。デイレツタントと「骨董屋」の続出の前に，考古学は，はたと，立ちどまつているかのようにすら見える。新法令の下に，次から次えと代え難い遺跡は破壊され，続々と貴重なるべき古墳墓は，盗掘の無殘を，露呈している。

すべて一連のものと，いつてよいであろうこのような潮の中で，地方々々の歴史は，所謂「郷土史」の偏狭と固陋の中に再び因習的な深いねむりにおちこもうとしている。眞の愛國心は，眞の歴史を知ることによつてのみ，獲得されるということが，眞実である限り，これは一つの危機であるといわなければならない。

このような狀況の下に，１９５０年，津山市及び津山市民は，我々の前に，素晴しい課題と，劃期的な計劃とを提示した。美作國の古代史……その考古学的研究……の究明が，それである。それは，貧すに長時間の忍耐と深い理解を，加うるに我々自身の不断の方法論的反省を以つてすれば，美作古代史の眞の姿を再構成する端緒ともいうべき第一歩を，踏み出すに足る構想であつた。貧弱な我々の力が，どこまでその目標に近づくことが出來るかを，絶えず顧慮しつつも，我々は積極的にその事業に参加した。その結果，１９５１年嚴冬，津山市民の好意と理解の下に，先づ調査対象に浮び上つた佐良山古墳群の調査に着手した。

本書は，この第一回の調査の忠実な記録であり，加えて，今後長期間に亘つて繼続されるべき調査に備えての，問題の提起と見透しの若干を，その内容に有つものである。我々の方法論の具体化は，極めて貧しい形をもつて，後者に，現われるであろう。しかるにあえて発掘報告の各章に，「考察」乃至「結び」の項を設けることをしなかつたのは，これがただ單なるresume に墮することえの顧慮と，より以上に，今後数年間の調査の遂行によつて得られるであろうより全般的な見透なり年代觀なりえの期待とを，有つたがゆえにほかならはい。我々の調査に，点々と現われた幾多の欠陥と不備とは，やがて實施される第二次・第三次の調査研究において，克服されるであろうと，ひそかに念願しつつ，とりあえず，この第一冊を送り出す。諸賢の忌憚ない批判と理解ある叱正とを，心から望むものである。

調査・整理・研究に際しては，多くの人々の援助と好意を受けた。終始一貫して，我々の調査の円滑な遂行に，援助を與え，協力を示した全津山市民，津山市議会，津山市当局に，失づ心からの感謝を，捧げたい。中でも，直接その局にあたられた……津山市和田義一・國政

輝郎・吉元宗・須江武雄・川端克己・柿内健治・岡五十二・白石哲その他の諸氏，吉村茂氏をはじめとする佐良山小学校教員名位，田外速・日下元榮兩氏を中心とする佐良山古墳保存会の有志，我々を常に激勵された医師江原猪知郎博士・江原昌平博士，及び発掘を快よく承諾された地主山本稔・津高仲江の兩氏，宿舍の世話を願つた畑肇氏御一家，等々……に對しては，特に御礼申し上げたい。

発掘調査に際しては，遠路來援され，困難な中宮第一号墳発掘を我々と共に遂行された名古屋大学文学部楢崎彰一氏，発掘の全過程に亘つて，我々を助けた岡山大学法文学部学生福武彦三氏，倉敷考古館鎌木義昌氏，黒川浩氏，更に，前橋英夫教官をリーダーとする成美高等学校郷土史部の生徒諸君……特に山田清之・神原英朗・今井堯・數見保幸の諸君……津山市南中学生徒山田英輔・坪井宏祐・河本清・河本昌廣の諸君，金川高等学校教官江坂進氏，森統子氏，岡山大学学生藤井学・西本達二の兩君，その他多くの方々の援助を受けた。厚く感謝の意を表明したい。又，我々は，辛抱强く我々と行を共にしたカメラマン宇野眞佐男氏の努力に，大きな敬意を，拂わなければならない。発掘後の整理研究に関しては，京都大學考古學教室梅原末治博士の御教示をはじめとし，岡山大學学生福武彦三・新庄幸夫・神原英朗の三君及び山田英輔君の不断の協力を得たことを記して，鳥眞その他に関する山田致知氏の好意と共に深甚な謝意を表したい。特に出版に至るまでの雜事の一切を，進んで引き受けられた神原英朗君の非常な努力と好意とは，忘れることが出來ない。

最後に，本書の出版に際して，快く序言の筆をとられ，我々を激勵された，津山市長中島琢之氏の学術に對する深い理解に對しては，市会議員各位のこれに寄せられた好意と共に，感銘なきを得ないものがあることを申し述べなければならない。

このような多くの人々の協力によつて，本調査が遂行され，また本書が刊行されることを，我々は心から喜ぶものである。

岡山大学医学部第2解剖学教室人類学考古学研究室にて

1952年1月10日

調査委員　根岸博
〃　浦良治
〃　中島寿雄
〃　近藤義郎

# 目　　次

序　言

はしがき

第 1 章・調査の経過 …… 1

第 2 章・佐良山古墳群 …… 9

A・久米のさら山

B・歴史的背景

C・各古墳の素描

D・問題の所在

第 3 章・中宮第1號墳発堀調査報告 …… 55

第 4 章・門の山第1號墳発堀調査報告 …… 89

第 5 章・祇園畝古墳調査報告 …… 99

附 Ⅰ・中宮第1號墳出土人骨について …… 109

Ⅱ・英文抄録 ……巻末

# 挿図・図版目次

## 挿　　圖

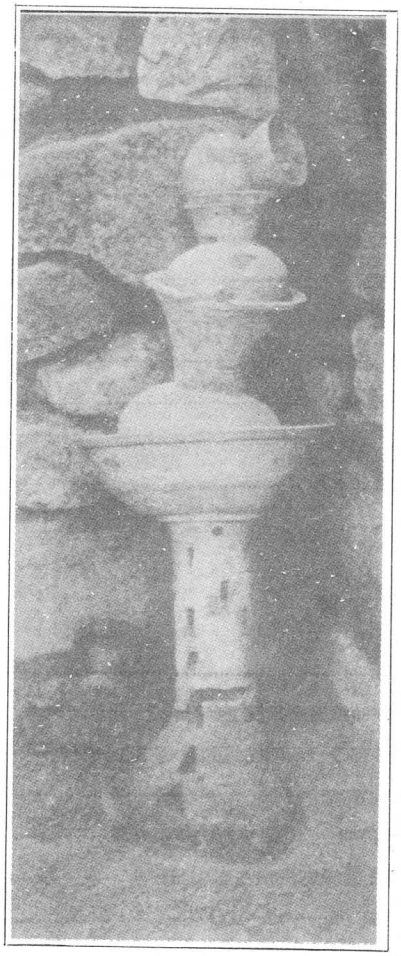

第 1 図　津山市附近地形図 …… 12
第 2 図　佐良山古墳群分布図（近藤） …… 22
第 3 図　中宮第1号墳地形測量図（楢崎・福武・近藤） …… 57
第 4 図　中宮第1号墳丘断面図（近藤） …… 59
第 5 図　中宮第1号墳ハニワ囲繞状態（近藤） …… 60
第 6 図　中宮第1号墳発見ハニワ円筒（近藤） …… 61
第 7 図　中宮第1号墳後円部横穴式石室（楢崎・福武・近藤） …… 63
第 8 図　中宮第1号墳前方部竪穴式石室（楢崎・近藤） …… 64
第 9 図　中宮第1号墳石室内発見四ツ重ね高坏出土状況（楢崎・近藤） …… 67
第 10 図　中宮第1号墳後円部横穴式石室内遺物出土状況（楢崎・近藤） …… 68
第 11 図　中宮第1号墳石室外発見土器類　（近藤） …… 71
第 12 図　中宮第1号墳横穴式石室内発見土師器　（〃） …… 72
第 13 図　中宮第1号墳石室内発見祝部式土器 1　（〃） …… 73
第 14 図　中宮第1号墳横穴式石室内発見祝部式土器 2（〃） …… 74
第 15 図　中宮第1号墳横穴式石室内発見四ツ重ね土器（〃） …… 75
第 16 図　中宮第1号墳横穴式石室内発見玉類　（〃） …… 76
第 17 図　中宮第1号墳横穴式石室内発見鉄鏃 1　（〃） …… 77
第 18 図　中宮第1号墳横穴式石室内発見鉄鏃 2　（〃） …… 77
第 19 図　中宮第1号墳横穴式石室内発見鉄鏃 3　（〃） …… 78
第 20 図　中宮第1号墳横穴式石室内発見刀子　（〃） …… 78
第 21 図　中宮第1号墳横穴式石室内発見刀　（〃） …… 79
第 22 図　中宮第1号墳横穴式石室内発見アブミ 1　（〃） …… 81
第 23 図　中宮第1号墳横穴式石室内発見アブミ 2　（〃） …… 81
第 24 図　中宮第1号墳横穴式石室内発見クツワ 1　（〃） …… 82
第 25 図　中宮第1号墳横穴式石室内発見クツワ 2　（〃） …… 83
第 26 図　中宮第1号墳横穴式石室内発見クツワ 3　（〃） …… 83
第 27 図　中宮第1号墳横穴式石室内発見雲珠 1　（〃） …… 84
第 28 図　中宮第1号墳横穴式石室内発見雲珠 2　（〃） …… 85
第 29 図　中宮第1号墳横穴式石室内発見鋲　（〃） …… 85
第 30 図　中宮第1号墳横穴式石室内発見座金具付鋲具（〃） …… 85
第 31 図　中宮第1号墳横穴式石室内発見鉄斧　（〃） …… 86

第３２図　中宮第1号墳横穴式石室内発見のみ　（〃）……86
第２３図　中宮第1号墳横穴式石室内発見釘　（〃）……87
第２４図　中宮第1号墳横穴式石室内発見輪金具その他（〃）……88
第３５図　門の山第1号墳地形測量図（福武・中島・近藤）……91
第３６図　門の山第1号墳葺石及石棺配置図（福武・鎌木・中島・近藤）……92
第３７図　門の山第1号墳発見A石棺（近藤）……94
第３８図　門の山第1号墳発見B石棺（福武・鎌木・近藤）……95
第３９図　門の山第1号墳発見C石棺（福武・楢崎・近藤）……96
第４０図　門の山第1号墳発見土器片（近藤）……97
第４１図　祇園畝古墳地形測量図（福武）……100
第４２図　祇園畝第2号墳石室（福武 近藤）……101
第４３図　祇園畝第2号墳石室平面図（近藤）……103
第４４図　祇園畝古墳発見陶棺（近藤）……104
第４５図　祇園畝古墳発見土器類（〃）……105
第４６図　祇園畝第2号墳発見金環及玉（〃）……108

## 圖　版

第１図版　中宮第1号墳全景（宇野）……57
第２図版　中宮第1号墳前方部石室及び埴輪出土状況（宇野）……61
第３図版　中宮第1号墳横穴式石室天井部及び羨門閉鎖装置（宇野）……63
第４図版　中宮第1号横穴式石室内部（宇野）……63
第５図版　中宮第1号墳横穴式石室内遺物出土状況（宇野）……67
第６図版　中宮第1号墳横穴式石室出土蓋坏内供物殘滓（山田）……75
第７図版　中宮第1号墳出土遺物（中島）……77
第８図版　門の山第1号墳全形（中島）……91
第９図版　門の山第一号墳石棺配置及び葺石露呈状況（中島）……93
第１０図版　門の山第一号墳発見石棺（宇野・中島）……97
第１１図版　祇園畝1号及び2号墳陶棺発見状態（中島）……103
第１２図版　祇園畝2号墳石室・遺物出土状況及び遺物（中島）……105

◆カッコ内の人名は，測図者又は撮影者を示す。
◆写図はすべて近藤が行つた。



カット 1· 中宮1号墳発見
四ツ重ね高坏出土状況
(cut Ⅰ)

# 第　1　章

# 調　査　の　経　過

中　島　壽　雄
近　藤　義　郎

カット2　中宮第1号墳頂にて（cut 2）

# 調　査　の　經　過

発掘を含めて，現地における今回の調査は1951年1月20日から，1951年4月8日のあいだ，略々繼續して行われ，若干の中断日を除いて，総計47日間を費した。各発掘古墳毎に,「経過」の項を設ける煩を避け，此處に一括して，全調査の行程を記錄する。但し，1950年末における豫備的調査は，一切，省略に附することゝする。（本章敬稱略）

**1月20日。**　午後2時30分，浦良治・大森誠・楢崎彰一・福武彦三・近藤義郎の5名岡山を出発。佐良山にて，一端下車し，中宮1号墳附近並びに，門の山古墳群の一部を，豫察する。中宮1号墳後円部東北麥畑中より埴輪円筒及び祝部式土器の若干の破片を発見する。夜，津山市江原猪知郎邸に，先発の根岸博・江原猪知郎・吉元宗・岡五十二・鎌木義昌・中島壽雄・並びに，上記5名が，集合し，中宮1号墳を，最初に，即ち明日から調査すること，及び宇野眞佐男を，カメラマンとして招請することを決定する。

**1月21日。**　午前中，中島を主として，中宮1号墳の電氣探査を行う。後円部頂を通つて東西に，測線を張り，中心法及び同深法を試みた結果、中心法により墳頂下方4～4・50mにおいて，若干の變化が認められたが後述の如き都合により充分の時間を得ず，石室の存在・方向・規模を確認するまでに，至らなかつた。正午，前橋英夫が神官として，キヨメを行う。晝食後，根岸・浦・大森・中島は，勝田郡豊田村御崎野住居址豫察に出発する。午後下草，及び灌木を切り拂い，楢崎・福武近藤の3名，簡易トランシツトを使用して，測量を行う。夕刻5時30分までに，3・5m等高線を終了し，本日の作業を終る。尙，除草木の結果，本古墳が，所謂帆立貝式の前方後円墳であることが判明した。又，墳の東西草むら中に，半壞した陶棺が発見された。これは，古墳東側の開墾の際，出土したものと地主山本は語つた。

**1月22日。**　前日に引きつゞき，楢崎・福武近藤は，雪の中を終日測量に，從事する。附近一帶の灌木類を，切り拂つて，宇野による16mm撮影を開始する。夕刻までに等高線4mまで，完了する。

**1月23日。**　測量は，トランシツトを，2号墳頂に移動して，續行される。2号墳西斜面の破壞痕から，祝部式土器小破片を発見したほか，同墳北側の畑端から，人物象形埴輪の腕と考えられる小片を採集した。午前9時から，後円部頂に，3m巾のトレンチを入れる。深さ10～20cmの箇所（主として頂中央部及びその南邊）から，口緣部を含む，祝部式土器破片若干及び，土師器片1片出土，又，墳頂西部の深さ50cmの所から，土師器皿半欠を発見する。土が可成柔かであるため排土は，急速にすゝみ，午後2時30分，北西隅附近において，天井石と考えられる，巨石に到達する。4時頃までに，北東部においても，天井石と考えられるものを発見。墳頂から，北西部発見の巨石の深さは，1・1mを測つた。直ちに，トレンチの巾を擴大し，5時発掘作業中止までに，略々1mの深さまで，排土する。測量は，午後5時30分まで繼續，池の東邊附近を除いて，略々完了する。

**1月24日。**　測量は午前中，すべて完了する。午前中，石室天井石の西半部を，午後，その東半部を，露呈する作業を行う。その略々全面にわたつて，厚さ10～15cmの黄褐色の粘土の被覆が，認められたほか，石と石との間隙及び部分的に石の上に，灰黄色の粘土が充塡または，配置されているのを，発見する。又，天井石に接して，数ケ所より土師器片が，発見された。その他，トレンチを大きく擴大した結果，表土下数十cmより祝部式土器片及土師器片数片が出土した。

**1月25日。**　午前中から，午後の一部にかけて，側壁上部を含め，天井石全面の排土・清掃を行う。前日と同じく，若干の箇所から，土師器細片が出土。櫓を組んで，宇野による天井石の撮影を行つた後，楢崎及び福武が主となつて，その實測を開始する。別に，黒川浩・近藤は，成美高等学校生徒及び南中学校生徒の協力を受け，前方部から，後円中央部に向つて，浅いトレンチを入れた結果，葺石とも考えられる人頭大の石の散在及び，ハニワの囲繞を発見した。ハニワは，先づ最初に前方部との右側のクビレ部において，発見され，續いて左側クビレ部においても，見出された。ハニワは数十cmの間隔を置き，後円部をとりまいて，配置されていることが，推測された。午後5時半作業中止までに，向つて右側に13本，左側に7本が，検出された。

**1月26日。**　午前中は，前日にひきつゞいて，ハニワの検出作業と，石室天井部の實測を行う。正午に近く，石室西端の天井石を除去して，内部を觀察する。外面からの觀察及び墳形の所謂帆立貝式をなしている狀態から考えて，はじめ，我々は，竪穴式石室を内部主体とする類の古墳と，想定していたが，その後，特に本日の内部觀察によつて，それが全く誤りであることが，判明した。内部は，長年月の間，徐々に流れこんだ細土が，可成り堆積していたが，充分入ることが出來た。觀察及びボーリングの結果，羨道が西方に，その口を開く，横穴式石室であることが，判つた。羨道部は，明日，排土露呈することゝして，玄室内部の流落土の排除を行つた。その際，玄室西北隅において，底面とは，全く考えられない浅い地点から，壺形祝部式土器にのつたまゝ斜倒している土師器完存品が発見された。これは，後述する巨大高に坏のつた一組の土器中の上2個であることが，後に判明した。夕刻までに，極く一部の排土を完了したのみ。ハニワの検出作業は，順調に進行し，夕刻までに，計40余個が，発見された。又，前方部と後円部との境界にも，一列に，ハニワの存在が，確認された。昨日我々が，葺石狀のものとして，想定しておいた石の散在の中に，略々前方部の中央邊にあたつて，乱雑ではあるが，確實に2列に，石が並んでいるのを，注意した結果，これが，後述の前方部石室ではないか，と考えるに至つた。フタ石の如きものが，全く見當らないことが，我々の疑問ではあつたが……。この日から天幕を張つて，作業員交代で，宿泊することにする。

**1月27日。**　昨日確認した，羨道部の露呈作業を行い，午後中に，愈々，石室の全貌が，露呈した。羨道は，西に開口し，巨大な板狀の石を，最外側の閉鎖用に，使用してあつた。玄室及び内側からする羨道部の排土は，昨日に引つゞいて，行われた。昨日発見された祝部式土器及土師器は，更にその下に續く祝部式高坏の上に乗つた大型の祝部式壺上に

のせられたものであることが，判つたほか，この巨大な高坏から約70cm奥壁よりで，右側壁より 50cm南の所から，鉄鏃が出土した。これは，可成りの高位の土中に存したため，シヤベルの尖にあたつて，三分した。高杯の全体を，露呈できないうちに，日沒。昨日想定した前方部の2列の石が，やはり，石室であることが，午前中の排土作業の結果明らかとなつた。しかし，依然として，フタ石のないことが，疑問として残つた。日沒までに，略々全体の排土を終了した結果，比較的粗に置かれた敷石の上，石室東壁に接して祝部式土器坏が2個底部を上にして，発見された。ハニワの検出は，本日も續行され，羨道部入口の周辺を除いて，後円部全体に圍繞していることが，判明した。尙，前方部に，無秩序に散在している葺石かと，想定された石は，今のところ，前方部石室の側壁の一部が，散乱したものではないかと，想像されている。

**1月28日。** 午前中は，主として楢崎及び，福武が，後円部主体の羨道部の外側の實測を行う。近藤は，成美高校生・南中生の協力によつて，前方部石室の完全排土及び清掃を行つた後，後円部主体の玄室内の排土を行う。成美高校郷土部及南中生山田英輔・坪井宏祐は，昨日まで検出されたハニワ円筒の完全露呈作業に從事する。午後，撮影の後，羨道入口の閉鎖巨石を取り除く。入口は，更に嚴重に閉鎖，即ち，該巨石の内部に，尺大の石をぎつしりとつめていることが，判明した。玄室内の排土は，順調に行われ，夕刻，奥壁に接する箇所から，壺アブミ・祝部式提瓶・土師器片等が，また，北西偶において，土師器祝部式土器及び，鉄片が，それぞれ発見された。夕刻に至つて，玄室西北部の一部において，底石の礫が，見出された。尙，午後，前方部の石室の實測が，開始された。

**1月29日。** 終日，後円部石室の排土を行う。玄室内の北東部の北側壁にそつて，掘り進めた結果，例の大高坏から数 10cmはなれて，先づ祝部式壺，續いてその横に20cmほどへだてゝ，土師器壺が発見された。奥壁附近の排土は，遲々として進まなかつたが，日沒までに，昨日の発見品に接して，祝部式坏が数箇，續いてその南側に祝部式の壺及び，それに接して，1本の鉄鏃が発見された。更に，北側壁に近く，それと平行に，3口の直刀が検出された。前方部石室の一部を實測する。

**1月30日。** 終日，石室内の排土・遺物露呈作業を行う。楢崎・黒川・岡・前橋及び近藤が，交代に從事する。午前中，玄室中央附近から，クツワ，續いてその南側に，祝部式土器坏を，奥壁附近からは，祝部式土器數箇及び各種鉄製品を発見する。また，29日・28日發見された土師器小片（これはおそらく天井石上から，落下したものらしい。）及び遊離した壺アブミの殘片を，實測の上，取り上げる。午後，玄室中央よりやゝ羨道に寄つた地点から，祝部式土器の坏が，續々と検出された。それに東接して鏡板1對，その他鉄器具數点も，發見された。奥壁附近においては遺骸の下顎骨・齒が，発見されたほか，ツボアブミの右側に，10数ケの鋲が，整然と出土した。また南東部からは，鉄鏃の数十本の塊が，見出され，その北側から，大型の鉄鏃数本，更に，南壁に沿つて，直刀が，発見された。

**1月31日。** 午前・午後を通じて，石室内の遺物露呈作業を行う。各種遺物検出の外，被葬者遺骸を，発見。玄室は，全面に亘つて，略々鶏卵大乃至それ以上の河原石を，敷きつめてあることが，判明する。夕刻から，内部に電燈を入れ，7時まで作業を續行した結果大体において，遺物の全体を露呈させる。

**2月1日。** 中島が本日，豊田村から，急行し，人骨埋葬狀態を調査する。實測及び寫眞撮影の都合で，終日，遺物及び敷石の清掃・露呈を行う。羨道口閉鎖石を取り除く。

**2月2日。** 石室内の遺物出土狀況，即ち石室内プラン實測を行う。日沒迄に，半分終了する。又，別に午前中，トランシツトによるハニワの位置測量，午後は，ハニワ囲繞狀態を $\frac{1}{10}$ 縮尺で，實測する。尙，石室に配電して，宇野が，撮影を行う。

**2月3日。** 午前中を費して，玄室遺物出土狀況プラン實測を終了する。別に，昨日に續いてのハニワ $\frac{1}{10}$ 實測を行い，その $\frac{2}{3}$ を終了する。午後，遺物出土狀況のセクション實測を行つた後，遺物の取り上げを，開始する。楢崎・福武・岡・白石・山田（清）神原英朗・数見保幸・山田(英)・坪井・國政・岩佐等の協力により，夜7時30分までに，悉く取り出すことが出來た。またハニワは，前方部との境界の部分を除いて，45番までを，取り上げる。全員，寒さと忙がしさ，それに不自由な姿勢での終日の作業のため，甚だしく困憊したが，発掘の半ばが，無事終了出來たことを，心から，喜び合う。尙，午前11時30分宿營に使用していたテントの内から失火し，テントが全燒した。遺物は直ちに，トラツクで，津山鄕土館に運送する。

ハニワは一時，地主山本の緣下に置くこととする。

**2月4日。** 朝から大雪，加えて豊田村御崎野住居址の発掘が，数日後に打ち切られるとの報を受けたので，本日は，作業を中止して豊田村に出かけることにした。岡山大学教育学部からの見学バスに，楢崎・福武及び近藤が便乘して，御崎野住居址に向う。住居址発掘に協力。そのまゝ，本日は，豊田村芦田資夫方に宿泊。

**2月5日。** 早朝，佐良山に戻り，前方部石室及び，後円部石室の實測を行う。別に，福武は，ハニワの殘部の實測を行う。前方部石室では，側壁及び，前後壁の實測を完了させる。後円部石室では，右側壁の實測の約 $\frac{1}{3}$ を終了する。夕刻，殘りのハニワを，すべて取り上げる。

**2月6日。** 都合により，午後2時から，作業開始，前日に引きつゞいて，實測。後円部石室側壁の約半分及び玄室中央部にてのセクション，前方部石室のプランを，完成する。山田(清)・山田(英)・坪井の3名が，玄室内北東部において，練玉及び，ガラス製小玉を10数ケ発見する。

**2月7日。** 楢崎は，本日10時の汽車で，津山を去り，名古屋に向う。既述の豊田村御崎野住居址の発掘を，どうしても，本日中に切り上げねばならず，加えて，人手が不足であるとの報を受け，近藤は，豊田村に急行する。その日は，豊田村に泊る。

**2月8日。** 福武及び近藤は，佐良山に戻り山田(英)・坪井の協力をうけ，前日に引きつゞいて，石室の實測に，從事する。福武，夕刻歸岡，

**2月9日。** 近藤は終日，後円部石室の實測に，專念したが，完成せず，奥壁及び側壁の

大半を終了し　のみであつた。山田(清)・山田(英)・坪井ハ3名が，午後になつて，現場に到り，前日の同じ箇所から，ガラス製小玉6ケ・練玉2ケ・鉄鏃片を，發見する。

**2月10日。**　近藤は，森・山田兄弟・坪井の協力を得て，終日，石室の實測を行う。若干の練玉・ガラス製小玉を發見する。

**2月11日。**　山田兄弟・坪井の協力で，午前中石室内の實測の総てを，終了することが出來た。又，若干の練玉・ガラス製小玉を發見する。本日で，中宮1号墳調査の大体が，完了したので，午後は，上記3名とともに，近藤は，福田の古墳を，視察して廻る。

**2月26日。**　第2回目の調査のため，病中の近藤を除き，根岸・浦・中島，12時50分のバスに乘り，津山に向う。夜，江原邸にて，津山市企画係長柿内健治を交え，準備打合せを行う。

**2月27日。**　浦・中島は，雨の中を，現地視察。ふりしきる雨のため，作業不可能となり本日は，豫察のみにとどめ，3月1日から，発掘に，かかることとする。

**3月1日。**　福武及近藤は，午前10時に岡山を出発。午前2時から，第回2目の門の山1号墳の調査を開始する。雨に妨害されながら，測量を行う。5時10分作業中止まで，全体の約$\frac{1}{3}$を測量し了る。

**3月2日。**　午前から，午後2時までに，測量を完成する。その際，墳頂及墳斜面に，葺石ではないか，と考えられる人頭大の石が，散布しているのに氣付く。雨のため，午後2時，測量終了と同時に，作業を中止する。別に夕刻，福武及近藤は，中宮1号墳に至り，坪井の協力を得て，後円部石室内から見た天井部のプランを，實測する。

**3月3日。**　午前中，神官が來て，キヨメを行う。それより前，神官來場前を利用して，近藤は，附近の古墳の分布・現況を，視察する。12時15分から，墳頂に，トレンチを入れる。夕刻までに，墳頂東側のA石室のフタ石の全体及び，北側のB石室の一部分が，露呈された。尚，墳中央辺から，土師器細片2片の出土を見た。

**3月4日。**　午前中は，A石室の全貌を，排土露呈させ，プラン及び，縦のセクションの實測を行つたほか，B石室の全体を露呈させ，更に，墳頂西側にA石室と併行して，C石室を發見した。午後，A石室の横斷セクションの實測を終了させた後，フタ石を取り除く。内部には，土が充満，その一部を排土しプランを畫く。土師器の小片2ケが，フタ石の直下から，出土した。B室の全貌のプランを，午後到着した鎌木義昌が，C石室のプランを福武がそれぞれ實測，日沒近くまでに畧々終了する。別に，墳丘を南北において，縦断するトレンチを，先づ北方から，入れた結果，斜面において現表土から，可成りの深さに，葺石列を，発見する。午前4時，名古屋から楢崎が到着した。

**3月5日。**　午前，A石室内の排土を行う。遺物・遺骸は全く發見されず，土師器細片1ケが見出されたのみであつた。午後は，B石室及びC石室それぞれのフタ石を，除去して充満している土の排除を行い，夕刻までに終了した。Aと同様にB・C兩石室ともに，若干の土師器細片が見出された以外，見るべきものはなかつた。葺石の露呈も順調に進行し夕刻までには，北側及び西側の半分を，露出させることが出來た。

**3月6日。**　雨中を，近藤のみ，現場に至り

A石室内部プラン實測を完了する。雨が激しくなつたので，正午中止する。楢崎は，早朝佐良山を去り，名古屋に向う。

**3月7日。** 午前中，A石室内部セクションの實測を終了した後，底石を取り除いた結果石室南半部には，更にその下に，小砂利が，敷きつめられているのを發見。午後は，C石室内部のプラン實測を行う。別に，葺石の露呈作業を進めた結果，墳丘を囲繞していることが，判明したほか，面白いことは，西側に2辺を有つ，5角形＝野球の本壘ベース形を呈していることが判つた。遺物は，A石室の附近の封土内から，2片の土師器が出土したのみである。

**3月8日。** 午前中，B・C兩石室の實測を鎌木，福武及び近藤が，手合けして行い，正午までに，完成する。午後は，全員して，葺石の露呈作業を行う。夕刻までに完了する。

**3月9日。** 葺石の$\frac{1}{10}$縮尺の實測を，手分けして行う。東側を福武，北側鎌木，西側を中島，南側を近藤がそれぞれ分擔する。午後6時近くに，終了する。本日をもつて，門の山1号墳の發堀が，完了した。

**3月13日。** 本日から，祇園畝古墳の調査にかゝる。祇園畝における古墳は，2基ともに數次に亘る，盜堀が行われており，その結果封土は切り崩され，陶棺は大きく破壞され，壞滅寸前の狀態であつた。特に，我々が1号墳と呼稱している1基は，殆んど，全壞と云つてよい位の，損傷を蒙つていた。そのため先づ1号墳の排土を行つた。$\frac{3}{4}$ほど殘存している陶棺身のまわりに，申し譯の様に石室の一部が，見出され，陶棺内からは，粉々に破壞された，蓋の部分の破片が，棺脚下からは，若干の祝部式土器片と，鏃らしい鉄の小片が発見されたのみである。實測の後，午後4時頃から，2号墳の方にとりかゝる。 6時頃作業中止。

**3月14日。** 2号墳も，陶棺が首を出しているので，その周囲を約3・0m の巾で，南北に掘り進めて行く。やがて，南側にもう1棺安置されているのを發見する。正午頃までに此等2棺をかこんで，畧々南北に長く南に開口する，しかも天井石と考えられる施設の全く見當らない横穴式石室が，存在することが判明した。南棺は，蓋部が身部の中にくずれ落ちている上に，極めて脆弱であるために，作業は次第に困難となる。石室底に達しない内，日沒す。尙午後3時頃から，兩墳にかけて$\frac{1}{200}$縮尺で，地形測量を行う。

**3月15日。** 午前中，陶棺周囲の排土を行う。北棺の脚下及び脚下附近から，祝部式土器が，續々と發見された。午後，排土を更に續行し，石室底の畧々全面を露呈させ，陶棺と壁面及び底面との関係位置を，實測圖に画いた後，南棺も搬出する。甚しく脆弱であるため，搬出中，大小の破片となつて了つた。その後，北棺周囲の土器類の全貌を，清掃露呈させ，撮影の後，北棺も，搬出する。夕刻に至つて土器類出土狀態の實測圖をとつたのち，取上げを行う。

**3月16日。** 午前中から午後2時まで，祇園畝2号墳の石室を實測する。その間，西北山顚に所在する三ツ塚古墳3基を視察する。午後2時30分から，一昨年，成美高校等の手によつて，發堀の行われた附近の平佐塚を調査する。殘存していた1個の，内部に土が充していた陶棺身上に置かれてあつた頭骨一部を，根岸が調査する。その後，福武及び近藤は祇園畝2号墳に至り，實測を完了する。

**3月17日。** 昨日に引續き，雨中を，平佐塚の調査に従事する。午前中，簡單に，地形測量を行う。成美高校発掘の際に，残された1個の陶棺は，數十年前に，破壊されたものと覺しく，身の一部のみが，完存するだけであつた。昨日見出された頭骨の外に，大腿骨が発見されたが，これら遺骸が，この陶棺と関係あるのもか，否か，大いに疑問である。陶棺は，取り出すことなく，現場にとゞめ，被土を行う。別に，浦及び近藤は，門の山1号墳の葺石調査に赴く。夕刻，津山市からのトラツクで，祇園畝 1・2号墳出土陶棺及び土器類，並びに中宮1号墳のハニワを，郷土館に運搬する。

**3月18日。** 平佐塚の，辛うじて残存している石室及び半壊の陶棺について，実測を行い，午前中終了する。本日をもつて，第一次佐良山古墳群発掘は，無事終了した。

**3月24日。** 近藤，午前11時，佐良山に赴く。佐良山古墳保存会副会長日下元榮の案内のもとに，山田(清)・山田(英)・坪井・河本(昌)・河本(清)・太田の諸君の協力を得て，字福田地区内の古墳を，踏査する。

**3月25日。** 今日は，佐良山保存会長の田外速の案内で，昨日のメンバーが，字高尾地区内の古墳調査を行う。午前中，東半分を終了。午後雨のため，中止する。

**4月5日。** 西本達二・山田(英)・河本清の協力を得，坂手輝夫の先導によつて，近藤は高尾西半の古墳の現状調査を行う。午後は，平福の嵯峨山東面の古墳群の現状調査。

**4月6日。** 西本・山田（清）と共に，近藤は一方の古墳を調査する。雨激しいため，正午中止。

**4月7日。** 再び，近藤は，一方の近藤保を訪れ，案内を請ひ，一方より，皿，種に至る地区内の古墳の現状調査を，日沒まで行う。

**4月8日。** 午前，山田(英)・河本(清)と共に，近藤は，字皿地區内の寺山古墳群を，調査する。竪穴式石室を持つ古墳群を発見した。本日をもつて佐良山地区内の古墳現状調査を終了すると共に，今回の第1次佐良山古墳群調査を，打ち切ることにした。

# 第　2　章

# 佐　良　山　古　墳　群

近　藤　義　郎

A……久米のさら山

B……歴史的背景

C……各古墳の素描

D……問題の所在

## A. 久米のさら山

（1）

作州は，山又山の國である。中國山脈のバックボーンを境いに，瀬戸内え向う南面の山地である。瀬戸内に面する地域の豊沃な平野に比すべきものは，ありようはずがない。そこには，無数の小河川によつて沖積される猫額大の谷間平地と，那岐山・蒜山その他の麓下に形成された扇状地とが，僅かに，見出されるに過ぎない。農業が，そして恐らくより正確には，水稲栽培が，生産の第一義的部門を占めていた古代においても，こうした状況は，同様であつたことは，いうまでもないであろう。小川が流れるか，湧水があるかすれば，何處の谷頭も，作州の祖先達の手によつて，むさぼるように，切り開かれていつたに違いない。作州の現実は，このような自然的環境にとりまかれたその祖先達が，様々な社会的体制の桎梏の下に，歩み進んで來た歴史の中に，はじめてその眞の姿を，示すであろう。

こうしたみじめな自然環境の中において，現在の津山市を中心とした津山盆地は，たとえそれが山中に僅かに開けた小盆地であるとしても，現在もそうであるように，往古においても，特異な，そして中心的な位置を，占めていたであろうことは，想像に難くないところである。勝田郡・苫田郡・久米郡等の山塊に源を発する，小河川……加茂川・廣戸川宮川・香々美川・久米川・皿川等……は，津山盆地に向つて，四方から流れ込み，中國山脈の分水嶺を起点とし，盆地を東西に貫流して南下する吉井川に，合流する。從つて，そこには，小規模ながらも肥沃な沖積低地が，隨所に，生ずることになつた。香々美川がその西端を南下する香々美盆地，吉井川流域の芳野村・鄕村の平地，同じく院庄平野，皿川が貫流する三保村及び佐良山の沖積低地，宮川が南北に走る一宮村苫田の平野，加茂川の流れに沿ふ高野平野，國分寺周邊，等々……方1里にもはるかに満たない群れの谷間流域平地が，盆地中心部を取りまくようにして存在する。正に作州の中心部と云つてもよいであろう。從つて，和銅6年分國によつて誕生した美作國の國府及び天平13年の勅令に基く美作國分寺が，この盆地内に，建設されたことは，決して遇然ではなかつた。その有つ自然的環境の優越さが強調される所以である。しかし，自然的環境の優越さは，そこに文化を，醸成させる可能的條件となることが出來ても，それのみでは，文化を生み出すことは出來ない。更にまして，自然的條件の優劣は，所與の社会の持つ諸條件によつて，強く規定される。むしろ，それは，社会的從つて歴史的諸條件によつて，變化し，あるいは変革されもするであらう。我々は，單に，津山盆地の惠まれた自然のみから，その歴史を語ることは，出來ない。國分寺の建立も，國府の設置も，それまでの長い歴史的背景を，無視しては，容易に理解し難い所であろう。

現在，津山盆地の周邊には，無數の古墳墓が見出される。國分寺を中心として附近の低小な丘陵地帶に数百基を数える河邊古墳群，加茂川右岸の台地上に点々と散在する高野の古墳群，神樂尾山東南方の総社古墳群，院庄

平野を臨んで巨大な前方後円墳を含む二宮の古墳群，香々美・芳野・郷にかけてのうねうねとした低い丘陵に立地する古墳群，帶狀に狹く長く走る佐良山の平地周邊の山々に見出される夥しい古墳群。主要な密集地帶を擧げただけでも，その夥しい，恐らくは千を越える古墳墓の營造は，驚異的ですらある。內海平野に存するそれに比すべき古墳群の築造である。これらの，このような多數の古墳墓が，如何なる歷史的な道程を經て山間の小盆地周辺に，營造されるに至つたかという問題及びこれらの古墳墓自身の示すその時代の社会の實体が如何なるものであつたかという問題こそ，津山盆地の，ひいては，作州一円の古代史において，先づ最初に取りあげられなければならない事柄に違いない。こゝに，その概畧を報告しようとする佐良山古墳群の調査は，その足掛りとでも云うべき第一歩に過ぎないものである。

（2）

「美作やくめのさら山さらさらにわがなは立てしよろづよまでに」古く延喜5年紀貫之等の勅撰にかかる古今和歌集に歌われ，以後，その靜かなる秀麗な山の起伏と四囲の美しい景觀とが，様々な人々によつて，吟詠の對象となつたさら山は[1]，また更に遠く，古代國家発展途上の作州の山野に活躍した多くの無名の人々の舞台でもあつた。壘々と，山麓山腹に連らなる夥しい數の古墳墓の群は，點々と，その事實を，示している。

さて，古歌に吟ぜられた「さら山」が，佐良山内のどの山に比定されるかどうかは論外として[2]，我々が，こゝに調査對象として，佐良山と呼ぶ地域は，津山盆地の西南方，皿川流域の狹長な平地及び，それを囲繞する山々を，包括しており，行政的には，昭和16年津山市への合併前の久米郡「佐良山村」[3]を総稱する。北は吉井川をへだてて二宮・院庄と，東は舊久米郡福岡村と，西は久米郡三保村と，南は久米郡加美町と，それぞれ境を接する。東西約3,500m，南北約5,000m前後の小さなムラである。津山盆地を構成する一要地であると共に，近世に至るまでの東西交通の要地でもあつた[4]。その概略の地形を述べれば，先づ，久米郡西部に源を発する皿川は倭文村・三保村の小盆地を貫流して後，佐良山へ入り，原田川・小屋谷川・市場川等の幾つかの渓流を合せながら，緩やかな蛇行を行つて，更に北上し，吉井川に合流している。その流域の平地は，吉井川との合流点附近のやや廣くなつている部分を除いては，約300～500m前後の巾を以つて，南北に細長くのびている地域のみである。「久米郡誌」の著者は，「本平野（佐良山の平地のこと……近藤註）は，本村の主要部であるのみならず，本郡の主要平野である[5]」，と述べておるが，それにしても，僅かな，正に狹長な沖積平地ではある。從つて，やはり，「佐良山村」の大部分は，美作の他の多くの地域と同じように山及びその間を無数に縫つて走つている大小の谷によつて，占められているといつてよいであろう。第1圖の10分1地形圖によつて理解されるように，皿川の東側には，北部に神奈備山（地形圖には佐良山として記載されている。）畝の宮山――寺山連山，更に市場川の谷を越えた南に，箟山――高鉢山の連山，西北辺には，三保村にその西斜面をのばしている嵯峨山山塊，その南面皿川をへだてて，同じく三保村にまたがる大平山を最高峯とする連山等，標高300～400mを算える山

々がその周囲を取りまいている。しかし，これらの山々は，中央の平地に向つて，そそり立つているような部分は少く，概して，ゆるやかな台地を伸ばしつゝ，平地に接しているのが，常である。特にそれは，神奈備山——寺山西面・嵯峨山東斜面・高鉢山西面の一部等において，特徴的である。現在，聚落の多くは，こうした山々の麓下に數十戸づゝ点在

第1図 津山近傍地形図(10万分の1) (Fig. 1)

し，その耕地を，前記の平地及び，山間にのび擴がつている大小の谷頭に，求めている。

こうした地形的環境を有つている佐良山が津山盆地の中でも最も古墳墓の密集する地の一つであることは，先にのべた如くである。それは，盆地東南にあたる，國分寺を中心とした河邊古墳群，國府の跡と稱せられる総社背後の山々に見出される総社古墳群に，まさるとも，劣らない地域である。あの狹小な地域に，200基 にも達しようとする古墳が，ひしめき合う様にして存在している事實は，ともかく注目すべき事である。このことは，こ

の地が，石材に便利な流紋岩の産出に恵まれているとか[6]，東西交通の要衝になつているとかの單純な理由のみからは，考えきれるものではないであろう。今，この佐良山古墳群について，1基1基の素描を始める前に，直接佐良山古墳群に関係ないかも知れないが，津山盆地の，ひいては作州地方一帶の古墳墓誕生の歴史的背景となるべき農耕社会の成立と発展を，特に山間地方という特異な條件の下に若干，考えて見たいと思う。

註

1) 矢吹金一郎訂「新訂作陽誌」『西作誌中巻』18頁――21頁。
2) 同上　18頁。
「久米郡誌」58頁――59頁。
3) 津山市えの合併以前の「佐良山村」については，「久米郡誌」第1章沿革参照。
4) 「久米郡誌」87頁――89頁。
5) 同上　4頁。
6) 特に，神備山――笹山――高鉢に亘つて流紋岩が分布し，山頂山腹の諸処に，露岩を見せている。江坂進氏の教示を得た。

カット3　津山市沼住居址（弥生式）断面露呈写真（cut 3）

## B 歴史的背景

いうまでもなく政治的社会成立の基本的なモーメントとなつたものは，日本列島においては，農耕の開始であり，農耕社会の誕生であつた。従つて，我々もまた，初期農耕社会＝彌生式文化の成立から，語り始めなければならない。

佐良山にも，この時代の人々の存在を示す3，4の遺跡が発見されている。大字皿寺池東方の谷斜面において，小数の後期及び中期（？）彌生式土器片と共に石庖丁が，同じく皿市場のやや急峻な谷傾斜面に，後期彌生式の明らかな包含層が，更に，大字高尾御笠美の標高 200m の台地上において，若干の後期彌生式と考えられる土器片が，又大字福田劍戸の西面丘陵上に，微細な土器片と共に蛤刃石斧と，石錘が，その他，正確な出土地点は明らかでないが，蛤刃石斧，石庖丁，抉入石斧等が発見されている。何れも，現在の集落とは，或る程度へだたつた丘陵又は谷斜面であることが注意される。ともかく，そこには明らかに石器を用いた人々が，農耕を營みながら住んでいた。

（1）

「彌生式文化における集落立地の性格は，つねに低地性といふ言葉を通じて強調される」[1]。彌生式文化を語るものは，例外なしに，縄文式のそれとの對比の上に，その遺跡立地の低地＝沖積地進出性を，語り續けて來た。彌生式の社会が，農業を，恐らくは水稲耕作を，その基本的な生産部門としようと努力し，又は基調としていた事が，明らかである以上，その立地の低地性は，当然のこととしてうなづかれなければならない。事実，藤岡謙二郎氏によつて語られた如く[2]，日本各地における主要彌生式遺跡の殆んどが，以上を裏書していることは，我々のよく知る所であつて，作州に程近い，瀬戸内の諸地方においても，或は，山陰地方においても，略々明らかな実際である。しかし，この「低地」とは，そもそも，どういう意味を持つているのであろうか？それは單に標高が低いということであろうか？作州における低地とは，一体どこであつたろうか？　我々は，その前に，彌生式文化成立の地形的基礎について考えて見よう。少くとも，自立的には水稲耕作に全く無経験であつたと考えられる人達にとつては，その耕地，というより播種地に，一つの限界があつたということが，考えられる。恐らく彼等にとつては，自然灌漑可能な新成沖積低地＝低濕地を，それに求める以外には，進んで灌漑排水の土木工事を行うことなどは，出來なかつたに，相違ない。技術的な未熟さと，それに基く社會的な諸條件とは，少くともそのはじめのあいだ，彼等に一定の耕地のみより外に，與えることをしなかつたであろう。通常我々が，遠賀川式の名で呼んでいる，初期彌生式文化の前半の全部の遺跡及び後半の大部分の遺跡は，このことを裏書するように，一つの地形的環境を同じくする土地に，所在している。その地形的環境とは何かというと，それは，單に標高が低いというようなものでなく，その周辺又は周邊の一部に，自然灌漑可能な，即ち多大の人力＝強固な社会的統制力の発動による灌漑乃至排水などの必要の全く

ない又は，殆んどない濕潤な低地＝沖積地が，繞つているということである。中期・後期の遺跡が，往々山間部に（この作州においてもそうであるように）見出されるのに引きかえ，前期，特にその前半の遺跡の殆んどすべてが，この様な地形的環境の中にのみ，見出されることは，こゝでクドクドいうまでもなく，初期農耕社会成立の際の，必然的な現象であつたろう。彼等は，「山高くえ人力の斧を揮う」[3]のには，あまりにも未熟で且つ無経験であつた。作州において数十に達する彌生式遺跡の発見が，確認されているにかゝわらず，初期後半の小規模な一遺跡[4]を除いては，すべて，中期又は後期彌生式の遺跡であることも，この点から，理解されなければならない。事実，作州には，海岸平野や廣大な盆地平野に見出されるような，自然灌漑可能な低濕地など，その當時においても，殆んど存在しなかつたのにちがいない。その持つ山間地域の特質からして，backmarsh の成立すら，殆んど不可能である。[5]とすると，作州における農耕社会は，如何にして成立したかということになる。作州の山間部地方は，備中備前の平野地方で低濕地に水稻を植えつつあつた時，依然として繩文式の段階であつたのであろうか？言いかえれば第2次的な波及という形で，一度海邊低地における人々によつてダイジェストされたものを，山の人々は，受け入れたのであろうか？はじめ，人々が，沖積平野に初期彌生式文化を残しつつあつた時，依然として山間に居住し，狩獵を行つていた人が，やがて，平地の多くの部分に擴大しつつあつた農耕の文化に刺戟され，その生活を，農耕のそれへと，轉化させていつたのであろうか？しかも彼等は，石器においても，土器においても，吉備平野，山陰の海岸平野に見出されるものとさして変りのないものを，残している。遠賀川式を先行形態として通過しなければ，誕生し得ないような製作・器形文様を有つ，初期末から後期にかけての彌生式土器が，果して山間に狩獵した人々によつて，直ちに，製作され得たであろうか？こゝに問題がある。

（2）

作州における彌生式遺跡の中，前期前半に屬するものは皆無であり，津山市山北遺跡を除いては，すべて中期から後期にかけてのそれであることは，先に述べた。たとえば，勝田郡那岐山扇状地に夥しく所在する数十の遺跡のすべてが，中期から後期にかけてのそれであること等。[6]繩文式晩期の遺跡はどうであるうか？，これまた皆無である。晩期はおろか，繩文式の遺跡自体，確認されているものはなく，僅かに2，3の土地からその出土が傳えられているのみである。[7]恐らくは100をはるかにこえる，彌生式の遺跡に比べて，あまりに，貧弱である。調査の不備と，一がいに，いえないものがあるのではなかろうか？それに對して，例えば，吉備の内海地方は，どうであつたろうか？。そこでは，註記したように，20ケ所近くを数える繩文式晩期の遺跡が，當時廣大な干潟を眼前に展開させたに違いない丘陵緩傾斜面乃至丘端麓上に，立地している。[8]そして，その間に，前期の彌生式遺跡が，略々同様な立地をもつて，点在している。このような現象は，單に，兩備・美作地方のみの現象ではない。その他の内海地方・山陰・北九州・畿内等の諸地方においても，微細なちがいは存しようとも，畧々同じ狀況であつたことが，考えられる。[9]即ち，繩文式晩期の遺跡も，彌生式初期の遺跡も，地

方々々の特性は存するけれども，その集落立地において尙それをこえて，それぞれ一つの共通性を有つていることが，考えられる。

これらの材料から，作州の山間地域における農耕社会の，成立をどのように考えることが出來るであろうか？ 極めて大膽な考え方かも知れないが，一つの試考として，次のように考えることは，出來ないであろうか？[10] 繩文式晩期の時期において，作州山間地方，（これは必ずしも作州のみでなく，備中備前の奥深い山中であつてもよい）には，人々は定住的な居を，かまえていなかつた。集團は殆んどすべて，海岸平地の緣邊，山の幸と海の幸とを共にとり入れることが出來る地域に，居を占めていたのではなかろうか？ 漸進的にではあつても，徐々に進行した繩文式社会の進歩は，その集落立地を，より生産性の豊かな土地へと，絶えず向けていつたに，相違ない。その間の事情は，今は觸れないとしてとにかく，その最末期に至つて，新しい文化の刺戟の下に，人々は，附近一帶に生成しつつあつた地形的な基礎（＝新成沖積地における自然灌漑可能な低濕地の誕生）に巧みに適應し，[11] 直ちに稻作の技術を，獲得していつたに違いない。その場合，同様な生産技術，同じ社会体制，加えて同様な地形的環境の下において，或る集團＝集落のみが，長時間に亘つて，果して依然たる生活を，繼續し得たであろうか？ 備中備前等內海の緣邊に居を占めていた彼等は，絶對時間の若干のズレはあつたであろうが，畧々一齊に，稻作及びそれに隨伴する諸種の技術を，獲得して行つたに違いない。[12]

繩文式末期から，彌生式の時代にかけて，海退と共に河川による沖積化は，可成りの勢で進み，處々に濕潤な低地を，形成していつたのであろうと，考えられる。[13] 最初期農耕民にとつては，附近に生成しつつあつた所の，灌漑も干拓も必要としない耕地，即ち繰り返えし述べた自然的灌漑可能な土地を，その耕地として求めざるを，得なかつたであろう。彼等の社会的條件は，彼等に，このような形態の耕地を，もたらした。しかし，それが如何に，貧弱なものであつたろうと，ここから彌生式文化の新しい前進は，開始される。経驗の蓄積と技術の進歩は，徐々とではあつたが，前代と比べて格段の急テンポを有つて進行した。沖積化は着々と進行し，次々と濕潤な土地（その多くが，backmarsh という形で）を生み出して行つたであろう。社会は前代に比しての，その相對的安定と共に，著しく內部的に，增大を遂げて行つたに違いない。耕地は，地形的な基礎の新らたな提供と漸次行われはじめた技術の発展とによつて，着々と增加していつたであろう。

しかしその限界は，あくまで嚴然と存在していた。彼等の漸くにして達し得た社会の能力　その技術的経驗と社会的体制＝條件……において，その耕地は，著しく限定されなければならなかつた。それにもかかわらず，彼等は発展し，前進せねばならなかつた。貧弱な体制の下に，低平地に横に擴がつて行く努力を懸命に試みたと共に初期農耕民は，ようやくにして，新しい價値＝土地を見出した。沖積平野に形成された自然灌漑可能な濕潤地以外に，彼等にとつて，残された所は，ただ一つであり，それは，山と山との，丘陵と丘陵との間の谷，谷頭利用の耕地であつた。[14] 彼等が，ようやくにして発見したのは，これであつたにちがいない。收穫量の点にお

いて，低濕地に比べて格段の差は，あつたであろうが，僅かの能力によつて，容易に，しかも，至るところに求めることが出來る。谷間に流れる水（小川である場合も，湧水である場合もあるであろう）は，水溫が極度に冷寒である場合を除いて，多少の勞力によつて灌漑水に轉化する。平地に灌漑するとは，話にならぬほどの小さな勞力をもつて，多少の堰を設ければ，更に好條件に惠まれたであろう。現在至る所の山間に見られる谷頭利用の段々式の水田は，それとして完成された姿である。先づ，低平地周辺において試みられたと考えられるこの形態の耕地は，增大しつつあつた人口の一部と共に，漸次に河川を遡り「山高き」方向へ，擴つていつたものであろう。我々が，作州において，山間や，開析扇狀地上に見出す初期末乃至中期初頭以降の彌生式の集落は，このようにして，誕生していつたものと，考えられる。成程，それは森本氏の云ふ樣に「ネガテイーヴ」であるかも知れない。[15] しかし，それは，貧弱な社会の発展段階において，地形的な制約を受けつつ，彼等の到達した必然の方向でもあつたのではなかろうか？　主として，吉井川と旭川にそつて，北上していつた彌生式の集落は，蒜山・那岐山の山麓に，津山盆地の緣辺に，勝間田——林野附近の丘陵に，久世・落合・勝山の谷頭に，次第次第と擴がつていつた。

（3）

このようにして，誕生していつたと考えられる作州の初期農耕社会は，その有つ自然的環境の劣惡さというハンデイキヤツプの下にも尙內海・山陰の諸地域におけると同樣，より確固とした社会の体制へ向つて，より大いなる政治的社会へ向つて，擴大発展していつた。貧しい谷頭水田を耕作する人達の間にも何時しか，銅鐸が，現われるようにすらなつた。[16] そこには，銅鐸を獲得し得るほどの「豊かさ」と社会的な要求とが，生じていた。族長制が，急速に伸展しはじまつた。稻作の技術も，種々の他の技術と共に，着々と，蓄積する經驗に，培われていつた。現在の知見では，この当時，作州における先進的な地域はむしろ那岐山，蒜山等の，無数の谷とゆるやかにのびる丘陵とを抱いた扇狀地であつたように思われる。河川の合流する津山盆地の中心部は，一つのウンエクメネーであつたかも知れない。

しかし間もなく，樣相は，徐々に変つてくる。彼等の社会的條件の発展と共に，集團と集團との間に，地域地域をめぐつての，激しい鬪爭が，ようやくにして，行われはじまつたにちがいない。そして，その絕えざる過程の內に，より大なる地域集團＝政治的社会が誕生してゆく。そこにはまた，他の地方からする，激しい壓力も加つたであろう。大和を中核とする畿內の「集團」と，北九州のそれとの間に存在して，たとえそれが山間地域であつたろうとも，その政治的成長には，見るべきものがあつたであろう。一方，生産技術は着々と進歩をとげ，それに相應じて発達してくる社会的諸條件とマツチして，著しい生産力の飛躍が，なされたことであろう。即ち，今まで，谷頭を主として耕作していた人々にとつて，平地＝盆地が，新らたな耕地として重大な意味を，持つて來た。山間に開けた僅かの平地，津山周辺の小さな盆地平野，それは，たとえ方一里にも滿たないものであつても，狹小な谷頭とは比べることの出來ない豊かさを，持つたことが，考えられる。內海地

方においては，平野のど眞中に，後期彌生式の大集落が，どしどしと，進出している。[17] 技術の進展と究極にはそれに基く社会の発展とが，前提されなければ，考えることは出來ない。作州においても，傾斜地の多い山間地方のこととて，灌漑の技術の進歩と共に，可成りの池の築堤すらも，はじめられたかも知れない。盆地内の平地の耕地化は，幾多の政治的な諸條件とからみ合いつつ，谷頭利用の耕地を，壓倒させる力を，生み出していつた。

小河川がそそぎこみ，そこに小さい乍らも幾多の流域平野と小盆地とに恵まれた津山盆地が，ようやくにして，大きく，歴史の舞台に，浮き上つて來た。平野に恵まれない作州の中心的な存在として，その雄姿を，示してきた。ぐいぐいと，強力な政治的社会が，そこに成長して來たことは，当然である。直接間接の大和國家の壓力と影響との下に，やがて，その社会の「有力者」の間に，奥津城としての古墳を營造する風習＝必要が，擴がつていつたであろう。津山盆地の眞の歴史は，ここから始まる。

## 註

1) 森本六爾（弥生式文化）「ドルメン」4巻6号89頁 1935年。
2) 藤岡謙二郎「地理と古代文化」第4章第2節 1946年。
3) 森本六爾 同上 98頁。
4) 最近発見された遺跡で，津山市山北一丁田にある。遠賀川式土器小破片数個が出土している。尚，同所附近からは，他に中期後期の弥生式土器及び石器類が，可成り採集されている。（斉藤安夫氏蔵）
5) この点，西本達二氏の教示を得た。
6) 那岐山麓扇状地の一部である勝田郡豊並村，豊田村，北吉野村の3村において，日本原調査委員会の手で，現在31ケ所の弥生式遺跡が，発見されている。近く同委員会によつて，その詳細が，発表される予定である。資料借用に際しての好意を，厚く感謝する。
7) 苫田郡一宮村中山神社
真庭郡美和村余の上
真庭郡美和村目木
真庭郡河東村西原
以上鎌木義昌氏の教示によるが，なお，同氏によれば，前3者は，水原岩太郎氏の資料で，遺跡のはつきりした所在地点は，不明のようである。最後者の資料は，鎌木氏が採集しており，中津式土器1片のみである。同氏の好意に感謝する。なお，「日本原石器時代地名表」（第5版）野村兼太郎「日本社会経済史」第1巻等に所載の「美作国石器時代遺跡」は弥生式遺跡又は，作州特産の風蝕礫（偽石器）の発見地である。稿成後，落合高校（真庭郡落合村）において真庭郡勝山町勝山高校敷地内出土と伝えられる縄文式後期の土器一片に接することができたので一応附記する。
8) 「縄文式晩期」に屬する土器を出土している遺跡を列挙すれば，次の通りである。
この点に関して，鎌木義昌氏の教示にまつたところが多い。

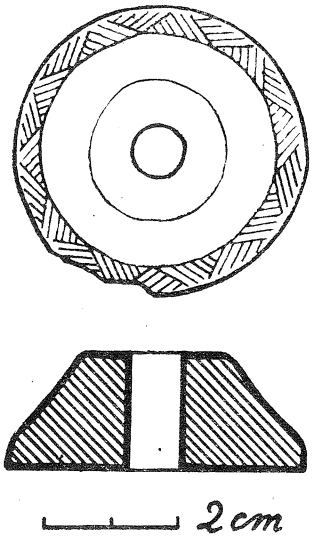
| | |
|---|---|
| 岡山県邑久郡太伯村大字清音 | 黒和貝塚 |
| 岡山県邑久郡牛窓町大字黄島 | 黄島貝塚 |
| 岡山県上道郡浮田村大字沼 | 貝殻島貝塚 |
| 岡山県上道郡角山村竹原 | 下竹原貝塚 |
| 岡山県児島郡粒江村東粒江 | 船津原貝塚 |
| 岡山県児島群福田町古城 | 古城貝塚 |
| 岡山県都窪郡吉備町大内田 | 宮後貝塚 |
| 岡山県淺口郡富田村八島 | 島地貝塚 |
| 岡山県淺口郡黒崎村屋守 | 中津貝塚 |
| 岡山県淺口郡大島村西大島 | 津雲貝塚 |
| 岡山県小田郡神島外村高島 | 黒土遺跡 |
| 岡山県小田郡神島外村高島 | 王泊遺跡 |
| 香川県小豆郡豊島村 | 神子濱遺跡 |
| 香川県小豆郡四海村 | 伊喜末遺跡 |

これらの遺跡は，その大部分が貝塚遺跡であることから判断されるように，その多くが，標高10m以下4、5mの低地に立地し，附近一帯に広くやがて沖積化される又は沖積化されつつあつた土地を望んで，営なまれている。
9) 北九州では今，詳細なデータがないけれども，縄文式晩期土器の出土する遺跡の発見は逐次報ぜられており，その何れも低平地又はその近くに進出していることが，知られている。最新の

出版にかかる「北九州古文化図鑑」第1輯解説書11頁によれば，晩期の完形土器を出土している筑前国遠賀郡中間町底井野字下大隈の遺跡は「遠賀川々床の荒地に広く遺物の散布を見る。有名な立屋敷遺跡（ここからも遠賀川式弥生式土器に混じて縄文式晩期の若干片の土器片が検出されている。←近藤）の上流である。」とし，更に松浦川流域の低平地に立地する「肥前東松浦郡久里村柏崎貝塚においては遠賀川式土器に伴う同形（底井野の土器と同形←近藤）のものがあり…… 條痕を持つ同種の土器の破片は，遠賀川土器の遺跡で筑豊方面での類例があるので，北九州では弥生縄文両系統の交流問題の解決の鍵となるものゝ一つであろう」と述べており，特に，弥生式初期の遺跡と重複している割合の強い点が，むしろ注目される。山陰地方の縄文式遺跡は，一般に，低地又はその周辺に発見されることが多く，中には現海底に見出されることも少くない。晩期のはつきりした遺跡は比較的少いが，松江市法吉町遺跡や米子市目組遺跡等にみられるように，何れも現海岸線に近い低平地（西伯郡外江町西灘遺跡などは現海底にある）に立地して，これまた，弥生式初期の遺跡と重複していることが多い。（法吉目組の各遺跡から，遠賀川式土器が出土している）。 近畿においては，若干事情が異なるが，河内日下貝塚・紀伊鳴神貝塚にしても，前者は「河内平野の低地に移らんとする……谷口扇状地の末端部を，聚落立地として利用し」後者は「藻屑川低地に接する埴山の低い丘陵端に立地」しており，近江滋賀里遺跡は，現琵琶湖水面より比高数mの低地に存在し，同国坂田郡杉沢遺跡は，伊吹山南麓面下に発達している谷口扇状地の末端部附近に立地し，更に大和橿原遺跡は標高にしては高位であるけれども，盆地床との比高20m強，奈良盆地南端部の沖積平地を一望にのぞむ低い丘陵の末端部に位置している。有名な唐古遺跡から，晩期に屬すと考えられる縄文式土器が出土していることは，衆知の事柄である。 官滝遺跡等の 1，2の例外とも云うべきものを除いて，縄文式晩期に屬すると考えられる遺跡の殆んどは，低平地又は低平地に臨む丘陵端乃至扇状地端に立地していることが，考えられる。

「北九州古文化図鑑」第1輯解説書11頁1950年
藤岡謙二郎「地理と古代文化」85頁88頁
小林・藤岡・中村（近江国坂田郡春照村杉沢遺跡）「考古学」9巻5号 1938年
末永雅雄「官滝の遺跡」1944年
山陰に関しては，佐々木謙氏に負う所が大である。

10) この問題に関しては，瀬戸内海綜合研究会個人研究テーマとして，別に他の形で発表の予定である。
11) 藤岡謙二郎「前掲書」第4章第2節。
12) かくして弥生式文化の急テンポな拡大，北九州から瀬戸内・山陰・畿内・伊勢湾に至る諸地方の弥生式文化えの急速な転換は，より具体的に理解されるであろう。
13) 藤岡「前掲書」第4章第2節。
14) いわゆる「谷頭水田」に関しては，岡山大学講師石田寛氏の教示，による所が大である。
15) 森本六爾「前掲論文」89頁。
16) 拙稿（美作国植月村念仏塚出土の銅釧）「吉備考古」83号。
17) 弥生式後期の頃になると，貝塚遺跡の数が，相對的にも絶對的にも，減少して，前期中期には見られなかつた大規模な集落……例えば，岡山県都窪郡庄村上東――中島遺跡，岡山市上伊福遺跡など……が，平野の中に，主として河川による自然堤防をその立地として利用しながら，出現してくる。距離は遠くはなれているが，静岡県登呂遺跡においても見られるような，耕地というものに對する積極的な設備と工作が，当然考えられてよいのであろう。




カット4 寺山1号墳採集 紡錘車形石製品（cut 4）

## C 各古墳の素描

舊「佐良山村」にあるから，單純に佐良山古墳群というのではなく，この地域は，先にその地形を概觀した様に北は吉井川，東は神奈備山……（地形圖には佐良山と記されている）笹山……高鉢の連山，西は嵯峨山山塊，大平連山，南は大平連山と高鉢山の連山とが溪谷をなしている地帶，という具合に，それぞれ四方において，一應他と切りはなされた單位地域を，なしている。この單位地域内に在る古墳を，総稱して，佐良山古墳群と，呼んだのである。であるから，僅少な例であるが，行政的單位である「佐良山村」に屬していない古墳も，当然含まれた。

本項では，一つの基礎史料として，この地域内に營なまれた，退屈になる程の量の古墳について，一基一基の現況を，記載してゆく。便宜上，地形に從つて4つの地域に大別し，更にそれぞれを幾つかの群に，必要に應じて更に細群に，分けて見た。元來，どの古墳から，どの古墳までが，××古墳群，山の裾にあるから，××古墳群と定めることは，嚴密には甚だ根據の薄いことがあるが，それが記述の便宜に加えて，多かれ少かれ，実際の一面を示しているので，ここにおいても，舊例にならつて，一應一つの案として，下のように分けることにした。

| | | |
|---|---|---|
| 神奈備山西方地域（神奈備山古墳群） | | 65基 |
| 1・ | 一方古墳群 | 11基 |
| | A群 | 7基 |
| | B群 | 4基 |
| 2・ | 寺山古墳群 | 8基 |
| | A群 | 5基 |
| | B群 | 1基 |
| | C群 | 2基 |
| 3・ | 門の山古墳群 | 13基 |
| 4・ | 煙硝庫附近古墳群 | 8基 |
| 5・ | 寺池東古墳群 | 18基 |
| 6・ | カキ谷古墳群 | 7基 |
| | A群 | 4基 |
| | B群 | 3基 |
| 嵯峨山東面地域（嵯峨山東面古墳群） | | 30基 |
| 7・ | 嵯峨山東面古墳群 | 30基 |
| 笹山高鉢山西南面地域（笹山古墳群） | | 50基 |
| 8・ | 御笠美古墳群 | 13基 |
| | A群 | 2基 |
| | B群 | 11基 |
| 9・ | 剣戸古墳群 | 28基 |
| | A丸山古墳群 | 2基 |
| | B中宮古墳群 | 8基 |
| | C高根山根古墳群 | 4基 |
| | D剣戸古墳群 | 14基 |
| 10・ | 小屋谷古墳群 | 5基 |
| 11・ | 孤立的存在 | 4基 |
| 大平山東面地域（大平山東面古墳群） | | 23基 |
| 12・ | 若林古墳群 | 7基 |
| 13・ | 三ツ塚古墳群 | 9基 |
| 14・ | その他 | 7基 |
| | 総計 | 168基 |

### 神奈備山古墳群

数的にいえば，最大の古墳密集地帶であり，その大多数が，寺池及び市場川附近の，複雑に入りこんでいる谷頭水田に面する斜面又はそれを見下ろす台地上に，立地している。しかし，また，神奈備山塊北面の山腹，山頂上，あるいは，市場川の狹小な溪谷地帶に，点々と存しているなど，先に述べたように，更により小單位の，しかしより特色の鮮明な幾つかの古墳群の集合によつて成立している。

## 一方古墳群

神奈備山塊西側の北面の，山麓，山腹，山頭に，点在する古墳を，ここで一括して，假に一方古墳と呼んだ。此等はすべて，所謂佐良山の狭小な低地帯には面せず，蒼津山市内方面に面して，營造されていることが，特徴的である。從つて恐らく，これらの墳墓は，佐良山の狭小な平地に，居を構えた人々の奥津城というより，むしろその面する方向が示す地域の人々によつて，營造されたものと推定されるかも知れない。墳墓の位置と被葬者の所屬していた集落乃至土地＝耕地との関係については，後に若干觸れる豫定である。記述の便宜上，一方古墳群を，更にA群及びB群に，分けて見た。第1号墳から第7号墳までは，A群に屬し，井口より畝に向つて上る道路周辺に所在する。第8号墳から第11号墳までは，B群に所屬し，大下の部落裏附近から，谷沿いに，南に登りつめる山徑にそつて所在する。第何号墳の数字は原則として山麓から山頂へ向つて順次付せられている。( )内の数字は古墳連續番号。

A　群。

第1号墳。(1)(一方) 皿川蒼河道に面して，山麓の長方寺の竹林中に，所在するが，今その封土のすべては，ハカイ消失し去つており，その形狀規模は，全く不明である。同じくハカイされた残骸をとどめている横穴式石室は，天井石などの殆どを，散失しているが，壁下部は，比較的よく残つており，細長な玄室を持ち，羨道が片袖式に作り出され，北々東に開口したものであることを，示している。現存石室長 5・16m　玄室巾 1・2m　羨道巾0・85mを測る。奥壁に近く，右側壁に沿つて，土師燒亀甲型の陶棺が，安置されていたもののようで，現在棺半身のみが，原位置と考えられる個所に存在しているほか，その蓋身の残片が多く散乱している。陶棺は，半身の長さ1・05m　高さ 0・7m　内底巾 0・62mを測る。

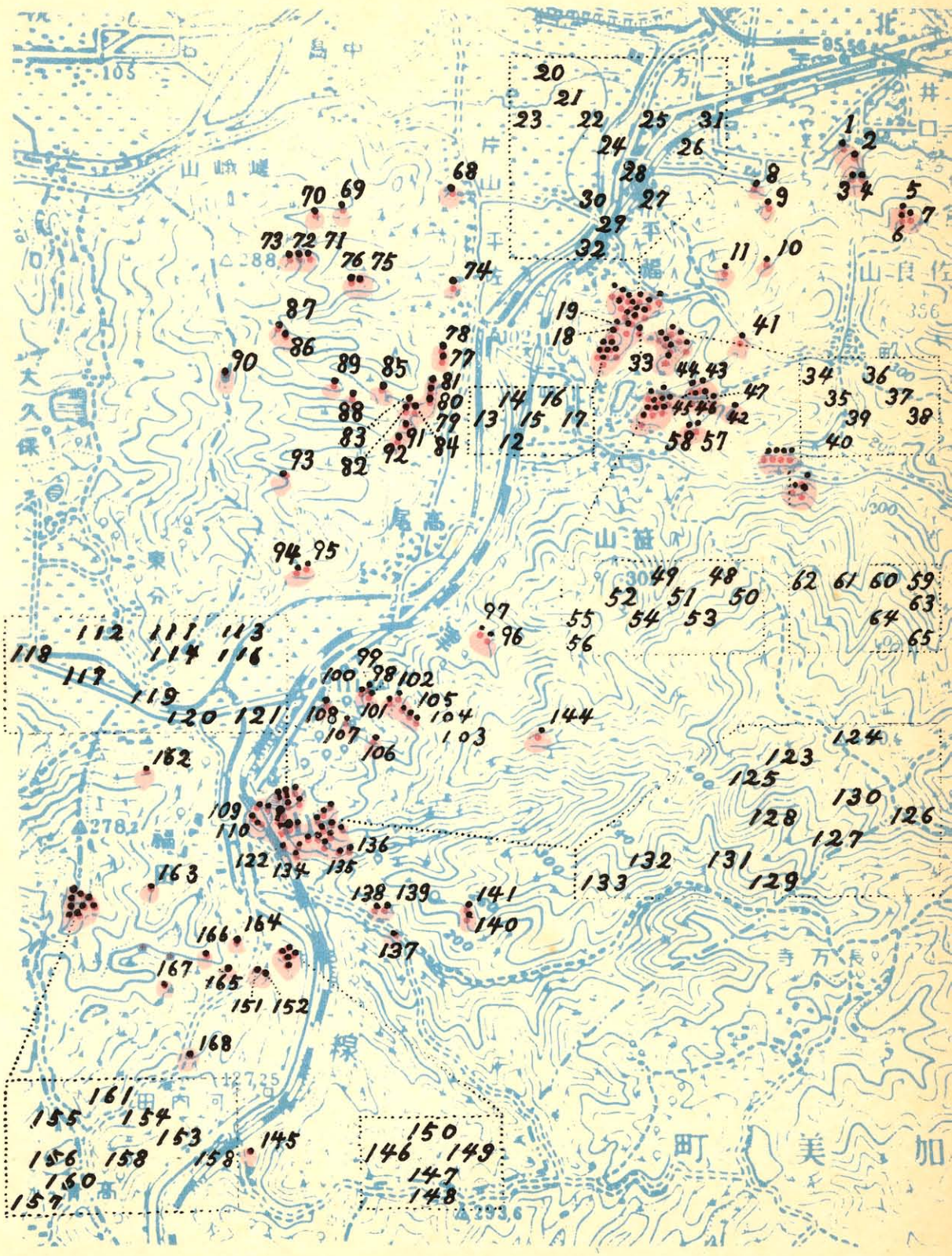
第2号墳。(2)(一方) 1号よりやや上つた斜面に，所存する。封土殆ど流出して，徑その他不明であるが，小円墳と推定される。今，奥壁を含む石室の一部が残る。北東方向へ開口した横穴式石室で，内部に土師燒陶棺片が僅かに，残存している。

第3号墳。(3)(一方) 2号より更に上方の斜面にある。道路工事によつて，中央部の大部分切断。今，道の両側に，僅かに封土を残している。推定徑 10・4m　高約2m 程の小円墳。石室はハカイ消失しているが，若干の尺大の割り石が，残存封土内に，認められる。

第4号墳。(4)(一方) 3号に隣接して存したらしく，今，ハカイ消失して全く不明。(近藤保氏教示)

第5号墳。(5)(一方) 5号6号7号は，井口……畝頂道路の東側にある標高 240m前後の台狀をなした頂部に，所在したと，いわれる類(近藤保氏)で，今，その跡形らしい石材，土器片が散見されるのみである。5号は，その台頂部の中央辺に所在したものと，推定され，現にその部が，周囲より，やや高まりを見せていることが，注意される。頂部一帯の開コンの折，ハカイされたものであろう。今附近に，竪穴式石室の構造を想わせるような板狀の割り石が，無数に散乱している。因みに，この地は，津山盆地の大部分を，一望することが出來る絶好の場所である。

第6号墳。(6)(一方) 台頂部の東側に位置し




第 2 図　　佐良山古墳群分布図　(Fig. 2)

数字…古墳番号。但し，66・67・142・143は欠番

同じく開墾のために，ハカイされたものらしい。封土の曾つて存在した様が，僅かに認められる。近藤保氏によれば，ハカイの折土師焼の陶棺が，出土したという。附近に土師器散見。

第7号墳。（7）（一方）6号に隣接して所在し，同じく，ハカイ消失したと稱せられているが，現在封土の痕跡は，全く見られない。近藤氏によれば，ハカイの折，石室（？）が，あつた由。今，畑隅に若干の割り石，附近に土師片散見。

B　群。

第8号墳。（8）（一方）山麓斜面上に，位置する円墳で，道路工事によつて，中央及び北側の封土が，ハカイ除去されている。推定徑（以下推徑）10m推定高（以下推高）2·0mの小墳。石室もハカイ消失して，今若干の石材を残すのみ。山田清之氏の調べによれば，ハカイの際，陶棺，鉄器，土器が，出土した由。

第9号墳。（9）（一方）8号の上方，谷間斜面上の山林中に所在する円墳で，徑約 12～13m，推高2·5m。墳頂はハカイ除去され，横穴式石室天井石と推定される巨石の一部が，露出。

第10号墳。（10）（一方）更に高位の，峠に近くなつて，道東方の山林中斜面に所在する。封土は，完全に消失しているが，石室から見て小墳と推定される。石室は，横穴式で，これまた，ハカイされ，天井石2枚と，側壁の一部とが，残存。現存長 4·8m。西北に開口している。

第11号墳。（11）（一方）峠附近の斜面に所在し，開コンによつて，ハカイ消失したもの。附近に，石材散乱し，もと横穴式石室があつたことを，想像させる。又，附近に土師焼陶棺片が，散見される。

## 寺　山　古　墳　群

大字皿小字寺山に屬し，寺池の北側にあたる，なだらかな尾根がある。神奈備山塊が，西方に向つて，ずーつと下降し，この寺池北側で，僅かに高まつているが，（標高180m比高80m），それは再び長昌寺の方向（略々南方）にむけて，徐々に低くなり，皿の水田に連結する。寺山古墳群は，この標高 180m の寺山附近から，南々西面にかけての，なだらかな山頭に所在する。1952年度から，この地の開墾が始まり，豊澤な果樹園となる日も近いが，朝日夕日をその全面に浴びるこの地は，往昔，奥津城の地としても，いち早く選定されたに違いなく，現に，所在する8基の古墳の内，2基は，略々確実に，他の2基も恐らく，竪穴式石室を，その内部構造としていることが，考えられる。立地及び構造から上の8基を，更に，ABCの3グループに，分けて記述しよう。

A　群。

第1号墳。（12）（皿・市場寺谷）8基内，最下位に位置する円墳で，その徑約14·6m　高約3mを数える。墳頂には，ハカイ痕があり，石室の一部が，露呈している。明らかに竪穴式石室の制をとり，その壁は，粗雑ではあるが薄い板状の割り石で，構築されている。蓋石は，それらしい一二を除いては，附近に見出されないが，ハカイされた側壁は，頂部に散乱している。石室の主軸は，略々東西である。尚石室内の土中から，山田英輔君によつて，紡錘車型石製模造品（滑石製）が1個発見されているほか，墳頂に，祝部式土器の細片が，若干散見される。

第2号墳。(13)(皿・市場寺谷)　1号の西北側数mの所に所在する2号墳は，径約12・5m高約3mを測る円墳で，同じく墳頂が，大きくハカイされ，その痕に，石室の極小部分が瞥見される。石材の多くは，散乱しているが，竪穴式石室の制をとるものと，考えられ，その主軸は，東西の方向。壁材は，1号のそれに比して，更に粗雑な割り石で，必ずしも板状を呈するもののみでなく，通常の塊状割り石を，可成り使用している。墳下から，石製の丸玉1個，墳頂のハカイ痕から，有柄尖根式の鉄鏃残片が，拾集されている。

第3号墳。(14)(皿・市場寺谷)　前二者よりやや大きな円墳で，より北側の，少しく高位に立地する。径約14・1m　高約3・5mを測る。頂部には，東南から西北にかけての長方形のハカイ痕があり，石材が，若干散見される。石材その他からして，竪穴式石室と推定される。

第4号墳。(15)(皿・市場寺谷)　寺池上古墳群中最大のもので，3号の東側数mをへだてて所在する円墳である。その径約20m　高約6mを算える堂々たるものであるが，前3者と同様，墳頂に，ハカイ口が十文字に開き，石材若干が，散乱している。しかし全堀は，してないらしい。石材からみて，恐らく，竪穴式石室と推定される。

第5号墳。(16)(皿・市場寺谷)　3号の北側にある径約11・4m　高2・5～3mの円墳で墳頂にハカイ痕があり，恐らく，竪穴式石室かと考えられる石室も，ハカイされている。

今，石室は，ハカイ部に，大きく被土をうけているので，判然とはしないが，東西に主軸を持つ，全長推定2・5m位と考えられる。蓋石の一部と思われる石材が，墳下に落下している。以上1号から5号までは，すべて，同じ傾斜面上に集合的に立地し，盗掘痕及びその結果現われている壁又は石材が，竪穴式石室を，確認又は想定させるなど，一連の共通性を有しているので，一つのグループとして，充分に取扱い得るであろう。佐良山古墳群中に現在見出される，唯一の比較的はつきりした竪穴式石室墳群であることは，注目されて然るべきもので，1952年度に，再調査が，豫定されている。

B　群。

第6号墳。(17)(皿・市場寺谷)　4号の南東側に所在する。墳頂の封土の殆どが消失し，形体不明であるが，推定径約9・0mの小墳と，考えられる。今，横穴式石室の構造を想わせる2m角位の巨石が一ケ露出している。A群に接して，横穴式石室墳が，一基のみぽつんと存在するとすると，いささか奇異な現象と云わねばならないが，この6号は，少くとも，我々の観察の範囲では，竪穴式を示す何物も，認められていない。再調査を要するであろう。(稿成直前，ほかに4基の古墳が発見された。)

C　群。

第7号墳。(18)(皿・市場寺谷)　第8号墳と共に，先の6基よりずつとはなれた寺山の最高所附近に所在する。径6・6m高0・5mに満たない小円墳で，墳頂にハカイ痕がある。石室の有無は不明であるが，墳上から，ガラス製の薄コバルト色を呈する丸玉及び鉄製刀子が，発見されている。

第8号墳。(19)(皿・市場寺谷)　第7号と並んでその北側に位置する径6・7m　高1m前後の小円墳で，處女墳と推定される。立地墳形からして，7号と同様な類と考えられるの

で，この2基を合して，C群とした。

## 門の山古墳群

神奈備山塊の西端に近く，寺山古墳群と東に浅い谷一つへだたつた，北西方向へ舌状にのびる一支脈の尾根部にあたる極めて緩傾斜の舌状部に所在する古墳を，假に，門の山古墳群と呼び，更に，その附近に所在する若干の古墳をも，便宜上同一群として，これに加えた。現在13基が，認められるが，内9基は舌状台上に，3基は寺山との間の屹部に，他の1基はそれと反對側の尾根部に，立地する。屹部に立地する1基（第13号）を除いては，何れも大同小異の大きさ高さ形状を有つ小円墳が殆どで，その内部主体も，單なる推定ではあるが，横穴式のそれを示すとは思われず，むしろ，今回の発掘にかかる第1号墳に見た式の箱式棺であろうと，考えられる。約100m程の間に点在する。尙，第×号墳の番号は，おゝむね，舌状部突端附近からはじめて，東南方向へ，順次附せられている。

**第1号墳。**(20)（平福・門の山）発掘調査報告（後章）参照。

**第2号墳。**(21)（平福・門の山）　1号から約10数mはなれて所在する。封土が著しく流失しているので，形状不明であるが，推徑約8・5m程の小円墳であろう。高さは甚しく低い。内部構造は不明である。

**第3号墳。**(22)（平福門の山）　2号より10数m東南に所在する小墳で，これまた流土のため，墳形明瞭でなく，円墳かどうか不明。大ささは2号と略々同じ位で，高さ0・5m前後，處女墳と推定される。

**第4号墳。**(23)（平福・門の山）3号の西南数mの個所に位置する徑約11・0m高さ2・5mの小円墳。處女墳と推定されるが，石室のそれと考えられる石材の一部が，墳頂に，露頭している。

**第5号墳。**(24)（平福・門の山）　3号の東南側にあたる小円墳で，墳頂の封土は，可成り流出している。現在徑約9・3m高約1・2mを測る。盜掘によるものか，封土流出によるものか，石材（箱式棺と推定）の一部が，露呈している。

**第6号墳。**(25)（平福・門の山）舌状部の東北斜面に位置する，徑約9m高さ2～2・5mの小円墳で，未発掘と推定される。

**第7号墳。**(26)（平福・門の山）畝～皿道路端に所在する　徑約10m　高約2～1・8mの小円墳で，封土の一部は，ハカイされているが處女墳と推定される。

**第7号墳。**(27)（平福・門の山）舌状部の西南面に位置する8号墳は，封土の多くが流失し形状定かではないが，徑約10mに満たない小円墳であろう。

**第8号墳。**(28)（平福・門の山）8号の約10数m西北に所在し，徑約8・0m　高約1・5m　を測る。比較的保存のよい小円墳で，未発掘と推定。

**第10号墳。**　(29)（皿・寺谷）　舌状部の西側屹部に位置する完全な円墳で，徑約14m　高（斜面下方から測れば）2m（斜面上方から測れば）1m程を，数える。谷を下降する径のため，極く一部分が除去されているほか，完存している。

**第11号墳。**(30)（皿・寺谷）　10号に隣接して下方に所在する。推徑約8・0m　高1・5mを測る小墳，内部構造は，不明であるが，ハカイ痕らしきものが，認められ，又，石材の一部が，墳下に轉落している。この11号及び，前の10号は，屹部に所在するとはいえ，先の

1号～9号までの類と共に1グループと考えてよいであろう。

第12号墳。(31)(皿・寺谷)　舌状部東側の尾根に所在する。径8・m 高 1・5mの小円墳で，墳頂の一部が，ハカイされているが，内部主体の盗掘は，行われていないようである。

第13号墳。(32)(皿・寺谷)　10号の南西側にあたる同じ谷の，寺池上山側にある13号は封土石室共に徹底的にハカイされて，現在僅かに，石室の一部（1m角の割り石若干）が残存しているのみである。墳丘の推定径12～13m

## 煙硝庫附近古墳群

古墳群と稱される程，まとまつた位置に所在するのではないが，寺池北方の谷傾斜面に位置する古墳を，総稱した。この谷傾斜面は古くから開墾が行はれ，水田と化している部分が多く，從つて，若干の古墳は，ハカイ消失しているのではないかと，想像される。現在僅かに見出される古墳の殆んども，ハカイ又は盗掘によつて，大きく変形しているのが特徴的である。又，門の山，寺池上の古墳群と異つた立地を示し…山頂や尾根でなく，谷頭を抱く傾斜面上である……ているので，古墳自体の様相も，可成り相異を，見せている。尚，曾つて，多くの人々が，巨大な石室を持つ古墳として，注目していた所謂煙硝庫古墳は，その現存する主要なる3基を点検した結果，それら3ケとも，少くとも古墳の原形を，示すものでないという結論に，達した。又，既述のように，この谷斜面の北西部にあたる一部（第1号墳附近）からは，石庖丁及び彌生式後期土器片の出土が，確認されている。

第1号墳。(33)(皿・寺谷)この谷斜面西北部にあたる南東斜面の草地に所在したこの古墳は1951年春，道路工事のため，ハカイされたことによつて，はじめて，發見されたもので，現在，封土の悉くが，消失しているため形状規模は全く不明であるが，村民の言や，附近地形を併せ考えて，低小な円墳であつたことが，想像される。石室は，横穴式石室で南々西に開口と推定される。今，奥壁一枚を殘すのみ。ハカイの折，祝部式土器若干が，出土したとのことであるが，煙硝庫の住人山崎氏が，壺形1個を所藏しているのみで，他は，不明である。

第2号墳。(34)(皿・寺谷)谷頭水田が，北方につきる所の中央附近に，次の3号と共に2基並んで存在する。墳形は，定かではないが，恐らく小円墳と推定される。南西水田に面する部分は，ハカイされている。内部主体は不明。

第3号墳。(35)(皿・寺谷)　2号の南隣に所在する。2号と略々同じ状況。墳形，内部主体は不明。小墳。

第4号墳。(36)(皿・寺谷)2号3号の東北側に所在する小円墳で，径4・7m　高約2・0mを測る。完好に保存され，處女墳と推定される。

第5号墳。(37)(皿・寺谷)　2号3号の東方數10mの南傾斜の山林中に所在する。現在甚しくハカイされて，封土全く残存せず，石室も亦ハカイされ，石材が散乱している。石材の具合からして，確實に，横穴式石室と推定される。斜面の方向から考えて，西南に開口していたものと推定される。尚，石材にまぢつて，陶棺が，1個体分，粉々になつて散見された。先の山崎氏によれば，こゝから

水晶製切子玉，勾玉，がらす製白玉等が，採集されたとのことである。

第6号墳。（38）（皿・寺谷）　谷の東北端の北々西斜面の山林中に營造されている。その一部がハカイ除去されている上，墳形が，著しく變形しているらしい。今回調査を試みたが，中止した。その折，象形ハニワの残片及び，円筒ハニワの残片が，検出されている。墳径約11m，高さ3mを測る。

第7号墳。（39）（皿・寺谷）　2号3号の南面の水田中に所在し，今，横穴式石室の天井部の石材を示す巨石のみが，残存する。

第8号墳。（40）（皿・寺谷）6号から，西方に3～40mへだたつた水田中に，石室のみ取り残されて存在する。封土は全く不明である。石室は，横穴式石室で，南々西に開口する。入口（といつても或る程度ハカイされているが）の巾約1,4m。盗掘が行はれ，陶棺が，入口附近に，残片となつて，散見される。残片からの判断であるが，少くとも，2棺が，安置されていたらしい。何れも土師焼のそれであることは，他と同様であるが，その内1棺は，縁とりの隆起帯の一部に，羽状文が画かれており，更に他の1棺は，

の形を示す一單位の型押文様が，その身部一帯にやゝ秩序を以つて，押捺されているという，極めて特異な文様で，飾られている。その大形破片は，今，吉備考古館に收藏されている。

## 寺池東古墳群

寺山附近一帯の地域と相對し，寺池北方谷斜面上の水田地帯を，はさむように，畝集落の邊りから漸次下降しつゝ伸びている，神奈備山塊の支脈があり，その山頭傳いに，畝から寺池東面へ通ずる山径が，開かれている。この支脈（といつても，下降するに從い，幾つかに分岐していることは，勿論である）の標高200m附近から寺池へかけての山頭及び南側面にかけて，10数基の古墳が，見出される。假に今，寺池東古墳群と呼稱し，一括して取扱うことにする。以下大体において，標高の高位の順に，記述してゆくこととする。

第1号墳。（41）（皿・奥）　標高200m程の谷頭の山林中に存在する。現在完全に消失し附近に石室の石材が，多数散見されるのみである。

第2号墳。（42）（皿・城平）　これは，上記支脈の南側の，別の支脈上に位置する古墳で台地上となつた個所の畑中に所在する。墳形は定かではないが，横穴式石室が露呈している。

内部は，土が充満しているため，測定不可能である。（近藤保氏教示）

第3号墳。（43）（皿・奥）　支脈の標高180m強の尾根部山林中に，位置する円墳で，その径15m，高約2m（最高4m）を，算える。墳頂は，大きくハカイされ，北に開口する横穴式石室を露呈している。石室の天井石及び側壁の一部は，ハカイ消失している。羨道がハカイ消失しているため，はつきりしない点があるが，玄室の推定長は5・0m，巾は1・8m。

第4号墳。（44）（皿・奥）3号の西側数mの同じ立地に位置する円墳で，墳頂に大きなハカイ痕を有つ。径約11m，高さ約2・5mを測る。天井石が完全に取り去られている横穴式石室。石室現存長7・0m，尚，石室内には，土師焼の陶棺片が，散乱している。恐らく亀甲型のそれと推定される。

第5号墳。（45）（皿・奥）　近藤保氏の教示

によれば，3号4号所在地の南面傾斜地（現在畑及山林）に2基の塚があつた由で，現に石材と覺しきものが，散乱している。

第6号墳。（46）（皿・奥）　上の2基の内の1基。

第7号墳。（47）（皿・奥）　5号の更に南よりの谷頭斜面に所在する円墳で，径約8m高さ約2・5～3・0m を測る。墳頂はハカイ消失し，天井石が露呈している。

第8号墳。（48）（皿・奥）3号4号附近から寺池へ向けて，やや降つた個所の道路南側に位置し，眺望の極めてよい西南面を占めている。径約9・0mの円墳で，封土の多くが消失している。西方に開口する横穴式石室は，現在，奥壁近くの$\frac{1}{3}$を，殘すのみである。略々原位置と推定される個所に，陶棺身が，殘存している。

第9号墳。（49）（皿・奥）8号墳の西南方の水田中に，石室のみ残存している。横穴式と推定されるが，耕作者の言によれば，もと，中にはいれて，石室長約7m，高さ約1・6m程あつたという。

第10号墳。（50）（皿・奥）　8号9号の南側分岐した支脈上に略々東西に並んだ，3基の未発掘の円墳が，所在する。東端から，10号11号12号と呼稱したが，何れも保存頗る良好で，封土は，全く原状を保つている如くである。10号は，径11・0m　高約3・0m。

第11号墳。（51）（皿・奥）　10号及び次の12号と，それぞれ數mをへだてて存在する。径約10m　高約2mの円墳。

第12号墳。（52）（皿・奥）　3基の内，最大の円墳で，径14・5m　高約4・0mを測る。

第13号墳。（53）（皿・奥）　10・11・12号に近接してその南側斜面上に，略々同様な形態を示す4基の塚がある。東から，13・14・15・16号と名づけた。何れも低小な古墳で，葺石と思はれるものが，散見される。13号は，径約8m。處女墳と推定。

第14号墳。（54）（皿・奥）　13号から数mはなれて，その西側に所在する。方墳かとも考えられるが，形状不明。斜面のため，流土が多いのであろう。推径10m，著しく低い。

第15号墳。（55）（皿・奥）14号の西南側数mの個所に立地する。14号と略々同大同巧。

第16号墳。（56）（皿・奥）15号の南側に位置し，前三者と同大同巧。

第17号墳。（57）（皿・切池）　該支脈の南側谷斜面の山林中に所在する径約7m　高約2・5mの小円墳。南に開口する横穴式石室は，入口の若干部分がハカイされつつも，凡ね完存し現全長3・3m を測る。中央が廣く，奥に行くに從つて狹小となる式のもので，玄羨の別は認められない。巾は奥にて0・8m，中央附近にて1・1m。高さは，中央附近にて1・3mを測る。石室内左側に沿つて，奥壁から約0・5mはなれた位置に，原位置を保持していると推定される陶棺身が，認められた。棺身の全長は2・25m，脚を除いた身の高さ0・57m，蓋の一部は，近藤保氏が，保存しているが，突帯をめぐらし，懸縄突起のある通有の土師燒陶棺で，後に報告する祇園畝2号墳の北棺と同じ式である。

第18号墳。（58）（皿・切池）　17号の西南側に，同様な立地を示す18号墳がある。墳頂の一部が，ハカイされ，墳形不明瞭であるが，小墳。天井石と推定される石材が，露呈している。

## カギ谷古墳群

神奈備山塊は，皿から種へ向つて，入りこんでいる狭小な溪谷地帯によつて，それ以南の連山と連續を絶たれているが，この狭小な地帯（＝溪谷）に面した兩斜面上に，數基の古墳が營まれている。神奈備山腹の一方畝から南に下降する道が皿――種道路に交叉する地点の，やや西側の地域である。現在，溪谷の北側，即ち山の南麓面の山林中に4基，その反對側の山の北斜面上に3基が，認められる。前者をA群，後者をB群として記述する。

### A　群

4基の塚が，背後に極めて急峻な山を負つている溪流の緣邊に沿い，東西に一列に並んで所在する。古墳營造地としては，不思議な位，落ちつかない所である。目前の急流が，往昔も，この点を貫流していたとは，限らないが，古墳自体も，甚しい急斜面に，作られている。何れも小墳で，すべて，ハカイ盗掘の跡を，見せている。東から1号2号……と呼稱する。

第1号墳。（59）（種・團子林）　著しくハカイされて，墳形不明であるが，恐らく推径8・0mの円墳と，推定される。東に開口と考えられる横穴式石室が，ハカイされたまま，露呈しているが，その天井石の殆んどは，消失している。石室推定長4・0m　巾1・65m。

第2号墳。（60）（種・團子林）　墳形は全く不明。横穴式石室の奥壁に近い部分のみ，僅かに，残存している。壁は，面とりされた大きな石材で，構築され，持ち送りの度は，殆んど，認められない。南々西に開口と推定される。

第3号墳。（61）（種・團子林）径約7・5m程の円墳と推定されるが，封土は，可成り消失している。入口の部分，天井部が，消失している。横穴式石室が，南々東にむけて，營造されているが，その制は，2号墳と同巧。

第4号墳。（62）（種・團子林）　封土殆んど全壊のため，墳形不明。石室もハカイ消失しているが，色々な点から，南面に開口した横穴式石室であつたろうと，推定される。

### B　群

A群の立地と，對照的に，若干廣々とした感じさえ與える，やや緩らかな北面傾斜地，皿――種道路からの比高約10～20m程の個所に，点々と3基の円墳が望見される。往時より著名なものと見え，久米郡誌にも，その紹介が載せられているし，亦，永山卯三郎氏の「種の三ツ塚」は，これに当るものであろう。

第1号墳。（63）（種・カキ谷）　墳頂の封土が，ハカイ消失しているが，円墳で，その径13・5m，高約2・5～3・0m。横穴式石室が，北に開口している。石室は，玄羨の別を設けていないが，壁は，面とりのよくなされた角材を用いて，整然と構築されている。石室全長8・9m，巾（奥壁近く）1・4m，巾（入口附近）1・2m，内部に土が，堆積しているので，高さは不明である。石室内部に，土師焼の陶棺片が，僅かに認められた。

第2号墳。（64）（種・カキ谷）　封土は大部分が，ハカイ消失しているので，墳形規模は不明であるが，推定径は10数m。横穴式石室が，北方に開口している。玄室と羨道とは区別（片袖式に）されているが，道道の大部分は，ハカイ消失されている。奥壁は一枚石で，側壁の狀況は，1号に類する。玄室全長3・4m，巾1・9m，高さ1・65m。室内に，土師焼の陶棺片が，散見される。

第3号墳。(65)(種・カキ谷) 円墳で，墳頂の封土が，多少流失しているが，径約 8・5 mを測る。横穴式石室は，天井石，壁の一部を，消失している等，可成りハカイされているが，石室の推定全長 4・5m位。奥壁は，下半部に一枚石を置き，その上半に，比較的偏平細長な石材を，横積みしている。

## 嵯峨山東面古墳群

嵯峨山を最高峯とするこの山塊は，主として，その尾根部を南北に通る境界によつて，三保村と，佐良山とに，分割される。この佐良山分に屬する東面の山麓，山腹，山頭に，数十の古墳が，点在的に，營造されている。数基づつの群集は，その内に，見出されるけれども，全体として，廣大な嵯峨山東斜面上に，点々と，所在するので，これまた，厳密には，古墳群と，云えないか知れないが，地形的にも一應他と切りはなされているし，個々の構造の示す所も，略々同様であること等から，ここに一括して，記録する。嵯峨山東面といつても，それは，大小の谷によつて，作られた，数多くのこれまた大小の台地が，概してゆるやかに，東方へ向つて，伸びているといつた地形で，それに應じて，古墳の立地も，一定することなく，あるいは三保村境の山頂に，あるいは，ゆるやかにのびる台地上に，その間に急な隆起を示す山頭上に，あるいは，低い谷間の斜面に，あるいは，山麓の傾斜地に，といつた具合の多様さである。しかも，その内部構造において，大体において等しく後期横穴式石室の制をとり，又，中に陶棺を收めた類が多いことは，注目せられなければならない。大略北から南へ，又山麓から山頂へ向つて，記述の順序とする。

向山1号墳。(66)(平福・向山) 開墾のため，消失し，現在畑地となる。ハカイの際，蓋坏及び高坏各一個出土の由。

向山2号墳。(67)(平福・向山) 径約10m，高約 1・5m の小円墳で，墳頂に，盗掘痕がある。

片山古墳。(68)(平福・片山) 山麓片山部落内の畑中に所在し，開コンにより，ハカイされ，封土の多くが，消失している。石室は横穴式と推定されるが，大部分消失している。土師焼の陶棺身が，今露出して見えるが，ハカイの折，その中から勾玉及び環が，出土した由。

中堂1号墳。(69)(平福・中堂) 片山塚背後の山腹南斜面の山林中に位置する円墳。推径約15m。封土石室共に，可成りハカイされている。石室は横穴式で，南に開口する。

中堂2号墳。(70)(平福・中堂) 2号のやや西方の谷斜面に營造された，径 15・5m，高 3・5～4・0mの円墳。墳頂はハカイされ，横穴式石室天井石露出。入口は開かれておらず從つて石室規模は不明。西・南・北とも山にかこまれた狭小な谷斜面下部に位置している関係，眺望も殆んどなく，むしろ暗い感じさえ抱かせるところである。

三ツ塚東古墳。(71)(平福・開の谷，中堂及び狼谷の境) 嵯峨山頂から分岐した支脈の一つの高い尾根部に「三ツ塚」が，東西に相並んだ形で所在する。この地からの眺望は，特に素晴しく，津山盆地を一望し，はるかに那岐連山をあおぐことができる。何れも（佐良山古墳群中では）相当大きな古墳であることは，注目される。その内，東古墳は，径約 15m，高約 3・5～4m の円墳で，よく保存さ

れている。墳頂に，石材かとも思われる小石が，若干散見されるが，處女古墳と，推定される。

三ツ塚中古墳。(72)（同上）径19m，高4～4・5mの円墳で，盗掘に遭つてはいるが，封土の保存は，頗る良い。石室は，南々東に開口する横穴式で，全長 7・9m，奥壁近くに 巾1・7m，高さ 1・6mを測る。玄室と羨道の別なく入口へ向つて徐々に狭小となる式，壁の積み方，石材は，後述する中宮1号墳に，類似する。内部土師焼亀甲型の陶棺片を，散見する。

三ツ塚西古墳。(73)（同上）径18・5m高4・0mの円墳で，墳頂が，大きくハカイ除去されている。石室もハカイされ，石材若干が，墳頂ハカイ口から散見される。横穴式と推定されるが，形状，規模の詳細は，不明。

平佐古墳。(74)（平福・平佐）平佐部落内の山麓に程近い山腹東斜面上に位置する。封土は大きく変形しており，形状規模は，全く不明である。本古墳は，昭和23年津山成美高等学校の手によつて，一度，発掘調査が，行われたもので，その折の状況は，當時3年生であつた渡邊誠一君の手によつて，見事に，記録されている。この記録及び，我々の調査を併せ考えれば，内部主体は，南に開口する横穴式石室で，その推定全長6m以上に達する。しかし，現在は，天井石をはじめ，側壁なども多く消失している。内に土師焼亀甲型の陶棺3棺が收められていたが，内2棺は，成美高校に，他の1棺は，現地に，所在している。成美高校の調査以前に，古くから数回の盗掘が行われた模様で，原形を保つていると考えられた現存する1棺も，我々の調査の結果，古くハカイされていることが，判つた。最に近い1棺は，長さ1・95m高さ0・85m内巾0・7mを数え，中央m1棺は，全長2・2m，高1・035m内巾0・63mを，測る。最も入口に近い現存せる1棺は，身の半欠しか残つていないが，その半身の長さ0・9m，高0・8m，内巾0・4m を測る。尚，前2棺の内外から，各種形態の祝部式土器及び土師器，並びに若干の鉄片（鐙か？）が，出土している。

祇園畝第1号墳。(75)（平福・祇園畝）後章調査報告参照。

祇園畝第2号墳。(76)（平福・祇園畝）後章調査参照。

桑山1号墳。(77)（平福・桑山）平佐塚南方の支脈の山麓傾斜面上に位置する径約13・5m，高約4・0m の円墳で，墳頂が消失し横穴式石室も徹底的にハカイされている。

桑山2号墳。(78)（平福・桑山）1号の北隣に位置する径約10・2m，高約 3・5mの小円墳で，石室は露出していないが，盗掘の形跡が，封土に残つている。1号2号共に山林中にある。

桑山南1号墳。(79)（高尾・桑山南）桑山塚より，やや南よりの同様な麓傾斜面に，3基が所在する。その南端の1号は，径約17・8m高約4m近い円墳で，横穴式石室が，ハカイ曝露している。内部は土が充満しているため測定不可能。可成り長大なるものと推定される。

桑山南2号墳。(80)（高尾・桑山南）1号の北隣に点在する径約12・0m，高約 4・0mの円墳で，封土保存よく，處女墳と，推定される。

桑山南3号墳。(81)（高尾・桑山南）山林と畑との境界となつている所，3基の内北端の古墳で，封土の多くは，消失し，石室の

一部が露出している。巨大な石材を用いた横穴式石室で，南東に開口する様である。

畝細1号墳。（82）（高尾・細畝）　同じく麓斜面であるが，浅い谷部に面している3基の古墳がある。その内，1号は，径約12mの円墳で，墳頂が，ひどくハカイされている。南東に開口する横穴式石室も，大きくハカイされている。壁は小口積で，又，持送りの度も著しい。現在長5・35m，巾 1・6m を測る。

細畝2号墳。（83）（高尾・細畝）　推定径約10・0mの円墳であるが，ハカイ甚しい。内部構造は，全く不明。

細畝3号墳。（84）（高尾・細畝）　推定径13・0mの円墳と考へられる。甚しくハカイされ，内部構造不明。

下山田上の古墳。（85）（高尾・塚の前）　細畝の西方にあたる谷斜面の一部に位置する径約7m，高約 1・6m の小円墳で，その一部は水田に切りとられる。横穴式石室が，南に開口しているが，入口附近は，ハカイされている。全長約5・0m，巾 1・3m，高 1・6mを測る。

火の釜1号墳。（86）（平福・高塚）　桑山南古墳桑山古墳などをその麓斜面に有つ支脈が，西方山頸から，ゆるやかに長くのびはじめる起点に近い尾根に，所在する。墳形は，流失変形して，形状規模は，不明であるが，推定径18m以上，推定高5・0m前後の，相当大きな円墳であることが想像される。南に開口する横穴式石室も，甚しくハカイされ，奥壁附近のみが，残存している。後記する高塚古墳及び先記した三ツ塚と共に，嵯峨山東面古墳群中，最も高い位置に所在し，しかも，一般に壯大な規模を，有つていることは，注目すべきである。

火の釜2号墳。（87）（平福・高塚）　前者の西北側に所在する古墳で，形状は不明であるが，推定径13・0m程。石室は完全にハカイされており，詳細不明である。

中山田1号墳。（88）高尾・中山田）　山腹斜面上に位置する径約13・0m，高約 2・5～3m の円墳で，墳頂は，大きくハカイされ，横穴式石室が，崩壊露出している。石室推定長7・6m。

中山田2号墳。（89）（高尾・中山田）　1号よりやや高位に營造された徑約15・5m，高約2mの円墳で，同じく墳頂ハカイされ，横穴式石室が，曝露している。内部には，土が充満し，天井石は散乱している。石室推定長6・7m。

高塚古墳。（90）（高尾・黒鳥及び重兵衛山田と三保村大久保との境界）三保村との境界線上の山頸に，一際高く聳えているこの古墳は平福・皿・高尾の平地からも，くつきりとあおぎ見ることが出來る。嵯峨山東面古墳群中最大のものである。經約24・0m，高5～6mの円墳で，封土は部分的に，可成りの損傷を見せている。東に開口する横穴式石室は，殆どハカイされておらず，各壁は2尺角大の石を以つて持ち送り積みされている。玄室羨道の区別は，天井部のみ設けられているが，その全長は約9・0m，玄室長5・5m玄室の 巾 1,9～2・0m を測る。佐良山及び三保村の平地はいうに及ばず，四方の眺望の絶佳極め，佐良山古墳群中隨一の立地である。

正京茶畠古墳。（91）（高尾・正京茶畠）　中山田古墳の位置する丘陵が，東にのびた麓斜面に位置する。円墳らしいが，墳形不明の小墳で，高さも低い，玄羨の別のない，横穴式石室が，東に開口している。側壁は，可成り

の小口積みであるが，奥壁は一枚石を用いている。石室現存長4.5m。

**弁慶岩古墳。**（92）（高尾・辨慶岩）　同じく麓斜面に所在する径約18m，高約5mの円墳で，その南端は，水田に面している。片袖式の玄羨の別ある横穴式石室が南々東に開口している。その構築は，各壁とも，2尺角大以上の大きな割り石を以つて，整然と積まれている。現存長7.7m，玄室長5.05m，玄室巾1.8m・羨道巾1,4mを測る。高さは不明。

**城成古墳。**（93）（高尾・城成）　ゆるやかにのびる支脈上の山林中に所在する。墳頂封土は，可成り消失しているが，現在径19.0m，高3.0mの円墳。石室天井石が，露頭している。恐らく南々西に開口する横穴式石室で，推定全長7.5m。

**西の岡1号墳。**（94）（高尾・西の岡）　嵯峨山古墳群最南端の古墳で，山麓山林中に，2基並存している。1号は，南側の小なる方の円墳で，径約12～13m，高約3m。封土は保存良好で，南々東に開口する横穴式石室も入口の一部を除いて，完存している。天井部に，玄羨を区別している。現存長5.5m，現室長2.65m，玄室巾1.2m，高さ1.5mを測る。奥壁は，一枚の巨石に若干の割り石をあてて構築され，側壁は若干持ち送り積みになつている。亀甲型と考えられる土師焼の陶棺片が，残存している。（50頁カット）

**岡の岡2号墳。**（95）（高尾・西の岡）　径約15～16m，高約4mの円墳で，封土は極めて保存がよい。南に開口する横穴式石室は，全長約7.9m，巾1.8m，高さ1.65mを測る。室内には，陶棺片が，散見されるが，田外速氏の話によれば，若干の，少くとも二，三個の陶棺が，小形棺を含めて，存在したとのことであり，佐良山校に現存する一棺は，本石室出土のものの由である。何れも土師焼である。

## 笹山古墳群

佐良山地区東南部の古墳に對して，笹山古墳群の名稱を附したが，これは御笠美古墳群小屋谷古墳群，劍戸古墳群に，最後者は，更に丸山古墳群，中官古墳群，高根山根古墳群，劍戸古墳群に分れる。又，以上の古墳群の何れに屬させてよいのか判らない孤立的な立地を有つ數基がある。

### 御笠美古墳群

大字高尾地区内の水田地帶東面にあたる笹山山塊の西斜面上の山腹に營造されている古墳に對して，特に小字御笠美地区内に所在するそれが多いところからして，御笠美古墳群と稱した。これらの内，中曾根上・下の2基（A群）のみが，ややはなれた，支脈を別にした山腹斜面に立地するほかは，大体において，1群をなしている。（B群）何れも横穴式を内部主体とする古墳で，すべて盜掘に遭つている。

A　群

**中曾根上古墳。**（96，（高尾・中曾根）　可成り急な西北面の斜面上に位置し，封土の約半分が消失しているほか，墳頂もかなりハカイされている。推径6～7m，を測る。石室はハカイされたまま，一部が殘存。西北に開口と推定される。

**中曾根下古墳。**（97）（高尾・中曾根）　上古墳と同じ立地で，そのやや下方に所在する。封土は多くハカイされているが，推径6.5m，

高約2m程の小円墳と推定される。石室は，ハカイされているが，現存部長 4.6m。恐らく西北方に開口する横穴式石室。

B 群

丸山1号墳。（98）（高尾・御笠美下） 西面の山腹山林中に，丸山塚と稱せらる3基がある。1号は，推径11.6mの，封土ハカイ甚しい円墳で，石室も大きくハカイされて，詳細不明。

丸山2号墳。（99）（高尾・御笠美下） 封土の可成りの部分が，ハカイされている。推径10m，推高2.5mを測る小墳。ハカイされた横穴式石室が，露出している。

丸山3号墳。（100）（高尾・御笠美下） 3基の内，最大で，推径17.0m，推高 4.0mの円墳。盗掘された横穴式が，南に開口している。その全長 7.m2，羨道長 3.7m を測る。巾・高は，内部に土が充満しているため，不明。

御笠美下1号墳。（101）（高尾・御笠美下） 丸山古墳より高位の・現在田外速氏が，果樹園として開コンされた舌状部の突端近く所在する。径7～8mの小円墳で，封土の若干が損傷している。石室は，入口附近が，ハカイされて，露呈開口している。玄室と羨道は片袖式に区別され，推定全長約 5.0m，羨道部の長さ2.85m，羨道の巾0.65mを測る。今土師焼陶棺片が，散見される。

御笠美下2号墳。（102）（高尾・御笠美下） 開墾のため，完全壊滅しているが，田外速氏の話によれば，横穴式石室があつて，壺・坏などの祝部式土器が，出土した由である。

三ツ塚1号墳。（103）（高尾・御笠美下） 御笠美下古墳の東方の南斜面上の山林中に，三ツ塚と呼ばれる3基の古墳が，東西に相並んで，見出される。三者とも，略々同様大きさを有つ小円墳で，すべて，横穴式石室を，内部主体としている。1号の東端に位する，径約12.0mの円墳で，墳頂はハカイ消失している。石室もハカイされたまま，露出しているが，現存長8.0m，奥に近く巾1.3m，高さ1.3m を測る。玄羨の別は，不明であるが，底面に，薄い板石が敷いてあり，その上に土師焼の陶棺片が，散見される。奥壁は，二枚の大石と若干の小割石とで，構成されている。南に開口。

三ツ塚2号墳。（104）（高尾・御笠美下） 3基の中央にある径約14.0m，高約 4.0mの円墳で，南に開口する横穴式石室は，羨道部の畧々全体を含めて，大きくハカイされている。玄室長6.0m，巾1.7m。

三ツ塚3号墳。（105）（高尾・御笠美下） 径約11.5m，高さ約 3.0mの円墳，墳頂は大きくハカイ消失している。片袖式に玄羨の別を有つ石室が，ハカイされ，天井石など散乱のままに，南に開口している。玄室長3.75m，巾1.0m，壁は，比較的小口積みである。

御笠美古墳。（106）（高尾・中宮上） 上記三ツ塚と，狭い谷一つへだてて・對面する可成り急な北斜面上に位置する径約 9.0m，高約 3.5m の円墳で，玄羨の別のない石室が，その天井石を露頭させている。北に開口と推定。

大塚上古墳。（107）（高尾・中宮上） 御笠美古墳と同じ支脈の，より西方の突端頂部附近の山林中に位置する円墳で，墳頂の封土の殆どは，消失している。推定径10.5m，現高は，甚だひくい。長5.9m，巾 1.0mの石室が北に開口している。

御笠美下大塚古墳。（108）（高尾・御笠美下）

國道に面する麓下の畑中に所在する封土は，全くハカイされている。石室も巨大な鏡石及び若干の側壁を除いてハカイされ，附近の石垣となつている。鏡石の具合からして西方に開口したものと考えられる可成り大きな石室が想像される。

## 剣戸古墳群

御笠美古墳群の南方約400～500mにあたる所で，東方から大きくのびて來た山が，やや緩傾斜を作り乍ら，平地に移行しようとする部分の斜面・尾根・麓下等の各所に，数十の古墳が見出される。佐良山古墳群中，最も密度の多い群で，亦，4基の前方後円墳のすべてが，これに屬している。今，これら古墳を，更に，地形とその実体とを考え合せ，下の如き4群に分つ。A，丸山古墳群。B，中宮古墳群。C，高野山根古墳群。D，剣戸古墳群。

A．丸山古墳群

丸山1号墳。(109)（福田・丸山）　丸山古墳群と稱しても，2基のみであつて，津山線によつてその西側に切り残された低地との比高26m程の山頂に所在する。畧々南北に，2基並存しているが，北の1号墳は，径約10・8m高約20mの円墳で，明治25年神社建設のため，可成りハカイされたものである。日下元榮氏の言によれば，その折，横穴式石室があり，人骨，馬具，刀（長4尺）2口，鉄鏃，土器等が，出土したと云う。現に墳頂から，祝部片が，採集されている。

丸山2号墳。(110)（福田・丸山）　鉄道工事で山を切り開く際，その東半が，ハカイされているが，推径約10・0mの円墳で，同じく日下氏の言によれば，横穴式石室があつて，内部から陶棺，子持高坏，刀，馬具等出土した由。

B．中宮古墳群

第1号墳。(111)（福田・剣戸）　後章報告參照。

第2号墳。(112)（福田・剣戸）　1号の西隣りに所在し，南北を主軸（南が前方部）とする帆立貝式前方後円墳で，後円部が，甚しくハカイされている。復元推定長約20・0m。後円部に横穴式石室の残骸が，僅かに残存する。西に開口したものと推定される以外，形狀規模不明。後円頂ハカイロから，祝部式土器片を，検出したほか，封土北側の畑地上から，人物ハニワの腕？と考えられる残片を採集した。

第3号墳。(113)（福田・剣戸）　1号の東側の径6・5m　高10m程の小円墳で，その東側の一部が，ハカイされているが，未発掘と推定。

第4号墳。(114)（福田・剣戸）　1号の南側約20mの個所に位置し，周湟の一部を，よく保存している円墳で，径14・0m　高2・0～30mを測る。墳頂がハカイされ，石室蓋石（竪穴式石室か？）が，一部露頭している。

第5号墳。(115)（福田・剣戸）　今畑地となり，完全消滅しているが，第3号の北側に當る個所の開墾の折，陶棺が，出土している。今，1号墳下に，その身の大形片が，轉倒して存するのが，それである。

第6号墳。(116)（福田・剣戸）　1号の南東約60～70mの斜面に所在する径10m　高約1・5mの小円墳で，處女墳と推定。

第7号墳。(117)（福田・剣戸）　次の8号と共にややはなれて，池の南側に所在する。径約6～5m　高約1mに満たない小墳

で處女墳と推定される。

第8号墳。(118)(福田・丸山)　鉄道工事の際，除去し，現在田となつている。日下元榮氏によれば，横穴式石室があつた由。

C．高野山根古墳群

中宮古墳群所在地と連絡した西面する緩傾斜台地上に，立地する。佐良山最大の前方後円墳2基を含む。中宮古墳及び次に述べる劍戸古墳群の中間位置にあり，共に密接な，群としての関係を，有するものと考えられる。壯大な前方後円墳2基を中心に，群小の幾十の古墳が，周囲に点在する様は，壯觀である。一つの強力なムラが，附近に形成されていたことは，疑ない所であろう。

第1号墳。(119)(福田・劍戸)　前方部を南にむけた前方後円墳で，全長約32.0m　後円高約7.0m　後円径約23.0m　前方部長約10.0m　前方部前面の巾約15.5m　前方部高約3.5m　周湟の巾約 3.5mを測る。クビレ部も極めて明確で，後円部には，周湟が，認められる。ハニワ破片も検出されている。後円部頂から，クビレ部にかけて，大きく深くハカイされ，石室の一部が，崩壞している様が，認められる。石室は，現在覗知し得る部分において，壙石？は消失しており，辛うじて，側壁の一部が，認知された。それによれば，壁は，0.3～0.5m×0.1～0.2m程度の細長な割り石を以つて，構築されており，竪穴式石室を，想像させる如くである。しかしその石材は，整然とした板状を呈しておらず，加えて石室中位邊から墳頂までの距離が，2.0m をはるかにこえると云う程の深さに，それが營造されているので，確高は，今後の排土調査に俟つべきであろう。

第2号墳。(120)(福田・劍戸)　最大の前方後円墳で，前方部を西に向ける壯大なものである。墳丘の南側は，曾つて屋敷のあつた折ハカイされたらしく，クビレ及び周湟が殆んど，認められない。北側では，クビレ部は，極めて明瞭で，また堂々たる周湟が，堤と共に，觀察される。全長約 36.0m　後円高約4.5m　前方部長約 15.0m　前方部前面巾約21.0m　前方部高約 4.0m　周湟巾約 4m～約7.0m　周湟最深約1.5mを測る。前方部と後円部の高さは，畧々相等しく，後者が前者より僅かに高い。又，後円径は，前方部前面巾と，略々等しい。横穴式石室が，後円部中腹に，南向きに開口している。羨道が，片袖式に作られ，その全長9.5m　羨道長3.3m　玄室長6.2m　玄室巾1.7m　高2.2m　羨道巾 1.0mを測る。中宮1号墳石室に比して著しく細長である。尙，石室よりやや東側の後円部封土中から，土師器高坏が，單獨に，見出されたほか，前方部附近の畑地から，ハニワ円筒片が採集されている。

第3号墳。(121)(福田・劍戸)　2号の東側に近接して所在する円墳で，径約12～13m　高約 1.0m。ハカイ口が，各地に認められ，石室が瞥見されるが，内部は未盜掘らしい。

第4号墳。(122)(福田・畑ケ奥)　2号の南側に所在し，鉄道工事のため消失したといわれる古墳で，詳細不明。(日下元榮氏教示)

D．劍戸古墳群

高野山根古墳南側に，一支脈がゆるやかに西にむかつているが，その突端斜面上，側斜面上，麓下等に，現在14基の古墳が，見出される。その内，特に，南麓に位置する13号14号は，地形立地からみて，次に記する小屋谷古墳群に，むしろ接近している。

第1号墳。(123)(福田・剣戸)　高野山根古墳を見下ろしている斜面に存在する径約13・0m　高約 3・0m の円墳。　墳頂はハカイされて，南に開口する横穴式石室が，露出している。通稱大平の塚。

第2号墳。(124)(福田・剣戸)　1号に接近して存在する小円墳。(日下氏教示)

第3号墳。(125)(福田・剣戸)　墳形は，甚だ変化しているため，不明であるが，推径20mに達すると考へられる。内部主体は不明。

第4号墳。(126)(福田・剣戸)　径約12・0m 高約3mの円墳で，處女古墳と推定される。

第5号墳。(127)(福田・剣戸)　径約8・5m 高約1・5～2・0mの小墳で，横穴式石室が，ハカイ露出されている。恐らく南面に開口したもの。現存長4・6m。

第6号墳。(128)(福田・剣戸)　径約11・8m高約3・5mの円墳で，封土保存よく，處女墳。

第7号墳。(129)(福田・剣戸)　径約14・0m 高約 3・0m封土保存良好の円墳。横穴式と推定される石室が，露呈している。奥を含めて各壁とも，細長な割り石を，持ち送りに横積みしている。この7号及び6号8号の中間辺りから，祝部式土器高坏が，見出されたとの由。(日下氏談)

第8号墳。(130)(福田・剣戸)　径約10・0m 高 3・0mの円墳で，處女墳と推定される。

第9号墳。(131)(福田・剣戸)　円墳と推定されるが，極めて低小で，疑問のもの。

第10号墳。(132)(福田・剣戸)　斜面山林中に所在する径約13 0m　高約2・0mの円墳で，處女墳と推定される。

第11号墳。(133)(福田・剣戸)　10号に接し，その下方に存在する円墳で，径約15 0m　高約3・0mの處女古墳。

第12号墳。(134)(福田・剣戸)　麓下，鉄道に近い山林中に所在する 径約 14・5mの円墳で，天井石と推定されるものが，露頭している。

第13号墳。(135)(福田・剣戸)　剣戸西塚と呼ばれたもので，14号と相並んで，谷低地に面して，南斜面山林中に所在する。共に封土，石室をよく残している。13号は，径約17・0m 高約4・0mを測る円墳で，南東に横穴式石室を開口させている。石室は，玄羨の別なく，入口へ向つて漸次狭小となる制をとつている。入口の一部が，ハカイされていると推定されるが，現存長9・7m　巾1・65m　高 2・4mを測る。下面を平らに切りとつた整然たる天井石8枚を以つて被れている。側壁は，大略0・6m×1・0m 及び 0・5m×0・8m角程の石材にて，僅かに持ち送りに，構築されている。尚奥に近く，陶棺半身が，土に埋もれたまま，認知される。

第14号墳。(136)(福田・剣戸)　剣戸東塚と呼ばれた類で，径約19m 高約4・0m　程の堂々たる円墳である。13号と同様，南東に開口する横穴式石室を，有している。石室は，現在祭祀の場として使用されているため，よく清掃されている。入口の一部は，消失していると見てよい。現存長9・8m　巾1・7m　高1・6m。　奥壁が，1枚石を用いられているほか，構造は，13号と同様である。

## 小屋谷古墳群

剣戸13号14号墳の南側邊から，東方へ向けて，狭小な谷が，極く僅かの水田を伴つて，入りこんでいる。この谷に面する北側の斜面に数基の古墳が，点在する。假に，小屋谷古墳群とよぶことにする。

第1号墳。(137)(福田・小屋谷)　山が谷頭水田に接する道路傍に位置する円墳で，一部が水田及び道路のため除去されている。径約14～15m　高3.0m。南に開口する横穴式石室は，大小の割り石を巧みに組み合せ，僅かに持ち送りづみである。天井は剣戸13号14号に見たように，整然と面とりされて，平面を呈している。日下元榮氏の言によれば，もと陶棺が，7棺存在していたが，道路作業員によつてハカイされた由。現在石室内には，陶棺片が，無數に散乱しているほか，入口附近には原位置を保持していると考えられる棺が，2棺，その身の殘片を，とどめている。何れも土師燒で，子供の棺と推察される非常に小型の棺も，存在する。石室の現存長7.9m高さ1.3mを測る。

第2号墳。(138)(福田・小屋谷)　谷低面との比高約20m程の個所に所在する古墳で，封土の大部分はハカイ消失。石室は，徹底的にハカイされ，今，僅かにその殘骸を，とどめている。斜面の具合からして，南に開口した横穴式石室と，推定される。

第3号墳。(139)(福田・小屋谷)　2号のやや上位に位置するが，封土石室共に徹底的にハカイされている。

第4号墳。(140)(福田・小屋谷)　2号3号よりも，はるかに高所に位置する円墳で，封土は可成り消失している。径約10.0m。恐らく東南に開口する横穴式石室の殘骸がある。尙，陶棺片も散見している。

第5号墳。(141)(福田・小屋谷)　4号に並んで，存在する。封土石室共に可成りハカイされている。小屋谷4号と同様な構造で，同じく陶棺片が，散見される。

以上のほか，孤立的に存在する古墳4基がある。(何れも，佐良山保存会の教示による。)

御笠美上1号墳。(142)(高尾・御笠美上)
御笠美古墳群所在地より數百米東方の山中に所在する小円墳で，處女墳と推定される由。

御笠美上2号墳。(143)(高尾・御笠美上)
1号に近く，略同様のものらしい。

此久尼塚。(144)(福田・剣戸)　同じく東方山中に所在する円墳で，封土は甚しくハカイされ，石室もまたハカイ露呈している由。

滝の元古墳。(145)(福田・瀧の元)　今，屋敷跡となつているため，詳細は不明である。

## 大平山東面古墳群

原田川西側の福田地區内の山頂・山腹・山麓台地に所在する古墳を，総稱したもので，変化ある地形に從つて，様々な立地を示す古墳を包括する。その中で，三ツ塚古墳群と，若林古墳群とは，顯著な存在であつて，前者は，山頂近くの斜面上に，9基の古墳を以つて構成され，後者は，福田の低地が，南方河内田方面へ向つて，やうやく狹くなる辺の皿川西岸の台地上に，7基を所在させている。

### 若林古墳群

この古墳群中，5基は，既に水田化した台地上に，取り殘された形で存在するが，他の2基は，その南西方向数十mばかりの，北西傾斜面上に位置している。何れも，横穴式石室を内部主体とし，又多く陶棺を收めている点，一群として取扱うことにした。

第1号墳。(146)(福田・若林)　円墳で，封土は部分的に大きくハカイされている。推径

10m前後推高約2～2・5mの小墳。畧々北東に開口と推定される横穴式石室が，その一部を露呈させているが，内部は未発掘と推定される。但し，入口に近い天井石の一部及び側壁の一部は，約30年前に，除去されたとのこと。現在土師焼陶棺身が，間隙から瞥見される。

第2号墳。(147)（福田・若林）　周囲が水田となつている関係上，東南及び南の一部が，大きく除去されている。円墳で處女墳と推定。

第3号墳。(148)（福田・若林）　封土殆ど崩壊し，横穴式石室の一部が，残存する。恐らく東に開口と推定される。床敷として使用されたと考えられる土師焼の偏平な板が，見出された。陶棺を置く際の床敷として使用したものであることは，邑久郡美和村亀ケ原古墳群中の一例に於いて，明らかな所である。

第4号墳。(149)（福田・若林）　封土が殆ど消失しているため，詳細全く不明であるが，恐らく小墳であつたろう。天井石の残骸のみをとどめる。

第5号墳。(150)（福田・若林）　封土ハカイ消失し，形体規模及び内部主体不明。

第6号墳。(151)（福田・登尾）　浅い谷にのぞむ山麓斜面に所在する径約11・3m高約3mの円墳で，田によつて切り取られている西側の一部を除いては，封土は完存する。西に開口する横穴式石室は，その現存長6・7m　奥に近く巾1・6m　高2・06mを測る。各壁とも持ち送りの小口積み，土師焼陶棺の可成り大形片が，残存している。

第7号墳。(152)（福田・登尾）　7号の東より地点に所在する。封土の大半は消失しているが，その石室から判断するに，相当規模大なる古墳が，想像される。今，横穴式石室と推定される巨石天井石が，数個露呈している。成美高校が発掘豫定をされた墳である。

## 福田三ツ塚古墳群

通稱三ツ塚といわれているが，現地踏査の結果，9基の古墳を見出した。三保村との境界部に畧々近接する山頂附近の，極く浅い谷をかこむようにしている斜面である。何れも大同小異の円墳で，石室も，明瞭に判るものはすべて横穴式である。

第1号墳。(153)（福田・鎌井谷）　径約12・5m　高約3・0mの円墳で，封土は比較的よく保存されている。南に開口の横穴式石室は，天井部にのみ玄羨の別を設けている式，奥壁は一枚の鏡石。入口附近はハカイ消失して，現存長7・25m　玄室巾1・7m　高1・45mを測る。

第2号墳。(154)（福田・鎌井谷）　経約13・5m　高約3・5mの円墳で，封土完好。石室天井石が露出している。恐らく南々西に開口する横穴式であろう。

第3号墳。(155)（福田・鎌井谷）　小円墳と推定されるが，封土殆ど崩壊消失。石室もまた石材のみ散見。

第4号墳。(156)（福田・鎌井谷）　径約10・5m　高約2・5～3・0mの円墳。石室天井石露呈するが，内部不明。南に開口か？

第5号墳。(157)（福田・鎌井谷）　径約7・8m　高約2・5～3・0mの円墳で，墳頂が平坦となつている。未発掘と推定されるが，天井石の極く小部分が露呈している。

第6号墳。(158)（福田・鎌井谷）　封土が，可成り流失しているが，推径約12・0m　の円墳。玄羨の別が，天井部にのみ見られる式の

横穴式石室が，露呈している。入口の部分が，若干消失して，現存長6・75m。

第7号墳。(159)（福田・鎌井谷）　推径10mの，封土ハカイ著しい小墳で，小規模の横穴式石室が，ハカイされて残存する。

第8号墳。(160)（福田・鎌井谷）　今，封土全く消失。石材附近に散見するのみ。

第9号墳。(161)（福田・鎌井谷）　径約8・0m高約 2・0mの小円墳で，石室の一部が，ハカイ露出している。細長い割り石の小口積みである。現存長3・45m　巾0・9m。

他に7基が，廣い範囲に点存する。北から南へ向けて記述する。

岡の屹(タワ)古墳。(162)（福田・岡の屹）　三保村を通り西川方面へ抜ける道路を見下ろす山北端の山腹傾斜面上に立地する。　径約 9・8m高約2・0～2・5mの小円墳。墳頂ハカイされ，石室天井石が露呈している。恐らく北に開口する横穴式石室である。

奥の谷古墳。(163)（福田・奥の屹）　谷間の斜面上に位置する径約 9・5m　高約 2・5mの小円墳で，推定全長 7・0m前後の横穴式石室が，露呈している。土充満のため，内部測定不能。

ウノメ古墳。(164)（福田・ウノメ）　山麓東斜面上山林中に所在する小墳で，封土・石室ともにハカイされ，奥壁のみが，辛うじて残存する。東に開口する横穴式石室と推定。

奥山田1号墳。(165)（福田・奥山田）　山腹斜面に所在するが，封土石室ともにハカイされている。石室は，南々東に開口する横穴式と推定される。

奥山田2号墳。(166)（福田・奥山田）　1号にやや近い山腹に所在。今ハカイされて不明。（日下元榮氏教示）

奥山田3号墳。(167)（福田・奥山田）　同様に山腹所在の円墳で，封土は甚しく，損傷。横穴式石室が，露出している。

高清水古墳。(168)（福田・高清水）　若林古墳群の南に連なつている支脈の山頭附近に所在する小円墳で，横穴式石室が，南に開口している。但し，天井石の大部分は落下消失している。（日下元榮氏教示）

## D 問題の所在

前項に，その一基一基を記述した古墳群は，古墳群として，どのような問題を，藏しているのであろうか？　そこには，古代史における無限の問題が，横たわつていることは，まちがいないことであろう。不學と怠慢とは，それらに全面的にぶつかつてゆけるだけの力を，筆者に與えなかつた。今は，それらの中から，一つのしかし大変重要だと思われる問題を，しかも極めてナィーヴな形で，提示するのみである。

（1）

古墳は，「豪族」「貴族」の墓であるとは，誰でも語り，又書いている。しかし，「豪族」「貴族」とは一体如何なる性格を有つたものであろうか？　漠然とした意味において，「古墳は豪族乃至貴族の墓である」と述べても，それは決して，古墳營造者＝被葬者の性格に對する說明とはなり得ない。その上，古墳の營造が行われた数百年間における日本の社会は，激動に激動を重ねる発展途上のそれであつた。古きものは，いかにそれが頑強な抵抗を試みようと，次第々々に，影を薄めつつあつた社會である。「貴族」「豪族」の有つた社会的な性格も，時代の推移と共に，刻々と，変化しまた発展をとげていつたに相違ない。我々が古墳墓營造者＝被葬者としての「貴族」「豪族」を考えようとするとき，單なる固定化された概念としての「貴族」「豪族」を，問題の對象に捉えるのではなく，激動する社会が生み出したものとしての，そしてそれ自身変化し発展するものとしての「貴族」「豪族」を取扱うのでなければ，その考察の大半の意義を失なうであろう。

佐良山古墳群を瞥見して，まず我々は，その狹少な地域に比しての，「豪族」「貴族」の墓の夥しさに，注目する。このちつぽけな地域が，これ程多くの「豪族」を生み出していつたことは，驚異的ですらあるようだ。從つて，このことから，これらの古墳は，佐良山の地に居を占めた人々のみの奥津城ではなかつたのではあるまいか？という疑問が，起つてくるかも知れない。もしそうであるとするなれば，この地域が，石材に惠まれ，ゆるやかな台地を有つているところから，附近地域一帶の「豪族」「貴族」によつて，死後の場として選ばれたのであろうか？　また，佐良山の美しい自然が，津山盆地の各所に君臨する人々の奥津城として，ふさわしいものがあつたためであろうか？　結論から先に言えば否と答えないわけにはいかない。佐良山附近の地域を概觀すれば，直ちに上記の推測の妥當でないことを，知るであろう。

西隣する久米郡三保村を見れば，嵯峨山西面をはじめ，錦織その他の地に数十を数える古墳群が，見出される。東隣する，あの佐良山地域よりはるかに甚しい山地である舊福岡村においても，可成りの数の古墳が，認められることは，衆知の事柄である。北方の総社から田邑にかけての山々には，佐良山に匹敵する程の古墳群が山顚山腹に連つている。院庄平野をこえて，二宮から鄉村芳野村にかけての地域も，ほぼ同様である。更に，少し遠くはあるが，何回となく例擧した國分寺周邊の河辺古墳群も，一里有余の彼方に存在する。どうみても，佐良山が津山盆地全体の人々の共同墓地でないことは，おうむね，河

辺附近の「有力者」が河辺古墳群に葬られ，三保村の「豪族」「貴族」が，嵯峨山西面や錦織の山腹に埋葬されたと同じ様に，佐良山の古墳群は，長い年月に亘つて，佐良山に住む，幾多の人々によつて，築造されたものであるにちがいないことを，示している。

あるいは，なおまた，このような古墳の在り方が，時代的なものでなかつたろうかとする疑問が，起るかも知れない。念のため，再び，周辺の他地域を見ても，結論は同じである。三保村の古墳群においても，河辺の古墳群においても，佐良山のそれにおいても，先項に見た様に，多くの後期古墳と共に，それ以前と考えられる少数の古墳が，見られるといつた具合である。このことから，必ずしも各地域がすべて全く同じ古墳墓の變遷を持つているとは言えないかも知れないが，大体において同じ様な推移を辿つて，各地の古墳が作られたことは，否定出來ないであろう。ここに，佐良山古墳群が，佐良山の当時の實体を示す史料であることは，疑いない。古墳は，多くの先学のいわれた様に，被葬者みづから君臨していた土地に近く，多くの場合それを一望することが出來る地に，營造されたものであろう。

さて，佐良山において，現存する古墳の数は，168基[1]にまで達したが，我々の調査の不備に加えて，多くの土地の人々によつて断片的に語られ前項に加えておらないところの，既に消失した古墳の数を，考え合せれば，恐らく200に近い数が，あげられるであろう。驚くべき数である。しかし，我々は，ただ單に，その数のみを問題にしても，はじまらない。その数量の動きに，注目しなければならない。そのためには，これらの古墳が何時の時代に，作られたものかと，いう問題を處理することが必要となつてくる。これは前に一寸觸れた。現在判明している168基を先ず，横穴式石室をメルクマールとする後期古墳と，そうでないもの（といつても，必ずしも前期又は中期古墳であると云うわけではない）とを分けて見なければならない。次表は，内部主体を主にして分類した佐良山古墳群のすべてに亘つた表である。

| 内部主体 | 古墳基数 |
|---|---|
| 竪穴式石室 | 2 |
| 竪穴式石室？ | 4 |
| 箱式棺 | 1 |
| 箱式棺　？ | 2 |
| 横穴式石室 | 93 |
| 横穴式石室？ | 17 |
| 不　明 | 21 |
| 未発掘と推定されるもの | 28 |

これらの中の，「不明」及び「未發掘と推定されるもの」の内，墳形・所在地形・隣接古墳の内部構造などから考へて，その内部主体が横穴式石室であろうと想像されるものが，大部分であることは，いうまでもない。かくして，これによれば，佐良山古墳群の壓倒的多數が，横穴式石室を内部主体としてもつ後期古墳であることが，判明する。それにひきかえて，竪穴式石室を内部主体とするものは，それと推定される類を加えても，僅かに，数基にすぎない。また，竪穴式石室と云つても，それが，必ずしも古式又は中期の古墳の確實な指標であるわけのものでなく[2]，又，箱式棺も，一概に，新しい古いとは云えないものがあることは，衆知の事柄であつて[3]，このことも，充分考慮に入れなければならない。しかし，ともかくも，数の上からいつても，横穴式石室墳は，壓倒的な存在であ

る。それも亦，比較的古い式に屬する（勿論後期の中で）横穴式石室は，少いようで，むしろ，所謂亀甲型の土師燒陶棺をその内部に安置するより新しい式と考えられる横穴式石室の方が，多いように思われる点も，注目されてよいのであろう。[4]

このような狀況は，單位地域における古墳墓の全体を檢討した人ならずとも，單に佐良山古墳群にのみ限つた現象ではなく，また，津山盆地のみに認められる現象でもないことを，知つているであろう。古備平野でも，山陰でも，また畿内でも，特殊な地域を除いては，等しく見うけられる現象である。かくして，佐良山古墳群の大多数は，所謂古墳時代後期の所産であると，認めて差支えないであろう。多くの人々が，当然な事柄として，あまり注目していない問題が，ここにひそんでいるのではなかろうか？　後期において，急速に＝爆発的にとでもいつてもよい位，古墳の数が，増えてくるのは，一体どうしたことであろうか？[5]　しかも，横穴式石室という，今までになかつた構造の内部主体と副葬品とをもつて出現する。勿論明確には一線は引けないけれども，前期・中期の時代の實体との間に，大きな相異が，考へられずにはいられない。しかも，それが，この佐良山にみられるように，狹少な地域に，考えられない程の夥しさをもつて，出現してくるのは，どうゆうわけであろうか？　横穴式石室の採用自体，そこに前提として何等かの社会的・「宗教」的な變化が，考えられるのであるが，その上に以上のような事態を伴つていることは，重大な問題である」端的にいえば，社会構成の基礎的な單位＝共同体の形態の上に，大きな変化が，起つたにちがいない。古墳を築造し得る人々，古墳に埋葬される人々の数の激増は，單なる人口の増加とか，單なる生産の向上などによつて，解決されるべき問題ではない。それは，或る意味では，古墳そのものの変化であり，また人々の墳墓營造に對する觀念の変化でもあるであろう。[6]しかし，本質的には，それが，大きくは社会構造の，小さくは，共同体の形態の變化に，求められてこそ，問題の核心に迫り得るのでは，なかろうか？

（2）

後期古墳の築造の年代について，即ち「中期と後期との境を，いつを以て区切るかという問題」及び「後期の古墳が……人々にとつて最善のものと感じられなくなつた」のは何時頃であつたかという問題について，小林行雄氏は，その近著「日本考古學概說」において，前者の問題は，「畿内における横穴式石室の出現を以つて後期の一つの標式とする場合，まだ明確な決定を與えることは困難である」と一應述べられた後，「しかし，後期の中心がほぼ六世紀にあり，かつ聖德太子の磯長陵や天武天皇の檜隈大内陵が切石造りの横穴式石室である点から見て，七世紀の後半にまでそのふうが続いていたことは，容易に察せられるのである。」としておられる。後者の問題については，これを「八世紀の初頃，佛教の隆盛とともに傳えられた火葬の制度の出現」に歸しているが，なお，「古墳時代の下限」については，幾つかの「一つの見方」が存することを例擧して後，「いづれにしても墓制の上からは同じ系統の古墳の行われた時代として，飛鳥時代をも含めて考えねばならないのであるが，……流動する文化の時代と時代との間に，一線を以つて境を劃す

ることを困難とする文化史の立場において，古墳時代の終末もまた七世紀のうちにあるものとする不鮮明な解釋を以て満足する方が，むしろ適當であろう。[7]」と結んでおられる。墓制としての後期古墳が，何時から何時まで行われたかという問題は，以上のように，明確な決定を與えることが，甚だ困難である。ましてや，一地域における僅かな調査から，その地域の古墳築造の年代を決定することは，より以上の困難事であることは，いうまでもない。しかし，大凡のことは，推定できるであろう。先づ，當時の文化の傳播ということから考えて，[8]作州山間地域における後期古墳＝横穴式石室の築造の開始を，ほぼ6世紀前後と見ることは，許されるであろう。さらに岡山縣邑久郡美和村東須恵本坊山古墳発見の切妻式屋根形陶棺の身に附せられた二個の連華文が，白鳳時代の円瓦当そのまゝである事実その他からして，[9]恐らく陶棺を藏する古墳の築造が（カット5），古墳の築造としての最後の段階乃至それに近い段階であろうと推定される佐良山地域における後期古墳の下限を，早くて7世紀末，おそくとも8世紀半ば以前の頃に，求めることも，大体論として，認められるであろう。[10]從つて，佐良山における大多数の古墳＝後期古墳が，二世紀又は二世紀半の間に亘つて，營造されたとして當らずといえど，遠くないであろう。

さて，佐良山には，先に述べたように，約百四，五十基にも達する後期古墳が，推定されている。[11]同じく後期といつても，その初頭と後半とにおいては，おのづから数においてまた構造の細部において，築造の事情を若干なりとも異にしているということを，充分考えに入れても，佐良山における後期古墳が，大凡二世紀乃至二世紀半の期間に，百四，五十基の夥しさで，築造されていることは，それ以前の狀況と比べて，注目すべき現象である。單純に，算術的な平均を出しても，上の事情からして，あてにならないかも知れないが，一つの便宜的な操作としてその点考慮して頂くとすれば，$1\frac{1}{3}$乃至$1\frac{2}{3}$年に1基の古墳の營造が，あるいは古墳を營造することの出來る力のある人間1人の死亡が，算定される。更に，ここで重要なことは，必ずしも1基の古墳に1人だけが埋葬されたのではなく，小林氏も書いておられるように，「わが上代の墳墓に，一つの墳丘なり石室なりに，二人以上の合葬した実例が豫想以上に多いという事實」[12]であり，特にこれが横穴式石室において然りとする事実である。現に佐良山においても，以下調査報告を行う3基の墳墓が，何れも2体乃至4体の遺骸の埋葬を示し，また，その他ハカイ現狀をよく止めている類において，小屋谷1号墳の七棺の陶棺の存在を筆頭に幾多の例を，擧げることが出來る。一つの墳一つの石室に，2人又は3人が埋葬されるのは，極く普通な現象であつたことが，考えられる。從つて，古墳に埋葬される人々の数は，古墳の數よりずつと多くなりその2倍から3倍となる。上の甚だ頼りない計算でゆくと，正に，1年につき1人以上2人強の，[13]古墳に埋葬され得る資格のある人が，死亡していることになる。驚くべき程多くの「貴族」「豪族」が，古代の佐良山に，存在していたことになる。1年につき何人と云う上記の算術を，全く根據のないものとして除外しても，佐良山における後期古墳に埋葬された人々の数が，約300人乃至450人前後以上とすることは，ほぼ動かせない想定であ

ろう。たびたび算術的な表現をして恐れいるが，平的すれば數十人の，死ねば古墳に埋葬される人々が，常時，佐良山に居住していたであろうとの想定も，一概に荒唐無稽なこととして，退け得ないものがあるのではなかろうか？　ここに「貴族」「豪族」の實体を見出さねばならない。佐良山における後期古墳の一つ一つを，更に細かく年代的に，きちんと配列することが出來れば，問題は，更に具体的となるであろうが，これは今後のより精密な調査にまたなければならない。同じく後期古墳といつても，先に指摘したように，前半に屬するそれが，後半に屬するそれに比べて，量的により少いことは，他の地方の所見をも合せ考えることによつて，充分想定され得るところであるが，その点に関する正確なデータを作成し得ない今は，ここのところに，問題を更に，発展させ具体化させる鍵が，ひそんでいることを指摘するにとどめ，目下進行中の第2次の調査に，その期待の多くをかけようとしている。從つて，ここでは極めて大まかに見えるかも知れないが，なほそこにそれ相應の充分な意味を有つものとして，後期古墳を一括して取扱うことにする。

後期古墳の以上の状況にひきかえて，前期中期の古墳は，どうであろうか？佐良山ひいては津山盆地において，何時頃から古墳の營造が始まつたかということに，明確な解答を與えることは，非常に難しい問題で，現在それを示すべき充分な資料を，持ち合せておらないが，盆地一隅において，梅原末治博士の調査にかかる，苫田郡郷村觀音寺古墳が「古式古墳にふさわしい内容」を持ち，当地方の他古墳に比して「時代の遡るものである」[14]ことが想定されていること，その他などから，[15]少くとも，所謂古式に屬する墳墓の築造が，津山盆地に行われていることは，略々確實であろう。即ち，古墳を作り得るだけの社會的な條件は，津山盆地においても，他の諸地方と同様に（地方々々によつて多少のズレがあることは，いうまでもないが）早くから存在していたことは，明らかである。しかし，ここ佐良山において，梅原博士が提唱されているような古式古墳あるいは，中期古墳の内容を有つたものが，存在したか，存在したとすれば，何基位あつたかという問題については，その一基から紡錘車型石製模造品（カット4）が，採集されている寺山古墳群中の數基及び後章に報告する門の山第1号墳が，横穴式石室墳よりも，わずかに時代が遡るものであろうかとする推定を下せるのみであつて，遺憾ながら，明確にこれを語ることは，出來ない。しかし，前項の素描において見たように，所謂後期以前と考えられる古墳は，数量的には非常に少なく，数基を数える程度であろうとする筆者の推定は，略々大過ないところであると思われる。ともかくも，絶對數において，非常に少ないということは，確實であろう。

佐良山における後期古墳が，後期の全期間に亘つて平均した数で，築造されたわけでないことは，前にも述べたように，充分考慮されなければならないが，それにしても，横穴式石室をメルクマールとしてみた後期古墳の時代を一括してみた場合，上記のそれ以前と考えられる時代との間に存する差異は，明らかに，横穴式石室の採用という重大な轉機とからみ合つて，その築造數量の上に，反映されているのではなかろうか？　數百人に上る後期古墳の被葬者＝所謂「貴族」の實体は何

か？　彼等が，佐良山の地に，忽然と誕生してくる筈はない。前期中期において極めて稀であつた古墳の築造が，その時期における佐良山の人口の小量さを，ただ單に物語り，後期古墳の夥しい出現が，ただ單なる人口の増加を物語ると思えない。又，國家体制の完成強化に伴つての，一つの末梢的な風習の流行に，後期古墳激増の根本的な原因を，歸せしめようとすることは，むしろ滑稽である。更に，單なる生産の向上，生活の豊富化なりを，直接的に，これに結びつけようとする試みは，乱暴である。それは，人口の増減の有無にかかわらず，古墳というものに對する觀念の變化，究極的にはそれを支えている社會の変化に，求められるべきであろうということは，先に述べた。かくして，後期以前における如上の状況は，当時の村落の構成を，津山盆地の政治的社会の實体を反映しているのでなければならず，同時に，それが後期古墳……横穴式石室の採用に関聯してのその數量の激増化……への轉換もまた，村落の構成・共同体の變化と，政治的社会の発展とを反映しているものなければならない。古墳營造者の，そして古墳被葬者の質的な相異が，両者の間に，存在したにちがいない。「風習」といわれるものの理解のためには，常に根底において，こうしたことに對する理解と把握とが，なければならないのではなかろうか？

（3）

古墳は，たとえそれが径10數mの小規模のそれにしても，それが，個人又は集團の權威的な誇示の現われである限り，極端にいえば「植物的」な生存を続ける社会においては，出現する道理はない。古墳の築造は，一定の歴史的発展の段階において，はじめて，開始されるものである。氏族共同体の古い殻を打ち破つたところにおいて，それは期待されるものである。そこには，權力又はその萠芽的なものを中心として，「强力な」意志＝個性が，働いていることは，否定出來ない。「强力な」意志と個性とが，何等かの形においても誕生していない社会において，誰が，權威的な壯大な古墳の被葬者となり得たであろうか？　前期乃至地方的には中期の古墳の被葬者が，そのやうな意志＝個性を顯現していたであろうことは，いうまでもなく，また後期古墳の營造者が，意志と個性との持ち主であつたろうことも，充分，考え得るところである。ただ，この場合最も大切なことは，その意志＝個性の全社会的な性格，從つてその顯現の仕方において，両者の間に，大きな相違があつたのでは，なかろうかということである。（いうまでもなく，その相違は，前者から後者への発展という形で捉えられなければならず，そしてまた，それは，その發展の基盤をなす廣汎な社会関係を，充分考慮しなければならないことは云うまでもない。）

先に見た後期古墳と，それ以前の古墳との一定地域内における築造數量の相違（單に佐良山乃至津山盆地のみの現象でなく，略々全國各地における状態でもあつたことは先に述べた）は，それが單純に，該地域内における人口の増減多少を示すものでない以上，そしてそれがそれぞれの時代の社会の實体の相違を反映するものである以上，より具体的には被葬者の社会的な性格の相違として取りあげられることが，可能であらう。前期・中期の古墳の營造せられた時代……具体的には3世紀……5世紀……において，既に階級對立が発生発展しており，たとえ，奴隷制はまだ「全

社會を深刻に把握していない」としても，初現的な階級社会が存在していたことは，既に多くの先学の說き來つたところである。いわゆる「常識」では，階級社会の支配階級は，廣汎な一般大衆と比べては，たとえ少数のものであつたとしても，その数は，極端には，少くなかつたであろうとされる。しかし，特に前期古墳に示された「支配者」の数はどうであつたろうか？　繰りかえしていうまでもなく，その数は極小であつたことが，指摘される。中期においてややその数は増加するとはいえ，略々同じ状況が，考えられるであろう。このことは，この種古墳の比較的多い先進地帶……幾内など……についても，適用されることが出來ると思う。その社会が階級社会であるにも拘わらず，古墳を營める人格が，極少数であるということは，一体何を意味するであろうか？「常識」では片付けられない問題がここにある　支配階級が，大化前後乃至それ以後に見られたように，デスポット的行政組織＝權力機構の網の目の中に，ヒエラルヒーを形成している場合とは，ずい分と異つた社会が想定されるのではあるまいか？　後者の場合には，既に，古代家族＝奴隷制的家父長家族の廣汎にして，深刻な成長と発展とが，各地方に亘つて，曾つての古い体制を[16]つき破つている事が考えられ，その結果，ヒエラルヒーの上部組織たる「律令的」乃至律令の「官僚」が，大化喪葬制の詔に見出されるような古墳を[17]，大小さまざまに，作つていることが，考えられる。古墳を作るということには他に多くのいろいろな原因が働いてはいるであろうが，根本的には，それは被葬者が，その主体性を獲得し，それを打ち出そうとする「意識」，その発展の土台が，前提されていなければならないことは前に述べた。こうしたことに関連して考へられるもう一つのことは，後期古墳が一般的には規模が小であるが，中には相当に巨大なものを含んでいるなど，その形態は可なりにさまざまであり，おのづから，その内に，当代のヒエラルヒーの在り方を想像させるに引きかえて，前期・中期の古墳は，特別に巨大なものを除いても，一般的に形態が大規模であることが，指摘される。後期古墳が，その墳丘において，一般的に，規模が極めて小さいにも拘わらず（この小さくなる原因の一つとして横穴式石室の採用を考えに入れなければならないが，なおこの兩者は，相関的に把握されなければならない），その中になお可成りに巨大なそれを有し，前記喪葬制の詔の物語る被葬者間の階層的な差異のさまざまを示していることは先述の通りである。勿論，前中期のそれであつても，墳丘の規模が，当時の一般的な大規模さから著しくはづれて，可成り小規模な類が，若干なりとも，存在することは，事実であろう。しかし通例には，むしろ大規模な墳丘に附屬する又は隷屬する形として，つまり陪塚的なものとして，理解されるものが多いのではなかろうか？　副葬品においても，後者が，鏡玉劍に主として象徴化される「寶器」的な類を主体としているのに較べて，前者のそれは，むしろ，死後の生活の場としての横穴式石室に相ふさわしい日常の利器・器具・供物がその多くを占めている。これら内部主体・副葬品・墳丘の規模，古墳自体の分布の狀態とその數量等の幾つかの，もつとも重要な要素も，それをバラバラに切りはなして考えては，當代の社会狀態，被葬者の性格を云々することが出來ないことは，いうまでもないこ

とであつて，そこに，これらを統一的に理解することが，必要となつてくる。

さてそこで，前期乃至中期の古墳が，何處の地方においても，極めて少いという事實は，上記の他の諸特色と合せ考へることによつて，強力な個性＝意志の具現者が極めて少数であり，且つ，それが各地に点在していたこと，從つてその個性の具現者が活躍することの出來た社会的地盤が可成りに廣汎なものであつたろうことを推定させるとともに，社会の他の大多数の人々が，未だ明瞭な個性的なものを有ち得ず，古い要素を多分にもちつゞける共同体の枠の中に，「單なる一成員」としての存在を続けていたのではないかとの想定に導く。この場合，強力な個性の具現者としての古墳の被葬者が，社会全体と遊離していたとは，考えられない。それどころではなく，むしろそれらの少数の人々が，各地方に僅かづつ出現して來たということ自体，生産力の発展に基いて，古い共同体が，自らの狭い枠内の矛盾を叩きこわそうとして，激しく行つている運動の一つの側面として，こうした運動の過程の中に生み出されてくる地域的なそして可成りの主体性をもつ「集團」，その集團の統制力の掌握者の出現を示すものではあるまいか？ そしてその場合，「集團」の意志は，その掌握者としての「族長」＝被葬者に象徴的に顯現されるのであろう。即ち「集團」の個性は，それを代表する人物においてはじめて具体的になり，顯現される。このような集團の個性を代表する被葬者の副葬品の性格が，下述する後期古墳の被葬者の持つ副葬品のそれと著しく異つて（尤も，この点は，中期を媒介とした時，簡單に一線を引くことは出來ないのであるが）それがむしろ日常の利器用具などではなく，寶器的なもの（前代との傳統的な連関が考慮される）であるところに，被葬者自身の性格，というより当時の社会の一般的な状態（祭祀的部族的状態）が，先の想定の如く見出されるのではあるまいか？ 前期乃至中期古墳の被葬者の社会的な性格を如上のように捉えることはどうであろうか？ これに引きかえて，後期古墳の被葬者の性格を，上と同様なものとして捉えることは，前項の論述からして，なし難いところであろう。我々としては，後期古墳の在り方からして，少くとも，個性と意志との持ち主（必ずしも1個人でなく，家族であつてもよい）が，曾つての時代と異つて，廣汎に出現して來たということを，先づ認めなければならない。その個性も，前期の被葬者の示したようなそれではなく，横穴式石室及び副葬品の性格のそれが象徴するように，「個人の自覺」乃至「個人の発見」という方向においてのそれであつたことが，想像される。そしてこの方向こそ，即ち個人又は家族の主体性を強調する方向こそ，これまでの共同体の制約をうち破り，祭祀的族制的な面を止揚しようとする方向ではなかつたであろうか？ 何故人々＝社会はこうした方向を取らねばならなかつたかの問題は，一應除いてみるとしても，多くの先学の説かれるように，6世紀前後からそれ以降に亘つての時期において，大和政權が，半獨立的な豪族の連合政權から專制体制へと轉換をなしとげつつあつたという事実は，正に地方地方に廣汎に展開する共同体のこのような動きと方向とを前提としなければ，理解することは出來ないであろう。この方向と動きこそ，先に，前中期の古墳の在り方から想定した農村の古い共同体，それの分解即ちその家父長的階級

関係の発展へのそれであるであろう。[18] 主として横穴式石室を内部主体として，内に日常利器用具供物を收めることを常とした後期古墳の各地方各地域における激増，猫額大の山間地域小河川の作る僅狹な溪谷地帶にまで，あらゆるところに出現してくる後期古墳の營造は，地方地方の共同体がくずれ去り，そこに家父長的な秩序が即ち深刻な階級関係が，自らを強く貫徹させて行つたことを物語つていると考える。

さて，佐良山における各古墳に，もう一度目を轉じてみよう。以下に掲げる表は，封土の大きさを測定することの出來た 116基の古墳についての，その大きさの分類表である。

| | 径20m以上 | 径15～20m | 径10～15m | 径10m以下 |
|---|---|---|---|---|
| 寺　山 | 1 | | 4 | 2 |
| 門の山 | | | 4 | 9 |
| 煙硝庫 | | | 1 | 4 |
| 寺池東 | | 1 | 5 | 7 |
| カキ谷 | | | 2 | 2 |
| 一　方 | | | 3 | |
| 嵯峨山 | 1 | 11 | 9 | 4 |
| 御笠美 | | 1 | 6 | 4 |
| 丸　山 | | | 2 | |
| 中宮・高野 | 4 | | 3 | 2 |
| 劍　戸 | 1 | 3 | 7 | 1 |
| 小屋谷 | | | 1 | |
| 若　林 | | | 2 | |
| 三ツ塚 | | | 5 | 2 |
| その他 | | | | 2 |
| 計 | 7 | 16 | 54 | 39 |

これによれば，前方後円墳 4基を除いては，封土の径20mを超えるもの僅かに3基，径15m以下の小古墳が，實に測定墳総数の80%強という数字が，現われる。これからして，佐良山に於ける古墳の，從つて数量的に90%以上を占める後期古墳の殆どが，非常な小墳であることが，判明する。このような径15m以下の小墳の築造には，どの程度の勞働力が，必要とされたであろうか？　その道の專門家でなくとも，これが，数百人が数十日を費しての築造であるとは，誰も考えないであろう。我々の計算によれば，それは，恐らく10数人の人々の 2・3ケ月の勞働によつて，建設され得るものとされる。石材には，周囲の山頭や山腹に，地肌を露呈している流紋岩が容易に利用されたことは，いうまでもない。それら墳墓の内部主体は，しかも，家族墓としての性格をより强調した横穴式石室である。1基の小古墳の營造，それは当時この地域にも「階層的」な差異を以つて形成されつつあつた家父長的家族のうち，上位にあつた，それ自身一個の奴隷主としてさえ成長しているの家父長にとつて，さしたる至難事ではなかつたのではあるまいか？　佐良山の地に形成された古代家族が，その構造一型において，下総國葛飾郡大島郷戸籍に示され遲れた形を有つていたか，あるいは，先進的な御野國加毛郡半布里に現われた形を示していたかについては，推断の限りではないが，それにしても，6世紀から7世紀にかけての夥しい古墳墓の營造は，この地においても，既に家父長的秩序が形成されていたことのみでなく，これらの家父長制家族のうちに階層的な差異が，現象的には古墳を作り得たものと，そうでないものという形をとつて，出現しているということを，示すものではあるまいか？　單に，肥君猪手の如き郡の大領，正八位勳十等の如き家長のみが，後期古墳の築造者となり得たとすることは，先に（2）において述べたところからして，考えられることではないであろう。更に，また，佐良山に

おいて出現した家父長的家族が，すべて等しく，古墳の築造をなし得たであろうとの推定も，先の論據からして，承服出來ないところである。佐良山において，後期古墳を築造した「豪族」「貴族」の実体は，まさにこのあたりに，その解明の足掛りが，存するのではなかろうか？　もとより断然他を壓している古代家族も存したに違いない。中宮・高野山根にまたがつての壯大な4基の前方後円墳の營造，嵯峨山西面の山頸に他を壓するように構築された数基の大規模（といつても佐良山における）な円墳の存在は，この佐良山の僻地にも，眞の意味の「豪族」が，他を壓しつつ誕生しているのを，物語るものでは，あるまいか？　8世紀初頭備前國から美作國が分國し，その國府が，津山市総社におかれたことも，[19] 附近における，このような事情を充分考慮して，理解されなければならないであろう。

以上の論據からして，廣く津山盆地における後期以前の古墳に目をむければ，他地方のそれと合せ考えることによつて，それは，農村における家父長的関係の廣汎な普遍的な形成以前の社会の狀態を反映していることを，思わざるを得ない。前項の所論に基いて結論的に云えば，石母田正氏によつて生き生きとして取り上げられた「古代貴族の英雄時代」の「英雄」が，[20] その主人公であつたのではあるまいか？　廣汎に社会の基礎をなしていたと考えられる當時の共同体の上に，「族長」として又半面「デスポット」として君臨していた政治家＝意志と個性との代表的顯現者＝英雄の奥津城を，そこに見えることは，果して不可能であろうか？。それに對して，後期古墳に関して見られた以上のような性格は，家父長的関係が地方＝農村の共同体（即ち曾つての「英雄」の論理によつてその共同体的関係を支配の手段とされていたところの共同体，自らの主体性の発展を強く制約されていた共同体の構成員）をゆりうごかし，その中に古代的な秩序を持ちこんでいつた姿を示すものではあるまいか？[17] 從つて，そこに葬られた人々即ちいわゆる「豪族」「貴族」が，前期中期の被葬者とは異つた性格を有つておることは明らかである。それは，正に家父長的家族の墓であるということが出來る。勿論その中には，上は支配のヒエラルヒーの頂点に立つ皇室の墓から，下はヒエラルヒーの末端にありながら，小規模ながらも自らを1個の奴隷主として成長させてくる山間僻地の家父長家族の墓まで，さまざまな被葬者の階層を含んではいる。しかし，それにもかかわらず，彼等被葬者の示すところは，廣汎に形成された社会の一般的狀態の家父長的奴隷制的性格に根底を有しているという一点において，共通しているとしてよいであろう。[21]

さて振りかえつてみると，後期古墳の示すところと，それ以前の古墳の示すそれとを，あまりにも對立的に，あまりにも突発的な変化として，取扱つて來たようである。そこには，3世紀前後から7世紀前後に亘つた古墳を單に2つの類型に分けたこと，中期古墳特にその後半のそれが示す一つの「過渡的」な様相に対する考慮が何ら爲されていないこと，從つて兩類型の示している被葬者の性格，ひいては，社会の一般的狀態について甚しく機械的平板的に取り扱つたことが，指摘されるであろう。[22] 前者については，中期特にその後半の古墳の持つ重要性（その重要性の存在の故に，中期が前後期の間に編年されている）についての評價を無視するものでは決してない。

それがその副葬品においても，墳形及び古墳自体の分布と數量においても，先述の兩類型の過渡的な面を持つていることは，衆知の事柄である。それにも拘らず，この中期を含めての前半の古墳と後期古墳との間には，可成りの変動＝発展があつたことも事實である。この変動＝發展こそが，たとえ中期古墳がいかに特色ある性格を持つ存在であるとしても尙，そこに中期と前期とをひつくるめてそれを，後期古墳と對比するという方法を許してくれるのではなかろうか？　といふことは，しかし，この方法の完備を意味するものでは決してない。それどころか，こういう方法しかとれず，從つて中期古墳の持つであろう眞の役割について殆ど取り上げることが出來なかつたところに，最大の欠陷があるのではなかろうかと考えている。その爲被葬者の「豪族」「貴族」としての性格及び社会の一般的な狀態等についても類型的な對比にとどまらなければならなかつたこと，從つてこれに関連して各地方乃至各地域間における不均等的発展に對する認識と評價とが殆どなし得なかつた事が，強く考えられる。これらの点については，目下進行中の廣範囲な調査の整備に伴つて，再び言及することの機会を期待して，今回は，「問題の所在」についての序説的な如上の考察を以つて終ることとしたい。

以上の所論において，結局，問題の解決はおろか，問題の所在すらも，混迷の淵に追ひこんでしまつたのではなかろうかと恐れる。しかし，その營造者の性格，從つて，その社會的な基盤の把握への努力を通じてこそはじめて，古墳の研究は，その正しい道において進むことが出來るとなす筆者の立場とそれへの確信は失われことはないであろう。最後に松本新八郎氏の高見を借用して，結びとする。

「それが，（奴隷が←近藤），英雄や族長の私的な所有に轉ずることがあつた後でも，そして村落の土地が成員の私的占有にまかされた後でもなほ世帶共同体が支配して，けつして家族奴隷をふくむ家父長家族には轉化しないという時代が長く部族同盟期につづいたということを指摘せねばならない。……土地占有をつうじて一般員の間にも奴隷所有が成立するときには世帶共同体は家父長家族に轉じていなければならず，そのためには氏族および部落同盟に大きな変化が行なわれ古代國家へ轉化しなければならない。」[23]

註

1）　稿成後，更に4基の古墳（3基が確実に横穴式石室墳で，他の1基もほぼ横穴式石室墳と推定される）が発見され，計 172基となつた。

2）　斎藤忠（わが国における古墳の諸類型とその系列）「考古学雜誌」37巻3号，1952年。

3）　岡山県下においても，後期に屬すると考えられる箱式棺の例は，枚挙にいとまない程で，例えば，川上郡落合村赤羽根2号墳，苫田郡神庭村緑山の箱式棺古墳など。
近藤義郎（川上郡落合村赤羽根 2号墳調査報告）「吉備考古」84号　1952年。
神庭英朗（緑山古墳群の研究）「研究メモ」第3報　1952年。

4）　後記するように，陶棺をその内部に蔵する横穴式石室墳は，後期としても，その新しい部に屬すると考えられる。
末永雅雄「大和古墳墓」194頁　1950年。

5）　それまで前期や中期の古墳の營造が全く行なわれなかつたと想定される山間の僻地にも，このころになると古墳が出現してくる事実は充分関連的に考慮されなければならないであろう。このことに関しては，近い将来に，やや詳しいデータとともに論述する機会を有つことができる予定である。

6）　小林行雄（黄泉戸喫）「考古学集刊」第2冊 1949年。

7）　小林行雄「日本考古学概説」258頁及び259 1952年。

8) 小林行雄（古墳時代における文化の伝播）「史林」 33巻 3号及び4号 1950年。

9) 小林行雄「日本考古学概説」258頁 1952年。

10) 梅原末治（我が古墳の終末）「日本の古墳墓」117頁—119頁 1947年。

11) 実際はこの数より多少多いであろうが。

12) 小林行雄「前掲書」251頁。

13) 計算で表われた数字は，1・2人～2・25人である。

14) 梅原末治（美作郷村観音寺古墳）「日本古文化研究報告第9近畿の古墳墓」75頁 1938年

15) 例えば，観音寺古墳に隣接して別な尾根上に所在する略々同大の前方後円墳（前方部の狭長なるに比して後円部が可成り高く，墳頂から家形かと考えられる象形ハニワの残片が採集されている），津山市三宮美和城前方後円墳勝田郡河辺村日上畝山前方後円墳などが，時代の遡る類と考えられる。

16) 大化以前において我国の共同体＝土地所有の主体が 藤間生太氏によつて提出された原始共同体→親族共同体→家族共同体→家父長的大家族＝古代家族の各範疇の継起的発展の段階を辿つたものであるか，あるいはいわゆる世帯共同体理論が，それに適用されなければならないかという点に関しては，今のところ自信を持つて積極的に自説を開陳する材料も理論も持ち合せていない。それにも拘らずあえて申さなければならない一言は，両者ともに論者において，その議論の根底としての当代の史料の重要な部分に對する軽視と無理解とが共通点となつていることである。中国の古文獻，記紀その他の我国の古文獻の批判的な解釈による史料の整備は，成程微に入り細を穿つて行なわれていることは，いうまでもない。それに較べて，当代の直接の遺物遺物である考古学的史料については，たとえそれの部分的な引用が行なわれているにしてもその多くは，単なる傍證的な役割を荷わせられているのみに過ぎないことが，指摘される。たとえ考古学的史料が具体的な個人の事蹟や明確なる絶對年代を表し得ないにしても史料の背後にある人間の生活の理解を目指していることは，文獻史学が紙の品質や文字の形態をその目標にしているのではないことと全く同じであることはいうまでもなく，ここに考古学が文獻史学と共に「歴史学」という同じ次元に立つべきものがあり，しかも両者の間に一線を引いての「對立的」な次元としてでなく，両者が一つのものとして，即ち言葉を変えて云えば，考古学が，「歴史学」そのものとして高められなければならない所以のものがある。従つてここに考古学が，文獻に従属した形でなく，自らの純粋性を強く主調しつつも歴史学そのものでなければならないことはいうまでもないことであろう。縄文式以降大化前代に至るまでの遺物遺蹟が，その間にほぼ断絶するところなく秩序づけられつつある現状において，考古学的史料を第一義的なものとして取り上げることは，重要な意味を有つている。我国における大化以前の共同体の問題にしても，この点に，その発展の成否がかかつていると思はれる。一見当り前と思はれるこのようなことを述べたのも考古学の側と文獻史学との側との協力及び相互間の理解に向つての積極的な努力に對する期待を強調せんがためにほかならない。なほ小林行雄「日本考古学概説」巻頭における同氏の構想を参照。

17) 甲申・詔曰・朕聞・西土之君戒其民曰・古之葬者・因高為墓・不封不樹・棺槨足以朽骨・衣衾足以朽肉而已・故吾営此丘墟不食之地・欲使易代之後不知其所・無蔵金銀銅鉄・一以瓦器・合古墨車鬼霊之義・棺漆際会・葬三過飯・含無以珠玉・無施珠襦玉柙・諸愚俗所為也・又曰・夫葬者蔵也・欲人之不得見也・酒者我民貧絶・専由営墓・爰陳其制尊卑使別・夫王以上之墓者・其内長九尺・濶五尺・其外域方九尋・高五尋・役一千人・七日使訖・……（日本書紀巻第廿五孝徳天皇大化二年の條）大化二年（646年）とはいえ，後期古墳営造の状態の一断面を示していると考える。

18) これを一つの階級斗争の現われとして把握して行こうとする東晶氏の提案は，注目すべきである。（歴史学研究）第156号 1952年。彼の文章から更に引用すれば，「6世紀に新設された白猪屯倉に関する書紀の記事は，慎重な文獻批判を必要とするとしても，田部の名簿をつくつたことが見えており，個別家族を直接に支配せんとする傾向が見られるのであつて，かかる事態は少くともそれ以前の氏族共同体の共同体的関係が意味をもち難くなつた農村の段階に對する支配形態と見ることが出来ると思う・……」

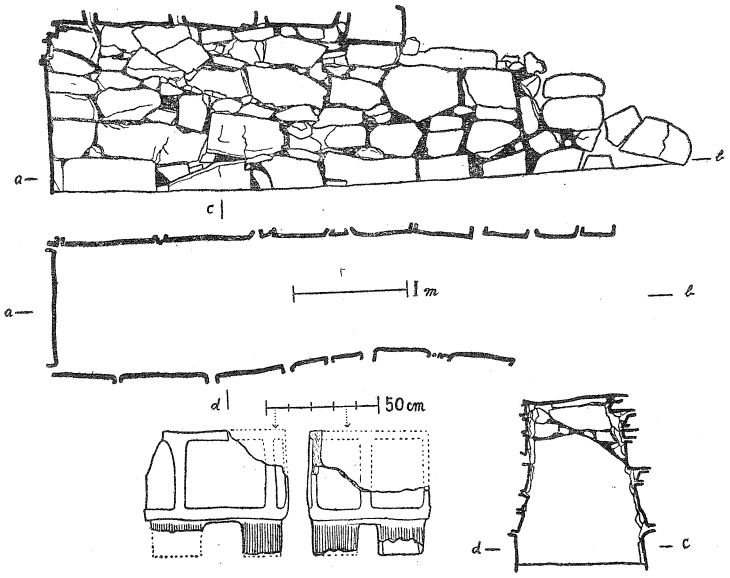
(19　他に異説があり，例えば国府を二宮の地に考えることの妥当性を主張されている人もある。

20)　石母田正（古墳貴族の英雄時代）「論集史学」1949年。

21)　ついでにここで，古墳の終末についての感想を述べれば，従来の多くの論者は，古墳衰亡の原因として，仏教・火葬思想の影響のみを強調しすぎた感がないでもなかつた。しかし支配機構の推移，社会特に農村における家族構造の変化などに目をつぶつていては，漠然とした「終末論」を展開し得るだけである。仏教・火葬思想の影響と，これらの事柄を統一的に相関づけて考察することが，必要であるという点を強く指適したい。

22)　これと相似た，しかも重大な関係のある後期古墳の前半後半の問題も本項（2）において述べたように，充分な考察を為し得なかつた。

23)　松本新八郎（原始・古代社会における基本的矛盾について）「世界史の基本法則」5頁。1949年。




カツト 5　陶棺古墳の一例（西の岡1号墳の場合）（Cut 5）

第　3　章

# 中宮第1号墳発掘調査報告

近　藤　義　郎

【内　　容】

位置及び発掘当時の状態

墳丘及び外部施設

石室の構造

石室内遺物出土状況

発見の遺物

## 位置及び發掘當時の狀態

本古墳の行政的な位置は，津山市小字劍戸30番地であつて，同所在住の山本稔氏の所有地となつている。附近一帶の地形は，5万分の一地形圖津山西部に，明らかな所であり，また，前章において，瞥見を，試みた所であるから，本項においては，必要な限りの言及を除いては本古墳の位置する局部的な狀態についてのみ，記述を進めることにする。

附近地形は，貯水池の開穿，鉄道の敷設，開墾等の結果，大きく変貌をとげていることが，想像されるが，我々の名づけた中宮古墳群は，笹山方面から西南にのびる支脈が，若干の短小な小支脈を，北方に向けて分岐させつゝ，西方即ち狹小な福田の沖積地に向つて，やや緩やかな勾配を作り出した，標高畧々136m 前後，その現津山街道との比高約20～30m 前後を測る地点に，所在している。その古墳群の略々中心の位置に一際高く，本中宮第1号墳が，聳え立つている。從つて，福田及高尾地区の平地からは，指呼の間にこれを望むことが出來る。その傾斜地は北西に面し，南東に山を背つているため，やや暗い奥津城を感じさせるが，その地に立つてみれば，近くは佐良山地区内の猫額大の平地をこえて，美保村・久米村の豊沃な平野を一望し，更には遠く中國背梁部山脈の幾重もの起伏を，望見することが出來る。景勝の地とは言い難いが，当時の奥津城として，相應わしい位置というべきであろう（第1圖版）。

現在，この斜面には，5基の古墳が見出される。内1基を除いて，他は，実測圖第3圖にすべて示したが，地主山本氏の談によれば，もと，小円墳即ち中宮第3号墳の北側にあたる個所に（現在は開墾されて，畑地となつている。）古墳があり，開墾の際破壞消失し去つたとのことで，現にその際の出土と稱される陶棺身の大破片が，小円墳と本古墳との間の草むらの中に，轉倒して放置されてある。從つて，計6基の古墳が，散在的に位置していたと，考えてよいであろう。第1号墳は最も大で，いうまでもく，前方後円形を示している。第2号墳は，第1号墳の西側に相並ぶ狀態で所在するが，既に大きく破壞され，横穴式石室と推定される石室の殘骸を，僅かに止めているほか，封土も甚だしく変形されていた。しかし，その現狀から考えれば，第1号墳と同様の前方後円墳である。墳頂破壞口附近から祝部式土器破片を，封土北側の畑地上より人物ハニワの腕部殘片と考えられる破片を，採取した。第3号墳は，東側に所在する小円墳で，その一部は破壞されているが，未発掘と推定された。第4号墳は，南側約20mの個所に位置し周溝の一部を，よく保存する円墳であるが，盜掘跡歴然として，竪穴式石室かと推定される蓋石面が，部分的に露呈している。第5号墳は，上記の陶棺を出土した消失せる古墳で，その所在位置は，第3号墳の北側にあたる。第6号墳は，南東約60～70m離れた斜面のやや高所に位置する，未発掘の小円墳である。これら各号墳の詳細及び附近所在の高野山根古墳群，丸山古墳等の記述は，ここでは述べないが，ともかく，本古墳を取りまく局部的な狀況の大略は，如上の如くである。

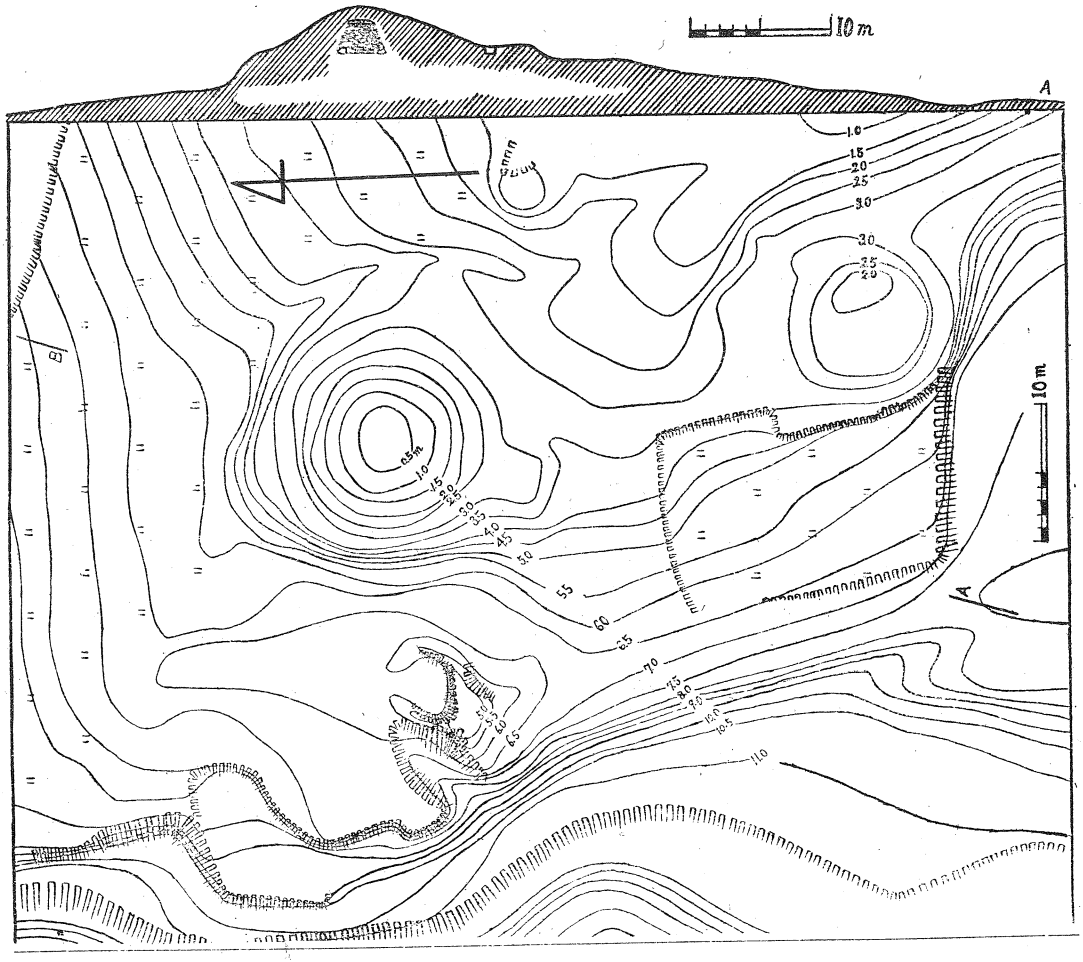
調査当時，第1第2第3の各古墳の北端まで，開墾による畑地と化していたほか，第1

西方池端から望む

東方山腹から望む

第1図版　中宮第1号墳全景

号南方から，第4号西側に至る一区劃が，耕地となつていたが，各墳及び各墳間をつなぐ側所は，一面に，灌木及び竹笹類によつて蔽われていた。第一号たる本墳の如きは，身の丈を沒する笹と灌木の密生のため，当初豫備調査の折，前方後円墳であることに，誰一人




第 3 図　　中宮1号墳及び附近地形図　　(Fig. 3)

として氣づかなかつたほどであつた。以上によつて，本古墳には開墾・耕作の鍬は，全く入れられていないことが，判つた。尙，発掘開始前，墳頂に，狸の穴と考えられる小穴が穿たれていることを，発見したが，墳丘自体の變形は，殆ど，認めることが出来なかつた。かくして，本古墳は，全くの處女古墳であるとの認定の下に，調査が，開始されるに至つた。

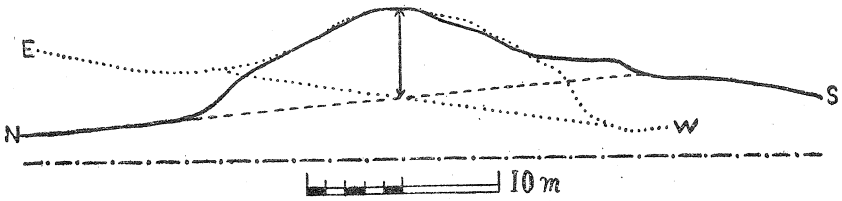
## 墳丘及び外部施設

前方部が，甚しく低小であつたため，雜草雜木の繁茂していた当初において，一見，円墳のやうな感じがあつたが，草木の伐採除去の結果，その前方後円墳としての平面形の全貌を，明瞭に，露呈させることが，出來た。幸いなことに，墳丘自体には，開墾乃至採土等による大きな變化は，加えられておらず，略々原形を保つものと認められた。しかしながら，矢張り，若干の部分的な變形はまぬがれ難く，特に，後円北西部等において若干の流土が，見出されたほか，埴輪の檢出に際して，注意されたことであるが，墳丘の畧々全体に亘つて，僅かに覆土を增加していることが，考えられた。

先づ，平面形から述べれば，その長軸は，north 19° eastの方向をとり，前方部を南に作り出したもので，從つて，西北面する斜面に対して，おうむね，直角となつている。後円部の頂は，2·5m × 3m 程の廣さで，おうむね，平坦となつているが，その斜面は，可成りの傾斜度を有つている。前方部頂は，その後円部との接觸部附近から，前端近くまで，畧々水平を保つている。兩者のクビレ部は比較的明瞭で，後円頂部に立つて望めば，それが所謂帆立貝式の前方後円墳であることを，何人も，直ちに，認めることが出來る。斜面に対して，このような築造方向を有つていること，若干の変形乃至覆土の存在は，明確に墳形を規制する葺石の如きものの発見のないままに，正確な古墳の大きさを測定することを困難にしたが，觀察及びそれに基く實測の結果，次の數値を得た。即ち，その全長は約23m，後円部は部分的にやや変形し，僅かに不正円形をなしているが，東西と南北の長さは殆ど等しく，約18～18·6mの直径を有ち，前方部は長さ約5m未満，前端下部の巾約4·8mを，測つた。それは，恰も，直径18m前後の円に，1邊5m内外の正方形を，附した形である。但し，上記の数値のあるものは，第3圖に於いて，了解されるように，平面形において，水平に計られず，立体形において斜めに算定される場合，相当な增加があることを，一言して置く。

高さの測定も，同様，甚だ厄介で，東側からの算定と，西側からの計測とでは，3mにあまる差異を生ずる。今，長軸中心線及びそれと直角に交わる線の二個所において，それぞれ，断面圖（第4圖）を作り，傾斜面と墳丘との関係を，調べてみた。それによると，地山の傾斜が，單に，東から西え向つて下降しているのみでなく，南から北え向つても，やや緩い下降を示しているということが判つたほか，墳頂の1点を起点として，兩断面圖を合して見た結果，その1点から下した垂線上に，兩者の底線の交叉点が，大体において，一致した。それによれば，一方側の高さを以つて云々するよりも，むしろ多少の推定はあつても，この場合，兩者の底線が交叉する点から墳頂までの距離が，より合理的な高さとして承認されるであろう。從つて，ここでは，後円部の高さは，5·0m として，算出される。前方部の高さは，長軸中心線による断面圖から算定すれば，後円部と接する個所において約1·5m，前面において約0·6m前後となり，又，前方部頂と後方部頂との比高は約2·8m前後を，算える。

以上述べたように，前方部が著しく短かく後円部直径の $\frac{1}{3}$ にも達せず，その高さも極めて低く，又，前方幅も，後円直径に比して甚だしく短かい，という特色を持つ本古墳は，いわゆる帆立貝式の形態を，とるものである。この種「高い主丘を作つて一方に低くて短かい封土を添えた形」[1] 即ち帆立貝形の前方後円墳が，前方円後墳の外形の変遷において，如何なる位置を占めているか，に関して，それが，いわゆる古式古墳に属するものとなす見解と，[2] 既に衰退期に入つた形態であると論ずる説[3]とがあるが，本例に徴して見れば，その内部主体が横穴式石室の形式を有つており，副葬品にも古式と考えられるものは存在しない等の点から，少くとも4・5世紀＝最盛期以降の所産ではないかと，推察される。但し，その場合，当時の中心的な地方であつた畿内と，僻遠の山地である此の地との関係を，充分，考慮に入れなければならないことは，勿論である。



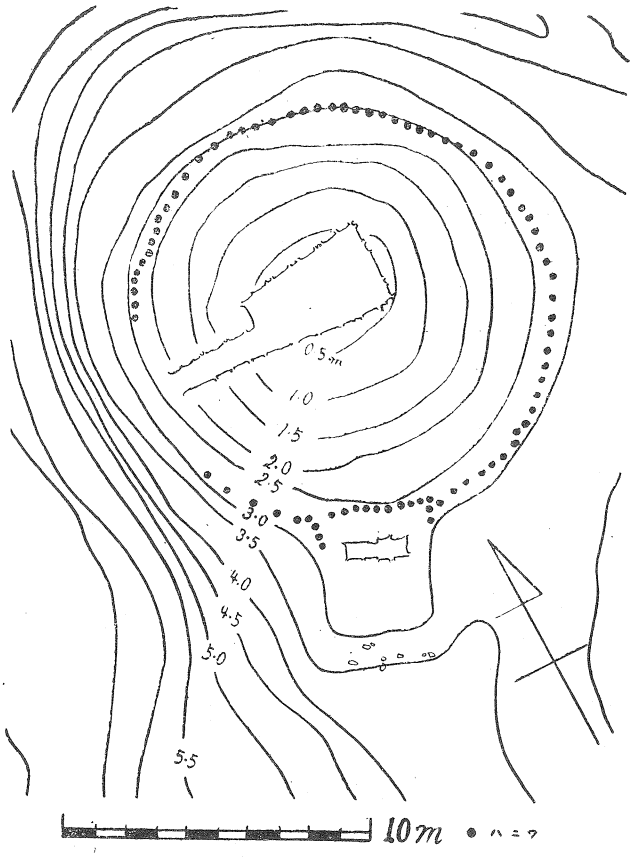

第 4 図　　墳 丘 断 面 図　　(Fig. 4)

外部施設としては，円筒埴輪の囲繞を除いては，葺石，濠の如きものの存在を，認めることは，出來なかつた。円筒埴輪の存在は，既に，発掘前の検分時における表面採集によつて，推測されていたが，前方部前面から後円中央に至るトレンチの穿掘に際して，はじめて，基底部を原位置に保つた一列の円筒列を，発見した。この円筒列は，西に開口する内部主体の入口の，巾数米の個所を除き，墳頂から測つて，－2.2～－2.8m の位置で，後円部を，囲繞している。探掘の結果，總計81本が発見されたが，特に前方部との境界において，興味ある配列を，示している（第5圖）。即ち，グルリと後円部を一周したハニワ円筒は，前方部との境界線において，畧々直線の列となり，更に，その左右兩端から前方え向つて，2本乃至3本を突出させ，前方部の所在を，明確に，示していることである（第2圖版左上）。前方後円墳に，円筒ハニワが，樹立される場合，一般に，少くとも，一重の円筒列が，前方部を含めての全体に，囲繞されるのが普通であるが，本古墳においては，上記のように，前方部に對しは，ほんの申譯程度の配置で済ましている。このことは，あるいは，恐らく本來的には，神聖なる靈域の區劃の示現体として発達して來たと考えられる円筒列囲繞の，形式化を示すものではあるまいか？　前方後円墳という墳形が，内部主体としての横穴式石室に，相應わしくないものであると共に，墳頂に竪穴式石室その他の主体を配置した形式の墳墓に発達したハニワ円筒列の囲繞配置が，主体の横穴式石室えの移行＝死後又は死者に対する觀念の変化と共に，形式化乃至殘骸化（これは，

具体的には，地方々々によつてその表われ方が，極端に異つてくる）していつたことの一つの表われと，解せられないであろうか？

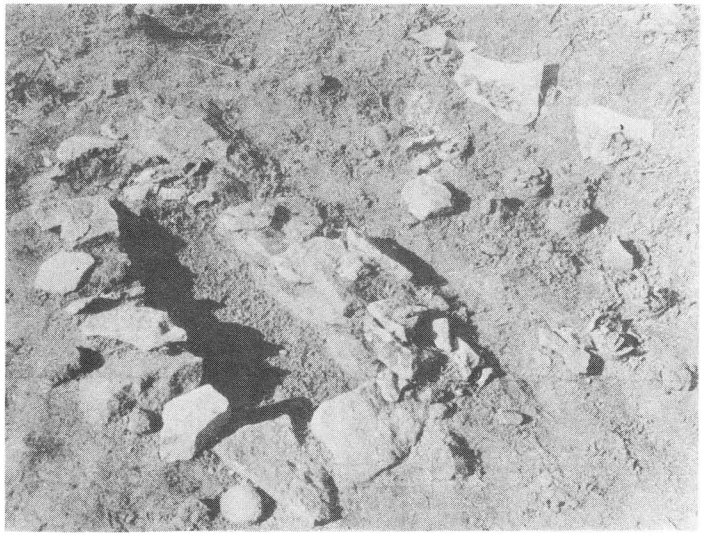
それはともかくとして，これらのハニワの配置間隔は，境界部においては稍々密で，約10cm～20cm，後円においては，約30cm～35cmを測り，また円筒が略々円形に區劃する後円部の徑は，13・7m前方部のつけねの巾3・6mを算えた（第2圖版左下・右下）。81本の円筒中大半は，よくその基底部を原位置に保つたまま發見せられたが，他の約10数本は基底部を含めた破片の存在狀態から，推定したものである。尙これら円筒の基底部面と後円部横穴式石室底面とが，大畧同一水平面に存在していたことも，注意されなければならない。

これら81ケ所で発見されたハニワ円筒のうち，完存品は全くなく，何れもその上方部分を欠いており，また，復元出來るものも，見出されなかつたため，ここにその正確な原形を示し得ないが，形における大小の二種が，区別されたほかは，何れも，最も簡單な形を有つ通常の類と，判断された（第6圖）。數的に大部分を占めている小なる円筒は，基底部における径約15cm～16cm，推定高約40cm，隆起帶＝タガが，恐らく3條，黄褐色の燒の柔かい類である。大なる円筒の方は，散在的に3本発見されたが，その配置に意味があるかどうか，不明である。その基底径は，約20cm（高さ，隆起帶の數は不明），紫褐色を示し，燒成よく，比較的堅緻な類である。

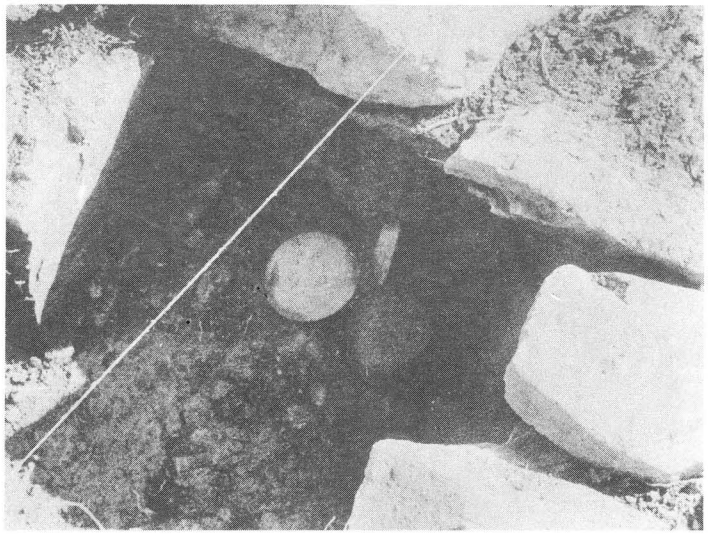



第 5 図　　ハニワ頂丘図　　(Fig. 5)

その囲繞が，明確に認知された円筒ハニワは，以上のようであつたが，石室天井石面を露呈する際及び後円頂から前方部え向いてのトレンチ穿掘の際に，若干のハニワ円筒片を，検出した。即ち，天井石面の露呈は，墳頂のほぼ全体を，東西に切り開くことによつて，行われたものであるが，その際，石室の東方contour line 1・0～1・5mの個所において，地表下約数十cm前後から，円筒と推定されるハニワ小破片を，2，3片検出した。何れも基底部の破片でなく，從つて，その性格をつきとめることが，至難で

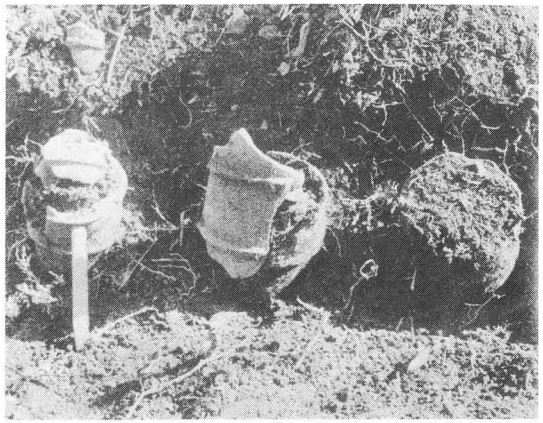


前方部竪穴式石室及びクビレ部埴輪円筒列



前方部竪穴式石室内遺物出土状況

後円部東南側埴輪円筒列

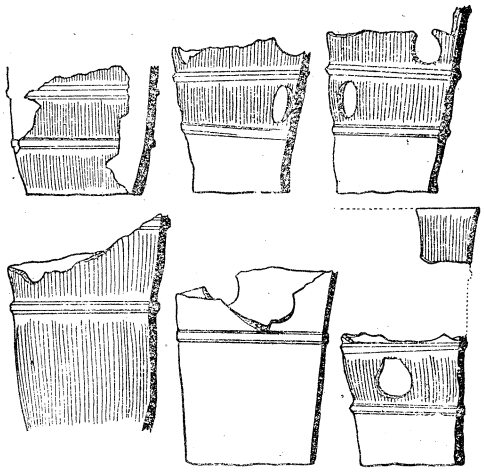


埴輪円筒列の一部

第 2 図 版　中宮第1号墳前方部石室及び埴輪出土状況

あつた。約3～4mの巾をもつて，東西を切り開いたにもかかわらず，僅かに，2，3の小片のみよりほかに発見されなかつたということは，恐らく円筒列のような施設の想定を，困難にするものと考えられ，従つて，封土中に偶然混在したものとする考えが，それが現封土下數十cmの深さにおいて発見されたことも考慮に入れて，より可能であるように思われた。ところが，後円中心部から前方部え向つておろしたトレンチ内において，墳頂から－1・30mの個所に（表土下約10cm前後）基底部の約3分の1を殘す円筒ハニワ半欠品が，基底部を前方部の方向えむけ，墳斜面とほぼ併行に，横倒れの状態で，発見された（第6圖左上）。そのため，可成りの廣さの巾をもつて，後円部南面一帶を，発掘検索してみたが，他には，破片一つとして，見出すことが，出來なかつた。先の2，3の小片を，偶然の混在として説明することが出來ても，この半欠のハニワの存在は，理解し難く思われる。墳頂又はその近くに，ハニワ円筒列の囲繞を，考えることの不可能なことは，西・南・東側にかけての検討の結果，明らかなことである。この一片の円筒半欠が，さして重要な意味を持つものとは，考えられないが，この際，單なる憶測はやめて，その事実のみの記載に，とどめることとする。

さて，先の明確にその囲繞が認知された円筒ハニワ列の検出の際，前方部との境界の一部及びクビレ部附近において，円筒又は円筒片と相接して，祝部式土器の出土を見た。これらはもとより，完形を保つことなく，多くの破片として検出されたのであるが，遺物の項で示すように，形態の分る類もあつた。これらの破片はすべて，円筒基底面よりも，10數cm～20cmほどの高位で發見されており，またその出土個所，出土状況から考えて，恐らくその個所に意識的に安置されたものとする妥当さを，有つている。（主としてクビレ部におかれた，これら祝部式土器の存在の有する意味が，奈辺に存するやはともかくとして）



第 6 図　　ハニワ円筒　　(Fig. 6)

他に外部施設として，明確に指摘し得るものはない。前方部頂及びその前面に，大小の若干の割り石が，まばらに点在していたが，これは，後述する前方部に設けられた竪穴式石室の側壁上部石材の一部が，散乱したものと考えてよいであろう（第2圖版左上）。

## 石　室　の　構　造

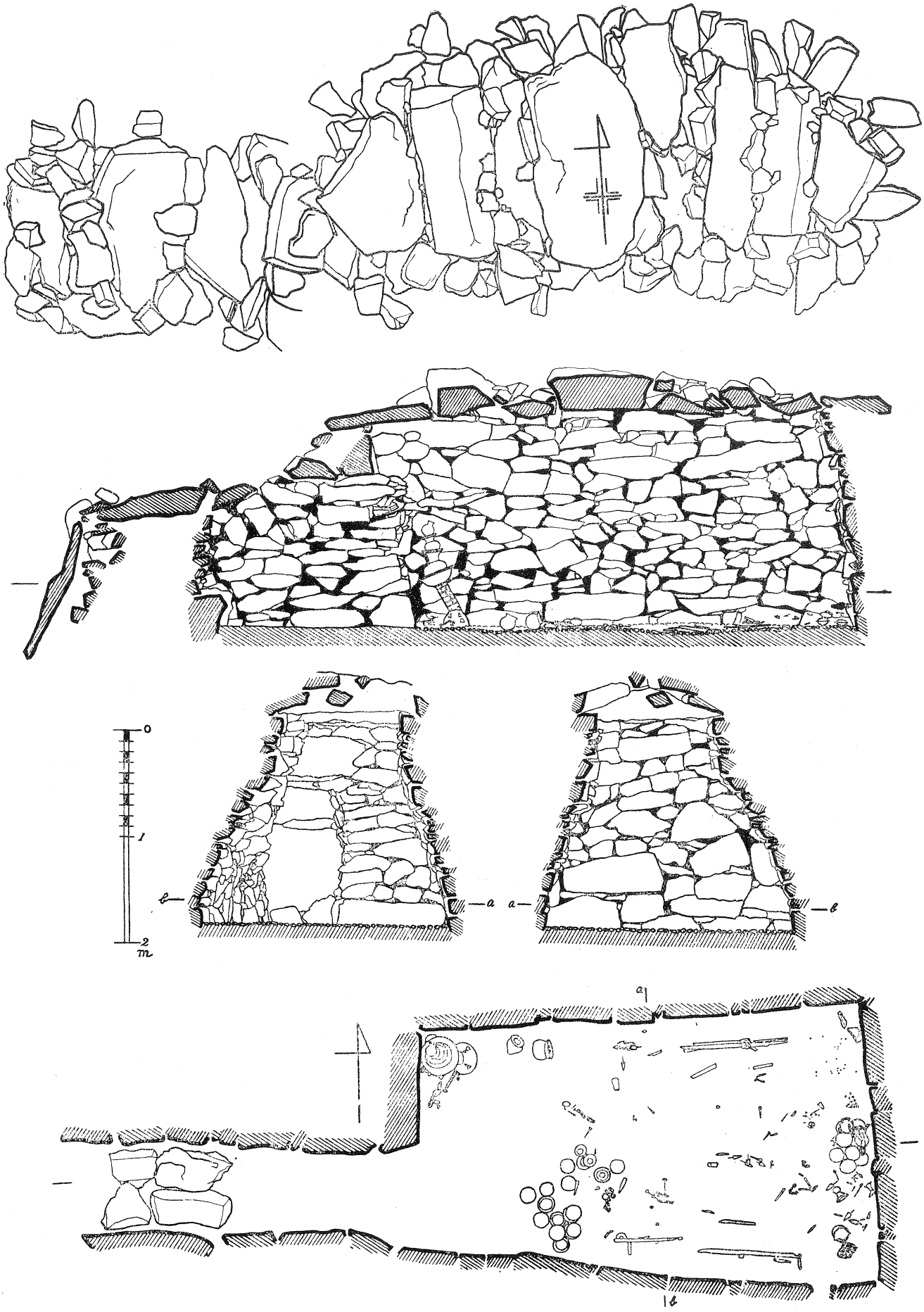
石室は二つで，内一つは竪穴式石室で前方部に，他の一つは横穴式石室で後円部に発見された。いうまでもなく，本古墳の主体となつた被葬者は，後者の石室内に，埋葬されたものである。從つて，先づ，横穴式石室からその構造の記載を，はじめる。

石室は，その玄室を，後円部の畧々中央に設け，羨道部を，その西側に所謂片袖式に取りつけたもので，その底面が，墳頂から測つて，約 −3•3m〜−3•40m の個所に置かれている。その平面形及び立面形における墳丘との関係位置は，第3圖及び第5圖に示した。

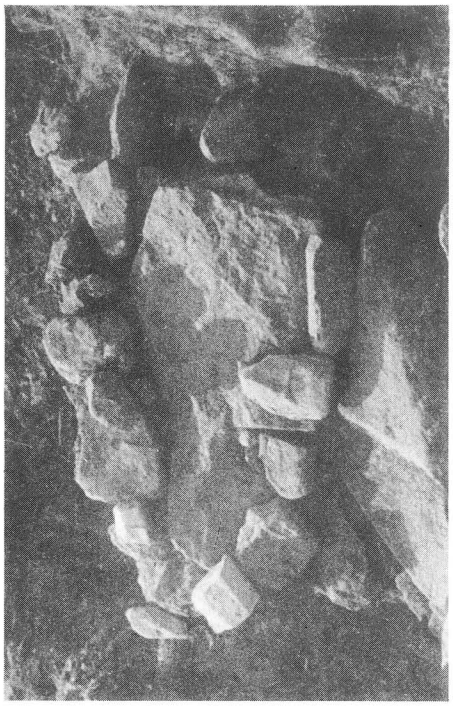
発掘の経過の章で述べたように，玄室天井石面は，墳頂下約1m前後の位置に存在していた。羨道部天井石と玄室のそれとは，明らかに，高位を異にし，前者は4枚，後者は8枚の巨石で，構成されている。すべて，附近に産出する流紋岩の割り石で，大小様々を混用しているが，その配石の形態として興味を引いたのは，玄室天井石の内，東西兩端のそれは，他の天井石が一般に大略長方形を呈しているのに對して，三角形狀を示していることで，共に，その三角の頂点を（頂点間の距離は5•4m）外方にむけて，置かれている。從つて，玄室天井石のみから受ける，その形の感じは，やや歪んだ紡錘形である。天井石の厚さは，極めて，まちまちである上内，面（＝下面）を，略々同一水平面に揃えたため，外面觀は，全くの凹凸を，示していた。天井石と名づけ得る以上の計12個の巨石のほか，天井石の間隙を塞ぐ目的をもつて他に數十個の大小各種の割り石が，更に，側壁上端部と天井石との間にも，同様な塡石が，多數設備されている。（第7圖の天井石平面圖では，側壁上端とその部の塡石とが，上手に区別されて画かれていない憾みがある）。

これらの塡石以外に，粘土の充塡乃至被覆が，注意された。即ち，天井石上面の略々全面にわたつて，厚さ10〜15cmの黄褐色の粘土の被覆が，認められたほか，各天井石間，天井石と塡石乃至側壁上端部との間隙及び部分的に天井石上に，灰黄色の微粒粘土が，充塡または配置されているのが，認められた。恐らく，灰黄色微粒粘土を，各石の間隙に充塡した後，その残餘を，天井石上に敷き並べ更にその上を，黄褐色の粗質粘土で被覆したものと，解せられ，その周到な構造には，見るべきものがあつた。後項で述べる土師器（又は彌生式土器）片は，この粘土層下，天井石に接して，発見されているのであるが，果して，何等かの意識の下に置かれたものか偶然の混在か，判断に苦しむ。

石室は，完全に處女狀態にあつたため，羨道入口の閉鎖裝置について，若干の記述を，行うことが，出來る（第3圖版）。非常に嚴重な設備が，施されていることは，実測圖の示す通りであるが，その築造は先づ，4個のやや大形の割り石を，羨道内入口附近に，二個づつ並べて据置し，その上方に，厚さ10〜20cm，径20〜35cm 前後の割り石数十個を，天井面に至るまで，きつちりと幾重にも積み上げ，完全に外部と遮断した後，高さ約1•4m，巾約1•15m，厚さ約10〜20cm の大形板狀の割り石を，やや斜めに立てかけ，更にそれと最西端天井石の接する所に，大小の

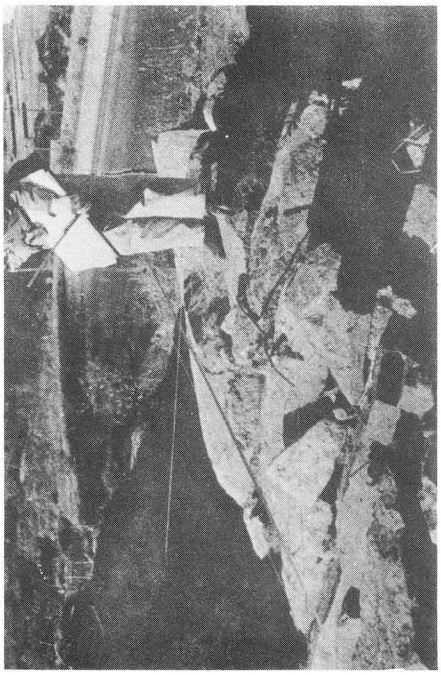



第 7 図　　後円部横穴式石室　　(Fig. 7)



羨道天井部及閉鎖装置上部

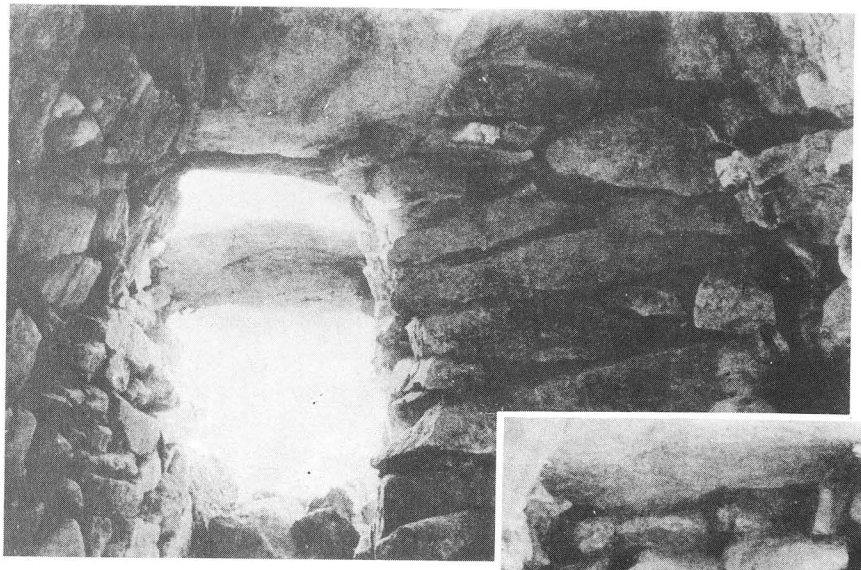
羨門閉鎖装置（巨石を除いたところ）



玄室天井部

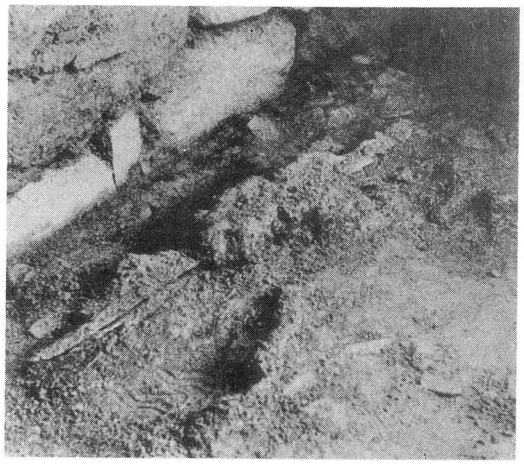
羨門閉鎖装置

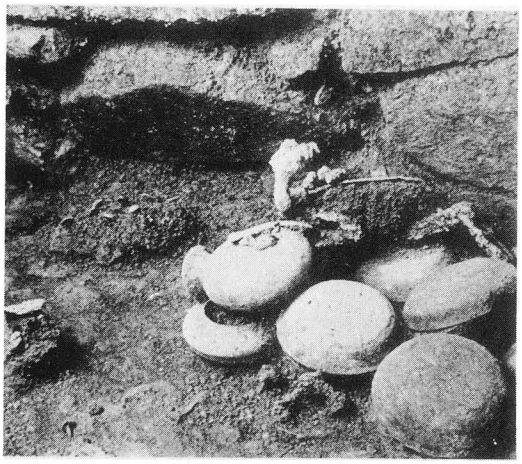
第 3 図 版　　中宮第1号墳横穴式石室天井及び羨門閉鎖装置



上　玄室から羨道を見る
中　羨門の閉鎖装置(内側)
下　奥壁天井の一部

第 4 図 版　　中宮第1号墳横穴式石室内部





上左　四ツ重ね高坏等　　上右　遺体及び刀等　　中左　土器類及鏡板等
中右　石室東南隅土器類　　下左　土器類・鐙・鈩類　　下右　土器・刀・鏃その他

第 5 図 版　　中宮第1号墳横穴式石室内遺物出土状況

割り石を，充塡することによつて完成されている。そのほかには，粘土帶の如きものの施設は，見られなかつたが，その構成は，正に嚴重を極めたものといわなければならない。その基底部における厚さ約1・7～1・8m 上部における厚さ約1・3～1・4mを算えた。尙，閉鎖裝置とは別物であろうが，それより約1m内外はなれた室外の右側に，尺大の割り石が數個発見されたことを，附記する。配列も整然としてはおらず，石室自体に對して，重要な意味を，持つものかどうか判らない。

次に，このような外貌を有つ石室の内部について見よう（第4圖版及び第7圖）。調査当時，第一章（調査の經過）で，繰り返えし述べたように，流土が非常な堆積を，示しており，特に，奥壁に近い個所及び羨道から玄室入口附近にかけての個所では，床面から，約1・4～1・5mの高さにまで達していた。

そのプランは，奥壁の所で最も巾廣く，羨道方向え向つて，漸次狹まつてゆく矩形の玄室に，比較的狹短な羨道を片袖式に附したものであり，その閉鎖裝置までの全長は，6mを計る。その縱斷面において，玄室内天井面は，略々同一水平面を，保つているが，羨道天井石は，それより，50～70cm程一段と低く置かれ，玄羨の区劃を，はつきりと，示している。

各側壁は，大小様々の流紋岩の割り石を以つて，巧みに構築されているが，一般に，下部には，より大形の石が，用いられている。片袖を作つている玄室西壁及び，羨道部壁を除いて，すべて，可成りの度の持ち送り積みが，なされているが，特に，それは，玄室内左右兩壁において甚しい。もつとも，この兩壁のうちの或る個所は，甚だ不自然な張り出しで，長年の間の漸進的な変化の結果ではないかと，推定される部分もあつた。しかし，全体としての持ち送りの度は，その部の横断面圖でも判るように，玄室中央部において，底面の巾と天井面との巾との比が，優に，2：1を，越えている程である。兩側壁と奥壁の接する個所，北壁と片袖部たる西壁との接する個所，において，その下半部分は，兩壁が，直角に交つているのみであるが，上半部においては，壁自身の持ち送り度の進行と共に，その個所が，丸味を有つて巧みに連結されている。持ち送り積みの自然の形態とはいうものの，見事な構築である。

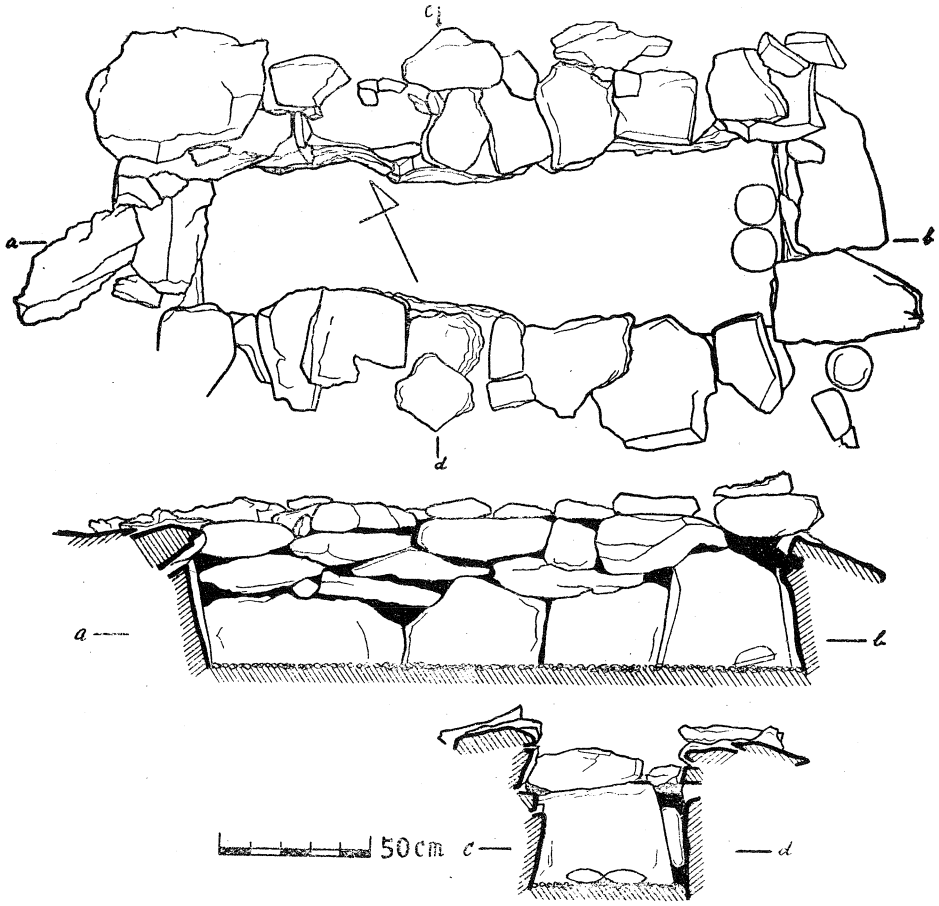
底面は，略々水平に作られ，玄室と羨道との間に，高低の差は，殆ど認められなかつた。玄室内にのみ，径5～8cm程の小石（割り石）が，一重に，敷きつめられていた。そのほかにわ，粘土床の如きものは，全く見られず，又，排水の特別な設備も，存しなかつた。

以下は，石室各部の大さを，示す。

| | |
|---|---|
| 石室全長（閉鎖設備外側迄） | 7・80m |
| 〃　（閉鎖設備内側迄） | 6・05m |
| 玄室全長 | 4・25m |
| 玄室巾（奥壁に接して底面） | 2・62m |
| 〃　（羨道に接して底面） | 2・05m |
| 〃　（中央部の底面） | 2・35m |
| 玄室天井面巾（内面中央部） | 1・10m |
| 玄室高 | 2・0～2・10m |
| 羨道長（閉鎖設備外側迄） | 3・55m |
| 〃　（閉鎖設備内側迄） | 1・80m |
| 羨道巾 | 0・7～0・9m |
| 羨道高（玄室に接して） | 1・45m |
| 〃　（羨門にて） | 0・95m |

次に前方部に設けられた竪穴式石室であるが，これは調査の当初，蓋石の一枚も存しなかつた事実に加えて，内部に土砂が充満していたことからして，その存在に対して，注意を引くところが少なかつた（第2圖版及び第8圖）。しかるに，その後の検討によつてこれが明らかに石室であり，しかも，後円部におけるそれと異つて，竪穴式の制を持つものであることが判明した。（第1章参照）。

その構造は，古式又は中期古墳の内部主体

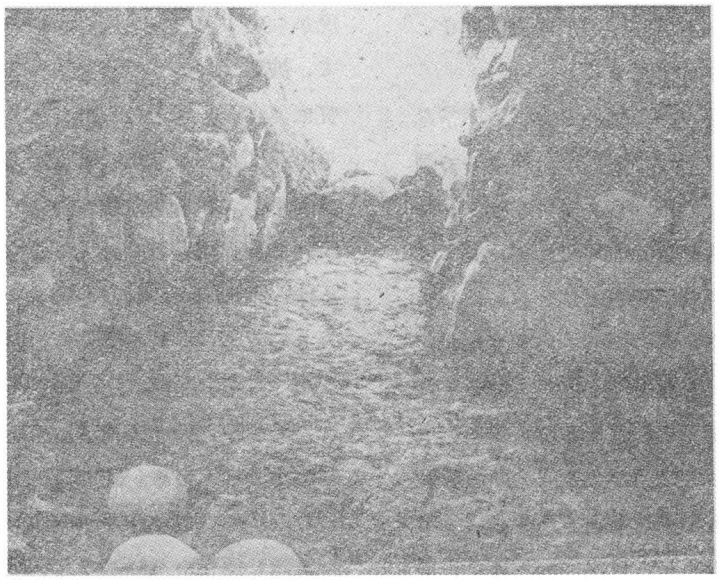



第 8 図　　前方部竪穴式石室　　(Fig. 8)

としての通常の竪穴式石室とは，可成り趣きを異にしており，各壁とも，その下半部には大形の割り石が置かれ，更にその上部に，若干のおうむね偏平な割り石を，配置しているという具合で，むしろ箱式棺のそれに近いような趣すら，もつている。その全体の規模も，可成り小形で，内面の長約2·0m弱，内面の巾0·4～0·55m，底面からの高さ約0·5～0·6mを測り，これまた通常の箱式棺の規模と，畧々同様である。曾つて，津山成美高校によつて調査された苫田郡神庭村綠山所在の箱式棺古墳群の中にも，これと畧々一致する構造を示すものが，注意されていることも，考慮されなければならないであろう[4]。底面の

プランにおいて，東壁に近い方が，やや廣くなつており，その部に，祝部式土器坏2個が相並んでふさつた狀態で，置かれていた。底面には，一面に小砂利が敷かれていた。蓋石が全く存在しなかつたことについては，それが，当初からの原態であるのか，又は後世蓋石のみが，取り去られてしまつた結果であるのか，容易に，判断し難いところであるが，前者の考えについても，これが副葬品を置き死体が埋葬されたことが推定される。従つて以上，何等かの（例えば木製の）フタが，置かれたであろうことは，想像されるところである。

このような構造を有つ「竪穴式石室」は，その長軸を，ほぼ東西に（即ち墳丘全体の主軸に対して，直角に）向け，前方部のクビレ部に近い部分の略々中央部に，營造されたものであり，その底面から，発掘当時の封土面までの距離，約0・6～0・7mを測るものであつた。



カット6　中宮1号墳玄室内より羨道を望む　（Cut. 6）

## 石室内遺物出土状況

ハニワを始めとして，石室外から出土した遺物の発見状況は，各項に畧々記載してあるので，本項では，一切省畧することとし，前後の二石室内の遺物出土状況のみを，記す。

前方部の竪穴式石室内からは祝部式土器杯二個が，相並んでふさつた状態で，室の東側底面から発見された以外に(第2圖版右上)，遺物としては，何も，検出することが出來なかつた。蓋石の存在していない状況の下では，よしや鉄製遺物が，もと副葬されていたとしても，腐銹消失していることは，当然であるので，これを以つて，副葬品のすべてと，言い切ることも出來ないであろう。先に擧げた綠山古墳群中の一石室からの祝部式土器の出土状況が，本例と，ほぼ同様な趣を，持つていることを，一言する。

後円部横穴式石室内発見の遺物は，非常な点數に上り，一つ一つの記載は，かえつて煩雜さを招くのみであるから，簡略な記述と共に，68頁の出土状況圖（第10圖）を，提示するにとどめたい（第5圖版)。

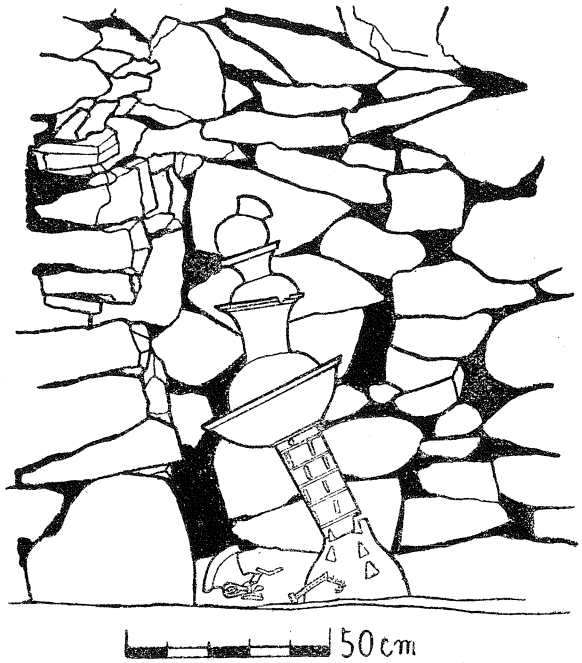
遺物は，悉く玄室内において発見された。石室内において，羨道から玄室の大部分に亘つて流土の堆積が見られたことは，先に述べた所であるが，この流土中からは，床面10數cmの個所で，土師器と推定される赤褐色素燒土器の小破片數片が，見出されたほか，排土中誤つて床面から遊離させられたと考えられる二，三の鉄製品が，採集されたのみであつた。土師器片は，5～2cm大の小片で何れも，玄室奥壁に近い右側に見出された。これらは，その発見状態などからして，落ちこんだ流土内に混在していたものと，考えられた。何れも器形文様不明である。

床面から発見された各種遺物は，100点を越えるが，先ず，遺体について述べよう。

発掘中明確に認められた遺体は，その頭部を，奥壁に近く，中央よりも右側に偏して，正確には，奥壁より約90cmの個所に頭部が，右側壁より約60cmの個所に体部がおかれ，側壁と併行に，伸展葬されたもので，東枕の制をとつている（第5圖版右上)。遺骨は，多く腐朽消失していたが，下顎の一部，齒，上膊骨，大腿骨，脛骨，及び腓骨などが，部分的に保存されていた。その内，右上膊骨及び右大腿骨は，遺体と併行してその右方に置かれていた三振の刀の下に，発見された。その状況から察すれば，これらの刀を抱くようにして，被葬されたものであろう。中島壽雄の研究によれば，壯年の男性である。ところが，その後における中島の研究によつて，小兒の齒若干が，本遺骸の齒に接して存在したことが判つた。稿成後の所見であつたため，詳しくは，「附」を参照されたい。遺体に附屬したものと考えられる遺物は，他に，認められなかつたが，頭部から奥壁にかけての一面に，黑色の土製丸玉及び，玻璃製小玉が数十個検出されている。確実に，遺骸の存在を示したのは，この一体のみであつたが，これと略々同じ位置の左側壁に近い側で，骨粉ではないかと想像される白色の粉状物質がやや廣範囲に認められたことは，注意されなければならない。これに関しては，後に，中島壽雄による見解が，述べられることになつているので，今は單に，その可能性のみを指適する

にとどめたい。尙先の遺体が，もと木棺に收められてからのち，安置されたものかどうかについては，不明というほかないが，大形の鉄釘の出土が，すべて，遺体左方のみからであることが，その可能性を薄くするのではないかを，一言しておく。

土器類は，大きく，三ケ所に分置されている。即ち(イ)片袖隅＝玄室の西北隅（第5圖版上左），(ロ) 羨道から入つて間もない個所（第5圖版中左），(ハ)奥壁に接してその中央附近（第5圖版下左），の三ケ所で，(イ) には，四つ重ね高坏（第9圖）壺その他，(ロ)




第 9 図　石室内発見四ツ重高坏出土状況　(Fig. 9)

(ハ) には，略々同じように，蓋坏多数・高坏・壺・瑔などが，発見されている。

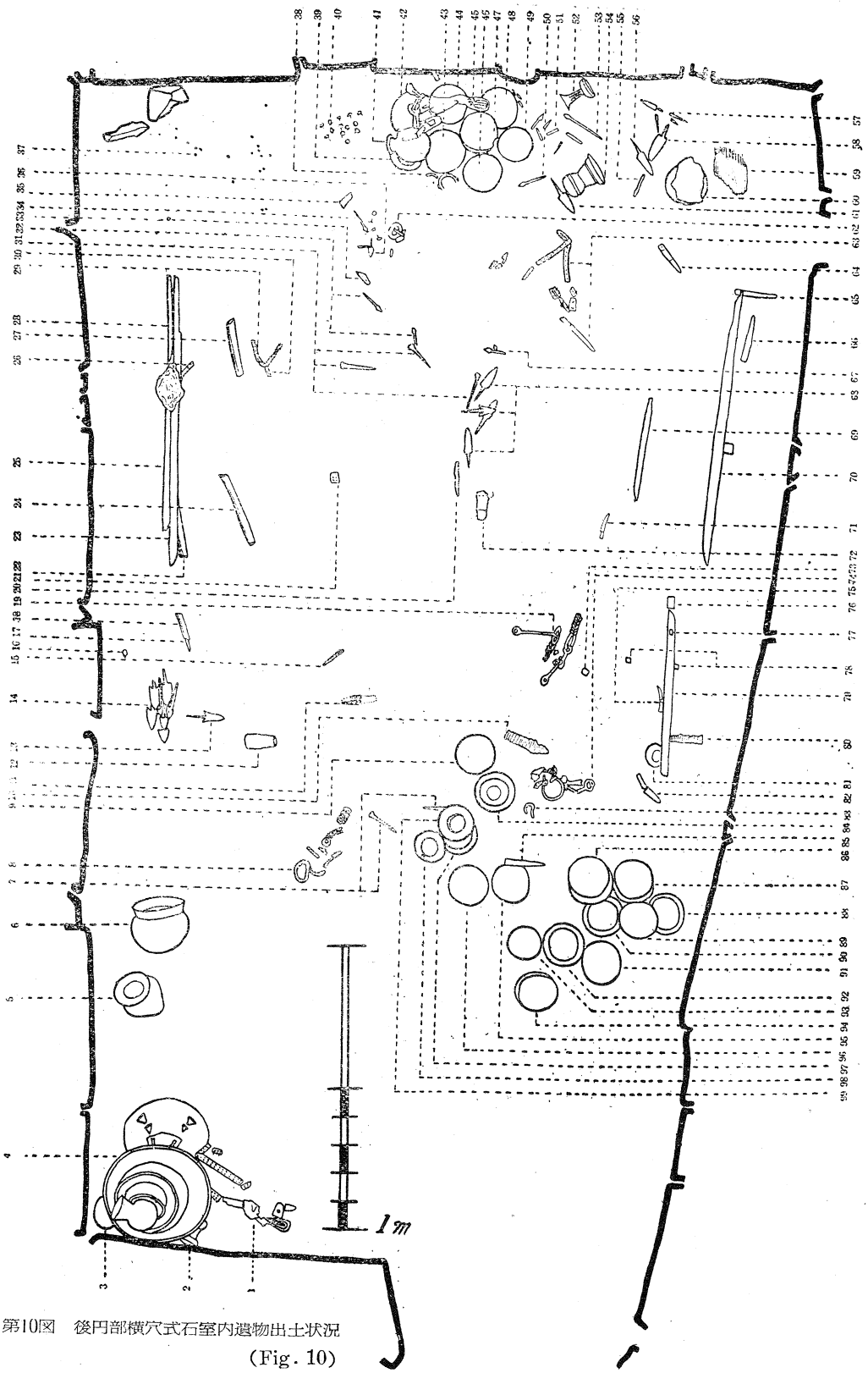
刀はすべて側壁に併行し，尖先を羨道方向＝西方にむけて発見された。左側，右側ともに3口づつ置かれているが，右側では，3口が束ねられた狀態で，発見された。

馬具類の内，アブミは，(イ)の個所の大高坏の脚下及び(ハ)の個所の蓋坏の上などで，発見された。轡は三隻とも，(ロ)の個所及びその附近で，見出された。鞍金具と考えられる類は，(ハ)の北側から発見されている。

鉄鏃は，玄室中央辺よりやや奥壁に近い個所から，南東隅にかけて，散在的に，また遺体の足部附近からも，出土している。

鉄斧は，同じく遺体の足端辺と推定される個所から，検出された。

その他については，出土狀況実測圖に附した番号に基く，下記表を参照されたい。




第10図　後円部横穴式石室内遺物出土状況

(Fig. 10)

| No. | 遺物名 | No. | 遺物名 | No. | 遺物名 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 壺鐙 | 38 | 雲珠 | 75 | 刀子 |
| 2 | 碗……(祝) | 39 | 短頸壺……(祝) | 76 | 鞘尻 |
| 3 | 高坏……(土) | 40 | 鉄鏃 | 77 | 方形金具 |
| 4 | 四つ重高坏…(祝)(土) | 41 | 提瓶……(祝) | 78 | 方形金具 |
| 5 | 壺……(祝) | 42 | 蓋坏……(祝) | 79 | 刀 |
| 6 | 壺……(土) | 43 | 〃……(祝) | 80 | ノミ |
| 7 | 鉄釘 | 44 | 〃……(祝) | 81 | 雲珠 |
| 8 | クツワ | 45 | ツボアブミ | 82 | ノミ |
| 9 | 坏（蓋）……(祝) | 46 | 蓋坏……(祝) | 83 | 輪金具 |
| 10 | ノミ | 47 | 〃……(祝) | 84 | 壺……(祝) |
| 11 | 鉄片 | 48 | 〃……(祝) | 85 | ノミ |
| 12 | 鉄斧 | 49 | 坏（蓋）……(祝) | 86 | 蓋坏……(祝) |
| 13 | 鉄鏃（平） | 50 | 鉄鏃（尖） | 87 | 蓋坏……(祝) |
| 14 | 鉄鏃（平） | 51 | 鉄鏃（尖） | 88 | 坏（身）……(祝) |
| 15 | 鉄釘 | 52 | 高坏……(祝) | 89 | 〃（蓋）……(祝) |
| 16 | 土師器片 | 53 | 鉄鏃（尖） | 90 | 〃（身）……(祝) |
| 17 | 刀子 | 54 | 碗……(祝) | 91 | 〃（蓋）……(祝) |
| 18 | 脛骨及び腓骨 | 55 | 鉄鏃（尖） | 92 | 〃（身）……(祝) |
| 19 | クツワ | 56 | 鉄鏃（平） | 93 | 壺（倒置）……(土) |
| 20 | 刀子 | 57 | 鉄鏃（平） | 94 | 坏（蓋）……(祝) |
| 21 | 鉄片 | 58 | 鉄鏃（平） | 95 | 蓋坏……(祝) |
| 22 | 右大腿骨 | 59 | 鉄鏃（尖） | 96 | 〃……(祝) |
| 23 | 刀 | 60 | 碗……(祝) | 97 | 坏（身）……(祝) |
| 24 | 左大腿骨 | 61 | 鉄鏃（平） | 98 | 小形坏（身）……(祝) |
| 25 | 刀 | 62 | 鞍金具（鞍） | 99 | 短頸壺……(祝) |
| 26 | 上膊骨右 | 63 | ツボアブミ | | |
| 27 | 上膊骨左 | 64 | ノミ | | |
| 28 | 刀 | 65 | ノミ | | |
| 29 | 下顎骨一部 | 66 | ノミ | | |
| 30 | 骨片 | 67 | 鉄鏃（尖） | | |
| 31 | 鉄釘 | 68 | 鉄鏃（平） | | |
| 32 | 鉄鏃（尖） | 69 | 刀 | | |
| 33 | 鉄片 | 70 | 刀 | | |
| 34 | 鉄鏃（尖） | 72 | 刀子 | | |
| 35 | 鉄片 | 71 | 鉄板 | | |
| 36 | 鉄鏃（平）（尖） | 73 | 方形金具 | | |
| 37 | 土製丸玉 | 74 | 鏡板付クツワ | | |

| | |
|---|---|
| 33 の 下 | 輪金具 |
| 36 の 下 | 鞍金具（鞍） |
| 37の附近 | ガラス製小玉 |
| 46 の 下 | 雲珠 |
| 49 の 下 | 小形坏……(祝) |
| 62 の 下 | 鉄鏃（平）（尖） |

(祝)…祝部式土器(平)…平根式
(土)…土師器　(尖)…尖根式

## 發見の遺物

前節において見たような狀態で，各種遺物が発見されたが，今一應下表のように，分類した。その殆どが，後円部石室玄室内に発見されたことは，言うまでもない。又その特に顯著な遺物として，武器類及び馬具類を擧げることが出来る。以下，その個々について，簡單な説明を，加えることとする。

| | |
|---|---|
| A 土器類 | (イ) 土師器<br>(ロ) 祝部式土器 |
| B 玉類 | (イ) 玻璃製小玉<br>(ロ) 土製丸玉 |
| C 武器類 | (イ) 鉄鏃<br>(ロ) 刀子<br>(ハ) 刀 |
| D 馬具類 | (イ) アブミ<br>(ロ) クツワ<br>(ハ) 雲珠<br>(ニ) 方形金具<br>(ホ) 鞍<br>(ヘ) 鋲 |
| E 農工具類 | (イ) 鉄斧<br>(ロ) ノミ |
| F その他 | (イ) 鉄釘<br>(ロ) その他 |

【A】 土器類。　　地表面，封土中，石室天井石上，石室内，の各處から，多くの土器類が，見出された。

(イ) 表面採集品。先ず，墳丘上及び墳丘下における表面採集によつて，得られた土器は，何れも，小破片であるため，原形を推知し難いが，可成り大形の壺形又は甕形の祝部式土器に屬す，と考えられる胴部破片で，厚さは大体1cm前後，内に青海波，表面に格子目の叩き文様を，有つている。

墳丘東側の畑地において，発見された土器類は，これまた，小破片で，その多くが，土師器に屬するもの，と考えられるが，中には，後述する封土中発見の或る類に，類似して，あるいは，彌生式土器後期のものかと考えしめるものが，含まれている。

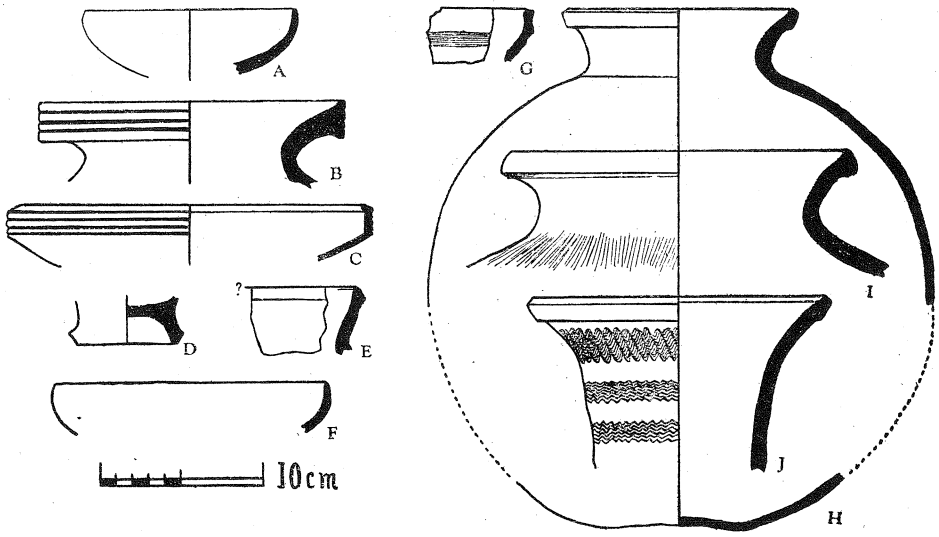
これらの，表面採集の土器類が，果して，本墳と，直接の関係を，有するものか，否かは，推断の限りではない。

(ロ) 封土内発見品。(第11圖) この中には，もと，封土上に，置かれてあつたが，歳月の経過と共に，次第に，その上に被土が行われ，発掘時には，土中から出土した類もあると考えられるが，区別し難い場合もあるので，便宜上 本項では，封土内発見の一切の土器類を含む。

先ず，後円部石室の天井石を，露呈する作業の折，出土した類の内で，(H) は，完全復原出来なかつたが，中形の大きさの壺である。薄手の製作で，肩から胴部にかけて，吹き出し軸が認められ，内面一面に，青海波が見られる。図示した底は，同一個体のそれと，考えられるが，やや，上げ底風に，作られている。推定高は，30數cm。(A)は，黄褐色を，呈する土師器で，壁内に，やや，砂粒を，含む。(B)は，彌生式の後期に，屬するものかとも，考えられる壺形の破片で，土質・燒成共によく，淡褐色を示す。(D)は，壺乃至甕の台部の破片，暗褐色氣味の色。そのほか，無文，明褐色で，口縁に近い部分の，土師品小片がある。また，図示し

てないが，あるいわ，ハニワかとも，考えられる，部厚な灰黄色の小破片がある。内面は凸凹甚しく，表面は磨損して，粗面を呈している。

天井石に接して，発見された類は，すべて褐色素焼の土器で，形態の一部が，辛うじて，分明するものは，第11図（C）及び（E）である。（C）は，高坏口縁部の小破片，（約$\frac{1}{10}$片）で，明褐色を呈し，ヘラ磨きの痕を，僅かに残す。土質は，比較的良好であるが，今脆弱である。折曲した口縁と，それに平行して走る沈線は先に見た（B）と同じ趣で彌生式土器後期頃の，例えば，美作國勝田郡豊田村久常御崎野住居趾出土の高坏[5]に，類似の特徴を，示している。（E）は，甕の口縁部と，考えられる，淡褐色の小破片である。土質・焼成は，土師器というよりも，むしろ，彌生式土器に類似し，良質である。使用された




第11図　　石室外発見土器類　　(Fig. 11)

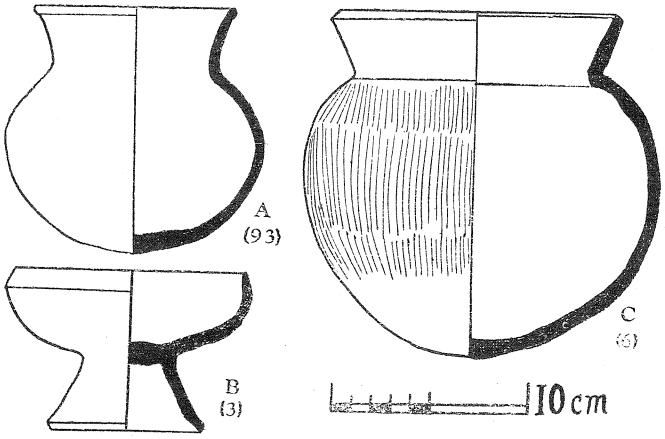
このような，口縁形態を持つ，彌生式土器は他に類例を求めることが出來る。他に，赤褐色～淡褐色乃至黄褐色の小破片が，6片程あるが，内外に刷毛目を持つ一片を除いて，すべて無文であり，その形態も，不明であるが，その土質・焼成は，前二者に，よく類似していることが，注意される。以上の，天井石上発見の土器片その他は，確実なことは，いへないが，先に述べた表面採集品の内の或るものと共に，彌生式に屬するもので，その本來の遺跡地が，偶然，本古墳の封土に，見ることは，出來ないであろうか。何れもが小破片の，散在的出土であることも，意識的な埋藏を，否定する可能性を示している。

前方部前面の排土の際，出土した（G）現は，灰色，堅緻な祝部式土器口縁部破片で，吹き出し軸が，かすかに認められる。全形は判らないが，やや大形の壺であつたろう。他に，その附近から，祝部式の小破片が，4片出土している。何れも青海波を内面に有し，厚さ7～9cm。

後円部とのくびれ部附近から発見された

祝部式土器の中，（J）は，青灰色の，壺の口縁部半欠品で，頸部にかけて，櫛目文が三段に施されている。（I）は，極めて大形の，短かい頸を持つ，壺である。灰青色で，表面に，叩き文が見られる。附近から，他に，十數片の祝部式土器片が，見出されたが何れも，表面に格子目，内面に青海波の叩き目を持つ。これらは前二者と同一個体に屬するものと考えられるが接合不可能であつた。

（ハ）石室内出土品。後円部石室床上約10數cmの個所から，堆積土除去作業の折，出土した土師器小片4ケの内，やや形体の判るものが，第11図の（F）である。何れも，赤褐色を呈し，無文であることは，いうまでもない。



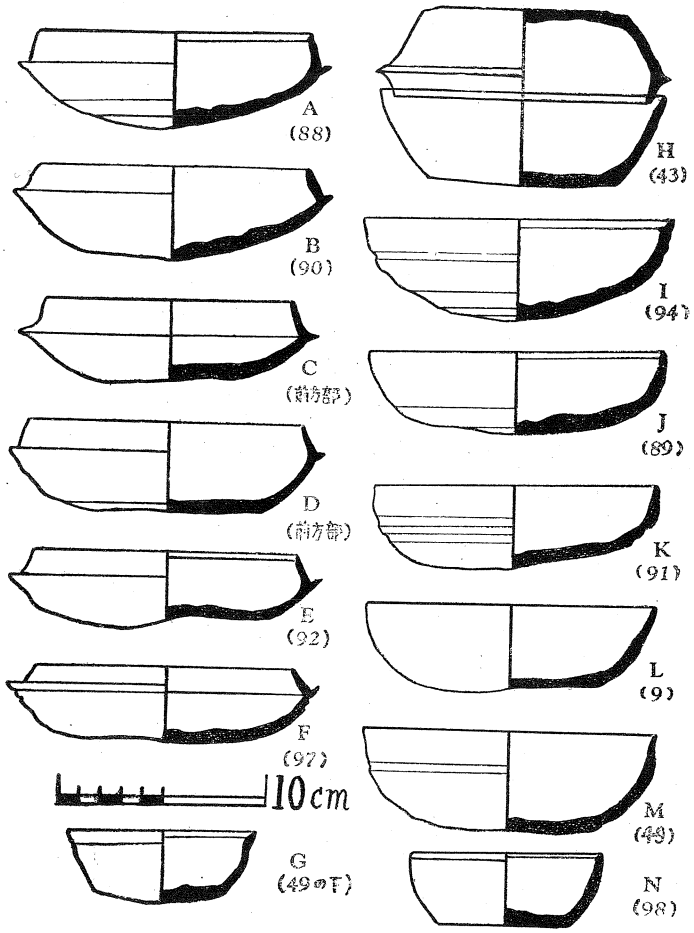

第12図　横穴式石室内発見土師器　(Fig. 12)

明らかに，石室内に安置された副葬品としての土器は，既に見たように，数十個体に及ぶ多数であるが，その内，4個の土師器を除いては，すべて祝部式土器に屬する。

土師器の1個は，脚の短く太い，赤褐色無文の高坏で(第12図B)，土質は，砂粒を含有し，あまり，良質でない。高さ8•2cm，口径11•5cm。4ツ組土器の最上部に，のつていた坩は（第15図中央）丸い器体に，外開き直口の口縁をつけた，黄褐色無文の土器で，ただ表面に，わずかに刷毛目が認められる。高16•3cm，口径10cm。他の2個の土師器も壺で（第12図A•C•），比較的薄い器壁を持ち，刷毛目を除いては，無文である。何れも丸い器体に，短かい頸を持つ。現在，表面が大部分剝脱しているため，黄褐色を呈しているが，もと，褐色の，或る程度平滑な面を有つていたことが，考えられる。（C）の上面觀は，やや，シンメトリーを欠く。

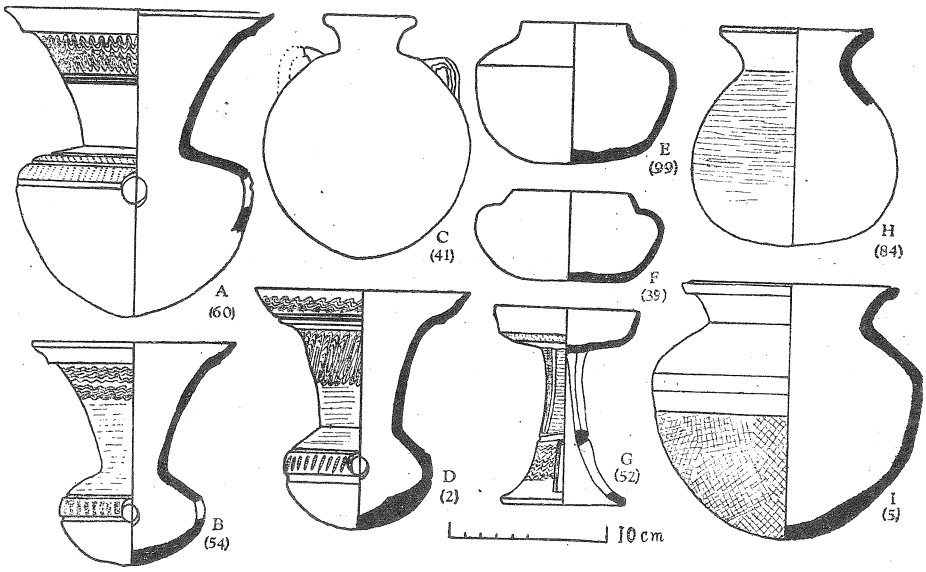
祝部式土器の内，最も多量に，出土したもは，坏の類であるが(第13図)，きちんと，蓋が，被さつている，所謂蓋坏と称するものと，蓋のみ又は身のみが，單獨に用いられたと思われる類とがある。又，中には，非常に小形の身に通常の蓋を，被せたものや，蓋が二枚重なつて，出土したもの等がある（第5図版）。通じてこれらを見れば，形態の上には，殆ど変化はなく，色も，通常の祝部式土器と同様に，青鼠色～灰褐色に至る variety を有ち，坏には，例外なく，口部に，蓋受けが作られている。又すべて，その成形に，ロクロを使用した痕跡が認められる。坏（身）口径12～13cm，蓋口径13～15cmを測る。このように，全くの通有の品であるが，ここに，特筆しなければならないのは，大部分の蓋坏（10個）の中に，発掘当時まで，殘存した物質についてである[7]（第6図版）。（42）には，底面一帶に，2～3

mm程の，粒度極めて微小な土がありその表面にチヨコレート色の，著るしい光澤ある物質の，薄い層が，蔽つている。しかし，その層は，底全体には，擴がつて居らず，周辺の一部において，細土と接するあたりは，茶褐色～黄褐色を，滯びている。又，器の側壁面には，光澤ある褐色のニス狀の物質（その一部は剝脱している）が，極めて薄く附着している蓋内面には，附着物は認められないがウケ（通常は，いわゆるウケが作り出されている方を，身と，呼びウケそのものを，蓋ウケと，称しているが，それを，逆に使用している場合，實質上の蓋，（実は形狀は身）に，ウケが，ついているということになる。以下，区別して，後者を單にウケと呼ぶ）の部分には，極く薄く，ニス狀物質の附着が見られる。(95)は，底面中央附近に，厚さ0.5m m以下の，極めて微小粒度の，土があり，その表面は，光澤ある淡褐色の物質，側面にはその淡褐色の物質と連続した，褐色ニス狀の物質の薄い被覆が，認められること，(42)と同じである。蓋には，身と接する部分に，褐色の不整然な，線狀が，見られる。(46)には，底中央辺に，黄褐色の魚骨の残存したものが，細土の薄い堆積（厚さ$\frac{1}{5}$mm位）上に，附着して認められる。魚骨の種の決定は，困難であるが，肉眼では，仲々認め難い程の，小さな脊椎骨その他から，恐らく，10cmに満たない，小硬骨魚類であつたろうことが，想像される(第6図版上段)。(86)は，底中央辺における厚さ約1.3cm程の，これまた水篏されたような，粒度微小な黄白色を呈する土が，堆積。その表面に，部分的に，灰褐色の薄片狀物質が，認められるほか，間隙を縫つて，入りこんだ，草の細根の腐朽したものが，認




第13図　石室内発見祝部式土器 1　(Fig. 13)

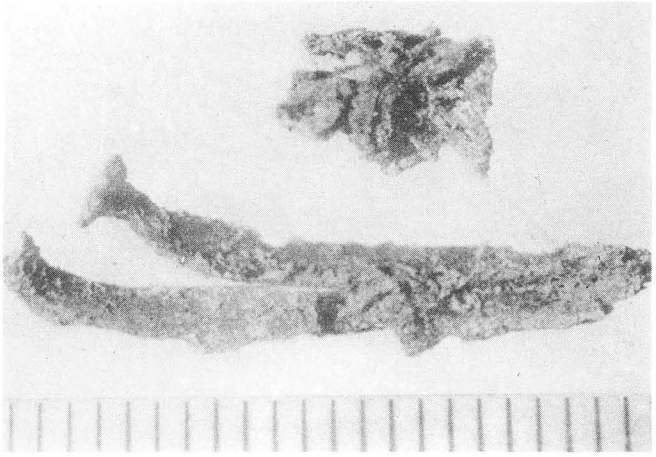
められる。蓋は，何等の附着痕もない。(87)は，(86)に類似の土の堆積を示し，底中央辺にて，厚さ 1•5～1•7cmを算える。その周邊部＝器の側面に接する部分には，褐色の物質が，薄く認められる。又，堆積土の，畧々中央邊に，淡チョコレート色の物質が，黄白色の土との自然の移行において，可成り厚く，存在する。蓋の外面に，同様なチョコレート色の物質が，一部分に，1cm 近くの厚さを持つて附着しているほか，略々外面全体に，黄灰色～淡褐色の物質の，極く薄い附着が，認められる。蓋の内面には，黄白色の土の附着が，見られる。(96)には，身の内面一面に，黄褐色～黄白色の細土状の物質が，極く薄く，附着している。口縁部附近では，それが，淡褐色を呈し，(42)(95)におけるニス状物質と，類似した感じを，示している。底面の前記細土層表面には，灰色の1cm に満



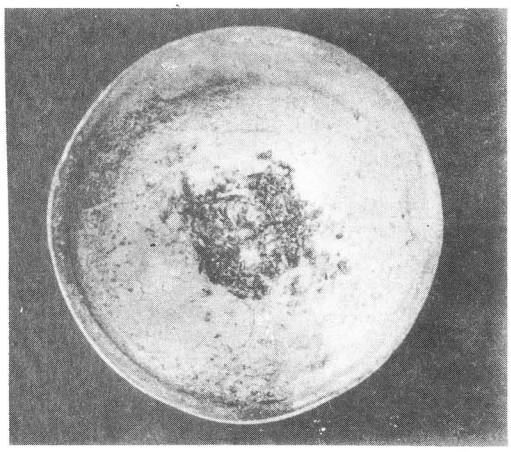

第１４図　横穴式石室内発見祝部式土器 2　(Fig. 14)

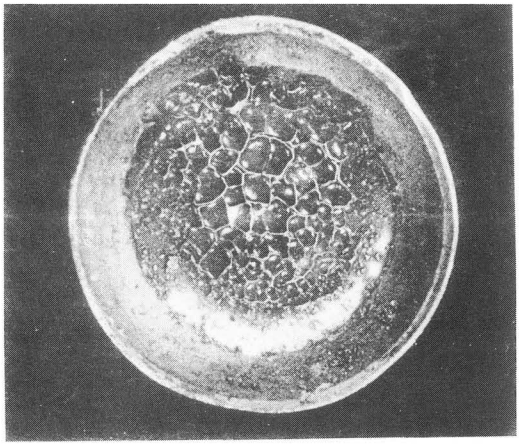
たない小土塊が，附着している。蓋の内面は(95)のそれと同様。(48)，底面の半部程に，は粒度微小な土が，径1mm 以下の小粒状に固つて，僅かに，堆積している。その中に，青灰色を呈する 5mm 程の物質2ケが，発見されている。蓋には，附着物全くなし。(47)も，内面半部に，(48)と同様に，細土粒(大は6mm位から小は2mm以下）の堆積が一部では，口縁に達するまで，認められる。蓋には，附着物なし。(44)底中央における厚さ1•5cm程の細土の堆積が，見られるが，(86)のように，堆積物表面まで一様の細土をなさず，表面は，(48)(47)で見たような，微粒塊と，なつている。側面から，口縁の一部にかけて，淡褐色のニス状物質の薄層が，附着している。蓋は，附着物なし。(43)は，(47)と同様で，薄い黄白色細土層が，底一杯にあり，その上面半部程に，微粒塊（径 3mm以下)が，僅かに堆積している。以上10個の蓋坏の内部に，保存された物質についての，分析は，元素分析の操作に，よらなければならず，従つて，その機会に恵まれない今日，(43)の魚骨以外には，具体的な内容物の名称を，指適することは，出来ない。又，先に

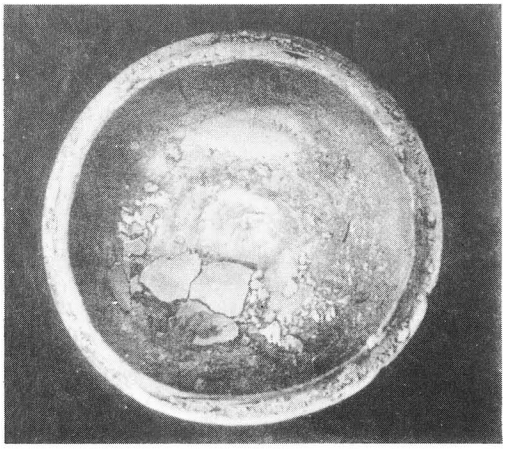
中左（46）の拡大

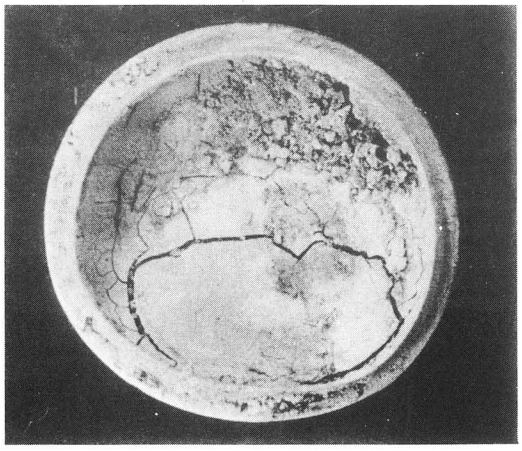


上左からの摘出拡大（下方２目盛１粍









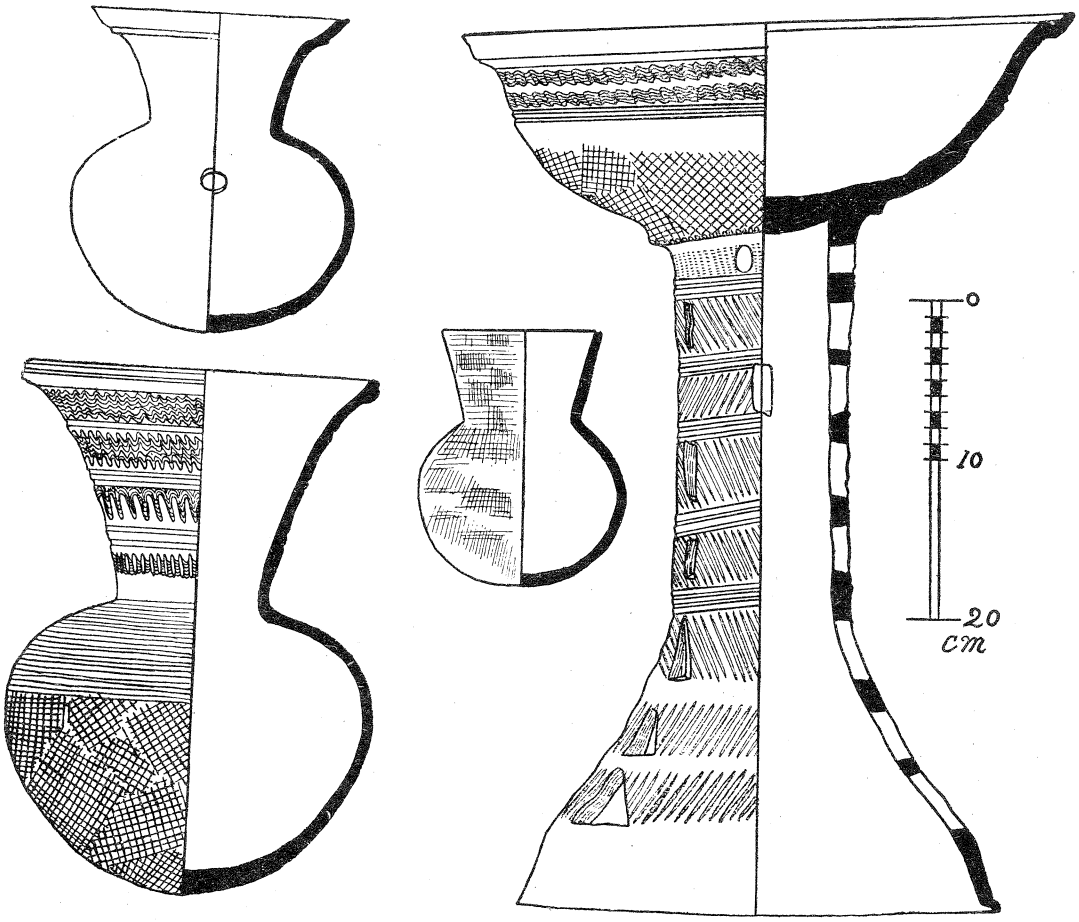
中右　42　　中左　46　　下右　87　　下左　95

第　6　図　版　　中宮第１号墳横穴式石室出土蓋坏内供物残滓

も，一寸指適して置いたように，いわゆる蓋ウケのある坏と，よばれているものが，必ずしも，身としてのみ，用いられたわけでなく，本古墳発見の蓋坏10個の内，5個まで，それが，蓋として用いられていたように，その使用に際して，厳重な規約などなく，どちらにでも，用いられていたようである。

第13図（G）は，（N）と同じく，小形の坏で，内面灰白色，外面灰褐色，無文。

壺形の祝部式土器は，計3個で，それぞれ




第15図　横穴式石室内発見四ツ重出土器　(Fig. 15)

少しづつ，形態を異にする。大高坏直上の1個の壺は（第15図左下），口縁帯を有する，大きな外開きの頸を，有つている。部分的に，吹出し軸の附着が認められ，頸部に，幾重もの波状文，胴下部に格子目叩き文がある。青鼠色の，叩けば，金属音を発する良品である。第14図（I）は，丸目の胴に，短かい頸を，附した壺で，叩いて金属音を発せず，褐色を呈し胴下半部に，格子目叩き文が，附されている。第14図（H）は，胴下半から底にかけて，ぐつと張つた，無文の壺で，鈍重な感じを，持つている。土質は，他と比べて悪く，多くの砂粒を，壁中に，含んでいる。発掘時，胴上部まで，土が，充塡していた。

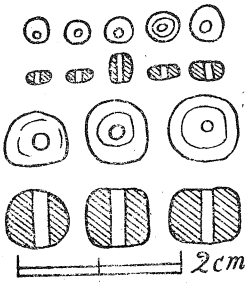
平たい胴部に，極めて短かい頸を有つ壺が

2個出土しているが，内1個（第14図F）は淡灰褐色，無文の土器で，一見柔らかな感を持たせる燒成である。金屬音を発しない。発掘時，約2cmの厚さで，土が堆積していた。他の1個（第14図E）も，燒成良好，部分的に褐色を呈するが，全体としては，鼠色の無文の土器で，叩いて，金屬音を発しない。

玄室中の袖部に発見された高坏（第15図右）は，稀に見る大きなもので，その高さ56cmに，径38cmに及ぶ優品である。大きさに，比例して，器壁も厚く，その坏部の上半部には，沈線文や，波状文帶が，繞らされ，下半部には，叩子目叩き文が附せられている。脚部には，8ツの文様帶が，繞らされ，各文様帶には，それぞれ，円又は長方形，或いは三角形の透孔が，等間隔で，4ケ所に，作られている。色は，坏部及び脚上部は，青鼠色で，脚下部に至るに從い，青白色に変つてゆく。叩いて金屬音を発する。筑前王塚装飾古墳封土内発見の「祝部式台付壺殘缺」は，その脚の，やや短い点を除いて，色々な点で，本高坏に，類似しており，あるいは，少くとも，その1個は，壺でなく，高坏であつたのではあるまいかとも，考えられるほどである。さてこの大高坏の上に，次々と，3個の土器，（祝部式壺，祝部式碌，土師器坩の順序）を積み重ねた状態で，出土したことは，先に，やや詳しく，述べた所であるが，このような組み合せを保存した出土の状況は，我が國上代の古墳に関する限り，寡聞にして，聞く所がなく，僅かに，朝鮮慶尙北道星州郡星山洞第一号古墳・第二号墳その他において，高坏の上に壺が，乘つた状態が，注意されたことを，知るのみである。[8]

碌は，大小はあるが，略々同形同巧のものが，4個出土している。何れも，青鼠色を呈して，叩けば，金屬音を，発する。その文様も，また，略々同じで，肩部及び頸上部に附せられている。(60)は，発見時，内面肩部附近まで，土が充満していた。

提瓶は，1個出土した（第14図C）。器体が丸味を帶び，肩部に附せられた耳は環状をなし，（内，片方の耳欠失）通常の品である。青鼠色を呈し，一部に，吹出し釉が，認められる。



第16図　玉類　(Fig. 16)

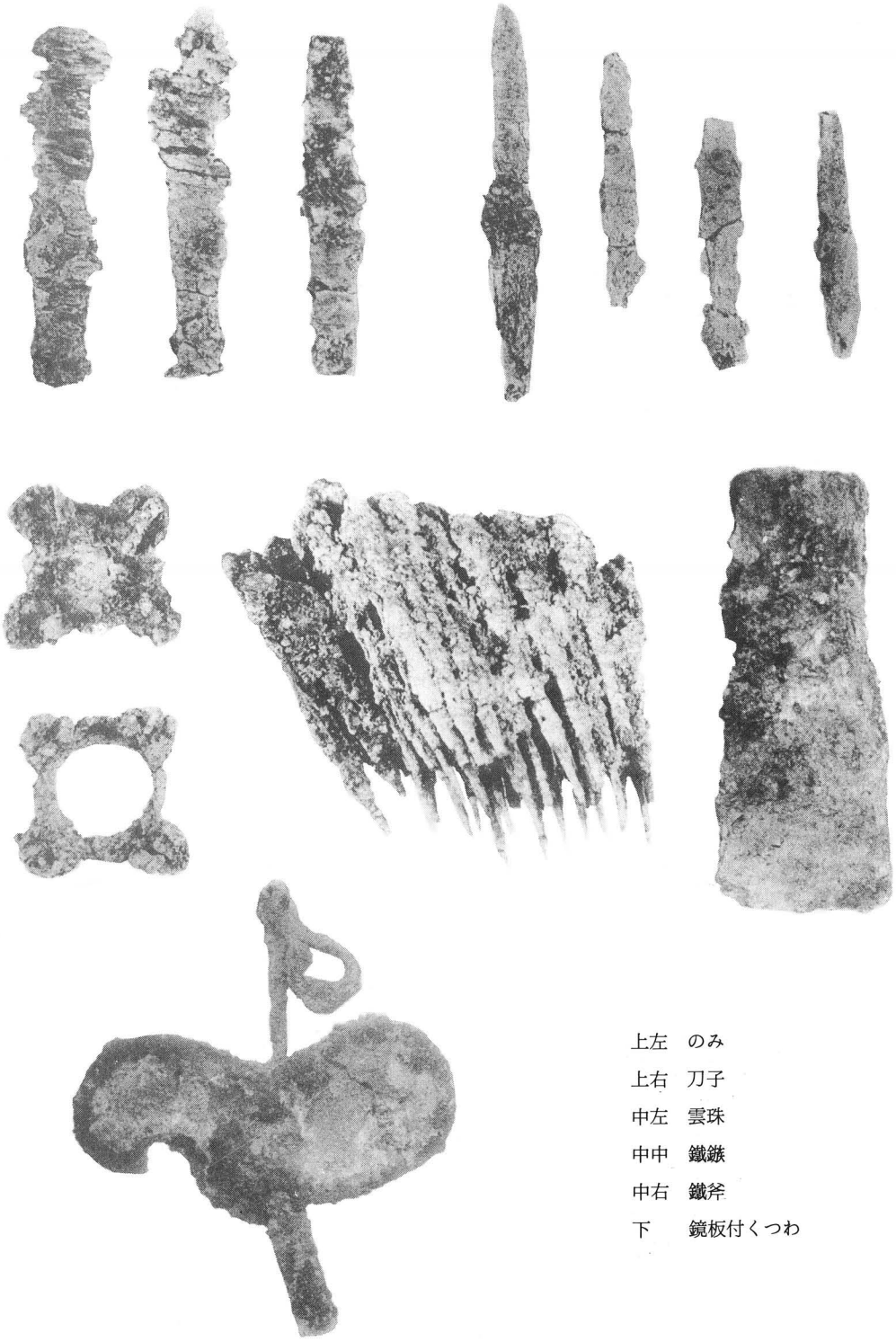
尙，前方部石室発見の杯も，（第13図C・D）既述のそれと差異のないことは，云うまでもないが，その発見状態において，その中に何物かを容れたとは考えられず，むしろ，何物かの上に，それをもつて，蓋をしたという具合であることが，興味を引く。

【B】　玉　類。

玻璃製小玉及び土製練玉のみであるが，何れも，後円部石室内において発見された。

玻璃製小玉は（第16図上），すべて，偏平な円形を呈し，その最大なるもの径5mm，厚2・5mm，最小なるもの径3mm，厚1・5mmを，算える普通の類である。その色彩によつて，分ければ，青色11，淡青色6，緑色2，褐色3，となる。合計22ケの出土を見た。

土製練玉は，（第16図下）すべて，粘土作りの丸玉で，表面が黑い類である。大きさは，個々にあつて，若干異るが，その径は，ほぼ7mm，前後である。合計46ケ及び若干の殘片。



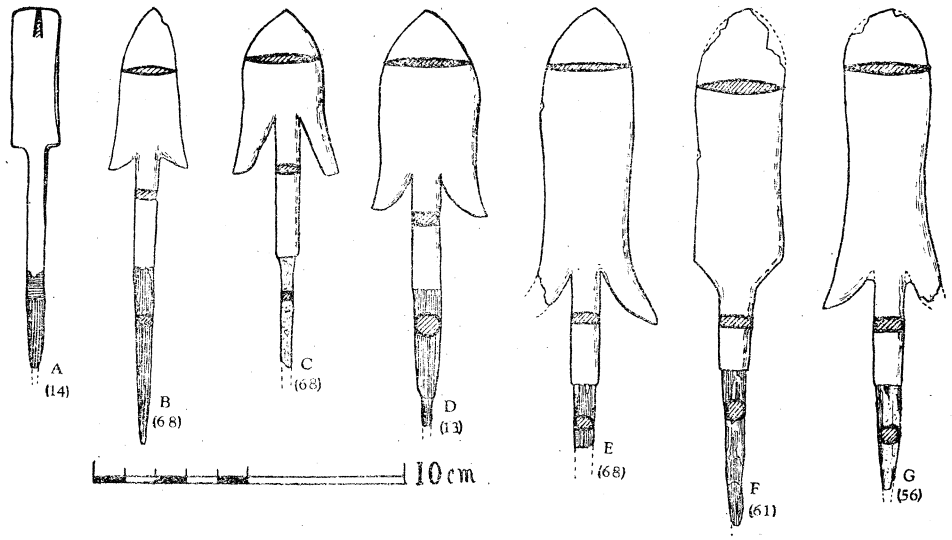
上左　のみ
上右　刀子
中左　雲珠
中中　鐵鏃
中右　鐵斧
下　　鏡板付くつわ

第 7 図 版　　中宮第1号墳出土遺物

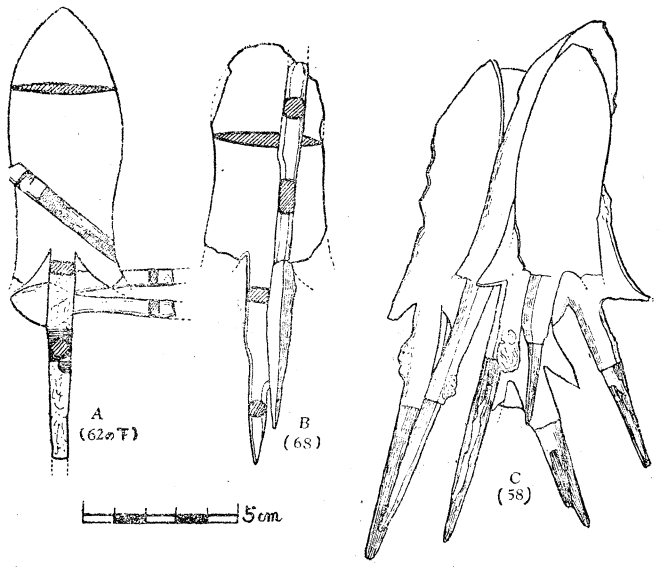
【C】　武　器　類。

（イ），鉄鏃。　発見された鉄鏃は，すべて有茎式に属するが，なお，茎の比較的短い割に身の大きく幅廣く薄い式，所謂平根式と，茎の長い割に身の小さくなる式，所謂尖根式とに，2別される。

前者は，約8cm 前後の短い茎を有し，腸抉りのある兩刃の平たい形式が大部分である




第　1　7　図　　横穴式石室内発見鉄鏃 1　　(Fig. 17)



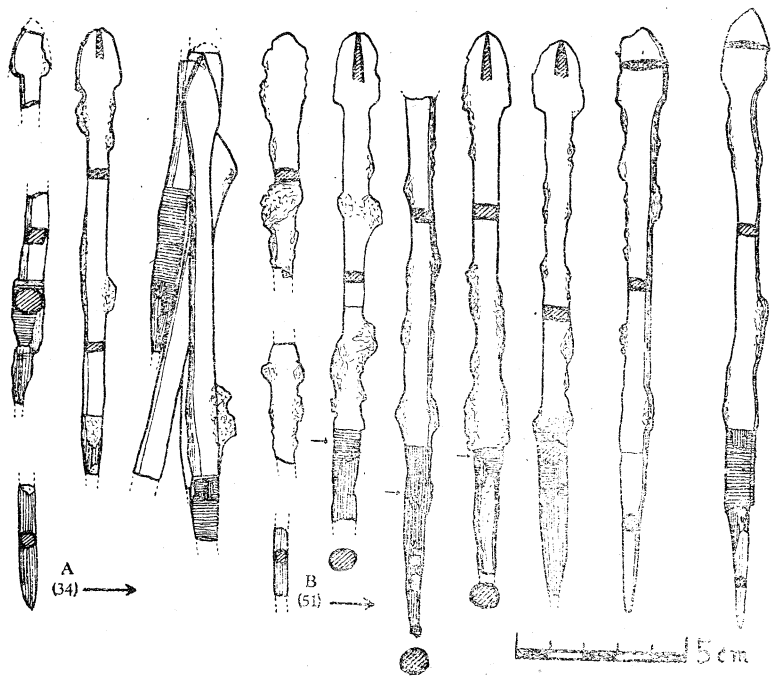

第　1　8　図　　横穴式石室内発見鉄鏃 2　　(Fig. 18)

が，その身の形状においては，ノミ形（17図A）のものがある等若干の variety を認めることが出來る。（Ⅰ）身巾は，比較的細いが，極めて長大な類で中央附近において，一たん狭まつて，また開いてゆき，腸抉りに至るといつた形式を持つ。（第17図E及びG）において典形的に見られる。（Ⅱ）全体の形状は，（Ⅰ）に似ているが，腸抉りがないことが，特徴的である。（第17図F）のみである。（Ⅲ）長さにおいて，前二者よりもずつと短く，從つて，ずんぐりと巾廣であることを，特徴とする。しかし，（Ⅰ）に近いもの，次の（Ⅵ）に近いものもあつて，その間に，一線を引くことは，できない。（第17図D）及び（第18図A・B）などが，この式に属す。（Ⅵ）前者を，更に小形にした形で

特に腸抉りの長いことが目立つ。（第17図C）

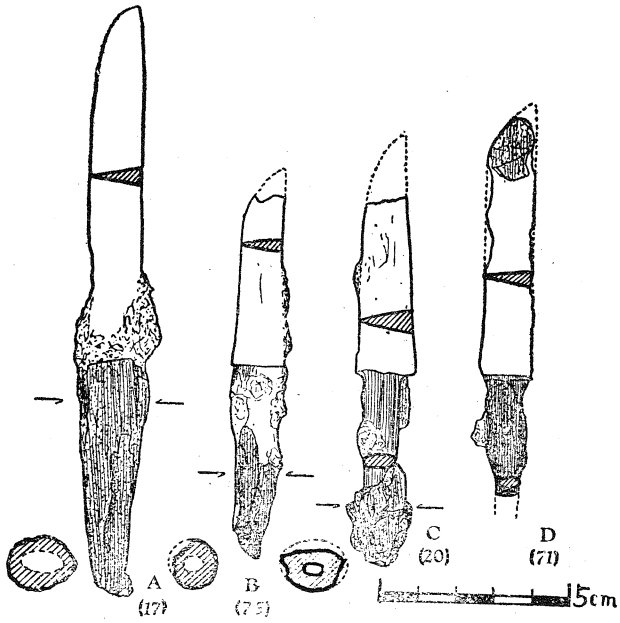
（V）（第17図B）で典形的に見られるような細長な小形品である。

（VI）ただ一例であるが，ノミ形を呈し，刃部が，その先端に附せられている。（第17図A）畧々完存品で，現長12・3cm を算える。




第 1 9 図　　鉄 鏃 2　　(Fig. 19)

(14)に屬して発見された。これらの殆ど全部は，その莖の下半部に，（恐らく竹の）矢柄が，殘存附着しており，またその中の一部には，その本を，緊縛した樹皮状のものの殘存が認められる。莖の上半部の厚さは，身の中央附近のそれと，同じ厚さを保ち，その断面は，矩形を呈しているが，その下半部，即ち矢柄を挿入する部分に至るや，急に細くなり，略々方形を呈し，更に，末端部に向つて細く且つ円形になつてゆく。その多くは，（第18図C）において見られるように，束ねて副葬されたものであるが，中には（第18図A・B）のように，尖根式の鏃と，密着して発見されたもの互いちがいに置かれたもの（68）などがある。

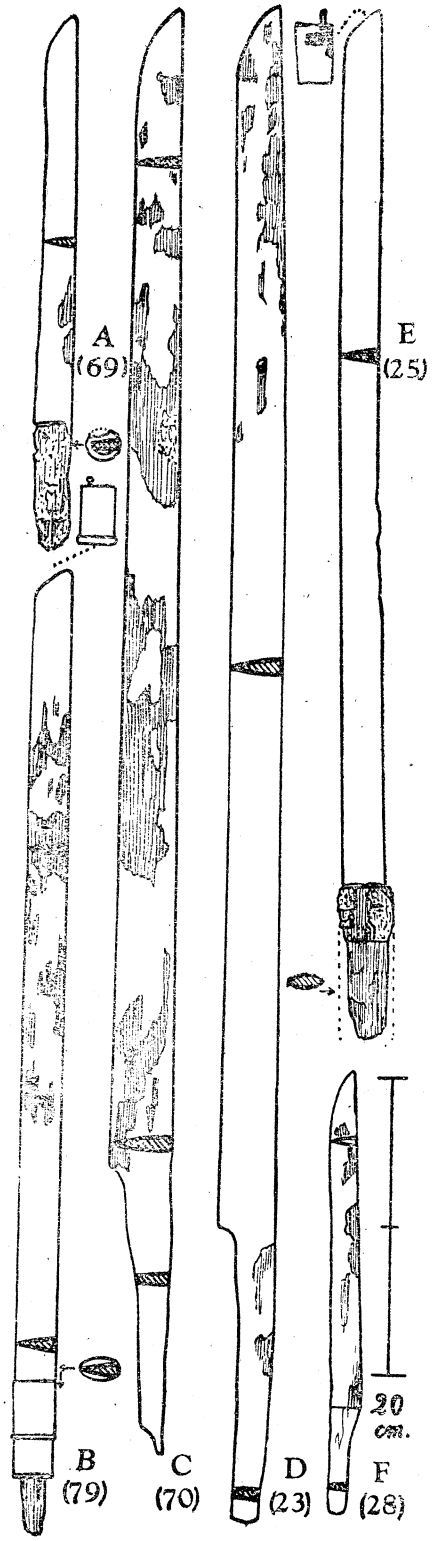



第 2 0 図　　鉄 製 刀 子　　(Fig. 20)

後者は，數十本の，出土を見たが，すべて，劍形で，腸抉りのない身を，有する式である。（第19図）密着して束になつて，発見された場合（第7図版）と，單獨に個々が発見された場合とが，ある

が單獨出土の場合でも，近接して數本が，発見されているから，恐らく，數本又は数十本（最も多いのは(59)の48本束）を束ねて，副葬したものであろう。又，それ等が，もと，矢柄に挿入されておつたことも，莖の下半部に殘存する，恐らく竹と思われる木質の附着及び，一部に見られるその本に卷きつけられた樹皮状の物質の殘存によつて，確認される。莖の構造は，その細長な点を除いては，前者即ち平根式の大形鏃の場合と，略々同巧である。全長は，最も長いもので，18cm，最短なもので，14cmを算えた。

（ロ）刀　子。　何れも鹿角製の柄を，備えた刀子が，4口出土した。（第20図及び第7図版）（A）を除いて，刄尖が，破損しているが，大小不同であることは，明らかである。柄の拵が，完存しているものは，皆無であるが，その附着殘存する鹿角及び木質からして，柄は，先づ鉄莖を木で挿み，その上に鹿角を被覆して作製されたものである。現在殘つている鹿角表面には，何等の加工乃至裝飾文も認められない。（D）は辛うじて，鹿角製柄が認知されうる程度であるに加えて，刄尖及び莖下端を欠如している。現在長10.2cm。（C）も刄尖が，欠損しているが，現在長 10cm。鹿角の脱離のあとに，木質がよく殘存し，拵への具合を恰好に示している。鹿角の比較的よく殘存している部分の断面を図示したが，復原して考へれば，可成り丸みを帶びた，楕円形となるであろう。（B）は刄部頂端が，欠損しているほか，柄の部分等もしつかりと原形を殘している。現在長10.8cmの，最小形と推定される品である。柄の略々中央における断面は，図示の通り略々円形に近い。（A）最も長大なもので，全長




第21図　横穴式石室内発見刀（Fig. 21）

16cm，刄部長9・5cmを算える完形品である。今，木質部の存否は不明であるが，鉄の莖の上に，何物かを斜巻した痕が，鉄銹化されたまま残つていることが，特に注意される。柄と刄との境界が，斜行しているのも，この一例に見られるだけである。柄の一部においての斷面は，丸味を帶びた楕円であることを示している。

（ハ）直刀。（第21図）鉄製の刀六口は，何れも直刀であるが，大小不同で，大刀2口中刀2口，小刀2口と分けることができる。前節でその出土状況を見たように，左右兩壁に分れて，それぞれ大，中，小の三本が，副葬されていた。（第5図版）。

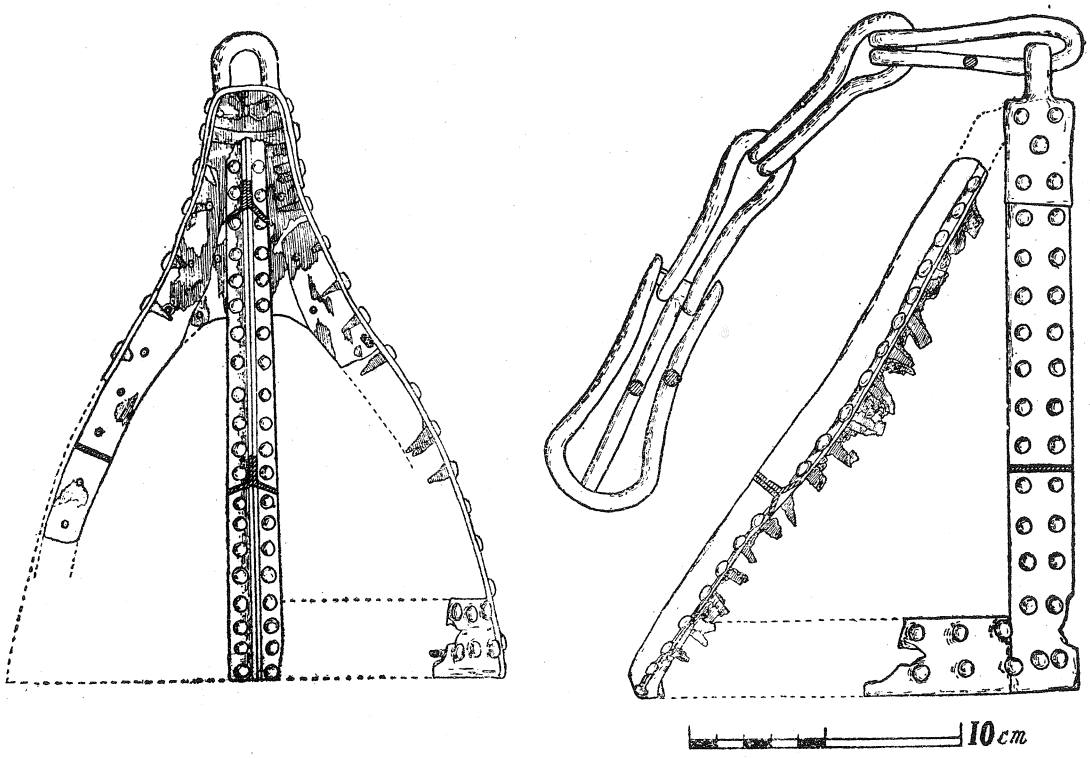
すべて，銹化が著しく進行しているため，判然としないが，折面その他一部から見て，平造（ヒラツクリ）と称される刀身形を有ち，その刀背の構造も，いわゆる角背（カクムネ）の手法によつていることが考えられ，中には，莖の拵の部分を可成りよく残しているものがある。鞘は，すべて木鞘であつたものの如く，（E）を除いて，その木片が錆着して残存している。（D）は，全長103・5cm（3尺4寸強）の大刀で，莖の一部及び身の一部に，木片の錆着が認められるほか，拵は不明である。（E）は，莖の拵を部分的に残している中形品とも称すべきもの。即ち，莖に被合された木部が，莖の略々全面に亘つて見られるほか，鞘口に接する把縁に，鹿角製の円形装具を残している。また鞘尻金具として，鉄製の簡單な式のものが発見されているが，その一部に漆塗と考えられる布片が，残存附着していたことが，注意される。（F）は，鞘の木部の一部を刀身にとどめているほか，拵は不明。（C）は，先の（D）とほぼ同大同巧の大刀である。（B）は，最もよく把の拵が残存している。尙，これには鞘尻の装具が，残存していた。銀漆製と考えられる見事な作りであるが，その末端部の拵は，消失している如く，現在図示のように，その部に二本の鉄製の留め釘が，木痕を銹着させたまま残つている。留め釘の存在は，（E）の鞘尻金具にも認められている。把縁は，鉄地に薄い銀製外郭を持つた円筒で，把間は，これまた円筒状の銀板で被れている。但し，把間の銀装具の内部の拵は腐朽して不明である。把頭の内部には，木質がよく保存されている。（A）は小形の鹿角装刀で，通有のものと異らず，直弧文その他の文様は見られない。

以上六口の直刀それぞれの大いさを，下表に示す。

| | (D) | (C) | (E) | (B) | (A) | (F) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 全長 | 103・cm | 98・5cm<br>32・5寸 | 70・0cm<br>23・2寸 | 65・5cm<br>21・6寸 | 36・8cm<br>12・1寸 | 30・0cm<br>9・9寸 |
| 刄長 | 83・ cm | 79・5cm<br>26・3寸 | 59・7cm<br>19・7寸 | 54・8cm<br>18・2寸 | 28・0cm<br>9・25寸 | 22・5cm<br>7・4寸 |
| 刄長対莖長（100%） | 80・5 | 80・8 | 85・3 | 83・7 | 76・2 | 75・0 |

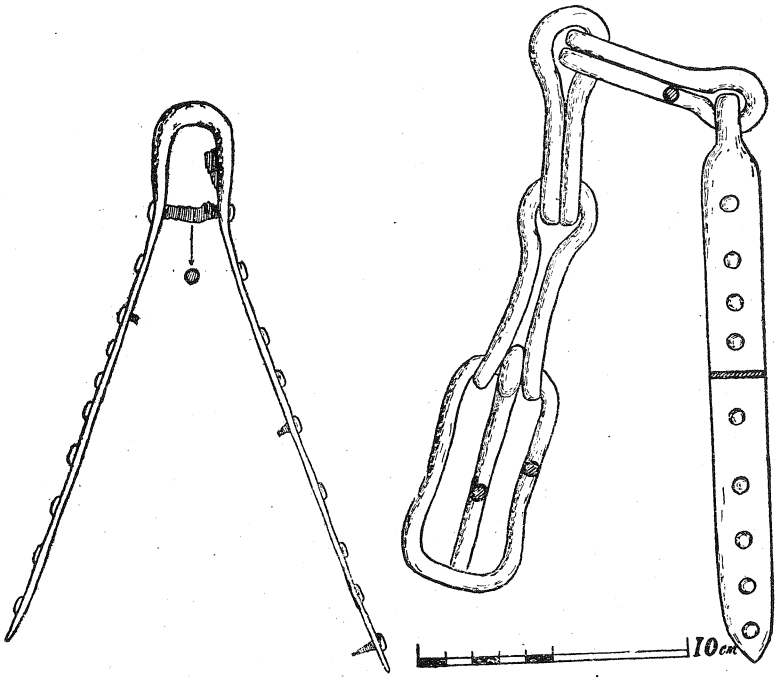
【D】　馬具類。

（イ），鐙。　鉄板飾木心の壺鐙が二隻出土した。その一つは，（第22図）筑前國嘉穗郡王塚装飾古墳[9]出土品と，規制を略々同じくする類で，木部をはじめ，腐朽欠損した部分が可成り存するが，その大いさ・形状の大体は




第 2 2 図　横穴式石室発見　アブミ 1　(Fig. 22)

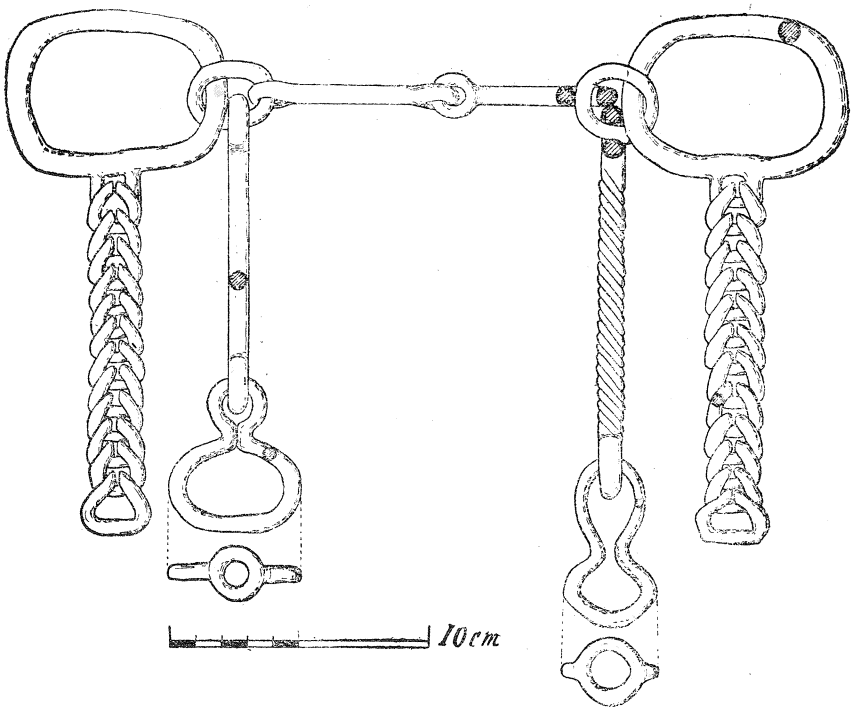
認知することができる。先づ鎖は，細長い作りの兵庫鎖で，王塚のそれが5個の組合せであるに対し，三個の組み合せで，同じく長大な鉸具に，接する。両側及び底部共に，木で作られ，その縁飾りとして，2例の鋲で留めた金具を，繞らし更に前面の合せ目にも，同様な鋲留金具を使用したものである。飾金具の内面や鋲尖の周邊には，木片が殘存している。その形状は，前面において背の高い2等辺3角形横面において，直




第 2 3 図　　同　アブミ 2　(Fig. 23)

角三角形に近い。殘存している部分から見れば，沓込みの部分は，平面をなしていたと考えられる。鎖と接する部分は，飾金具が，急に丸く太くなり，輪を作つている。尙，紋板にも，鋲が打ち込まれていることはいうまでもない。

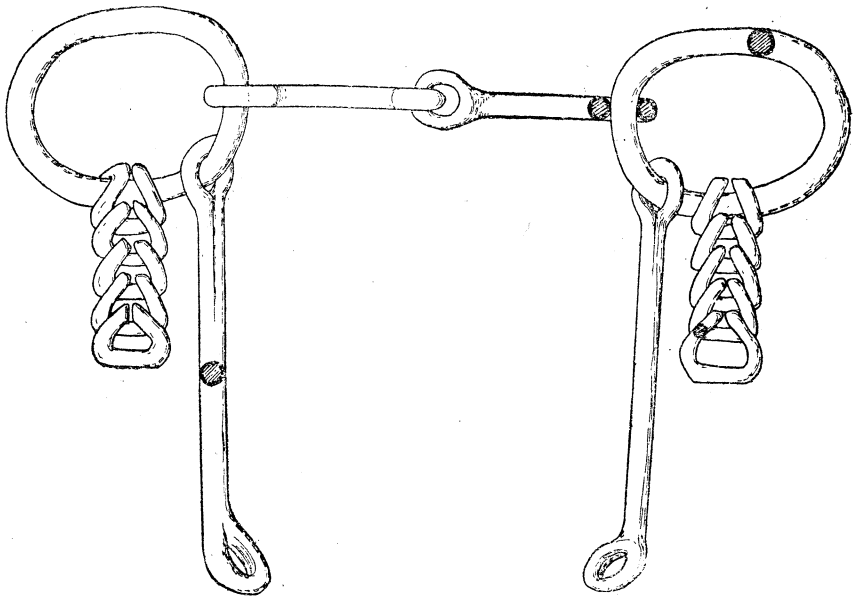
他の一つは，（第23図）底部及び前面つぎ合せの金具，紋板などすべて殘存しないため稍々確然としないが，鎖及び鉸具の作り，前面形が，略々3角形を呈する点などは，前者



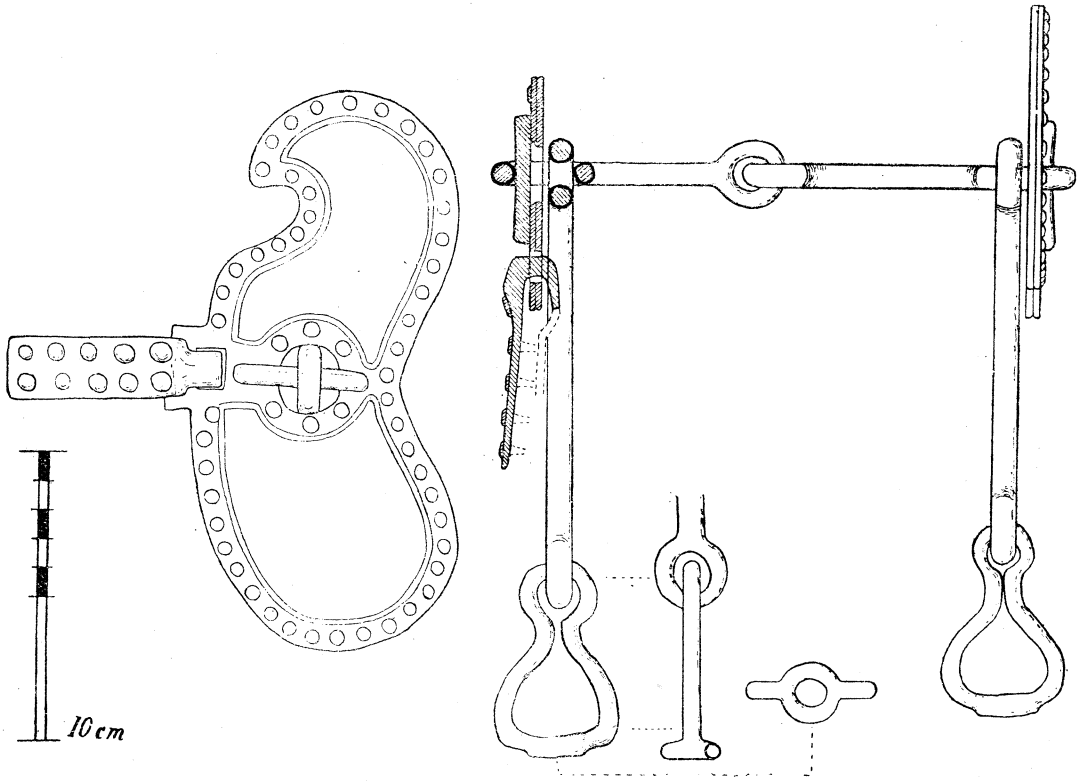

第24図　クツワ (8)　(Fig. 24)

と等しいが，その大いさや，飾金具等，幾分異つた点がある。殘存している緣取りの飾金具は，横側のそれに限られているため，確然としないが，前者に比して，はるかに短少で，その留鋲も一列且つその間隔も荒いことが指摘される。又，横側の飾金具が底の緣金具と接する部分は，3角形狀に尖つている。

（ロ），　轡。　（第24図・第25図・第26図及び第7図版）鉄製の轡が3個出土したが，内2個は通常の類で，他の1個は鏡板付のものである。前2個は略々同じ作りであるが，引手の構造及び鎖において，若干の差異を持つている。銜の具合は，三者ともに同様同大である。鎖は，(19)(8) 共に兵庫鎖で，(19)は5個，(8)は12個で構成されている。又，鎖が輪と結合する仕方も兩者は異り，(19) は直接に，(8) は，輪に作り出された輪狀小突起を媒介として，結合している。引手の作りも，(19)の簡單なるに比して (8) は，稍々精巧に作られている。又，(8)にあつて引き手の作りの内，壺形の繩かけの輪の部分において，左右同形でないことが注意されると共に，一方の引き手金具が，鉄地の合せよりの作りを思はせる現形を示しているこ



第 2 5 図　　同 ク ツ ワ (19)　　(Fig. 25)

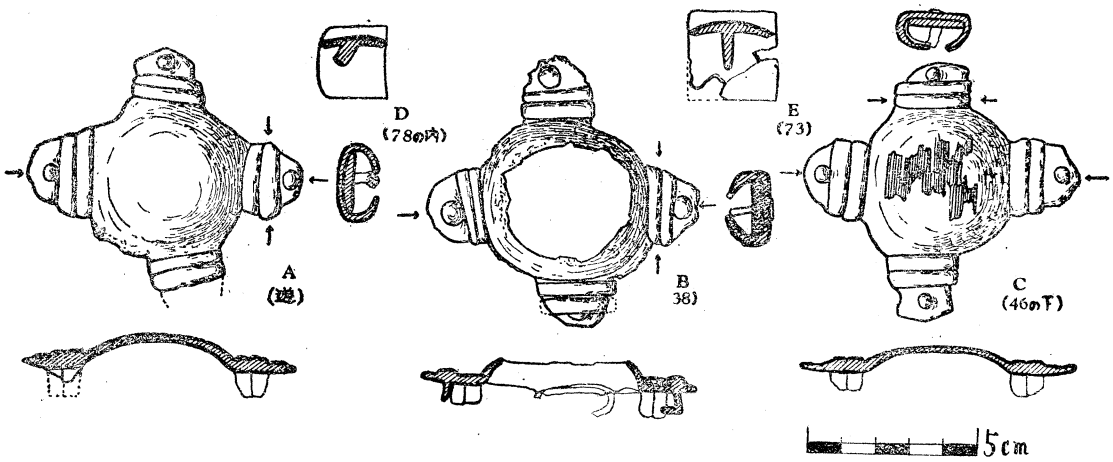



第 2 6 図　　同 ク ツ ワ (74)　　(Fig. 26)

とが指摘される。あるいは，これはこの部分の金具に巻きつけた物資が，錆化附着している状態とも考えられるが，今は不明として置く。(74) は，(第26圖) 銜及び引手は，前二

者と略々同様であるが，鏡板が附せられている点が，他と異つている。鏡板は鉄板2枚を合せ，更に薄い金銅製の板を鉄鋲で留付したE字形のもので，出土当時も，その金銅製の大部分を保持していた。縁取りの線に加えられた鋲は，銀被せなどの特別加工はなされておらず，鉄鋲である。

（ハ）　雲　珠。　（第27図A・B・C及び第7圖版）3個ともに，略々同大同巧を示している。何れも，径約4～5cmの円に，4ツの足が張り出されている式のもので，錆化は甚しい。一般にその円部の丸みは，さして高くなく，むしろ他の例品に比べて，甚だ低いようである。足の構造の完存しているのが少いが，若干の完存部の示す所では，中央円に接する辺に，二本の細い鉄帯を並べ被せており，且つ，その尖端は皮革を抱えるように内面に向つて折れ曲つている。鋲の役目をする目釘は，それぞれの足の先端近くの中央に1本づつ存在する。その先端も，ほぼ直角



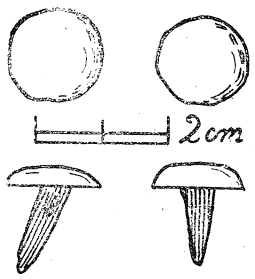

第　2　7　図　　横穴式石室内発見　雲　珠　1　　(Fig. 27)

に，内側に折れ曲つているが，皮革を抱帯に通した後，目釘を打ちこみ，その先端を曲げて，より堅固に固定したものである。(B)は円の中央の大半が欠損しているが，足及び目釘は最もよく殘つている。殘存の目釘3個の内，明らかに中断欠損している1個を除いて他の2個の先端は，明らかに内折しており，その内折の個所と，抱帯の折れ曲つている個所とは，前者が心もち低くなつているが，略々同一線上である。(C)は，目釘の三本が欠損している点を除いて略々完存している。今，その全体は著しく錆化しているが，円の中央邊に，その錆化した部分の上に，木片の若干の附着が認められる。(A)は，足の一つの先端，目釘三個が欠損しているほか，略々完形を保つて居る。

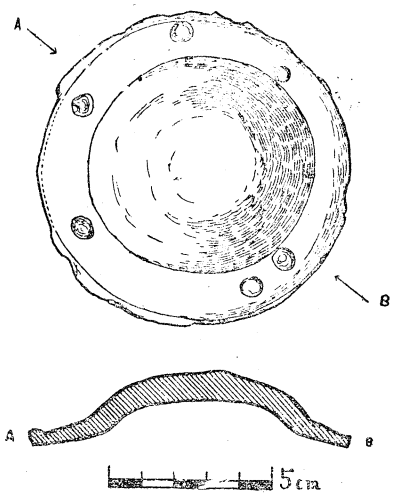
次に第28図は，足が全部欠損しているが，形状大なる雲珠と，推定される。円形を爲しその中央に廣く，前三者に比べて，高い盛り上りがある。鉄地に，金銅板を貼つたもので今，錆化が甚しいが，金の部分も僅かに認められる。径約9.5cmであるが，その周辺に，2～3mmの厚さで，縁取り（木製か？）が繞らされていたようである。周囲には，現在6個所に，不整然な突起が認められ，鋲を打ちこんだ様を思はせる。但し，下面において

その痕跡は，著しい錆化のため，認められない。尚，甚しく近接していないが，附近から方形金具が5個散在して発見されている。

（ニ） 方形金具。（雲珠足か？）（第27図 D・E） 計5個見出されている。その何れにも，表面から内側の周辺にかけて銀被せの装飾が施され，ほぼその中央部に，留釘が打たれている。内5個は上述のように，大体1個所に近接して発見されたが，他の1個は，鐵鏃に混じてかけはなれて孤在した。雲珠の足金具かとも考えられるが，足巻きの抱帶金具の附着した跡は，認めることが出來なかつた。馬具の附属品かと考えられる。

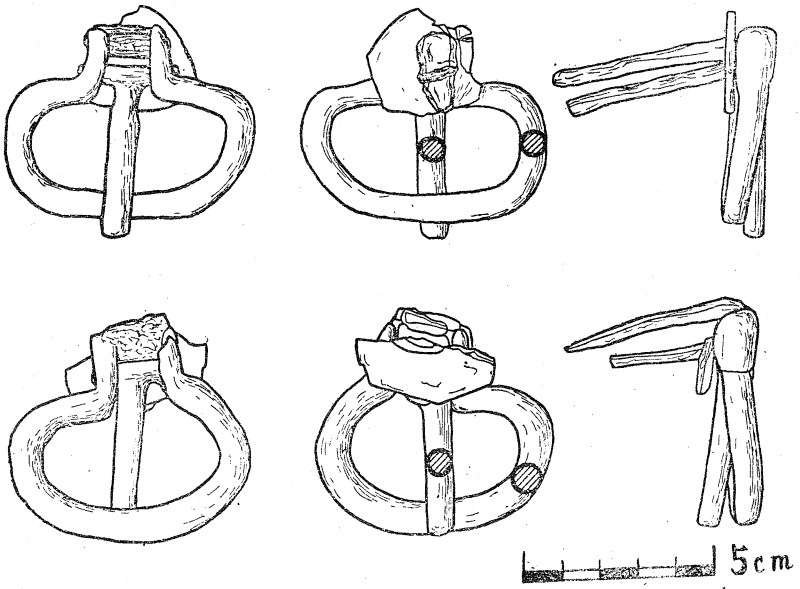



第29図　鋲　(Fig.29)




第28図　雲珠 2　(Fig. 28)

（ホ） 座金具附鉸具。（第30図）鞍と考えられる鉸具が2個接近して発見された。部分的に多少欠損しているが，概して保存よく，略々完形を呈する。固定用の2本の突起に，木質の附着（その木目は，突起長に平行して走る）しているところから木製の鞍に，備えられたものと推定される。



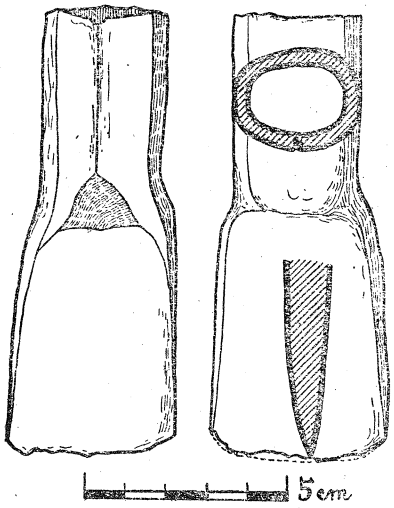

第 3 0 図　横穴式石室内発見座金具付鉸具　(Fig. 30)

（ヘ） 鋲。（第29図）奥壁に接して，やや，整然たる配列を示して発見された類（第5図版左下）を始めとして，総計20個余りの鉄製留鋲が，出土している。すべて，同一種に属するもので，長さ1・5cm，頭部が丸く作り出されて，その径1・35cmを数える。何れも，その径に木質が錆着して残つている所から，木具に打ちこまれたものと考えられる。更に，前記の座金具附鉸具と近接して発見されている点から，これらが相共に木鞍を構成していたものと推考さ

れる。その附着木質の木目の走向は，横走と縦走とあるが，縦走すなわち莖の長軸に平行している方が大部分を占めている。

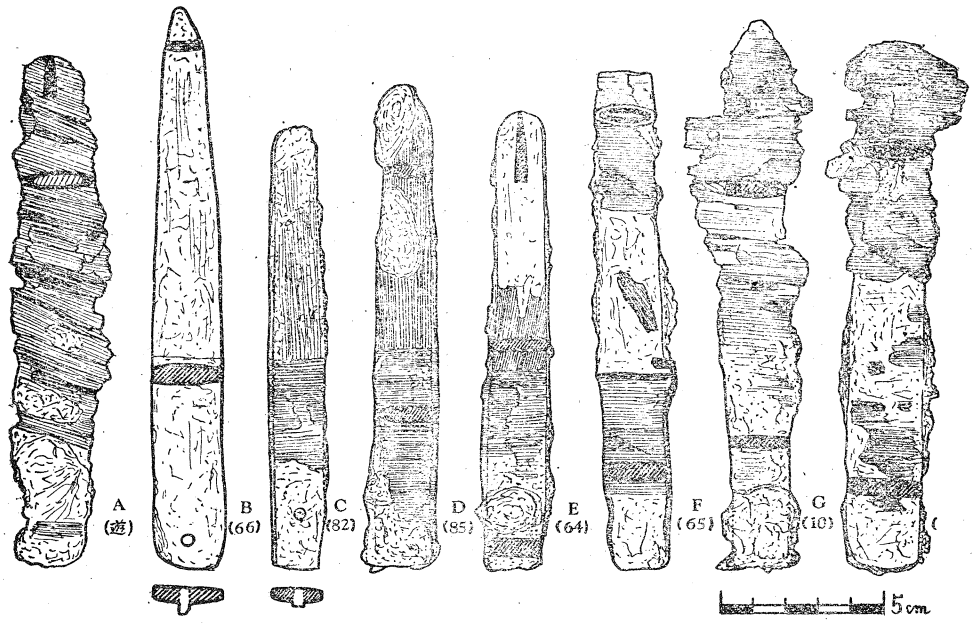
【E】 農工具類。

（イ）鉄斧。（第31図及び第7図版） 錆化しているが，保存良好の完全品で，袋部は曲げ合せ貫通させる式のもので，刃部に向つて徐々に，巾廣くなる。斷面図に示したように，製作は可成り部厚く，頑丈な感を持つ，全長 11cm，刃部巾4・3cm，袋部内径(長) 2・5cmを測る。袋部に木質が残存するところから，もと着柄のまま，副葬されたものと考えられる。



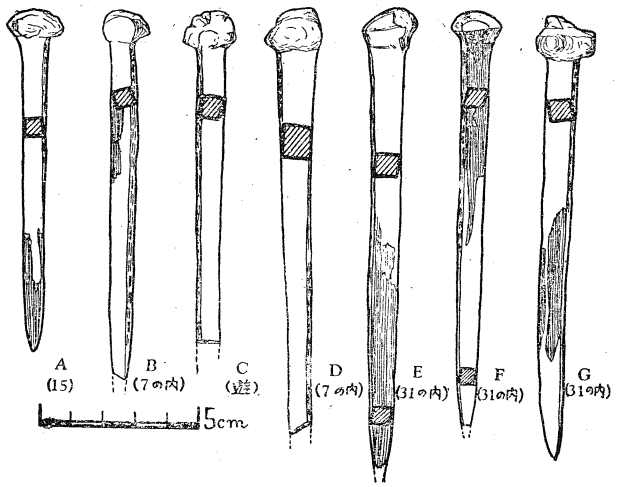

第31図 鉄 斧 (Fig. 31)

（ロ） のみ形鉄製品。（第32図及び第7図版）一見，刀子状をした鉄製品が，8個出土したが，以下に述べるような理由から，のみであつたろうと推察している。何れも，長約14～17cm程の品で，側面には，刃と考えられる部分を欠如している。（E）は，そのみであるとの推測を典型的に示している品で，全長 14・2cmの完全品，下端において，厚さ最も厚く5mm強，中央邊にて4mm，次第に薄くなり，先端は，図示の如く，鋭利な刃となつている。この刃の部分は，一方に幾分のそりを有つている。また，下端から，6cmの個所を境界として，その表面に錆着する木質が，その木目の走向において，明らかに相異を示している。即ち下部は長軸に直角に，上部は長軸に大体平行




第32図 の み (Fig. 32)

して走つている。木柄と木鞘を附したものであることが想像される。これに最もよく類似を示す品は，(C)(D) で，特に (D) は，尖端が刄部をなし，且つ，その部分が，一片にそりを有つていることなど，殆ど，(E) に変るところはない。(C) の刄部は，錆化甚しいため，今，明らかにし得ないが，全体の作りは (E) に同じである。(B) は，やや大形で，木質の附着が殆ど見られず，尖端も，錆化のため，刄部をなしているかどうか，確かめることが出來ないが，その作りが段々と巾狭く，薄くなつてゆく点など，前三者と，同様である。(F) は，尖端欠損しているが，現長 15.4cm を測る。その製作は，既記の類と全く同様であるが，その表面に，錆着残存する木質部が，やや異り下部も上部も等しく，その木目は長軸に直角に走り，その間にはつきりした境界は，今，認められない。特に上部に残つている木質は，図示することが出來る程の厚さを持つて居り，顯微鏡検査では，杉皮様のものを巻きつけたものかと考えられ　。更に，略々中央邊に，長軸にやや斜行する木質の小部分が認められる。このように長軸の略々全面にわたつて直角又は略々直角に近く，木目の走向を有つ，錆着残存する木質は，(G)(H)(A) に認められる。これらの木質はやや厚く，そして可成り巾廣く，残つており最も廣い部分では，4 cmを測る程である。(A) は，その木目が特に斜行している。何れも (F) と同じように，杉皮様のもので被覆されたまま，副葬されたものと想像される。若干の部分で切断し，断面を検査したが，すべて既記の類と同様，両側には刄部なく，先端に向つて，狭く，薄くなつてゆく製作を示している。特に (A) の尖端は木質の被覆にも拘らず，刄部をなしている様が，うかがえる。




第 3 3 図　鉄　釘　(Fig. 33)

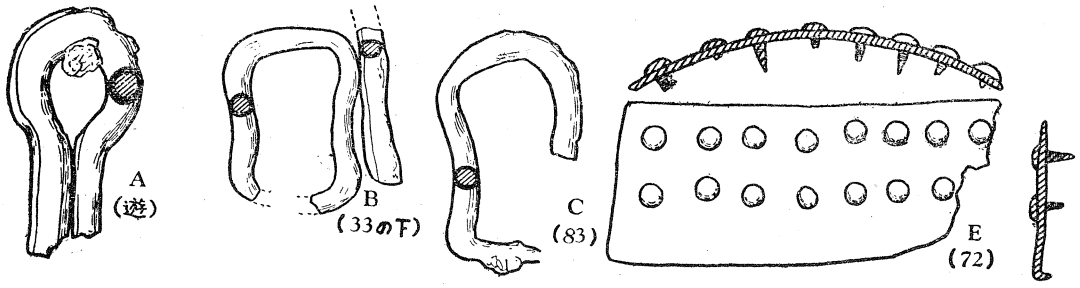
以上のように，各個では若干の差異を示しているが何れも，側面に刄部のない点，その内の数つかは明らかに，先端部に刄部を有つている点その部分が一片にそつている点，何れも，段々と巾狭く，薄くなつてゆくという製作上の共通性を持つている点，木鞘又は杉皮様のもので，被覆を行つている点，中には (B) (C) のように，目釘かと思はれるものが，認められる点，等々からして，のみとして使用された利器であると考えてよいのではないかと思う。

【F】 その他。

(イ) 鉄　釘。(第33図) 計七本が発見された。すべて，断面略々正四角形を呈す莖を有つている。先端の破損していない類から推せば，鋭く尖つていたことが判る。頭部は，多く鉄錆化して不整形をなしているが，最も原形を保つと考えられる (F) によれば，半

円頭をなしている。莖部には，僅かにそれと分明する錆化した木質（その木目は，長軸に平行している）が，附着残存している。略々完存品である（G）において，全長 13.5cm 莖中央の厚さ 1 cmを算えるが，最長は，現存長 14.4cm を算る（E）である。すべて，大形で，頑丈な鍛造品であり，可成りの部厚い木材に打ち込まれたものと考えられるが，果して木棺の存在を，これのみによつて，推察出來るかどうか，論斷の限りでない。

（ロ） その他。　第34図の（B）（C）は，共にほぼ同様な形態を有つ鞍具で，（B）は鉄鏃片が附着したまま発見された。共に不完全品である。他に同図の（A）に示した鉄製金具（鎖か？）の残片が，遊離して発見されたほか，（D）の如き板状をなし，留鋲が2列に打ちこまれている金具が，数ケ所から單獨に検出された。留鋲の莖に，明らかに木痕が残つている所から，木製品にあてられた縁取り金具であることが考えられる。




第 3 4 図　　石室内発見　輪金具其の他　　(Fig. 34)

## 附　記

「はしがき」において述べたように，本発掘報告及び以下の二つの報告において「結語」乃至「考察」は一切省略した。これは，同じ題名の書第2冊又は第3冊において，他の多くの調査古墳の所見と共に，述べられるであろう。

## 註

1) 梅原末治（日本の古墳墓）58頁　1947年。
2) 梅原末治（前掲書）。
3) 後藤守一（上野国佐波郡赤堀村 今井茶臼山古墳）41頁　1933年。
4) 緑山古墳群については，近く神原英郎君の綜括的な報告がなされる予定である。
5) 遺物は豊田村公民館に収蔵されている。尚，住居址調査報告の刊行は，目下その準備が進められている。
6) 所謂後期弥生式土器に屬する類である。
7) 小林行雄（黄泉戸喫）「考古学集刊」第二冊に食物供献に関しての高見と共に，その実例を列挙されている1949年。
8) （屢尚北道屢尚南道古墳調査報告）「古蹟調査報告」第一冊1918年。
9) 梅原末治・小林行雄（筑前国嘉穂郡王塚装飾古墳）「京都帝国大学文学部考古学研究報告」第十五冊　1940年。

第　4　章

# 門の山第1号墳発掘調査報告

近藤義郎
中島壽雄

【内　容】

- 位置・地形及び発掘当時の状態
- 墳丘及び外部施設
- 内部主体
- 発見の遺物

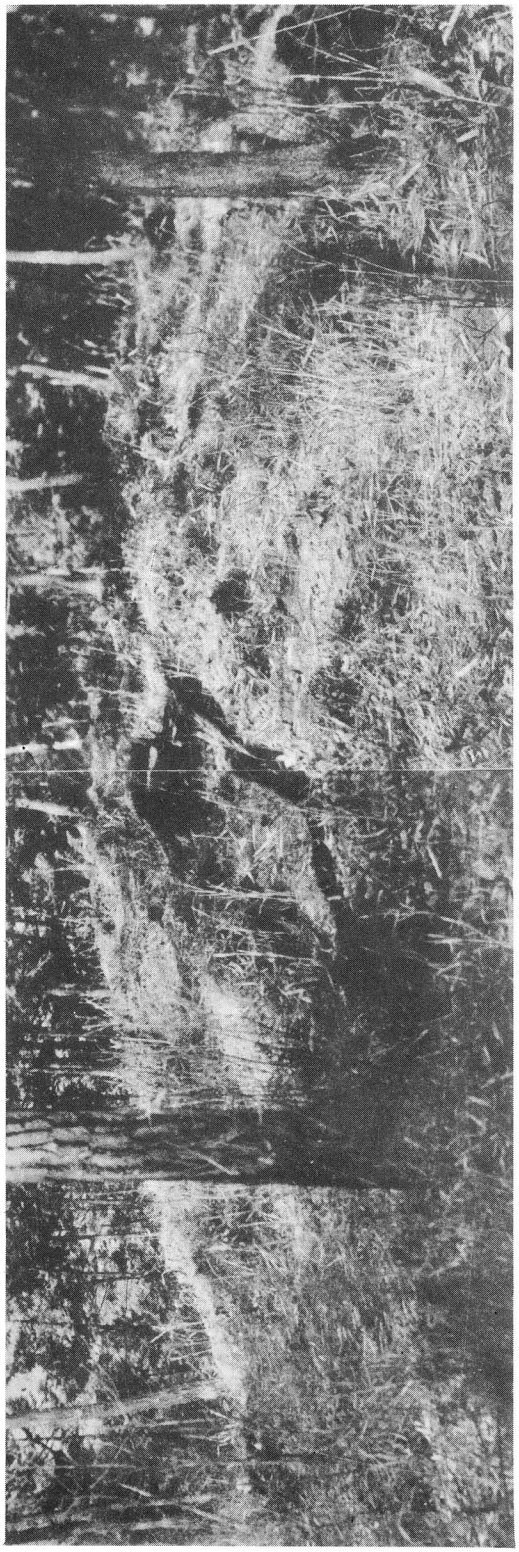
## 位置，地形及び發掘當時の狀態

神奈備山塊の西端に近く，北西方向へ向つて，舌狀にのびる一小支脈は，通称，門の山と呼ばれている。その頂部にあたる極めて緩傾斜の舌狀部には，小円墳を主とした約十基程から成る小古墳群がある。我々が，それに對して，門の山古墳群と名付けたのは，既述の通りであるが，今此處にその発掘調査の結果を述べようとする門の山第一号墳は，その最も北西の端，台狀部が，その下降傾斜度をやや急に変化しはじめた部分に，位置している。その部分の標高は，約 150m，平福地区の低地との比高約50mを算える。

北西斜面に築かれているとは云え，その眺望は，廣く且つ優れ，古墳營造地としては，全く恰好な位置を占めていると云つて，過言はないであろう。(現在は松林が視界の多くを遮つているが)。即ち，津山盆地西半部を眼前に展開させ，作州最大の前方後円墳・円墳を有つ二宮・院庄を指呼の間に望み，又，更に苫田北東部の重疊たる中國山脈のバックボーンを，遙かに遠望する素晴しい位置であり，佐良山古墳群中，最も美しい眺望を持つものの一つを占めている。その行政的な位置は，津山市平福向山二七七番地の十一で，その所有者は，同平福の津高仲江氏である。

附近古墳群については，第二章で概觀した所であるが，何れも相似た大きさ・高さを有つ低小な小円墳で，その一部は破壞露呈している部分の狀態からして，後述する本古墳の内部主体と同じ，所謂組合せ長方形箱形石棺をその内部主体としていることが，想像される点を一言して置く。

本古墳は，上記のように下降斜傾度が，やや急に大となりはじめた個所に，營造されている関係か，長年月の間に可成りの被土が堆積し，必ずしも原形を充分に示していなかつた（このことは，次項においてやや詳しく述べるそ)。のほか，調査開始時，主として墳下北辺に，人頭大の河原石が，若干散見されたことが，やや注意を引いた程度であつた。しかし，人力による意識的な破壞乃至攪乱を示すような痕跡は，全く認めることは出来なかつた。墳丘上には，若干の松と，矮小な灌木・下草とが密生し，全くの處女古墳が想像されていた。（第８圖版）



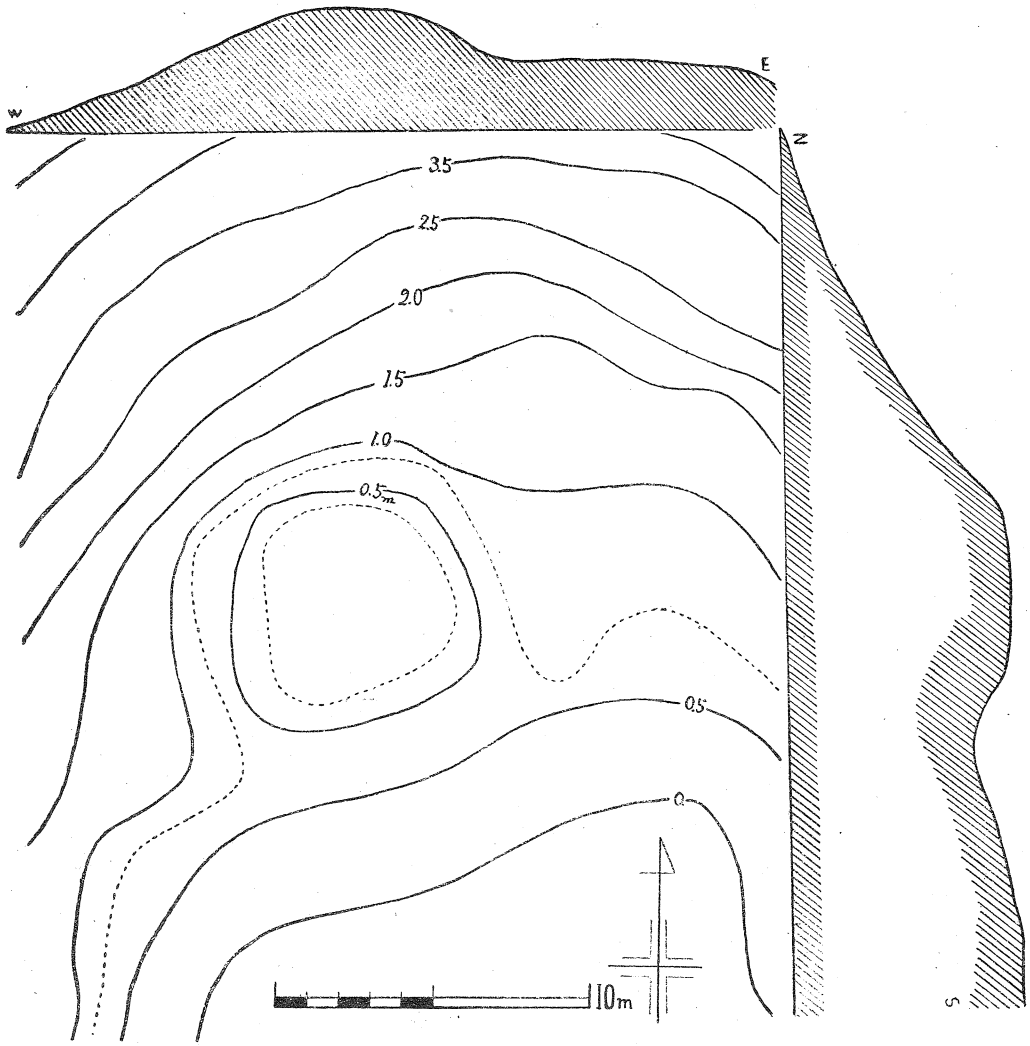
上　発掘開始直前西側

下　発掘終了後南側から望む

第 8 図 版　　門の山第1号墳全形

## 墳丘及び外部施設

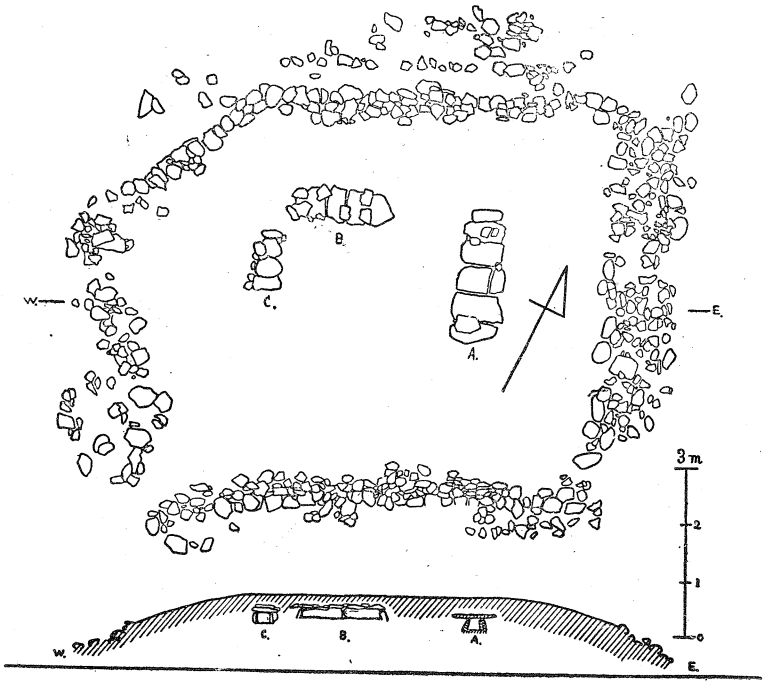
以上のような狀態にあつた古墳は，一見したところ，円墳のように考えられたが，実測の結果は，第35圖に見るような「方墳」の墳形を示した。即ち大体において一辺の長さ約10mの隅丸方形の平面形を，有つており，墳頂は，約5m四方に亘つて平坦となつていた。それが斜面に營造されているため，その高さの算定を著しく困難にしているが，第35圖の断面圖によつて，その狀態を示したからそれによつて理解されたい。




第35図　古墳地形測量図　(Fig. 35)

このような古墳の形態は，前項に一寸觸れたように，長年月の被土に基く変形の結果によるものであり，発掘の結果，我々が見出した葺石列の存在によつて，原形態は可成りに

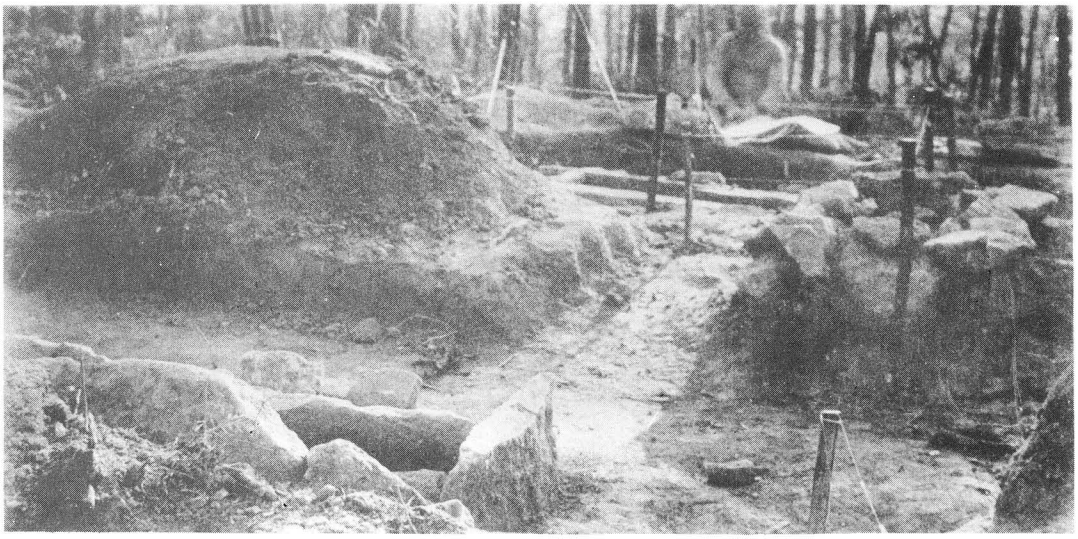
異つていたものであることが判明した。被土は，部分的に可成りその厚さを異にするが，南側及び西側に於いて最も厚く堆積し，約20cm～40cmの厚さを示した。葺石は，既に発掘前から墳頂・墳下の一部に，人頭大の河原石が散見していたことから，注意を引いていたが，封土の南北に亘つて，トレンチを入れた結果，その存在を確認することができた(第9圖版)。人頭大乃至その二倍程の大きさの，河原石を主とした石から成る葺石は，古墳周囲全体を囲繞・配置されていたが，驚いたことには，発掘前に見られた墳丘の形と異なり，野球のベースを想像させる五角形を示す配置であつた。部分的に，可成りの脱落移動が認められたけれども，この五角形の配置が，原形であることは疑う餘地のないところである(第36圖)。その五角形は各角ともに均等な角度を持つ五角形ではなく，正方形に近い四角形の一辺が，張り出して余分の角を作つた五角形であつて，その一邊が，本古墳においては西側に当つている。



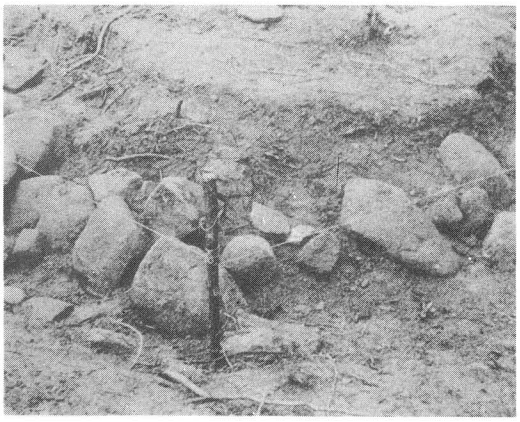

第 3 6 図　　葺石及石棺配置図　　(Fig. 36)

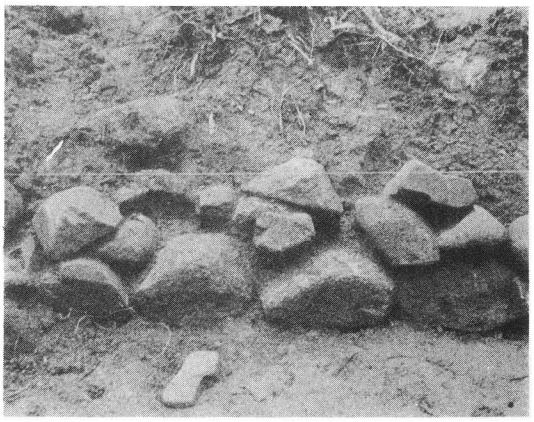
従つて，全体として東西に長く，その長径約11m，南北に短く，その径約8mを測つた。葺石は脱落移動に基く可成りの変形が認められ，その下端及び上端を明確に決定出來難い部分が多いが，墳頂には全く存在せず，約0・7m～約1・3mの巾をもつて，墳斜面に，帶狀にめぐらされていた。又その石材は，大小不揃いの河原石を主とするものであつたけれども保，存のよい部分を觀察してみれば，比較的整然と，密な配列を行つたものであることが判る。

それが墳丘との関係，石棺の関係傾斜角度等々については第36圖を参照されたい。



石棺配置状態　（手前）A 棺（右側）B 棺（人物の下）C 棺





中左　北側，　中右　東側，　下左　西側と南側の交点，　下右　南側の一部

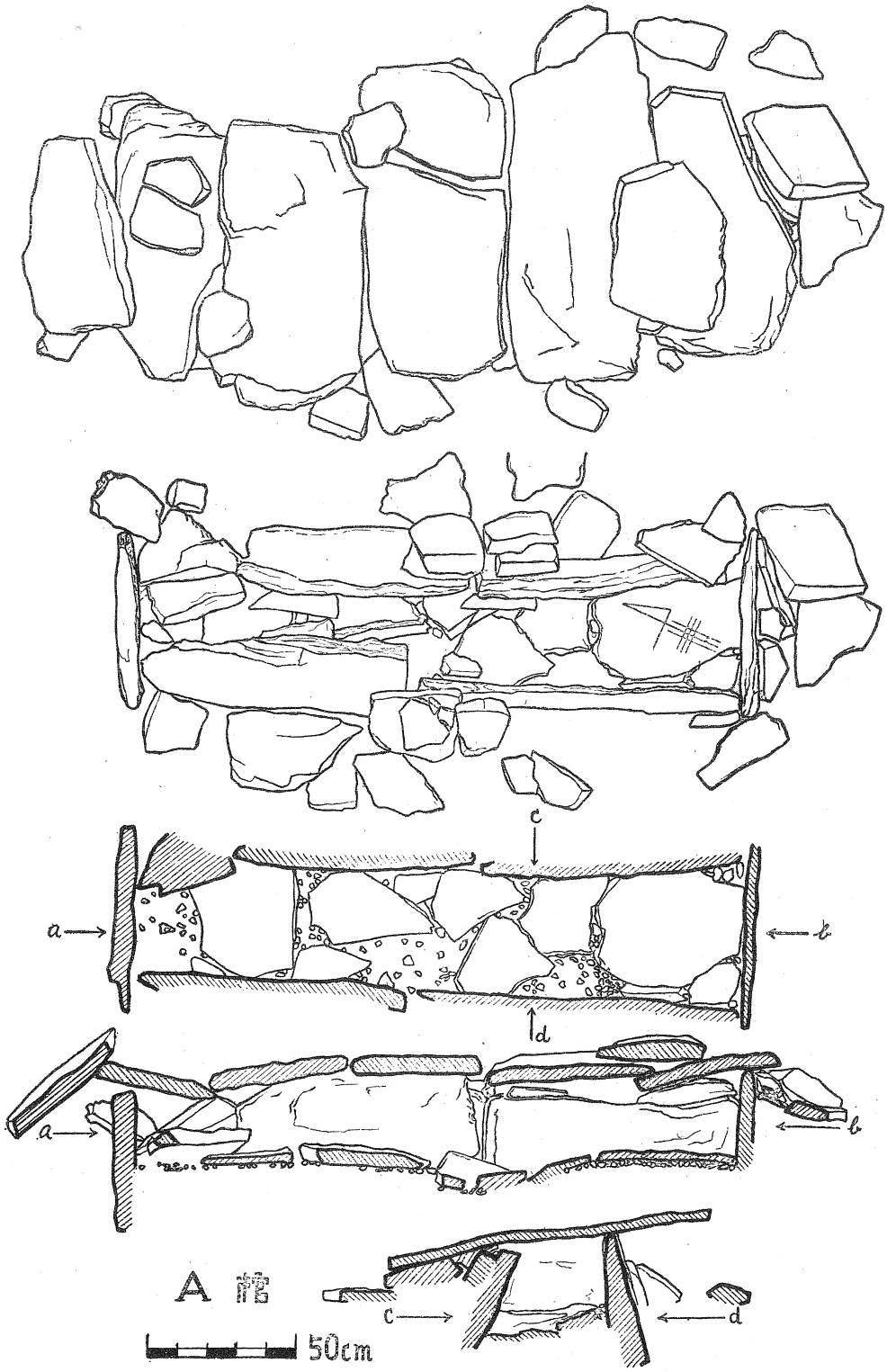
第 9 図 版　　門の山第 1 号墳石棺配置及び葺石露呈状況

## 内　部　主　体

三個の内部主体は，すべて，墳頂において発見された。何れも，組合せ式長方形箱形石棺＝cistの制をとり，墳頂下，極めて浅い個所に，設置されていた。設置位置の相互間の関係は，第36圖及第9圖版上に示したように中心部よりやや北側にあたる墳頂の東側に，南北を長軸とする大形のA石棺が置かれ，それと略々併行に 約4m程はなれた同じ西側に南北を長軸とする小形のC石棺が安置され，更に兩者間の北側に，東西を主軸とする，中形のB石棺が配されるという具合で，恰も，假名のコの字のような配置を示している。先づ各石棺の構造を，A・B・Cの順序で，概記して見よう。

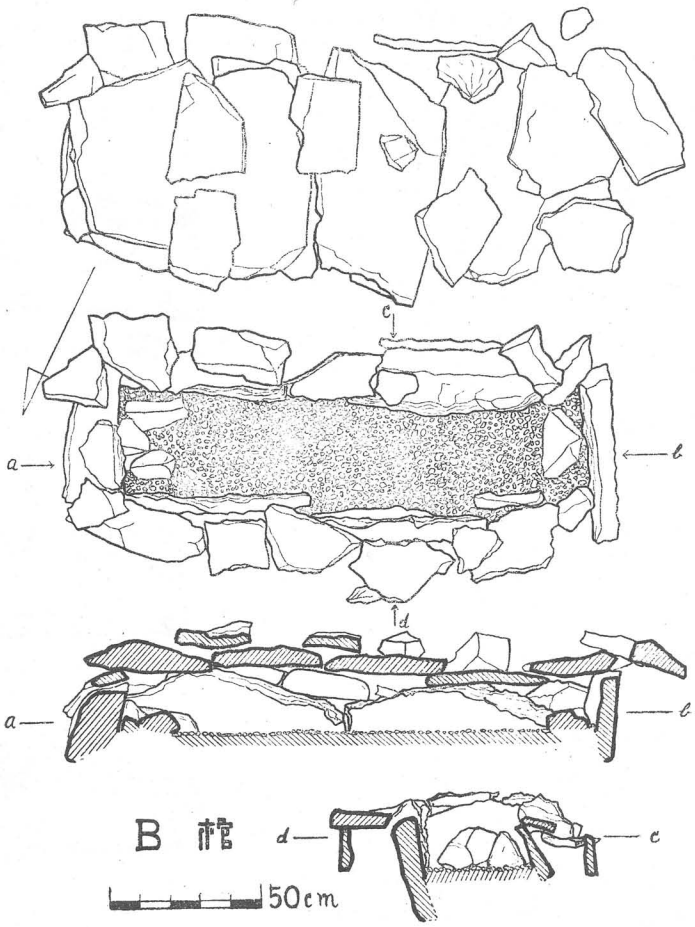
A石棺。　（第37圖及び第10圖版上段）三つの石棺の内で，最も大形である。その長軸は，南北に（北がやや東にふれている）即ち封土の東側に併行して營造されている。蓋石は，五枚の偏平な比較的大形の割石，及びそれに配するに，大小各種の数個の同様偏平な割石を以つて構造されており，一部の自然的な変形と考えられる個所（例えば，中央の蓋石は二枚に割れていた）を除いては，後世における攪乱の痕跡は，認めることが出来ない狀態であつた。側壁は，大小七枚の板狀の割り石で，構成されているが，前後壁は各々同形の一枚の石で作られ，東壁は二枚の比較的大きな石に，一枚の小形の割り石を配して作られ，西壁は二枚の割り石から成つている。その他，その外側の一面に，主として板狀であるが，雜然とした割石が配置されている。これらの側壁の内，東西兩壁の北側にあたる部分は，若干の変形を蒙つているようで，その上部が室内の方向へ向つて，可成りの傾斜で傾むいていた。これも恐らく築造後の長時間にわたる自然の變形と考えられた。発掘時この内部には，流土が充満していたが，排土の結果，底面に以下のような設備が施されていることが判つた。即ち，先づ底面に一重に小砂利が置かれ（しかし，この小砂利は，底面全面に及ぶことなく，南半に主として，敷きつめられ，中央邊及び北半の部分では，極めてまばらに置かれたに過ぎないが）更にその上に，板狀の不整形な割石が，置かれていた。これも，その南半では比較的整然としていることが注意され，遺体の埋葬方向を暗示していた。石棺内から，はつきりした骨は勿論のこと，副葬品の一片も発見されなかつたことは，発掘の経過の項で，述べた所であるが，排土中，先に中宮第一号墳後円部横穴式石室玄室内左側において，認められたような粉狀を呈した白色の物質が，南半部において認められた。恐らく，遺骨の殘骸ではないかと推定される。床石の上記の狀態などからして，南にその頭部を向けて埋葬されたものであろう。尙，底面は平面を呈しておらず，断面圖で判るように，可成り不整然であることが注意される。石室内面における長径約2m07cm，巾は南邊に於いてやや廣く約50cm，中央附近で約 40cm，底石上から蓋石下面までの高さ30cm～40cmを測つた。尙，現墳頂から底面までの距離は，約60cm～約70cm前後を算えた。

B石棺。　（第38圖及び第10図版中段）主軸を，東西に（東をやや北にふつている）むけ，北側葺石に併行して，營造されたこの石




第 3 7 図　A 石 棺　(Fig. 37)

棺は，三者の内中形の大きさである。蓋石は四枚の板状の割石から成つているが，その上部及び東側に若干の小さな板状割石を配している。A石室に比べて，整然と原形を保つているように見えた。壁は六枚の略々同大の板状割石で構成されているが南北の兩側壁においては，更に，小形の割り石が補塡されている。東西兩壁が一枚石であることは云うまでもない。壁の外周には，A石室で見たと同様に，不整形な割り石が，不規則に置かれていた。底面には砂利が全面に亘つて，一重に敷きつめられていたほか，枕石と推定される無加工の石が，東側には，三個一組となつて，西側には一個だけが見出された。発掘時，この石棺内にも土が充満していたが，特に，その土の中に，小砂利が可成り含まれていたことが，注意された。通常の流土にしては變であると思い，盗掘乃至攪乱の形跡を示すものかとも疑つてみたが，上記の様な封土や，蓋石の状態からして，その痕跡を認めるには困難であつた。強いて想像を逞しくすれば，底面に敷いた小砂利の餘剰の分を，蓋石又は側壁間隙に配置した結果，流土と共に漸次落ち込んだものであろうかとも考えられるが，今は，疑問のものとして置きたい。枕石と考えられるものが，東西兩端に，施設されていることは，恐らく，岡山県赤磐郡西山村唐臼山古墳で見たと同様，たがいちがいに，埋葬された二体の被葬者の存在を示すものであろう。石棺内長径約1•60m前後，東邊における巾約40 cm，西邊における巾約 30cm，底面から蓋石下面までの高さは，東邊において約15cm，西辺において約 22•3cm，墳頂から底面までの距離約40～50cmを，それぞれ測つた。

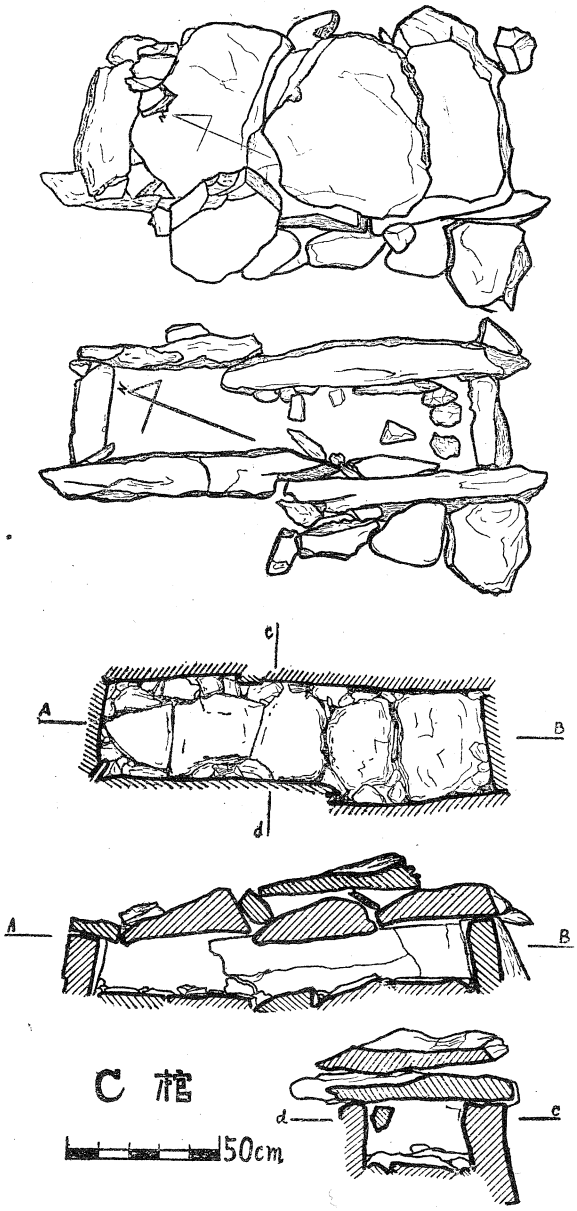



第 3 8 図　B 石 棺　(Fig. 38)

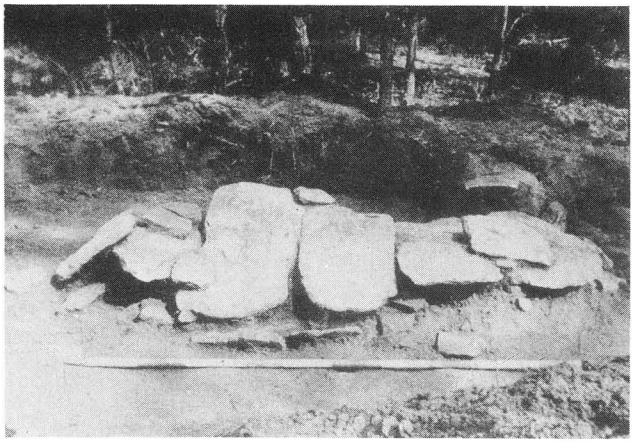
C石棺。（第39図及び第10図版下段）最も小形の石棺でA石棺と併行して，墳丘西側に設けられたもので，最も整然とした作りを有つている。蓋石は4枚の板状割石から成つているが，内1枚は，若干の小割石と共に，

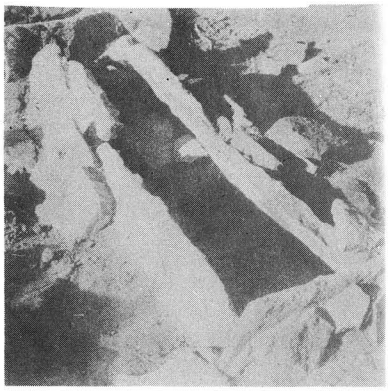
三枚の蓋石間の間隙を塡める目的を以つて，その上部に置かれている。側壁は，A・B兩石棺と畧々同じ構造で，6枚の割り石及びその周囲に配置した若干の小割石によつて構成されている。それらの狀態は，原形を殆ど完全に保存しているように推定される。底面には，A石棺でみたような板狀割石が，A石室よりも，はるかに整然と置かれている。但し，その板石の下部に，砂利の敷設は認められない。明確に枕石と推定されるものは，存在していないが，南辺に拳大の割石が数個見出された。石棺内の長径 1m25cm前後，巾は約 35cm前後，底石面上から，蓋石下面までの，高さ約22cm，墳頂から底石面上までの距離約60cm をそれぞれ測つた。

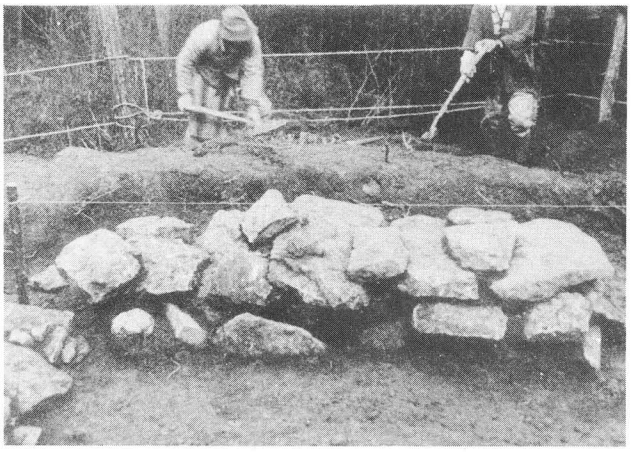
以上のように，同一墳頂に設けられた此等三つの石棺は，何れも，その形制が相等しく，所謂「箱形石棺」の制を，とつている。その細部においても，形の大小，底面敷石の構造，枕石の存否などの若干の相違を除いて，殆んど同一の構造を示している。此等の内，何れの一棺が先づ最初に，墳頂に築成されたかの問題は，最も興味ある事柄の一つであるが，現在のところ，墳頂から最も低い個所にその底面を作つているのが，A石室で，又，最も大形な構造を，持つものも，A石室であるということを，指摘することが出來るのみである。

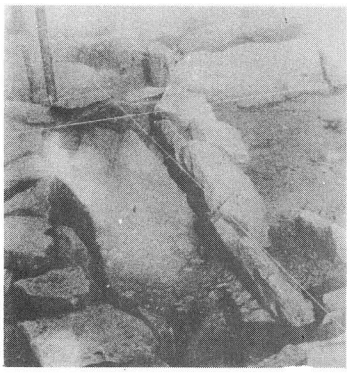


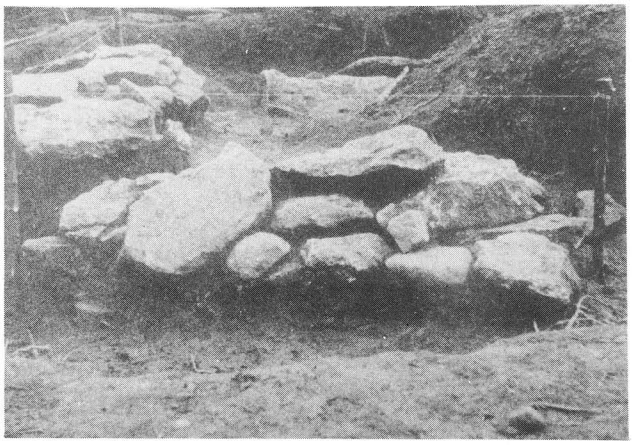

第 3 6 図　C 石 棺　(Fig. 39)

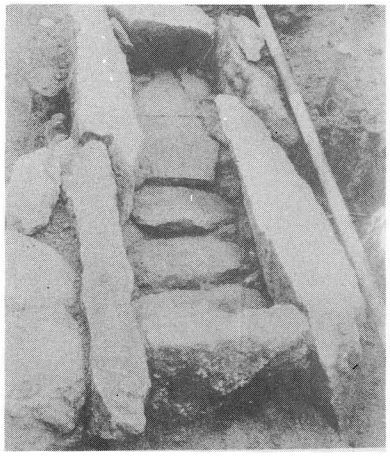












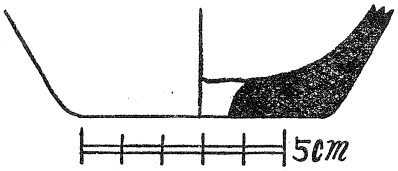
上左右　A棺,　　中左右　B棺,　　下左右　C棺

第 10 図 版　　門の山第1号墳発見石棺

## 發　見　の　遺　物

石棺の何れからも，副葬品の一片すら見出されなかつたことは，先に述べたところである。これに対して盗掘による遺物の消失の結果となす考え方は，前項にも一寸ふれたように，封土，石棺の保存狀況からして，賛成し難いところで，むしろ副葬された品物が，長年月の間に，自然的消失を遂げたか，又は当初から鉄製品のような副葬品を，置かなかつたかの結果と，解したほうが，妥当と思われる。この種の組合式箱形石棺の多くが，殆ど遺物を出土してないことは，從來からも注意されていたところであつて，例えば，筆者等の調査にかかる岡山県赤磐郡西山村安ケ峠古墳においても，完全處女石棺で，且つ，遺骨が，極めてよく保存されているにも拘らず，副葬遺物を，何一つとして認めることが出來なかつたなどの如くである。ともかく，僅小な盛土ではあるが，可成り立派な葺石をしかも五角形という珍らしい形に，配置したこの古墳で，しかも，盗掘の痕跡のないままに，三棺からの出土遺物が皆無であつたことは，今後の研究を進める上に，充分考慮してよい事柄であると思われる。

さて，石棺内の副葬品に関しては，上述のようにいうべきことはないが，先に「発掘の経過」の項で示したように，数ケ所から，土師器又は彌生式土器と考えられる，褐色乃至赤褐色の素燒の土器片が，検出されている。何れも小破片で，全形を覗知することの出來るようなものは，全く存在せず，わずかに西北隅の葺石上から，検出された底部半欠破片を，図示することが出來るのみである（第40図）。それは，褐色を呈し砂粒を含み，甚しく磨滅し，粗面を見せているが，明らかに中央部に貫孔を有つ平底の器形(＝甑)を示している。土師器というより，むしろ彌生式土器に，普通見出される類に近いことが，考えられる。この種に酷似した土質，色を有つ破小片は，他に二，三片封土中から発見されている。他の数片は，明褐色～黄褐色を呈し，器壁も薄く，土質もやや砂粒の含有量が少く通常土師器と称されているものに，同定され得るものであろう。しかし何分，極小破片であるため，確断することは出來ない。




第40図　土　器　片　(Fig. 40)

# 第　五　章

# 祇園畝第1号及び第2号墳調査報告

中　島　壽　雄

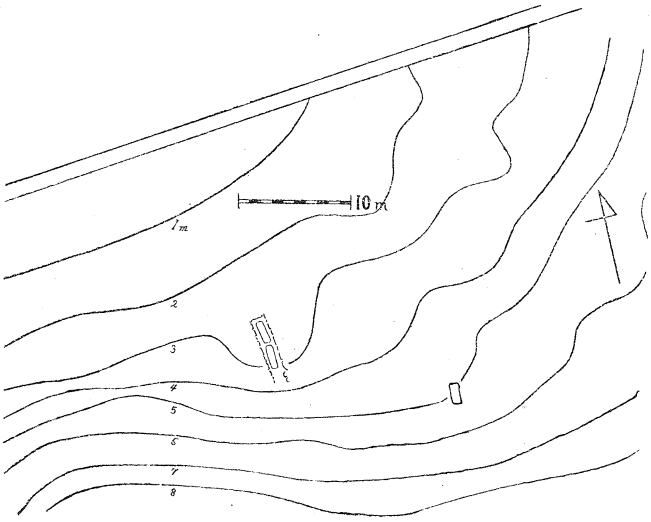
【内　　容】

位　置・墳丘及び調査当時の状態
石　室　の　構　造
棺その他の遺物発見の状況
遺　物　に　つ　い　て

## 位置、墳丘及び調査當時の狀態

中宮及び門ノ山古墳群のある丘陵と相対して，皿川の西岸に嵯峨山がそびえ，その山麓は，現在水田になつている同河畔の沖積地に到るまで，西から東へ下る緩やかな斜面をなしている。南北に長くこの緩斜面は，東西に平行した數條の谷によつて開析され，數條の尾根となつて東に延びているが，そのうち津山市平福の平佐部落に達している一本の尾根の中頃に，祇園畝と呼ばれる，特に平坦な所があり，標題の二古墳は，その南斜面にある（第2図）。そのうち東なるを1号墳それより西30度北方え17m，且つ2m程より高所にあるのを2号墳と呼ぶことにする（第41図）。附近の標高は凡そ190m，皿川附近よりの比高は約90cmであり，兩墳のある斜面の傾斜は $\frac{1}{5}$ で，附近の地類は草本及び小灌木のみ生じている未耕地であつて，現在共有地となつている。祇園畝の近隣には皿川西岸だけについても，西北方300mの所に，著名の「三ツ塚」，南方600m位の所に高尾の古墳群がある（第2図）。

（第41図）の等高線（間隔は1m）の形によつても，うかがえる如く，2号墳では墳丘の形態が明瞭に残つており，現状で徑6～7m，高さ60～70cmの極めて低い小円墳である。之に反して1号墳では現状では墳丘の存在が分明でなく，周囲よりこころもち小高くなつているに過ぎない。附近斜面に岩盤の露出するまで，土壌の流失した所が屢々見られるところから，これらの墳において流土の多かつたろうことも想像できるが，特に多量の封土を盛つたものか否かは，断定し難く，むしろ石室を築くために，地表をうがつた際の排土を盛り上げただけに過ぎないのでは，ないかと思われる。

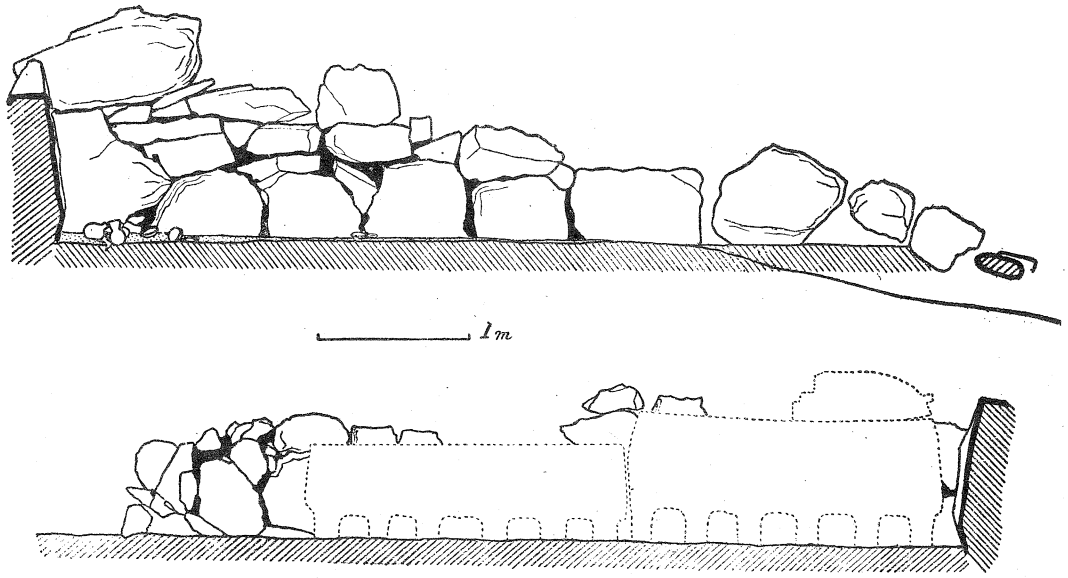


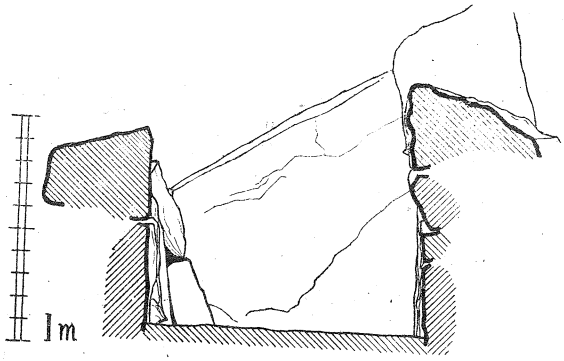

第41図　地形測量図　(Fig. 41)

本墳は何れも中宮及び門ノ山古墳発掘調査當時までに，既に數次の盗掘を被り，破壊著しく，1号墳ではは陶棺の蓋が少量粉々になつて附近に散乱し身もこわれており，2号墳では陶棺内が全くさらわれていて，しかも附近住民の來り觸るゝもの益々多く，之を放置すれば日ならずして潰滅に歸するおそれがあつたので，大半が破壊し去られたものとはいえ，僅かに残る部分なりとも記録保存する必要を認めて，ことさらに発掘することなく残された部分のみを實測調査したに過ぎない。

## 石　室　の　構　造

1号墳においては，石室の僅かな残骸（第11図版中央）を見るほか，既に蓋部が消失し又身の一部も破壊されている陶棺が一個存在したのみであつたが，これとて，原位置かどうかは不明である。しかしその僅かな残骸から察しても，以下に述べる2号墳と類似した構造の石室が，同様な操作によつて營造されたものである。之れに反して2号墳においては石室の構造が，比較的によく残つていた。本墳においては，細長なる石室内に，室の概ね長軸上に，それらの長軸を一致させる如く二個の陶棺が相接して納められている（第42図。）



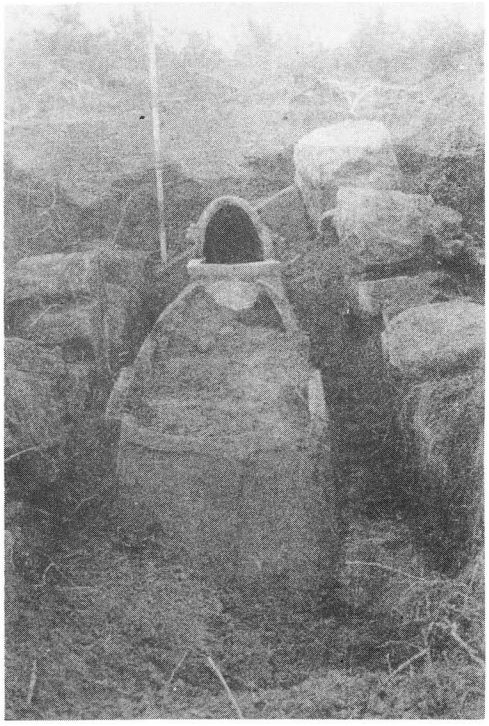

第４２図　第２号墳石室（Fig. 42）

本石室（第42図及び第12図版中央）は，その長軸を，本墳の存する斜面（この斜面は正南面し，その勾配は約 $\frac{1}{5}$ である）の傾斜に正しく沿い，即ち正南に向け，内長径6m，内幅径1・2mの長方形をなし，北及び東，西の三壁を石で築き，現在南側のみを開口している。石室の床は，室内の二個の陶棺のある部分は，斜面を水平に削つて床となしているが，室内でこれより現在の開口部寄りの部分は，前者と同じ高さまで土を斜面に水平に盛つて床としている。北の壁は，底部の幅1m，上縁は直線状で西に傾斜し，高さ東端で1・2m，西端で0・6m，厚さ30cm程の一枚石，及びその西方下部の缺損

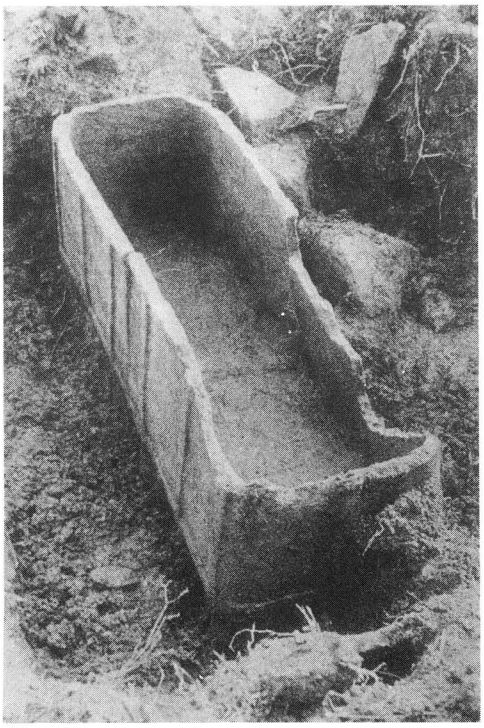
を補う1個の石とよりなる。東壁は2個の陶棺に対する部分のみ堅固に作られ，そこでは最下部を6個の幅70cm，高さ40cm程度の石で組み，その上部を何段かにわかつて，稍小型の石を以つて組んでいるが，北壁に向う程，即ち傾斜面の高所に向う程，大きな石を段數多く積んで強固にしてある。二個の陶棺に對する部分より南方では，壁を作る石も小さく，組み方も極めて疎である。西壁は概ね8個の，東壁のよりも稍小型の石を最下段とし，東壁におけるよりも稍南方まで堅固に作られており，又上縁の高さが稍低いことの他は，東壁と大差はない。唯東壁のみは上方が僅かに内方に向つて，輕い持ち送りを示している。石の組み方から考えて，本石室は横穴式石室に屬するものと考えられる。前記の通り陶棺2個の存する方即ち北方と，現在の開口部寄り，即ち南方とでは，壁，床に破壊された現状から察するのではあるが，若干の差異があり，北が強固にできていたろうことが想像に難くなく，從つて北方が奥，南方現在の開口部が羨道入口であつたと思われる。この入口には遊離した中型の石が3個あつたのみであるが，封鎖裝置があつたのか，特別のものがなかつたのかは，現在確め難い。

本石室で更に注目すべきことは，之が天井石をもたなかつたのではないかという疑いのあることである。天井石の一部と思われる石は，石室内には勿論，墳の近傍にも全く見出されず，附近住民が悉く運び去つたということもないらしい。後世の破壊を考慮しなければならぬとはいえ，東西兩壁の上縁が夫々著るしく平坦さを缺き，且つ兩縁間に高低差少なくなく，又奥壁上縁も前記の通り甚だ斜めであること等から，天井石は初めより設けられなかつたものとも疑えないではない。因みに國立津山療養所建設の際，同様に石室内に陶棺を有する能万寺古墳群が破壊されたが，その時の近藤義郎の調査によれば，それら殆ど全部の古墳が盗掘をうけていたとはいえ，現状で天井石をもつものは一基もなかつたという。さて本石室に仮りに天井石がなかつたとしても，天井をあけておいたとか，或は自身に蓋を有する陶棺であるからとて，棺に直接に土を被せたとかいうことは，いかにも考え難く，何れは天井をふさいだものであろうがその際天井は之をいかにしてふさぎ，又陶棺をいかにして室内に納めたのであろうか。本墳の如く狭小にして，天井石を設けなかつたとも考えられるものにおいては，天井をふさいで室を完成して後に，羨道を通じて棺を室に納める代りに，大き目な穴をうがつて，そこに陶棺をおき，その周囲に石壁を築き，その上に木材等を架して，天井をふさぎ，土を盛つたものとも考えられないことはないが，勿論臆説に過ぎない。更に南北兩棺を同時に納めたか，或は南棺は後に追加安置されたかも考えられねばならぬが，これらは本墳の如き破壊をこうむつたものについては，その解決の手掛りさえも得られないのは当然で，こゝではたゞ，陶棺を有する横穴式石室には，天井石を用いなかつたものもあり得たかも知れないという可能性を指摘するめに止め，今後の調査に待つことにする。

第 2 号 墳 北 棺



第2号墳南棺及び北棺



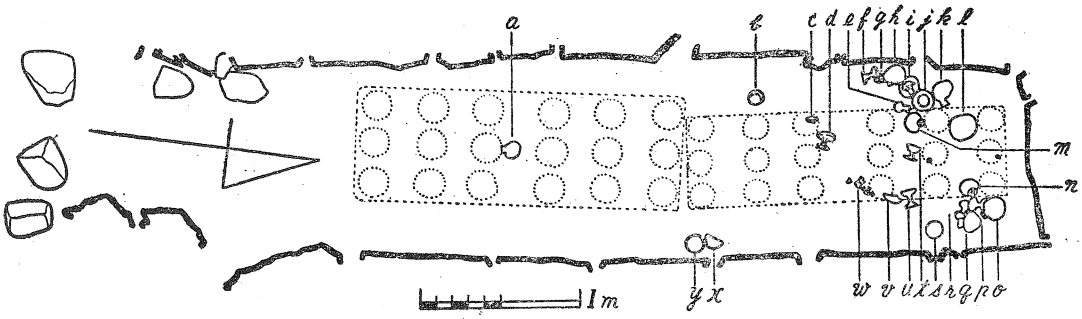
第 1 号 墳 陶 棺

第 11 図 版　　祇園畝1号及び2号墳陶棺発見状態

## 陶棺その他遺物の發見狀況

1号墳陶棺は前記の如く，1棺のみが單獨に発見された。しかも当時既に蓋は完全に破壞亡失し，身も斜面の低い側に向つていた一端に大きな欠損があり，棺内の土も完全に攪乱をこうむつた跡を示して，蓋の零細な破片が，棺内土中種々の高さの所にあつた。棺外も，脚の下縁の高さにおいて，中央列南より第2番目の脚の近くに極めて零細に壞れた一個体に屬するらしい，祝部式土器の破片数個があつた他，棺底の高さの面では遺物を認めなかつた。本陶棺は現狀では水平に置かれ方向は正しく南に向つていて，斜面の傾斜よりは僅かに西に偏つている（第41圖）。

2号墳陶棺は，(第43図，第11圖版下右) 2個が前記石室内に，縱に南北に相接して列び，いずれも略水平をなす同じ床面上にある。但し南棺は，北棺が室の中軸上に殆ど正しくあるのに対して，室の中軸を僅かに外れ，殊にその南端が室の西壁に近接し過ぎている。調査当時北棺内部の土は全く排除されており，その蓋も半分以上を亡失しており，南棺内部の土は古く攪乱をうけた跡を示し，蓋の殆ど全部を失つていた。後記する金環3個(第46圖)は北棺内部から出土したものであるという。




第43図　2号墳石室平面図　(Fig. 43)

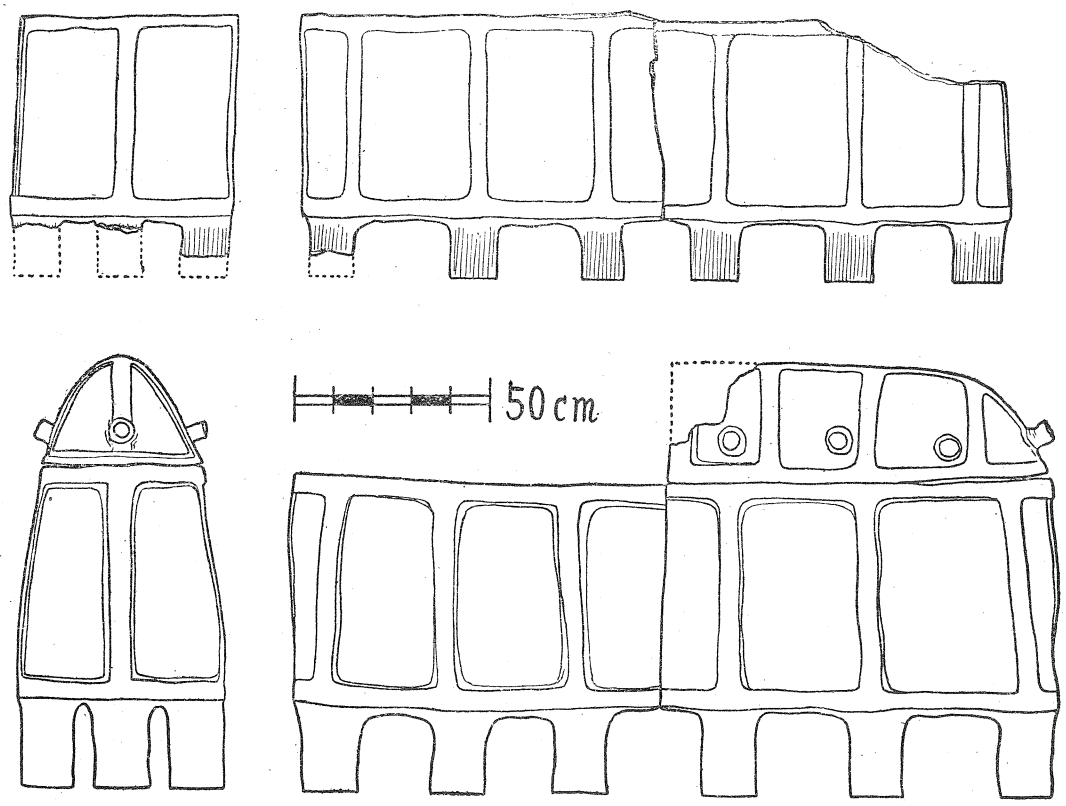
2号墳における遺物発見の狀況は，右表と（第43圖）とで明瞭であろう。同一石室内にありながら，南棺に伴う遺物が平瓶1個のみであるのに対して，北棺にはかように多数の遺物が伴つていることは，何等かの意義があるかも知れないが，今俄かに決し難い。棺外にある之等の遺物は，必ずしもすべてが石室床面に整然と立ちならんで発見されたわけではないが，石室内えの水や泥の浸入によつて顚倒したろうことが充分考えられるし，何れにしても棺底下或は底外の石室床面にならべ置いた被葬者えの供物であることは確かである。

| No. | 遺物名 | No. | 遺物名 |
|---|---|---|---|
| a | 平瓶……(祝部) | o | 平瓶……(祝部) |
| b | 脚付盌……(祝部) | p | 高坏……(祝部) |
| c | bの破片…(祝部) | q | 平瓶……(祝部) |
| d | 高坏……(祝部) | r | 碌……(祝部) |
| e | 碌……(祝部) | s | 小形坏(蓋)(祝部) |
| f | 高坏……(祝部) | t | 高坏……(祝部) |
| g | 高坏……(祝部) | u | 高坏……(祝部) |
| h | 高坏……(祝部) | v | 坏片(身)…(祝部) |
| i | 高坏……(祝部) | w | 坏片(身)…(祝部) |
| j | 台付坩……(祝部) | x | 坏片(身)…(祝部) |
| k | 平瓶……(祝部) | y | 坏 (身)…(祝部) |
| l | 坏……(土師) | (遊1) | 坏(蓋)……(祝部) |
| m | 平瓶……(祝部) | (遊2) | 盌……(祝部) |
| n | 坩……(土師) | | |

## 遺　物　に　つ　い　て

### 陶　棺

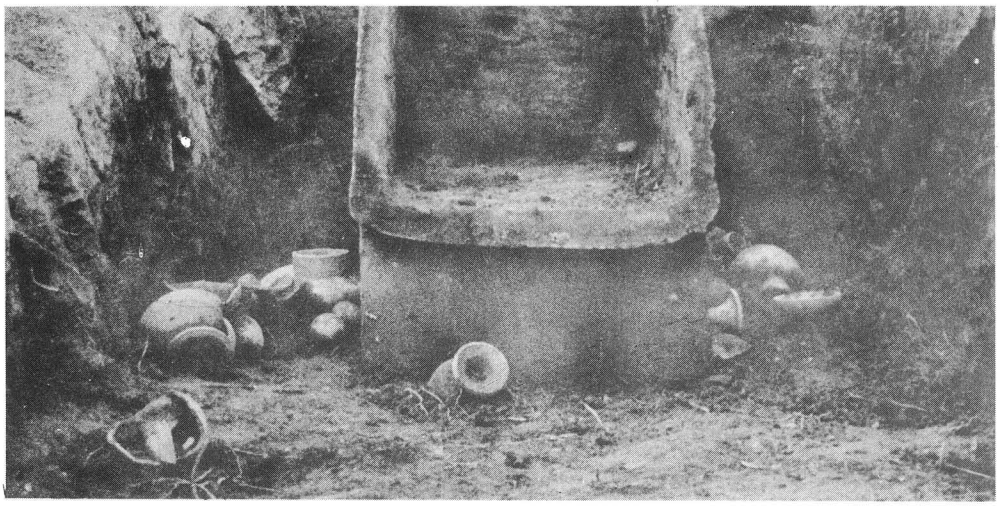
1号墳陶棺（第44図上，第11図版下左）はその蓋亡失して，身について知るのみであるが，全長1•83m，幅0•59m，棺身の高さ0•69m，そのうち脚だけの高さ0•15m，上縁の隆起帯を含めての厚さ4•3cmで，壁は四面とも略垂直であるため，脚を除いた部分の棺身は略々直方体をなしている。脚は3行6列，計18本で，中空の円筒形をなし，厚さ2cm，表面に僅かに刷毛目がある。身の外側面には上下両縁に沿つて全周をとりまく，幅4cm，高さ1cm 位の隆起帯がある他，側面中央に

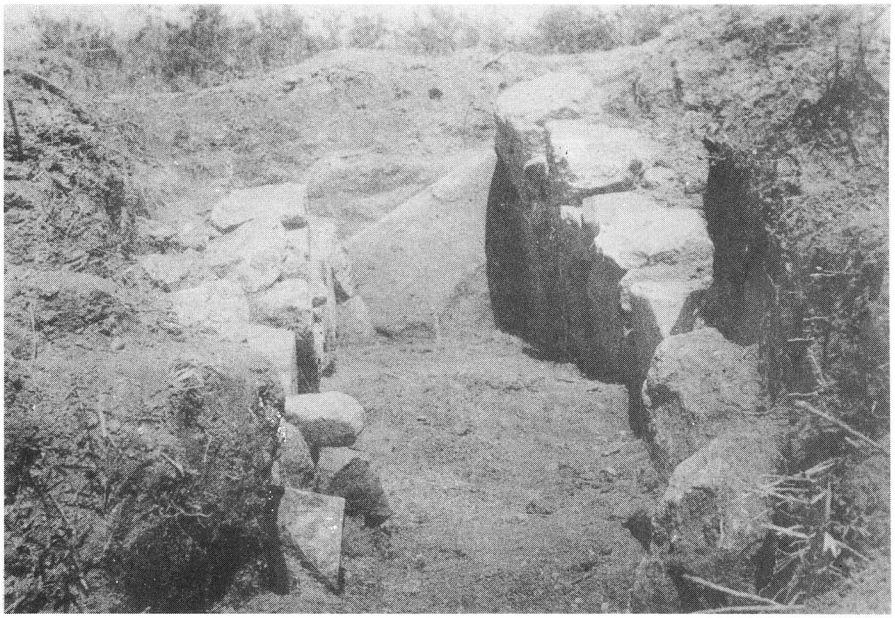



第44図　陶　棺　(Fig. 44)

1本，正面に6本の鉛直の同様な隆起帯があつて先きの上下両縁の隆起帯間を結び，側面を2個の，正面を7個の区劃に分けられている。しかしてこれら鉛直の隆起帯は概ね各脚軸の延長上にあつて，棺身の強さを増すことに役立つている。身の内面は平坦且つ無文である。身と蓋との接合部は單に一文字で，何等の装置はない。

2号墳北棺（第44図下，第11図版上，第12図版上）は，蓋の半分及び残りの半分のうちの前者に接する部分を若干欠失しているが，略々全形を復原し得るものであつて，身の平面形の両端は円くはないが，所謂亀甲形の陶棺で，全長1•98m，幅0•55m，高さ1•13mで，身の正面壁は上方にゆく程内方に傾いているので，長軸に直交する横断面では上すぼまり

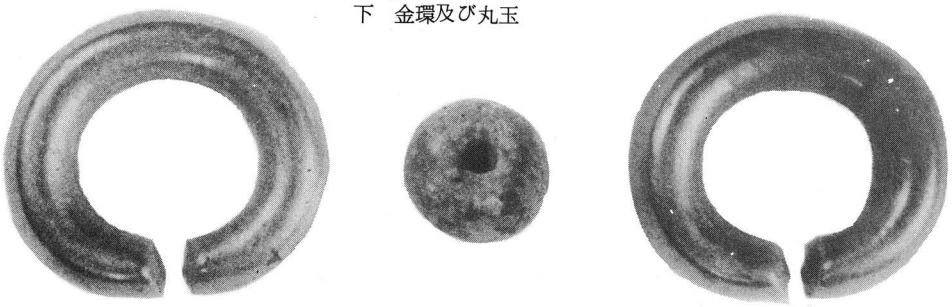




上　北棺半身及び附近遺物発見状況

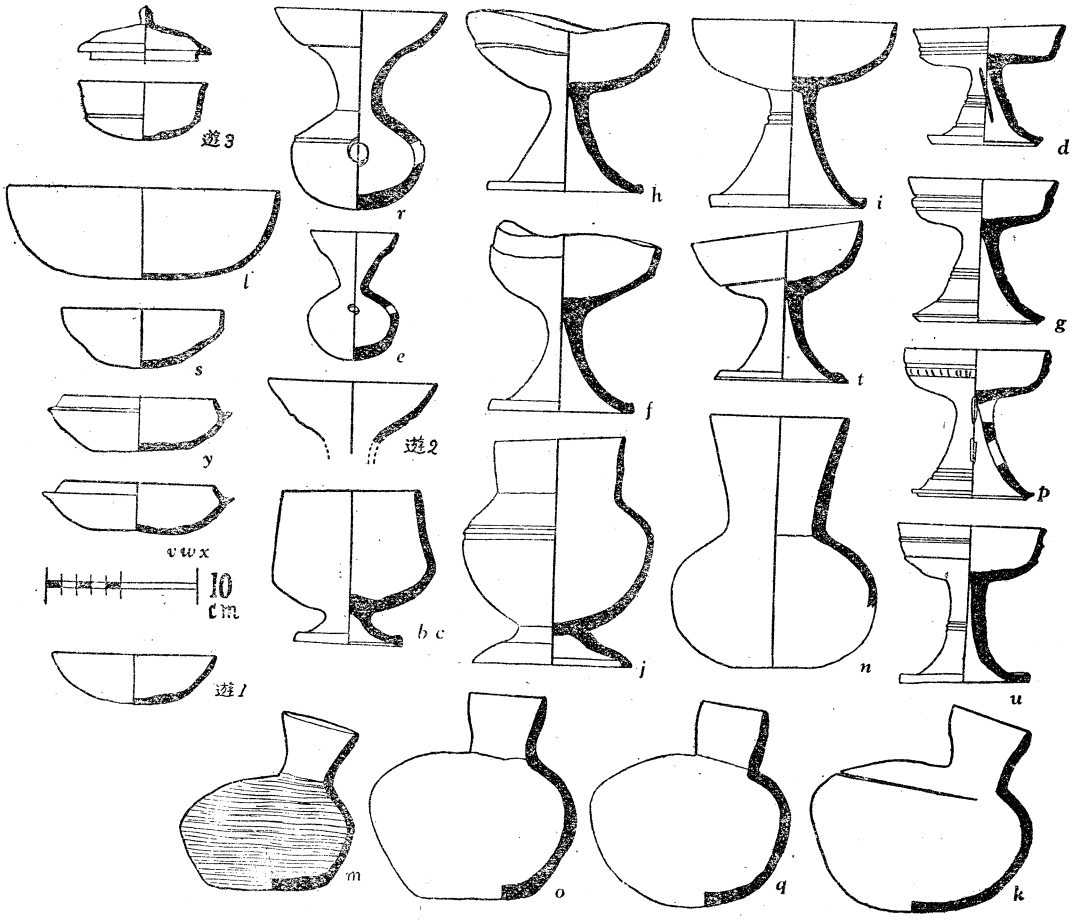
中　石室

下　金環及び丸玉



第 12 図 版　　祇園畝 2 号墳石室・遺物出土状況及び遺物

の形を呈し，身の上縁での幅は0・43mとなつている。身の下底につく中空円筒状の脚は3行6列，計18本，高さ22cm，表面は，へらで整形され，刷毛目は見られない。脚の内面は指又は掌を以て横に撫でて整形した跡がみられる。身の外側は，1号墳棺と同様の，幅5cm，高さ1cmの脚軸延長上にある縦の隆起帯及び上下両縁をとりまく隆起帯があつて，棺身の強化を図つている。壁の厚さは上縁の隆起帯のある所で4・5cm，帯のない所で3・5cmであり，隆起帯に囲まれた區劃内は撫でて整形した跡を示している。身の内面は上縁は




第 4 5 図　土　器　類　(Fig. 45)

内方に僅かな隆起をもつている。身の内面は全く無文である。棺身側面上部の中央垂直の隆起帯が，上縁の隆起帯に交わる所に，直径1cmの程の輪形の凹みがあるが，その意義については，未だ考え及ばない。棺蓋は長さ1・95m，幅43cm，高さ29cm，長軸に直交する横断面は僅かに左右相稱を欠いているが，拋物線状をなし，縦断面は緩やかな低いかまぼこ形をなしている。蓋外面には下縁全周及び縦の相称面に沿つた隆起帯があり，又蓋の各半分にはその横断面に沿つて4本の隆起帯があつて，前二者の間をつないでいるこの4本の隆起帯は，棺身の場合と異り，脚軸の延長上にあるというわけではなく，又蓋の両半

分の接合面に接している縁にも設けられている。縦の相称面に沿つた隆起帯は，側面下縁の隆起帯にまでは達することなく，側面中央にある1個の突起に接して終つている。かゝる突起は側面のみならず，正面においても，隆起帯によつて囲まれた各區劃に1個宛設けられていて，その位置は該區劃内で下方，且つ蓋の半分毎にその棺端の方に偏している。これらの突起は直径4·5cm，高さ5cm程の円筒形をなしている。蓋の厚さは周辺隆起帯のある所で4·5cmである。蓋と身との接合面は單純な一文字である。

2号墳南棺は蓋を欠き，北棺に比して高さ低く，幅廣く，形態は1号墳棺に全く酷似しているので，詳細な記述は省略する。

陶棺はその大形なものは一般に身，蓋共に中央にて，長軸に対して横に切斷して四つの部分として焼き上げるのが普通であるが，この中央の切斷の方法を知るために，以上三棺の各切斷面を詳細に觀察した所，實際に觀察できたのは，棺身に限られているが，三棺共明らかに整形後に切斷されたものであつた。切斷面に見られるジグザグがつねに完全に嚙み合うのも当然のことである。ジグザグは或は意識して之をつけたものかも知れないが，確かではない。

その他の遺物

1号墳 坏（蓋）（第45図遊1）祝部式，棺外で，棺底より高い面に遊離して発見されたもので，口径10·7cm，高さ3·3cm，砂粒を多く含み，表面の平滑さを欠くが，焼成良好，作りは上等とはいえない。

1号墳鉄製品　前記坏と同様な状態で発見された19個の小鉄片で，何れもその断面が，大は縦9mm，横5mm，小は縦5 mm，横4mm程度の矩形をなす棒状のもので，いずれも小破片であり，且つ接合し得ないため，その全形及び用途を推定し得ないが，破片によつては直なるもの，直角にまがるもの，折り返してあるもの，その先が更に直角にまがれるもの等があることは注目すべきである。

以下記載する2号墳出土各遺物に冠したローマ字は，第45図に附したものと一致している。但し(a)のみは圖を省略してある。

(ε) 平瓶　祝部式，通高推定12·5cm，体部の長さ13·5cm，体部はその高さに比し，その長さが大きい方である。口の一部に欠損あり。焼成稍良好，無文であり，釉が体部及び口に極めて薄く吹出している。

(b,c) 脚付盌　祝部式，通高概ね10·5cm，口径9·7cm，石室床面上，棺底外にあつた器の大部分Bと，1本の棺脚内にあつたその破片Cとを接合し得たもので，体部は水平をなさず，歪んで傾斜している。体の底部は丸くて浅いが，之に屈曲して接続する上部は眞直で，上方に向つてすぼまつている。

(d) 高坏　祝部式，通高8cm，坏部の径10cm，小型精巧であるが，土質は砂粒を稍多量に含み，焼成もさほどよくない。坏部は焼損じのためか水平よりは僅かに傾き，2條の沈線を有する。脚には中央に2條，下方に1條の沈線ある他，縦より僅かに斜めに，2cm程の相連つた2本の貫通した切込みが焼成前に施されている。

(e) 甕　祝部式，通高8·7cm，体部の径5·1cm，口縁の径6·1cm，砂粒を多く含み，表面平滑さを欠ぐが，焼成は良好，口は漏斗状に開いているが，上 $\frac{1}{3}$ 程の所で段を作り大きく開いている。最も小型の器である。体部上方，肩の部分に貫通している孔の径は

7 mmであり，孔の方向は器壁に直交せず，略々水平である。

(f) 高坏　祝部式，通高12cm，坏部の径11.3cm，稍大型のもの，比較的砂粒を多く含み，平滑でないが，焼きしまつている。坏部は著しく歪曲し，ために口縁及び1條ある隆起線が甚だ不規則な波狀を呈している。

(g) 高坏　祝部式，通高9•5cm，坏部の径10cm，脚が大きく，坏部に2條の沈線，坏の中央及び下方に夫々2條及び1條の沈線がある。焼成よく，脚の下部は所々に釉の吹出しがある。

(h) 高坏　祝部式，通高約12•5cm，坏部の径13•5cm，稍大型の器で，土質は砂粒を多く含むが，焼成良好，坏部に1條の沈線あり。坏部は著しく歪曲して，口縁は大きな波狀のうねりをもつている。焼成時の失敗によるものであろう。

(i) 高坏　祝部式，通高12•5cm，坏部の径13•8cm，本墳発見品中では最も大形の高坏で，砂粒多量に混ずるも，焼成良好，脚部に變化なく，唯脚の上部に平行2沈線あるのみ。

(j) 台付坩　祝部式，通高15cm，体部の径13cm，焼成稍不良，僅かに張つた肩をもつ体部に，上方に向い僅かに開き且つ口縁部も極めて僅かに外反する所の，比較的長い筒形の頸がつき，両者の境界は，明かになつている。体部の肩には，平行した2沈線がみられる。台は比較的に大きい。

(k) 平瓶　祝部式，通高14cm，体部の長さ15cm，体の高さ小で，長さ大きな器，無文にして，口の附いている方と反対の側の，体の上方の大部分に，1條の沈線が施されている。上半は灰白色，下半は祝部式特有の色をもち，焼成良好ではないが，体の上部には吹出した釉の剝離した跡がある。

(l) 坏　土師，口径18cm，高さ6cm，厚さ4mm，大形粗製の器であるが，肉は比較的薄く，斷面は稍平たい，底から口縁に到るまで緩やかな孤を畫き，その間に角がない。勿論無文である。

(m) 平瓶　祝部式，通高12cm，体部の長さ11•6cm，口縁の作る面が器の左右相称面に対して直交せず，稍傾いている。

(n) 坩　土師，本墳発見品中最大の土器で，通高17cm，体径14cm，体は高さ低く，径大で，蕪形をなし，之に極めて僅かに外反するが，殆ど眞直といつてよい断面をもつ，漏斗狀に上方の開いた頸がついている。体と頸の境は器の表面で緩かな移行であるが，内面では屈曲をなしており，体の底面への移行は滑かで角がない。色は赤褐，全面にひび割れ甚だしく，無文，土質は僅かに砂粒を混えている。

(o) 平瓶　祝部式，通高，体長共に13•5cm，体の高さ大きな器で，稍厚手，焼成比較的に良好である。

(p) 高坏　祝部式，通高10cm，坏部の径9•7cm，坏部は2條の平行沈線間に，多數の縦に近いが，僅かに斜めの引き掻きを施し，脚の下方にも2條の平行沈線をつけている。その他脚の前後両面に上下に2本の，細長な縦の脚壁を貫通した孔をあけている。焼成良好。

(q) 平瓶　祝部式，通高13•5cm，体部の長さ13.5cm，灰白色，無文で焼成良好，口縁の円形が歪んでいる。

(r) 瓶　祝部式，通高13•5cm，体の肩部及び口部に各1條の沈線あり，焼成稍良好。

(s) 小形坏(蓋) 祝部式, 高さ4cm, 径11cm, 砂粒を多く含み, 表面平滑ならず。

(t) 高坏 祝部式, 通高概ね10cm, 坏部の径11・5cm, 坏部それ自身には歪曲がないが, 脚との接続に歪みあり, 坏部は著るしく傾斜せり。坏部下方に1條の沈線を有す。

(u) 高坏 祝部式, 通高10・7cm, 坏の口径9・8cm, 坏部には上方に平行2沈線, 下方に1沈線, 脚中央部に平行2沈線あり。本高坏の脚は, 本墳発見の他のすべての高坏の脚が, 坏部との附着部から直ちに下方に開いているのに対し, 該附着部からかなり下方まで筒形を保つてから後に開いている。焼成良好坏部には釉の吹出しが見られ, 又若干のひびわれがある。

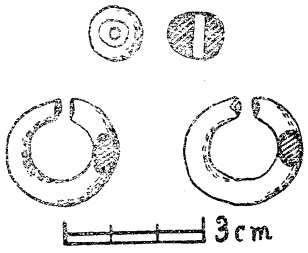
(x,w,v)坏片(身)祝部式, 破片を接合して原形を復原した結果, 径13cm, 高さ概ね3・5cm, 作りはよくない。砂粒を多量に混じて, 焼成また不良。

(y) 坏 (身) 祝部式, 径12・5cm, 高さ3・8cm, 砂粒の混入多く, 焼成亦不良。

(遊2) 盌 祝部式, 2号墳室内南寄り室の床面より高く, 遊離して発見されたもので, 蓋を有し, 之をかぶせた時の通高6・8cm径88cm, 体部は下方寄りに沈線1條あり, こいで, 浅い丸底が角を作つて, 胴に移つており, 胴は上方に僅かに開き, 更に外反する口縁に到つている。蓋部は断面が中頃で角を作つて凸出した二段の傾斜をなし, 上部中央に乳嘴状のつまみを附し, 口唇の内面から出た張り出しは, 体部口縁に嵌入する如くなつている。

金環及び丸玉 (第46圖及び第12圖版下)

金環は殆ど等しい2個よりなり, 外径2・4cm, 内径1・4cmにして, 之等は長径9mm, 短径5mmの楕円形の断面を有する棒を叩いてまるくしたものらしく, 環の一部に2mm位の切目がある。材は金銅に金を薄くかぶせたものの様である。丸玉は径1・2cm, 厚さ1cmの作りのよくないもので, 厚さの方向に内径2mmの穴を貫通している。穴は一方の出口が廣くえぐられている他は, 内径一定して美しくうがたれている。色は薄茶色, 石質は詳かにしていない。



第46図 金環及玉 (Fig.46)

# （附） 中宮第1号墳出土人骨について

中　島　寿　雄

【内　　容】

人骨出土の状況
第1号人骨
性及び年齢
保存状態
観察及び計測事項
第2号人骨

## (附) 中宮第1号墳出土人骨について

### 出土の狀況

第3章　中宮第1号墳発掘調査報告中，石室内遺物出土狀況の項において述べられた如く，該墳後円部横穴式石室内で，一体の人骨が発見された。この人骨は右壁より 30cm程離れて，壁と略々平行に，右の上下肢が整然とおかれ，又発掘作業中は勿論動かしはしていないが，古く行われた攪乱の形跡を認め，現狀では奥壁より1m程の所に下顎骨が見出された(第10図第5図版右上)。既に全身骨格の多くの部分を失つているが，之が仰臥伸展されたものであることは誤まりない。束ねられた刀3口が，その右上肢に添つて置かれ，該上肢はそれを抱く如き形をなしていた。人骨は室内床面の発掘精査の時に，既に他の調査者によつて，略々その全貌を露呈されており，本文の筆者はその後これを取上げたのである。

本人骨水洗中に一見，これと個体を異にする歯牙数本を発見した。従つて，前者を第1号，後者を第2号人骨と稱することにする。

第2号人骨は前記歯牙のみで，他の骨を伴わず，その歯牙は第1号人骨の下顎附近よりの採集包みの中にあつたもので，概ね該下顎骨の附近にあつたものである。1号人骨がその右側上下肢の整然と残つているのに反し，左側上下肢は，これに欠損部多く，且つ位置の乱れが見られたことから考えて，第2号人骨は後から1号人骨の左側に，之に接してその遺骸を安置されたもので，しかもその大部を消失したものと推定し得るであろう。何れにしても，発掘現場において，この歯牙を1号人骨と辨別採集し得なかつたことは，遺憾であるが，事情止むを得なかつた。

次に本石室内における遺物出土の狀況を見るに，刀を抱いた1号人骨が右壁に沿つて置かれてあつたのに對して，之に對向する左壁においても，それに沿つて，一方，同様な刀1口及びそれに続く他の1口があり，且つ他方，前者より25cm程の所に，これと略々平行して，別に小さい刀1口及びその続きに，刀子，更にくつわ等があつて，之等両者の間には，1.5m程の長さにわたつて，大きな遺物の見られない部分がある（第10図，第5図版右中)。発掘者の言によれば，この部分には点々と白い粉が存在したことを，認めたという。これら遺物の配置及びこの白粉から考えて，おそらくこの空所にも人骨が存在したものと想像しても誤まりないであろう。従つて実際の骨の遺残は採取していないが，今假りにこれを第3号人骨と稱しておく。

石室内のその他の部分においては，人骨の存在した形跡は認められないので，本石室には1乃至3号の三体の遺骸が埋葬されたものと想定される。後に詳記する如く，1号人骨は壯年の男性に屬し，2号人骨は性は決し難いが，年齢は12～3才，童年第3期に屬することが認められる。第3号人骨について，直接には勿論知るよしもない。さてこの三者間の関係はいかなるものであろうか。既記の如く，2号人骨は，1号より後に葬られたものと考えられるが，これは兒童のこと故，ことさらに厚く葬ることもなく，便宜室内の空所に置かれたものではなかろうか。従つて重要なことは1号及び3号間の関係であり，3号に実際の遺骸のない爲，確言すべきではない

が，その遺骸を納めた木棺等があつたとして，その周囲に置いたろうとも考えられる所の，諸遺物の種類，その整然たる配置，及びその良好なる保存から想像をたくましくするならば，3号は同様に男性で，おそらくは壯年以上のものに屬し，且つ1号より後に葬むられたものと推定される。2号の兒童を葬り置くに際しては，假りに左壁寄りに充分な空所があるのに，ことさらに1号に觸れる如く，或はこれをこわす如くして置いたことは考え難く，2号は3号よりも後に，1，3号間の空所に便宜安置したものと考えられる。要するに1乃至3号の三者は，第1，第3，第2の順を追つて埋葬されたものであり，しかも何等かの理由で，そのうち最も古い第1号のみが，最もよく保存されたものと推定してよいのではなかろうか。各号人骨は，何れは極めて近親者のものであろうが，3号人骨も男性に屬したとするならば，2号は兒童故しばらく論外として，本室に埋葬された二人の大人が共に男性であつたことになる。一般に古墳時代後期における女性の社会的地位については若干の私見があるが，今はそれらに觸れることなく，單に本石室における事実，及びそれが可能ならしめる限りの想定のみを記すに止めよう。尙本墳前方部の竪穴式石室には人骨の殘存を認めなかつた。

**第1号人骨**　男性壯年

**性及び特徴。**　頭骨片の厚さはさほどに大ではないが，眉上隆起强く，齒牙稍强大，四肢骨は，骨端欠除して不明であるが，骨体は太くして厚く，筋肉附着の粗面大にして粗糙强く，男性に屬するものと認められる。又齒牙の咬耗は概ねマルチンの2度或は1度で，檢し得た唯一つの縫合たる，冠狀及び矢狀縫合のブレグマ部に癒着を全く認めず，壯年に屬するものと認められる。

**保存狀態**　一般に保存甚だ不良であり，腐朽甚だしく，古墳人骨特有の脆弱さが著るしい。零細な破片のみ多く，頭骨は殆ど復原し得ず，四肢長骨も辛うじて接合し得たのは，骨体に限り，骨端は何れも失われている。色は骨片によつては灰白で，これらは稍堅緻であるが，他のものは，殊に体の右半，刀に沿つていた部分のものは，茶褐色を呈し，脆さ甚だしく，表面に大小の鉄銹が附着して，强いてこれを除こうとすれば骨片自身の剝離するもの多く，又植物体の分泌物によるものであろうか，Dendriten 狀の褐色の模様が縱横についているものが多い。

頭骨として，その部位の明瞭なものは，前頭骨の中正線に沿つた4片，左頭頂骨前頭角，同頭頂面の一部，左側頭骨顎節結節の近傍，右下顎体の$\overline{7|}$より$\overline{4|}$に到る部分等の各破片で，その他はいずれも1平方糎未滿程度の零細，且つもろき破片少量であり，接合し得ない。齒牙は下に丸を以て囲んだものが存している。

| | |
|---|---|
| 8 ⑦ ⑥ 5 ④ 3 2 ① | 1 2 3 4 5 ⑥ ⑦ 8 |
| 8 ⑦ ⑥ ⑤ ④ ③ 2 1 | 1 2 ③ ④ ⑤ 6 7 8 |

脊柱及び胸廓の骨は全くなく，上肢帶を欠き上腕骨は左右共，上下骨端を欠損し，右前腕骨は橈骨尺骨共に上下端を失い，左前腕骨はなく，手骨は全くない。寛骨も存せず，大腿骨は右のみ稍長い骨体片のみ，左は短い骨体片のみあり，脛骨及び腓骨は左骨体下方の小片のみあり，足骨を全く欠いている。

## 觀察及び計測事項

頭骨は前頭縫合及び同鼻上遺残なく，前頭骨前面の厚さ5mm，頭頂骨前頭角の厚さ5.5mm，下顎骨体は稍強く，極めて輕微の下顎隆起あり。齒牙は概ね齒根端が壞失しており全長を計測し得ない故，齒冠部における計測値のみを掲げる。但し冠長は，同じ表に示す咬耗で明らかな通り，咬耗の結果が表われている。齒根の数は欠損の爲，知り得ないものが多い。

| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 咬耗の度 | 2 | | 2 2 | 2 1 2 | 1 1 | 2 2 2 | 1 2 1 | |
| 冠長 | 12 | | 10 10 | 8 7 8 | 7 8 | 6 6 6 | 7 7 6 | |
| 冠幅 | 9 | | 7 7 | 7 7 7 | 6 7 | 13 12 12 | 9 10 11 | |
| 冠厚 | 8 | | 8 9 | 11 8 8 | 8 8 | 11 12 11 | 12 12 10 | |
| 咬頭數 | | | | | | 5 4 4 | 4 4 4 | |
| 齒根數 | | | | 1 2 1 | | 3 3 2 | | |

四肢骨。上腕骨は右は鉄銹附着して計測不能，左の骨体破片について，その中央の高さを推定して，骨体中央最大径22mm，同最小径17mm，同断面示数77.4，中央周径60mmの値を辛うじて計測し得た。現代日本人に比し，稍々偏平であるが，石器時代人の扁平には遠く及ばないものである。

尺骨は右について，前後径12mm，横径16mm，斷面示数75を得た。

橈骨は同じく右について，骨体横径16，同矢狀径13mm，断面示数は81.3である。

大腿骨は骨体中央を右について推定して，その矢狀径28mm横径24mm，斷面示数85.7中央周径82mm，を測つた。粗造線強きも，柱狀の程度は著るしくない。

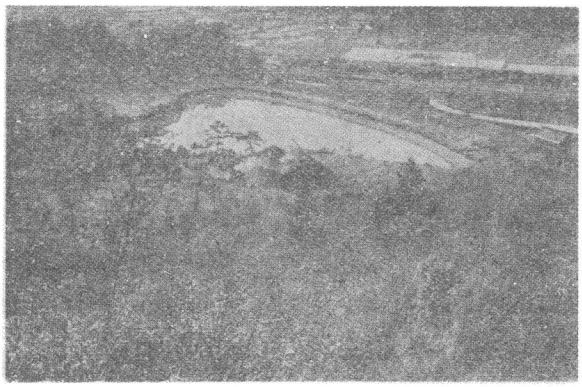
脛骨及び腓骨の中央諸径は計測不可能で，又特記すべきことはない。

## 第2号人骨

齒牙のみであつて，次表中丸を以て囲みたる10本のみが採取された。すべて永久齒で，保存著るしく不良，齒根の畧々存するものは 3| のみで，他はいづれも齒根を失い，殊に 6| 4| 6| 7| は象牙質を全く失つて單にエナメル質のみとなつている。全体に小形，繊弱であり，咬耗は殆ど見られず，概ねマルチンの0度であり，僅かに第一大臼齒，犬齒等に輕度の，即ちマルチンの1度のものがみられる。性は決し難いが，年齢は童年第三期，くわしくは十二，三才に屬するものと認められる。大臼齒における咬頭数は，左（4,4,?）右（?4?）である。6| にはカラベリー氏結節を見ず，又該当の齒がないので臼旁結節，臼後結節の有無はわからない。齒冠部の計測値は次表の通りである

| 8 | 7 | ⑥ | 5 | 4 | ③ | ② | 1 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 8 | ⑦ | ⑥ | ⑤ | ④ | 3 | 2 | 1 | 1 | 2 | ③ | 4 | 5 | ⑥ | ⑦ | 8 |

| | 2 | 3 | 6 | 3 | 4 | 5 | 6 | 6 | 7 | 7 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 冠長 | 10 | — | 7 | 9 | 9 | 7 | — | 7 | 6 | 7 |
| 冠幅 | 7 | 8 | 11 | — | 7 | 7 | (10) | 10 | 10 | 10 |
| 冠厚 | — | 9 | — | — | 8 | 8 | — | 10 | 10 | 10 |



カット 7　発掘中の中宮 1 号墳　(Cut 7)

# STUDY OF THE TOMBS AT SARAYAMA, NEAR TSUYAMA, IN THE PROVINCE OF MIMASAKA

Volume I

*Resume*

TSUYAMA, JAPAN

1952

# PREFACE

This report contains the results of our study on the tombs at Sarayama, near Tsuyama City, in the Province of Mimasaka carried on since January, 1951 by members of our school of Okayama University, in compliance with a request of Tsuyama City. All the results, however, have been arranged and systematized by Y. Kondo and T. Nakashima in the present form now published.

Our sincere acknowledgements are due to the authorities of Tsuyama City and also to Mr. S. Narasaki, Mr. H. Fukutake and others for the kind help offered to us during our investigation.

HIROSHI NEGISHI, M. D.

RYOJI URA, M. D.

TOSHIO NAKASHIMA

YOSHIRO KONDO

Okayama, February, 1952.

# STUDY ON THE TOMBS AT SARAYAMA, NEAR TSUYAMA CITY, IN THE PROVINCE OF MIMASAKA, JAPAN.

## CONTENTS

Chapter I ..... Sarayama Tombs

Chapter II ..... A. Nakamiya I Tomb

B. Monnoyama I Tomb

C. Gion-une I and II Tombs

## PLATES

1. General views of Nakamiya I Tomb (photo by M. Uno).
2. Pit type chamber in "square front" and *Haniwa* cylinders as they were found (ditto).
3. Ceiling of the corridor type chamber and the shut-up set of the entrance in Nakamiya I Tomb (ditto).
4. Interior of the corridor chamber in Nakamiya I Tomb (ditto).
5. Remains in the corridor type chamber of Nakamiya I Tomb (ditto).
6. Sediments of the offerings found in the dishes (*Yuwaibe* potteries) : upper; magnification of the sediments in the middle left dish (photo by M. Yamada).
7. Remains found in the corridor type chamber of Nakamiya I Tomb (photo by T. Nakashima).
8. General views of Monnoyama I Tomb, before and after excavation (ditto).
9. Cist type coffins and stone covering of Monnoyama I Tomb as they were unearthed (ditto).
10. Cist type coffins found in the Monnoyama I Tomb (photo by Uno and Nakashima).
11. Earthen coffins both in the Tombs Gion-une I and II as they were found (Photo by Nakashima).
12. Corridor-type chamber, remains as they were discovered, and a part of remains, in the Tomb Gion-une II (ditto).

## ILLUSTRATIONS


Page in Japanese text

Fig. 1. General map of Tsuyama City and its environs. ... 12

Fig. 2. Map of Sarayama showing distribution of the tombs. (Y. Kondo). ... 22

Fig. 3. Physiographic environment of Nakamiya I Tomb (S. Narasaki, H. Fukutake and Y. Kondo). ... 59

Fig. 4. Sections of Nakamiya I Tomb (Y. Kondo). ... 59

Fig. 5. Relation between *Haniwa* cylinders, chambers and mound (S. Narasaki, H. Fukutake and Y. Kondo). ... 60

Fig. 6. *Haniwa* cylinders of Nakamiya I Tomb (Y. Kondo). ... 61

Fig. 7. Plans and sections of the corridor type chamber in Nakamiya I Tomb (S. Narasaki, H. Fukutake and Y. Kondo). ... 63

Fig. 8. Plan and section of the pit type chamber in Nakamiya I Tomb (S. Narasaki and Y. Kondo). ... 64

Fig. 9. A set of three pots and one big dish with a strong stand (ditto). ... 67

Fig. 10. Plan of the stationing of funeral objects in the corridor type chamber of Nakamiya I Tomb (ditto). ... 68

Fig. 11. Various types of potteries found in and out the mound (Y. Kondo). ... 71

Fig. 12. *Haji* type potteries found in the corridor chamber of Nakamiya I Tomb (ditto). ... 72

Fig. 13. *Yuwaibe* type potteries found in the corridor chamber of Nakamiya I Tomb (ditto). ... 73

Fig. 14. *Yuwaibe* type potteries (II) found in the corridor chamber of Nakamiya I Tomb (ditto). ... 74

Fig. 15. A set of three pots and a big dish with a strong stand (ditto). ... 75

Fig. 16. Beads found in the corridor type chamber of Nakamiya I Tomb (ditto). ... 76
Upper: Small beads made of glass (red, purple, green and yellow).
Lower: Globular beads made of clay (black).

Fig. 17. Iron arrow heads found in the corridor chamber of Nakamiya I Tomb (ditto). ... 77

Fig. 18. Iron arrow heads (II) found in the corridor chamber of Nakamiya I Tomb (ditto). ... 77

Fig. 19. Iron arrow heads (III) found in the corridor chamber of Nakamiya I Tomb (ditto). ... 78

Fig. 20. Iron knives found in the corridor chamber of Nakamiya I Tomb (ditto). . ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... 78
Fig. 21. Iron blades found in the corridor chamber of Nakamiya I Tomb (ditto). . ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... 79
Fig. 22. Stirrup (*Tsubo Abumi*) found in the corridor chamber of Nakamiya I Tomb (ditto). . ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... . 81
Fig. 23. Stirrup (II) found in the corridor chamber of Nakamiya I Tomb (ditto). . ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... 81
Fig. 24. Iron bit found in the corridor chamber of Nakamiya I Tomb (ditto). . ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... . . 82
Fig. 25. Iron bit (II) found in the corridor chamber of Nakamiya I Tomb (ditto). . ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... 83
Fig. 26. Iron bit with a pair of ornament (*Kagami-ita*) found in the corridor chamber of Nakamiya I Tomb (ditto). . ... ... ... ... ... ... ... 83
Fig. 27. *Uzu* (a kind of trappings) found in the corridor chamber of Nakamiya I Tomb (ditto). . ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... 84
Fig. 28. *Uzu* (II) found in the corridor chamber of Nakamiya I Tomb (ditto). . ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... 85
Fig. 29. Iron rivets found in the corridor chamber of Nakamiya I Tomb (ditto). . ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... 85
Fig. 30. Clasp of saddle found in the corridor chamber of Nakamiya I Tomb (ditto). . ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... 85
Fig. 31. Iron ax found in the corridor chamber of Nakamiya I Tomb (ditto). . ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... . . 86
Fig. 32. Iron chisels with wooden cases found in the corridor chamber of Nakamiya I Tomb (ditto). . ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... 86
Fig. 33. Iron nails found in the corridor chamber of Nakamiya I Tomb (ditto). . ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... 87
Fig. 34. Others found in the corridor chamber of Nakamiya I Tomb (ditto). . ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... 88
Fig. 35. Physiographic map of Monnoyama I Tomb (H. Fukutake, T. Nakashima and Y. Kondo). . ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... 91
Fig. 36. The stationing of three coffins and stone covering (H. Fukutake, Y. Kamaki, T. Nakashima and Y. Kondo). . ... ... ... ... ... ... ... ... 92
Fig. 37. Cist A. in Monnoyama I Tomb (Y. kondo). . ... ... ... ... ... ... ... ... ... 94
Fig. 38. Cist B. in Monnoyama I Tomb (H. Fukutake, Y. Kamaki and Y. Kondo). . ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... 95
Fig. 39. Cist C. in Monnoyama I Tomb (H. Fukutake, S. Narasaki and Y. Kondo). . ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... 96
Fig. 40. Bottom fragment of *Yayoi* type pottery found in the mound of Monnoyama I Tomb (Y. Kondo). . ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... 97

Fig. 41. Physiographic environment of Gion-une Tombs (H. Fukutake). . ... 100
Fig. 42. Section of a chamber in Gron-une II Tomb (H. Fukutake and Y. Kondo). . ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... 101
Fig. 43. Plan of a chamber in Gion-une II Tomb (Y. Kondo). . ... ... ... ... ... 103
Fig. 44. Earthen coffins found in Gion-une Tombs (Y. Kondo). ... ... ... ... ... 104
Fig. 45. *Haji* type and *Yuwaibe* type potteries found in Gion-une Tombs (Y. Kondo). . ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... 105
Fig. 46. Two golden ear-rings and a bead found in Gion-une II Tomb (Y. Kondo). . ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... ... 108

# RESUME OF
# A STUDY OF THE TOMBS AT SARAYAMA, NEAR TSUYAMA CITY, IN THE PROVINCE OF MIMASAKA

## CHAPTER I SARAYAMA TOMBS

Sarayama tombs which we here treat is a name given to a group of tombs constructed at the foot, on the slopes, and upon the ridges of the mountains rising 300 or 400 metres from the narrow level ground in the south-western part of Tsuyama Basin in the province of Mimasaka (Fig. 1). As a result of our investigations, we have found 168 ancient tombs in this region. According to their features, these tombs may be classified into four groups — Kannabi, Sagayama, Takahachi, and Ōhira — and further subdivided into 13 or 14 smaller groups (Fig. 2). Together with Kawanabe Tombs in the south-western part of the Basin, and with Sōja Tombs in the northen part of the basin, Sarayama Tombs' constituting "ancient tombs of Tsuyama Basin", are good material for archaeological studies. It is clear that Tsuyama Basin, containing the ruins of Kokubunji Temple (established in the 8th Century A. D.) and the site of Kokufu of Mimasaka Province (office of local government in ancient Japan) as well as the site of Sarayama Tombs, has always been the centre of the province of Mimasaka.

Built in ancient days, when agriculture was the basic production, the structure of the numerous tombs in the mountaineous region suggests the characteristics of state authority in ancient Japan and of its succeeding history.

Before the appearance of these tombs, the terraces around Tsuyama Basin must have been used for human habitation since stone implements and potteries belonging to the *Yayoi* age have been discovered there as well as in Sarayama region.

Of the many important aspects of the study of Sarayama Tombs, we here are interested in the constructors of the tombs. What can be told by the presence of numerous tombs in a very confined region? Who were their constructors? It is

easy to say that they were the "aristocracy" or the "powerful families", as many authors have told us. But this answer does not satisfy us. By their arrangement in chronological order, it is known that over 90% of the tombs in Sarayama belong to the late period of ancient tombs, and thought to have been built in and after the 6th Century A. D., and the tombs constructed prior to the 6th Century A. D. constitute within 10% of all extant. We think that the Sarayama Tombs and those in other part of "Tsuyama Basin" do not show the decrease and the increase in population or the changes in social customs, but they indicate the process through which the political society had been formed and the changes in the constitution of communities.

The late period in the chronology of Japanese ancient tombs has been supposed to be between the 6th Century and the Ist half of the 8th Century A. D. Accordingly, in Sarayama, 140 or 150 tombs were constructed during these 200 or 250 years. The constructions were very frequent. Besides, we must not forget that usually 2 or 3 bodies were buried in a tomb or a chamber. One corridor chamber of ordinary size in Sarayama, however, contained seven earthen coffins. Thus, it can be reasonably estimated that 300 or 450 persons of positions high enough to be buried in mound tombs died during about 200 years or 250 years. A remarkable number of "aristocrats" or "powerfuls" were inhabitants of Sarayama.

The ancient communities in Japan, since the adoptation of agriculture in the 2nd or the 3rd Century, B. C., rapidly developed political and social class characteristics. The facts in Sarayama above mentioned reflect the historical process of constitutional development in the communities. In the step of the development of communities (before the late period) when the whole society was not put down under the perfect control of the slavery, the first social relation of classes, in spite of the appearence of the opposition of classes; individualism was not a characteristic of the people: individualism was embodied in "heroes" as representatives or "chieftains" at the head of the communities. During and after the 6th Century A. D. each community (house community) disintegrated into several family communities with patriarchs as powerful leaders. It is right and proper that through this process of disintegration, difference in rank resulted among the patriarchal communities. Such patriarchal communities as grew in Sarayama, must have arised in this historical pattern. The fact that tombs during the late period are small in size and of similar type, compared with the tombs belonging to the earlier period which are generally great in size and of strong individuality, may be a result of the patriarchal social pattern described here. The sudden increase in number and the general reduction in size will be understood, if

we think it to be a phenomenon reflecting the above conditions.

Finally, we can follow the right path of studies on the tombs only through a comprehension of the changing social characteristics of their constructors.

## CHAPTER II

### A. NAKAMIYA I TOMB

Situated on the northwestern slope in a section known as Fukuda, south of Sarayama, Nakamiya I Tomb has retained nearly its original form. The shape belongs to the characteristic mound type in Japan known as "Square front and Round back". But the "Square front" radiating from the "Round back" in the south direction is so flat and little that people often call this the scallop-like type with the base, as measured from the extreme end of "Square front" to the "Round back", being about 23 metres long, and the height of the round part about 5 metres, this tomb is the one of the largest in the whole group of Sarayama (Pl. 1 and Fig. 3, 4, 5).

A number of ***Haniwa*** cylinders (mortuary objects of the drain pipe-like type) were discovered 20 or 30 cm. under ground around the circular mound. These are identical to those found in many other parts of Japan, but rather small in size (Pl. 2 and Fig. 6). Two stone chambers, one at the middle of the "Round back" and the other at the "Square front", were found; the former is the large and massive one of corridor type with its bottom at the depth of 330 cm. or 340 cm. below the surface and the latter, the small, shallow pit type (Pls. 3, 4 and Figs. 7, 8).

In contrast to the discovery of only two dish type earthenwares in the pit type stone chamber, we found varieties of precious funeral objects in the corridor type chamber — many earthenwares (***Yuwaibe*** potteries and Haji potteries), iron objects, beads and so forth (Pl. 5 and Fig. 10). Among the earthenwares which occupied half of the finds, we found two things of particular interest; the grand dish with long and firm stand upon which were placed three pots one over another, discovered at the nothwestern corner of the chief chamber (Fig. 9), and the remains of the offering to the dead found in dishes with lids (Pl. 6).

The appearence of the former is unparalleled in Japan, but similar items have been found in ancient tombs in the southern part of Korea. The latter may be important material for the study the offering to the dead in ancient Japan. We should like to add that horse equipment and trapptngs, weapons of war, an iron ax, big and square nails, chisels, bijou and others were discovered, showing the instructive arrangement. (Pl. 7 and Figs. 11 — 34).

Finally this tomb was presumed to have been constructed in about the 6th Cen tury A. D. judging from the shape of mounds, the structure of chambers, and the remains.

## B. MONNOYAMA I TOMB

Situated near the extremity of the ligulate terrace west of Mt. Kannabi, which fronts on the Basin of Tsuyama, is Monnoyama I Tomb, actually a collection of neighbouring tombs. This tomb is small and flat in the structure, and curiously pentagonal in shape (Pl. 8 and Figs. 35, 36). By unearthing, we discovered the stone covering, lying about 20 to 50 cm. below the surface, on the slope of the mound and three stone coffins of simple make on the flat top; the former consisting of numerous cobble- and split-stones (Pls. 9, 10). The three coffins commonly named "cist" vary in size, but are almost similar in structure (Figs. 37, 38, 39).

Contrary to expectation, no funeral objects as well as no ashes were fonnd in them except several small fragments of unglazed potteries on its outside (Fig. 40).

## C. GION-UNE I AND II TOMBS

These are situated on the gently sloping southern side of Mt. Sagayama, commanding a very fine view (Fig. 41). Both Gion-une I and Gion-une II, with 17 metres between them, had already been demolished before we surveyed. Especially, in Gion-une I tomb the demolition was exhaustive, so the insignificant ruins of the corridor chamber, the destroyed unglazed earthen coffin, and dish type earthenware were all we found (Pl. 11).

In Gion-une II Tomb we unearthed a semi-destroyed stone chamber in the

middle and two unglazed earthen coffins in it, at the foot of which many earthenwares were found (Pls. 11, 12, and Figs. 42, 43, 45). Of the two coffins, the southern one had been demolished in to fragments, and the northern was partly destroyed. All the coffins, both in I and II, are unglazed and orange colored of the so-called tortoise carapace type, similar to those which have been generally found in the tombs of Sarayama and other parts of the Province of Mimasaka (Fig. 44). In addition, golden ear-rings and a bead shown in Pl. 12 and Fig. 46 were the finds before our investigation.

The tombs containing the earthen coffin of this kind are concluded to be new in chronological order of the ancient tombs in Japan. Accordingly, we may here presume that these tombs belong to the second half of the 7th Century A. D.

resumed by *Yoshiro KONDO*

Anthropological and Archaeological Seminar,
Deptartment of Anatomy, Medical School,
Okayama University.

昭和二十七年三月二十日印刷
昭和二十七年三月三十日発行

編集者　近藤義郎
発行者　中島琢之
印刷所　津山市田町38番地　津山朝日新聞社印刷部
印刷者　福田卓也

昭和五十二年三月十五日複刻

津山市教育委員会
印刷者　津山市川崎168　有限会社弘文社